
紫紺の邪眼

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫紺の邪眼

【Nコード】

N9104I

【作者名】

刹那

【あらすじ】

単なる和菓子職人が、事故で「ネギま！」の世界に乱入。生き返ったのか、転生したのか、憑依したのか、気づいたときには、目の前には、角と翼を生やした女の姿が。体中痛いし、そこかしこから出血してるし、やっぱり死んだかなと思う主人公だが…。

序の序（前書き）

オリ主、最強？、オリジナル設定有り、原作つぶし有り、アンチ有
となんでもありませんが、よければ読んでやってください。
原作をこよなく愛する方は読まないことをお奨めします。

序の序

俺は、水無月透^{みなつきとおる}、和菓子職人だ。

今日も、今日とて和菓子を作り、世に送り出している。

大そうな言い草だというかもしれないが、俺はこの仕事に誇りを持っている。

食べた人に笑顔を与え、時に清涼感を演出し、時に儀礼的意味も果たす。それが和菓子だ！

文句は言わせないし、受け付けないのだ。

さて、この仕事に誇りを持つ俺だが、この頃婚期というものが気になり始めた。

なぜなら、俺は29歳！三十路突入まで、もう時間がないのである。誇りあるやりがいがある仕事だといっても、出会いは運んできてくれないのが、世の無常だ。

俺が働いているのは、京都でも知られた老舗なのだが、出会いがあるといっても、良家の子女ばかりで、手を出そうものならクビがとぶこと間違い無しの高嶺の花なのだ。

それに、良家の子女といっても、その大半は年配の方々だ。さすがにそっちに食指は動かないし、あちらだってそんな気はないだろう。結婚適齢期といわれる年代の方々も、やれ許嫁やら政略結婚やらでキープされており、手出しは不可能だ。

では、誰を狙うかというと、そのお弟子さんとか女中さんだ。彼女達の多くは一般市民だし、手を出してもクビがとぶようなことはない。

そんなわけで、最近親しくなったお得意先の女中さんである葵さんに猛烈アプローチ中である。

彼女もまんざらではないのか、今日はこれから一緒にディナーを共にする約束をしている。

いいか、夕食ではない。ディナーだ！これ重要！

それなりに親しくなった自信はあるし、今日こそは、結婚を前提とした正式なお付き合いに持っていこうと考えている。

今日こそはと意気込んだ俺は、ピカピカに磨いた愛車に跨り、約束の場所へと急いでいた。

片付けが遅くなったこともあり、約束の時間に遅れまいと自然とスピードを出していたのだろう。

それは、山間の急カーブだった。突如、正面からデコトラが突っ込んできたのだった。

どうも、急カーブでハンドルを切り損ねたらしく、反対車線であるこちら側に車体が思い切り振られている。

知らずスピードを出していた俺は、避けることも許されず、デコトラに正面衝突した。

凄まじい音がして、体がバラバラになったような衝撃と痛みが走ると共に空を飛んでいた。

そして衝撃と共に、山間の闇へと落ちていく。

最後に認識できたのは、何かが砕けるような音と凄まじい痛みだけだった。

そうして、意識も闇へと堕ちていった。

はじまりと契約

（何も感覚がない。死んだのか、俺は。どう考えても即死級の衝撃だったし、内臓破裂してたっばいからな）

（くー、せめて結婚してから、いや子供の、いやいや孫の顔を見てから大往生したかった）

死の危機に瀕しているはずなのに、存外に未練たらしく凶々しい男である。

それはそれとして、彼はどうにか眼を開いた。

「な、何だよ、これは！」

彼の疑問はもつともである。彼の眼に映った光景は予期していたものとは全く異なるものだったからである。事故に至るまでの彼の記憶が確かならば、事故で自分が落ちた山間には、人里などなかったはずである。たとえ、彼があるのを知らなかっただけにしても、まわりには山林が広がっているはずだが、それすら見当たらない。

何より彼を混乱させ、恐怖させたのは、小さい村が蹂躪^{こわごわ}され、人々が逃げ惑い、悪魔達がそれを襲う光景である。光の矢のようなものが飛び、打ち消すように炎や風が吹き荒れる。それは伝え聞く戦場のようだった。

もつとも、狩場という方が正確な表現かもしれない。散発的な抵抗は、瞬^{またた}く間に潰^{つぶ}され、恐慌^{きょうこう}におちいった人々を一方的に悪魔達が襲っていたからだ。その光景は、まさにこの世に具現化した地獄だった。

「どつなってるんだ、これは？打ち所が悪くて、夢でも見ているのか？」

思わずそんな言葉すら、こぼれる。目の前の光景を現実と認められない。認めれば狂ってしまったが、彼の感覚や知識はこれが現実であると嫌が応にも伝えてくる。

まず、違和感を感じたのは、人々の髪の色である。黒髪が全く見受けられない。加えて、黄色人種よりもさらに白い白人特有の肌の白さ、どう見ても日本人ではない。つまり、ここは事故現場はおろか日本ですらないのだ。

さらに、問題なのはいわずと知れた悪魔達だ。彼も、菓子職人とはいえ、娯楽を全くもたなかったわけではない。漫画も読むし、ゲームだってするし、酒だって飲む。特に乱読家である彼は、純文学から推理小説、ライトノベル、漫画に至るまで様々な書物を読み漁っている。

そうして蓄えられた知識がいう。似たような形状の生物はいても、あんな巨大なものは実在しない。そして、何より既存の既知の生物に該当しないような形状のものまでいる。

あれはまるで、ゲームや物語にでてくる悪魔ではないか。仮装にしてはあまりに常軌を逸しているし、何より逃げ惑う人々から伝わる恐怖感も、襲う悪魔達に感じる嫌悪・不快感はあまりにもリアルであり、自分の考えを肯定するには十分過ぎた。

だが、彼にはもっと気づくべき重要な問題があった。すなわち、なぜ彼の視界が反転しているかということである。

「え、何生きている？嘘でしょ、蘇生したというの！？」

そんな言葉が、頭上ではなく足下？から落ちてきた。

ここで、ようやく彼は己が何者かに片足をもたれ、逆さ吊りにされ

ていることに気づいた。

目の前の光景があまりにも衝撃的だったとはいえ、余りに遅い現状認識である。

とにかく、現状認識をしようとは彼は声の方向へと体の向きを変える。逆さ吊りにしている人物も、この動きに異論はなかつたらしく、その協力を得てどうにか苦勞して逆さ吊りのまま、声の方向へと向き直る。

ようやく、声の人物を視界に収めたとき、彼は逆さ吊りされている不平不満を忘れ、忘我すらして一瞬見惚れた。

そこには、地につきそうなくらい長い銀髪と意思の強い紅の眼に伶俐な美貌、男なら誰しも垂涎であろう豊満でメリハリのある肢体をもち、絶世の美女がいたからである。

まあ、男なら無理もない反応である。但し、彼女こそが、彼を逆さ吊りにしていた張本人であり、頭に角、背中に蝙蝠の様な翼を生やしていたのだが。

角と翼という非現実的なもので、我を取り戻すと、彼は矢継ぎ早に疑問と要求を行う。

「貴女は誰だ？ 一体何なんだこれは？ というかさっさと離せ」

「私が何者なのか理解していないというの？ それでいて眼に恐怖はなく、あるのは困惑と混乱。加えて現状を全く認識できていない。

これは……」

彼女は、彼の疑問・要求を黙殺し、むしろそれらを材料に考えをまとめている。しばし、沈黙思考した後、その紅眼で彼の胸、心臓辺りを凝視した。この瞬間、彼女の眼が紫に染まったように見えた。

「魂が変わっている。変質したとでもいうの。いえ、そもそもこの

肉体の主はさつき確実に死亡したはず。だって、私の中に魂があるもの。では、この肉体に宿っている魂は何？

こちら辺で迷っていた魂だともいうのかしら？いえ、これ程強力な魂に私が気づかないはずがない。だとすれば、これは…。あはははははは」

ひたすら自身の思考に没頭していた彼女が、突如笑い出す。その笑みは明らかに喜んでいるものだ。むしろ、その様は狂喜しているといった方がいいかもしれない。

だが、彼にとつてそんなことはどうでもよかった。先の考察の中に聞き捨てならない言葉があったからだ。思わず激昂げっこうして反駁はんぱくする。

「肉体の主は死亡しているだって、何をいつてるんだよ！俺はこうして生きて…」

そこから先は、言葉にはならなかった。いや、できなかった。彼は、己の現状と感覚から、その肉体が己がものではないことを実感してしまったのだ。

大体、逆さ吊りにされて頭が地についてないのが、まずおかしい。水無月透は、180cm弱の大柄な男である。目前の彼女は、確かに女性にしては背が高いほうだが、周りの建物かとの対比からして170cm強といったところだろう。彼女に逆さ吊りになどされたら、頭をすること間違い無しである。

だというのに、頭から地面までの距離は50cm強はある。すなわち、水無月透の肉体ならばありえないことなのだ。

さらに、手足の感覚もおかしい。圧倒的に長さが足りないし、伝わる力も貧弱なものである。和菓子職人でありそれなりの腕力と脚力を誇っていた手足は見る影もない有様である。

多めに見積もっても、彼の現在の身長は110cmあるかどうかであ

り、せいぜい彼女の腰程度でしかない貧弱な矮軀わいくである。明らかに己の肉体でないことを、彼は認めざるをえなかった。

「理解したようね。そう、それは貴方の肉体ではない。貴方は一体、どこの誰なのかしら？」

でも、そんなことは正直どうでもいい。貴方は、私にとって初めての『未知』なのだから！

私の未来視でも、貴方の未来は見えない。過去視でも、見えるのはその肉体の本来の主の過去だけ。貴方の過去は見えない。何て素晴らしいことでしょう。」

どうやら、彼女の眼はいわゆる魔眼若しくは邪眼の一種なのだろう。どうやら、見つめた者の過去と未来をみることができるもののようなのだ。

彼は、目の前の女性がとんでもなく高位の悪魔であろうことをなんとなく理解した。

同時に、彼女を怒らせたら最後、己は一瞬でミンチにされるであろうことも、悟らざるをえなかった。

だが、その恐怖を押さえ込んでも聞かなければならないことがあった。

「この肉体の主が死んでいるというのはどういうことだ？本来の主はどうして死んだんだ？」

己の肉体でないことを認識したときから、気になっていたことだった。なぜなら、己がこの肉体に宿ったことで本来の主が死んだという可能性もあるのだから。

「ああ、それは気になるか。安心しなさい、貴方のせいではないわ。いえ、むしろ、自業自得というべきでしょうね。その子はね、異常

魔力保持者なのよ。人の身では在り得ない程の魔力をもっているわでも、その子には致命的な欠陥があったの。遺伝のような先天的なものか、封印等による後天的なものか、どっちかは分からないけど、魔力を外部へと放出する才能が全くなかったのよ。

要するに、優れた魔力はあっても、肝心の魔法が使えなかったわけ。それで、私が親切にも、魔力を外部へ放出するための道を作ったわけだわ。その結果、その過程で起こる魔力暴走の負荷による全身をくまなく襲う激痛に耐え切れず、その子はショック死したの。人間は肉体だけでなく、精神まで脆い^{もろ}のね」

心底くだらないと思っ^{おぼ}ているようで、嘲^{あざわら}る様に語る。

「そののどろが、自業自得だ！お前のお節介のせいじゃないか」

どう考えても、彼女のせいにはしか思えなかったし、嘲^{あざわら}るように言う態度も気に入らなかつた為に、自然言葉がきつくなる。

「それがその子自身が望んだことだったとしても？」

「な、何だって！どういうことだ？」

だが、問髪^{かんぱつ}いれずに返された疑問に、わけわからなくなってしまう。

「ねえ、考えてみなさいな。取り出して使えるけど少量しか入らない水筒と取り出せないけど大量の水が入る水筒。砂漠のど真ん中で、重宝されるのはどちらかしら？」

答えは聞くまでもなく、前者よ。どれだけ大量にあっても使えないのなら意味はないの。

その子の周りの人間もそう考えたわ。英雄の息子という分かりやすい比較対象があったから、それをさらに助長したのでしょね。

英雄の息子すら凌ぐ魔力を持ちながら、魔法を全く使えない落ちこぼれ。どれだけの期待と失望をその身に受けたのかしら？想像もつかないわ。

そうした環境で育った子は、今日を迎えた。この計画された襲撃の際に、本命は別にいるというのに、その異常魔力ゆえに私に目をつけられ、魂を狙われることとなった。

私と対峙した時にその子がなんと言ったか分かる？」

「……」

彼には想像もつかない。幼いときから、周りから勝手に押し付けられた期待と失望の数々。

どれ程の苦悩であったのだろうか。どれ程の苦痛だったのだろうか。

「「やつと楽になれる」、そう言ったわ。貴方が理解できないのも無理ないわ。過去視で過去を見るまで、私にも理解できなかったから。」

で、あっさり魂を奪ってもよかったのだけど、生きること諦めた魂はまずいのよ。死ぬことに希望を見出しているからね。どうせなら、本当の意味で、全てに絶望してもらわないといけないわ。

それで、私は契約を申し出たわ。貴方に魔法をあげると、そのかわり死んだらその魂は私が貰うという契約を。

その子は、喜び勇んで契約したわ。それが破滅への道であるというのに……。

ねえ、理解できる？外部から、魔力を外部へ放出するための道を作ることが、いかに危険なことか。本来自身の魔力しか通らない道を開いてない状態で他人の魔力を無理矢理押し通すのよ。気が狂うような激痛が全身を駆け巡るの。大抵の人間はここで狂うか、シヨック死するというのにそれに耐えてみせた。

普通なら、これで終わり。なぜなら、誰だって、魔法を使うために

魔力の制御を訓練するのだから。

でも、その子だけは話が別。開いている道は一つもなく、魔法を一度も使ったことがなく、何より異常魔力保持者だった。

今まで、放出されたことのない魔力は全身に開かれた道を暴れ周り、その暴れまわった魔力量も膨大^{ぼうだい}。当然、魔力を制御する術など知らないし、理解もできない。それは、実際に使って、体得するものなのだから。

結果、魔力暴走をとめることができず、全身を絶え間なく襲う激痛に耐え切れず、精神が負けてショック死したわ。

その子は、結局己に負けたのよ。時間をかけて修行して自分の魔力で、内からあける努力をすればよかったのに、安易な方法を選んだ。魔法は使えないと勝手に諦めて、体内の魔力制御の訓練すら怠ったつけを払ったに過ぎない。

私から見れば、くだらない人間のくだらない結末よ。魂は美味しくいただいたけどね」

凄まじい話だ。彼女の思考も然ることながら、本来の肉体の主である少年の覚悟も凄いと思う。

確かに安易に近道を選んでしまったこと、訓練を怠ったことは攻められるべきことかもしれないが、少年の幼さを考えれば仕方のないことだろう。そうさせたのは、周りの人間にも責任があるだろう。そんな考えに一人沈んでいると、彼女が突然手を離れた。考えに没頭していたせいで、気づかずに頭をもろにぶつけてしまう。涙目になりながら、体を起こして彼女に文句の一つでも言ってやろうと思っただが、体が微動だにしない。

「ようやく気づいたの？その子、今は貴方の体はボロボロよ。さっきいったとおり、魔力の暴走で体中のあちこちに異常が出ている。何もしなければ、半日もたたずに貴方は死ぬ」

「な、なんだって。くそ、せつかく死ぬのは免れたのに、結局死ぬのかよ…。」
「というか死の苦痛を二度も味わうなんて、むしろ不幸だろ。ちくしよー！」

己を不運を嘆くが、運命は変わらない。さらに過酷な運命が彼に襲い掛かる。

「あ、安心しなさい。自然死なんてさせてあげないから。異常魔力保持者の肉体に完璧に魔力の道が開いた肉体、それに宿った強力な魂。どちらもこれ以上ない御馳走^{ごちそう}なのだから」

「ちよつ、おま」

自分が頭からがぶりと喰われる状況を想像して青くなる。

「あははははは、冗談よ。そんなもつたいたいなことするわけないでしょう。」

貴方は、私が見初めた初めての『未知』。それをみすみす自分で潰す様な真似はしないわ。

だから、契約をしましょう。私は貴方に生き延びるための力をあげる。貴方は対価として、私に未知をみせること。

強制は嫌いだから、無理強いはしないわ。野垂れ死ぬか、契約するか好きなほうを選びなさい」

彼女の申し出に、彼は一つだけ疑問を呈す。

「未知をみせるとは、一体何をすればいいんだ？貴女にとって予想外のことをすればいいのか？」

「いいえ、そんな大それた事ではないわ。貴方はただ生きればいい。己が意思の赴くままに生きなさい。未来が全く見えない貴方の未来は、何よりも私にとつての未知となるのだから。どんな些細な^{ちかひ}ことでもいいから、私の見た未来を覆^{くつがえ}してみなさい」

「分かった、契約する」

間髪いれずに彼は答えた。最初から、選択肢などないのだ。契約を断れば、彼女は容赦^{ようしゃ}なく自分を喰らうであろうからだ。野垂れ死に待つ気など毛頭なかるう。彼女自身がいったように、今の自分はこの上なく上質な餌であるからだ。すなわち、結局契約する以外の選択肢はないのだ。

(わざわざ自分の意思で選ばせるという形式をとるとは、意地の悪い女だな)

内心で悪態をつきながら、どうにか体を起こす。その瞬間に目に飛び込んできた光景に彼は絶句した。

彼女は、己の胸の谷間あたり、心臓の真上あたりに自分の手をおくと、躊躇^{ちゅうちゆ}なくそれを己が体内へと沈めたのだ。

彼女の自傷行為という名の凶行はさらに続く。沈めた手を内部で動かし嫌な音を立てて、体内から抜き出す。手の内にみえるのは、骨の欠片らしき白い物体と生々しい光沢を放つ肉片だ。

それを何と、自らの口にいれ咀嚼^{そしやく}しているのだ。あまりのおぞましさに悲鳴が奇声となって響く。

「あqwse drftgyふじこlp」

それを黙らせるかのように、いつの間にか彼の上へのしかかっていた彼女の唇が、彼のそれに重なる。

突然のキスに頭が真っ白になるが、その行為の意味するところをすぐに理解することになる。口内に広がる濃厚な血の味によって……。彼女の血肉を己が内に受け入れることで、力を得るのだろう。まさか、口移しされるとは思わなかったが、正直な話、その内容を知っていたら、拒否していた可能性もゼロではないことも考えると、彼女のとつた方法は最善であつたらう。

口移しによつて、嫌が応にも押し込まれていく噛み砕かれた骨と血肉。彼女の^{こわくてき}蠱惑的な舌使いもあつて、彼も次第に行為に没頭していく。全ての感覚がその行為に注ぎ込まれていく。

童貞ではないものの、職歴〃彼女いない歴である菓子職人、水無月透にとつて、絶世の美女からの濃厚なキスはどうしても抗えない甘美な誘惑であつたのだ。

まだまだ、青くて若い29歳独身貴族である。

「契約は完了したわ。貴方の見せる『未知』を楽しませて貰うわね」
遠くなる意識の向こうで、彼女の声を聞いた気がした。

はじまりと契約（後書き）

初投稿です。

どれだけやれるかは分かりませんが、どうにか完結させたいと思います。

新しい名前

目が覚めたらベッドの上だった。見知らぬ天井に思わず目を瞬かせ
る。

ここは、病院であろうか。もしかするとさっきまでの悪夢で、あ
の即死級の正面衝突の衝撃に耐え切って、自分は生き残ったのかも
しれない。あの未知をこよなく愛する悪魔女との出会いは夢で、俺
は普通に生きているんだーと喜ぼうとした矢先、立ち上がった自分
の視線の低さに絶望する。

(夢じゃなかったよ、ちくしょー)

内心で歯噛みしつつも布団に拳を叩き付ける。その際、あまりのり
ーチのなさ腕の小ささに、またもや絶望する。

「神様の馬鹿野郎！。テメーなんか一生信じてやらないからな！」

とはいうが、彼は元々無神論者であり、神などこれっぽちも信じて
いない。まあ、そんなことだから、こんな目にあったのかもしれない
が……。ひとしきり喚いた後、彼は己の現状把握に努めることにし
た。今更かよと思われるかもしれないが、あの女悪魔との出会いの
時は色々な意味で、いつぱいいつぱいだったので、きちんと現状把
握をするのは、初めてだったりする。

Q1、自分は死んだのか？

恐らくYES

Q2、ここはどこか？

不明。日本ではないが英語圏（見舞い客がおいていったであ

ろっ新聞が英語表記)

Q3、今はいつなのか？

新聞の表記から、1996年3月1日以降

Q4、これは夢か？

そう思いたいが、痛いし現実だ

Q5、俺の世界に悪魔や魔法といったものはあったか？

恐らくNO、あるかもしれないが俺は知らない

Q6、魔法は存在するか？

YES、魔力が体内を循環しているのを感じる

Q7、もしかして異世界？

保留、少なくとも勤めていた店がないことを確信するまでは、元の世界だと思っておく

Q8、転生？憑依？

恐らく憑依であると推測するが、元の人死んでるし、これはもう転生じゃねえか

つつかそんなのは小説の中だけで、十分だ。現実起きるな、ボケが！

Q9、今の俺の名前は？年齢は？

個室の表札を見た結果、トールズ・ヴェインだそうだ。身長から年齢は8、9才だと推測する。

Q10、頼れる人の有無

見舞い客がいるようなので、一応有り。悪魔女は色々ヤバイ

んで除外。

Q11、己の記憶に齟齬はないか？

今のところ無し、ディナーの約束も、和菓子作り方も完璧だ！

Q12、これからどうするべきか？

不明。全く指針無し。恐らくそろそろ主治医か、巡回の看護師が来るはずなのでそれからだ。

自分なりの現状把握が終わった頃、ノックと共に看護師が入ってきた。

「おはようございます。申し訳ありませんが、今何月何日でしょうか？」

自分ではこの上なく爽やかに挨拶したつもりだったが、彼女は俺を呆けた様に見て固まっている。「もしもしー」などと手を目の前で振っていたら、ようやく硬直が解けたらしく、俺の質問に答えることもなく、ダッシュで病室を出て行く。

（あんだ、何しにきたんやー！この役立たずがー！）

心の中で突っ込み毒づく。精神衛生上必要なことなのだ、うん。だが、5分もしない内に医師&看護師さんの団体様がおつきになられ、ストレッチャーで強制連行。その後、半日かけて精密検査のフルコースを味わうこととなった。どうも、医師や看護師さんの話を総合するに、俺はあの悪魔に襲われていた村から救助されて以来、一月以上寝ていたらしい。そりゃ、看護師さんもフリーズ&リターンするわと納得し、内心で詫びつつ先程の突っ込みと毒を取り消す。

それから、どうも俺は一月前とは容姿が変わっているらしい。具体的にいうと髪と眼の色が…。髪は銀色、眼は真紅だ。まるで、アルビノのようだ。医者の診断は、事件の精神的ショックによるもの（この時、ツールズとしての記憶もなくなっている旨を伝えた、これも同様の原因とされた）だということだが、俺は真実を知っている。まず、間違いなく、あの女悪魔との契約のせいだ。だって、そのまんまやん！あの御方（思い出したら何か怖くなったので、以降はこう呼ぼう）の血肉（骨含む）には、色素細胞を変化させる効果でもあるのだろうか。

まあ、かなり目立つ容姿になってしまったが、幸いアルビノだといえば、誰もが納得してくれる色なので問題はない。ただ、さすがにこの容姿で和菓子屋は無理だといわざるをえない。やっぱり、和菓子を売るんだから雰囲気も大事にしたいと思うし、欧米系の顔立ち（不覚にも元の自分より二枚目になりそうで悔しい！）の今現在の自分が、元いた職場で働くのは想像できない。そして、何よりあの御方が和菓子職人の人生なんて見て、満足してくれるとは到底思えない。この実に宿る異常魔力と、魔力の道全開な肉体で無双でもしろということだろう。そういや、あの御方が、くれた力とは何なのだろうか？髪と眼の色が変わることじゃないだろうし…。うーむ、驚異的な生命力とかだろうか？魔力の量は変化していないので、肉体的なものだと思うのだが…。

「むづ…、いくら考えてもわからねえぞ。こんちくしょー！」

腹立ち紛れに貧相な腕でベッドに備え付けられた移動式テーブルを、思い切りぶったたく。するとメキヤという音がして、机は真っ二つに折れてしまった。あの一、子供のしかも8歳児の力なんですけど、しかも片手…。どうやら、予想はあたりだったようで、驚異的な身

体能力の向上が見られた。この机、なんて言っごまかそう…。とりあえず納得して、後で腕力以外もリハビリがてら確かめることにしよう。お次は、情報収集と英語で書かれた新聞を読む。ほむほむ、そんなことが…。

（あれ、何かおかしくねえ？）

何か引っかけた気がするが、とりあえず情報収集を優先する。しばらく、そうして情報を仕入れていた俺だが、ふと時間を確かめたくなって、顔を上げた。その時、時計の隣のスタンドミラーに俺の顔が映った。くそ、二枚目系の顔しやがってと元三枚目として憤りつつ、時計に目を移そうとする。だが、鏡に映る己の顔に猛烈な違和感があった気がして、すぐに鏡に顔を戻す。そこに映ったのは、銀の髪に西欧系の整った顔立ちに、紫の瞳…、っておい紫ってなんですか！もつとじつと確かめてみるが、確かに紫（紫紺）といった方が近いかもしれない）に、目の色が変わっている。これは何の冗談だろうか。しばらくすると、目の色は真紅に戻った。あれは何だったんだらうか…？

とりあえず時間を確認し、再び新聞に目を戻す。ふむふむと記事を読み上げていくが、そこでまた何かひっかかりを感じた。さすがに二度目なので、気のせいではないだろうと少し考え込む。この引っかけりは何なのか…。ポクポクポク………チーン、閃いた！

（なんで俺、英語の新聞がすらすら読めるんだよ！？そっいや普通に英語理解できてたし！）

そう、俺にはツールズとしての記憶は皆無である。ゆえに、純粹日本人であり、英語は高校で打ち止めの典型的な日本の大学生だった俺に、単純な日常会話ならともかく、新聞や症状などの詳細な説明

を理解できる英語能力はないはずである。だというのに、理解でき
てしまう。そこで、ふと思いついてまた鏡を見てみる。予想通り、
目が紫紺に染まっていた。恐らくはこのせいだろう。試しに真紅に
戻るのを待って、新聞を読み出し、すぐに鏡を見た。やはり紫紺に
染まった目を見て確信した。この紫紺の目は、いわゆる邪眼とか魔
眼の一種なのだろう。恐らく効果は理解能力の向上といったところ
だろうか。どうも、今は自動発動のようで、任意に解除したり発動
させることはできないらしい。これも、要訓練といったところだろ
うか。また、結構なものを頂いたようだ。というか、非常に助かる
！正直、この国で生活するなら英語は必須だろうしな。英語分から
なくて、授業も状況も分かりませんになったら、間違はなくシネル
もう、あの御方には足を向けて寝られないな、うん。拜んでおこう、
ナム南無。

そんなこんなで気がつけば、もう夜である。不意の来客があった。
あの事件の俺以外での生き残りだと言って、利発そうな少年が訪ね
てきたのである。記憶を精神的ショックでなくしていることを告げ
ると、少年は元気よく自己紹介してくれた。

「ネギ・スプリングフィールドです。改めてよろしくお願ひします
！」

この瞬間、俺は固まった。当然だろう、漫画の主人公が目の前にい
るのだから…。一縷の望みを託して、俺は勇気をだしてネギに質問
した。

「スプリングフィールドって、あのサウザンドマスターの？」

違うといえ！それは誰ですか？と言ってくれ。

「あ、御存知なんですか？父さんなんです。これは、秘密なんですけど、今回の事件でも悪魔達を倒し、僕を助けたくれたのも父さんなんですよ！これがその時、貰った杖で…」

終わった。燃え尽きちゃった。異世界確定！憑依転生確定！だよ、くそつたれ！うちの店がないことを確定するまでは、希望を持ち続けようと思ったのに、希望を粉々にされちゃったよ。もう駄目かも分からんね…。ネギの語りは絶好調で、ますます熱が入ってきている気がする。なけなしの原作知識で teme 一家のせいで襲撃されたんだよ！と罵りたくなつたが、必死に我慢した。この子に罪はないのだから…。結局、ネギは姉（従姉妹だったか？）であるネカネが迎えにくるまで、サウザンドマスターリサイトを延々とやってくれたのだった。帰り際にネカネに文通を頼まれた。筆不精&スプリングフィールドと関わりを持ちたくない俺は、やんわり断つたのだが、ネカネさん、中々粘り強く最終的に懇願され、泣く泣くOKした。男はお姉さんのお願いに弱いのですよ…。余談だが、サウザンドマスターが嫌いになりました。

翌日、早朝から見舞い客を迎えていた。どうもトールズの母方の祖父らしく、現存する唯一の身内らしい。まあ、記憶がなくなっている宣言しているので、適当に対応すればいいと思っていた。爺さんだから朝早いんだなー、などと寝惚け眼で対応していると、突然、爺さんが看護士さん達を病室からしめだした。さらに、符術だと思っただが、病室内に結界をはり、誰も入ってこれない&盗聴不可状態にってしまった。これは、何かあると思い、姿勢を正して爺さんに相対した。

「お主は誰だ？わが孫、トールズではないな！」

単刀直入だった。さすが身内と言うべきだろうか。しかし、記憶が

ないことを糸口にすれば、何とかごまかせるんじゃないかと口を開こうとしたのだが、

「ごまかそうとしても無駄じゃ！記憶がないと言う話は聞いているが、方便であろう。何より、主の魂が我が孫でないことを証明しておるわ！」

うわ、魂とか感じられる人なんだ。こりゃ、駄目だ。そいや、あの御方も魂で別人であると判別したしな。魂を感じられる人間には、変化や幻惑系の術は効かなさそうだ、覚えておこう。俺は、観念して全てを話した。俺が異世界の住人であったこと、トールズの死因とあの御方との契約にいたるまで、気づけば俺は洗い浚い吐き出してしまっていた（但し原作知識除く）。単なる事実にとどまらず、その時々的心情に至るまで詳細に。もしかして俺は誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。話し終わってみれば、日が沈みかけていた。爺さん、いや徹心さんは、全てを聞き終えると、まず礼を言った。

「我が孫の最期を話していただき、感謝する。併せて、孫の肉体だけでも生かしてくれたことについても深く感謝申し上げます」

深々と頭を下げる徹心さん。気にしないでくださいと頭を上げるよう促すと、次の瞬間飛んできたのは、渾身の右拳だった。紫紺の邪眼が発動し、その軌道と避け方を俺に理解させる。なるほど、こういうことも「理解」できるのかと感嘆するが、あえて避けようとは思わなかった。顔面に深々と拳がつきささり、ベッドから吹き飛ばされ、後ろの壁に叩きつけられた。その衝撃で、肺から空気が強制的に一時的に呼吸困難にすら陥る。正直、泣くほど痛い。それでも避けもせず、泣きもしないのは、当然の報いだと考えるからだ。どんな事情であれ、徹心さんのお孫さんの体を勝手に使っているのは

事実であろうし、その名を勝手に用いたのも事実であるからだ。俺が自分の意思で用いたわけではないが、覚醒した後にツールズとしてふるまったのは、間違いなく事実であり、俺の意思なのだ。

徹心さんからすれば、俺という存在がツールズと言う存在を殺してしまったようなものなのだ。たとえ、ツールズ本人がすでにしんでいたとしても、その存在の居場所を盗むことは許されないのだ。どうにか、息を整え起き上がった俺に、徹心さんは土下座して謝罪する。

「すまぬ、どうしても抑え切れなんだ。お主に罪はなく、むしろ感謝すべきであるというのに、ワシは……」

「いえ、当然のことです。お願いですから、頭をあげてください。その怒りは正当なものです。徹心さんは間違っていないですよ」

「すまぬ、本当にすまぬ。ありがとう、そして、先の一発で全てを水に流すこと約束する」

「それはありがたいですね、徹心さんの鉄拳をそう何発も喰らったら、本当に記憶喪失になってしましいそうですから」

「いいよるわ！」

徹心さんと笑い合う。この人と話せて本当によかった。この世界でも、分かり合える人がいてくれた。全てを知る人がいてくれるというのは、この上なく幸せなことのように思えた。そして、このときに俺は誓ったのだ。今日、この日をこの世界での俺の門出、誕生日にしよう。新たな門出には、新しい名が必要だ。この世界でツールズではなく、俺が俺として生きていくための名が。その名付け

親として、この世界での最初の理解者にして、俺の目を覚まさせてくれた徹心さん以上に相応しい人はいないと俺は思った。

「徹心さん、お願いがあります。俺に俺がこの世界で俺として生きてく為の名をくれませんか。これ以上、トールズの居場所を奪いたくはありませんし、何より俺の道を貫くために」

「ふむ、名付け親とは責任重大じゃな。うーむ、己が道を貫き徹すといったな。その言葉に二言はないな？」

「この命とトールズの名に誓って、二言はございません」

「言いおったな。ならば、その覚悟本物であるか、そばで見極めさせて貰うとしよう！お前の名は、道を貫き徹す者、徹じゃ！元の世界の本来の名も字は違えど」とおる「であるからの、ちょうどよいじゃろう。そして、ワシの名の一字でもある、その重みしかと受け止め精進するがいい！以後、小宮山徹と名乗るがよい。」

「はい、ありがとうございます！あの、ところで小宮山という姓は…?」

「ワシの姓よ。ワシの名は小宮山徹心、今宵この時からお前の名付け親であり、父であり師となる」

「え、あ、あの?」

「側で見極めるといつたであろう。そのためにお主をワシの養子にする！実は後継者がいなくて困っていたんじゃ、いい拾い物をしたの」

「いや、それはそうなんですけど、えといいのかなこれ？」

困惑する徹。その徹を尻目に結界をとき、荷物をまとめ帰る準備をする徹心。

「何をしておる？どうせ荷物などなかるう。必要なものは日本でそろえればよい。さあ、我が家へと帰ろうぞ、息子よ！」

病室の扉をあけ、こちらへと手を差し出す徹心。徹は一瞬、逡巡したものの、即座に手を取り、力強い声で応えた。

「はい、参りましょう父上！」

この日、小宮山徹というこの世界で生きる一人の人間が生まれた。さてさて、己が道を道を貫き徹すという彼の生がいかなるものになるのであろうか。

ちなみに、後日、記憶をなしたという徹への同情と徹自身の懇願、加えてそれまでのトールズの生活を不憫に思っていたネギの祖父の口添えによって、トールズはあの事件で死亡した唯一の犠牲者とされることになった。徹には、特別に戸籍が作られ、意気揚々と日本で養子となったとさ。

<序章 完>

新しい名前（後書き）

序章終了です。思いつくままに書いてしまったので、おかしいところがあれば、ご指摘ください。

では、次の章でお会いできることを、楽しみにしております。

2009/12/18 主人公の年齢を再度修正しました。

神鳴流と出会い

蝉時雨の響く真夏日、京都のとある神社の境内において、剣戟と静寂が繰り返されていた。

対峙するは、片や銀髪紅眼の少年であり、その手には身の丈以上に大きな剣を横薙ぎに構えている。片や齡60に達するであろう白髪交じりの翁、その手には日本刀が居合いの構えられ、微動だにしない。ここは、小宮山神社、いわずともわかるであろう小宮山親子の住処である。

徹と徹心はこの真夏日に、山中にあるさんさんと日差しのみならず境内で、鍛錬をしているのである。気温にして35度を超える状況で、両者は汗一つかいていない。無論、見るものが見れば、彼等が己の体表を蒼い冷気の膜で覆っていることに、気づいたであろう。両者の対峙は未だ終わらない。すでにこうなってから5分以上経過していると云うのに、微動だにしていない。暑さを遮断しているとはいえ、その集中力と辛抱強さは賞賛するべきであろう。ただ、年の功なのかはたまた練度の差か、徹心の表情にはどことなく余裕が感じられる。対して、徹の表情は険しいの一言につきる。余裕など全く見受けられない。それどころか、暑さ以外の原因で、額に汗が滲みだしている。

一陣の風が両者の間を吹き抜ける。その瞬間、徹は動いた。緊張に耐え切れなかったのか、隙を見出したかは不明であるが、現状を打破せんと動いたのだ。両者の間には10メートルは距離が開いていたというのに、たった一足でその距離を踏破する徹。徹心は僅かに目を細めただけで、未だ微動だにしない。横薙ぎに構えた長剣を何の躊躇いもなく、徹心に向けて全力で薙ぎ払う。徹心は、それを避けようとせせず、ただ腰をわずかに落とすだけだ。刃がその身に

届くその瞬間、甲高い音が境内に響く。その後、長剣が上へと跳ね上げられる。一体誰が思おう、先の音は納刀した際の鏝鳴りが原因であり、徹心が抜き手すら見えぬ神速の居合いで長剣を弾いたなど…。

されど、流石と言うべきか。この結果を予想していた徹は、弾かれる直前自らそちらへと跳んでいた。そして、弾かれた勢いを利用し、大きく上段に振りかぶると剣を巻き込む様に、体を回転させ、自身の膂力だけでなく、重力加速・遠心力まで加えた渾身の切り下ろしを放つ。その斬撃は、先の居合いの一刀では、弾けぬ威力をもっていた。

しかし、これにさえ徹心は余裕をもって、応じてみせる。連続して鏝鳴りの音が響き、気づけば渾身の切り下ろしは、徹心に当たらない軌道に変更させられていた。弾くのではなく、逸らすという妙技を徹心はやつてのけたのだ。このままでは、空振り必至。その隙を突かれ、神速の居合いに倒れるであろうことは明らかだった。徹心の勝敗を決する一撃が放たれんとしたその時、徹心のすぐ横を素通りするかと思われた長剣の刃が、突如分裂し鞭のごとくしなりながら、その軌道を変更した。徹の得物は、蛇腹剣若しくは蛇鞭刀ともいわれる連結刃だったのである。その特性を生かした意表をつく一撃であったが、相手が悪かった。かの武器を徹に与えたのは、徹心にほかならず、その特性も知り尽くしていたからだ。

要は、徹心にとっては予想の範疇にある攻撃に過ぎなかった。結果、徹心はこれすらも神速の居合いで迎撃し、さらに無理な体勢から攻撃を放った徹に対し、容赦なくトドメの一撃を入れた。神速の居合いでではなく、普通の横薙ぎでかつ峰打ちであったが、12歳の少年を吹き飛ばすには有り余る力が加わっていた。

境内の中を容赦なく吹き飛ばされ、神社を囲む鎮守の森へと頭から

突っ込んだ。普通の人間なら間違いなく病院送りであろう状況であるのに、徹は何ごともなかったように（打たれた腹を押さえてはいたが）立ち上がった。

「くそ、勝てねー。強すぎなんだよ、このクソ親父！ちよっとは手加減しろよ」

「ふおおおお、まだまだ甘いのが。お主の作る和菓子より、はるかに甘いわ！大蛇の特性を生かした攻撃は悪くはなかったが、わざわざ、ワシの間合いに入ったのは減点じゃのう。どうせなら、最初から大蛇でワシの間合いの外から攻撃するべきじゃった。そうすれば、もう少し長引いたやもしれんぞ」

「親父の言うとおりにしても、長くやれるだけで結果は結局かわんねえじゃねえか！」

「当然じゃろう、年季が違うわ！まあ、本来ならば大蛇の特性を隠して戦い、通常の斬撃からの変化は見事じゃった。ワシでなければ意表をついたであろうから、その発想と着眼点に免じて及第点はくれてやるう。「おっしゃー！」が、約束は約束じゃ」

「って合格なんだから許してくれるんじゃない……」

徹心の評価に歓喜の叫びをあげる徹だが、その直後の科白でどん底へと叩き落される。

「それとこれとは話が別よ。出稽古の免除は、あくまでもワシに一撃を入れたらじゃ。観念して、青山の嬢ちゃんにもまれてくるとええ」

「鬼、悪魔、人でなし！下半身が老いてますます盛んな色ボケ爺！」
徹心に襟首をつかまれ、瞬動術で山の麓まで連行される徹。あらん限りの罵詈雑言を喚いている。3年の間になにがあったのか、この親子、お互いにかなり遠慮がなくなっている。いや、むしろ遠慮なぞ全く見られない。どう見ても、互いに対する配慮など皆無である。

「ふおふおふお、負け犬の遠吠えじゃのう」

「くそー、死にたくない。厄介事は御免だー。誰かー！」

「大丈夫じゃ、あちらさんだって、その辺はわきまえておるわ。大体、今回が初めてではなかるう。なんで、今回に限ってそんな嫌がるんじゃ？」

「……………」

父の素朴な疑問に息子は沈黙をもって答える。徹心はそんな息子の様子をみて、ため息をつく。

「答えられん、若しくは答えたくないといったところかのう。やれやれ、困った奴じゃ。じゃが、理由を言わぬ以上、出稽古には行ってもらうぞ。他流試合の貴重な機会じゃからのう」

「呼ばれているのは親父なのに、何で俺が……」

そんなやりとりをするうちに、気づけば麓にしていた。そこには、艶やかな黒髪を腰の辺りまでのばした京美人が、佇んでいた。

「待つとりましたえ、徹はん。ほな、行きましょか。<妖閃翁>も

たまには相手してもらえると嬉しいんやけど」

徹心から、荷物（徹）を受け取り、そのまま車の後部座席に放り込みつつ、誘いをかける。

「ふおおおお、年寄りには神鳴流最強剣士『青山 鶴子』の相手は辛いわい。ワシのかわりに、精々徹をしごいてやってくれ。死ぬ程度にな」

「またまた、そんなこというて。全然現役のくせによう言いますわ。まあ、徹はんを鍛えるんも、中々どうして悪うないから、そっちで我慢ときますわ」

そんな風に言い捨てて、徹を放り込んだ後部座席に鶴子も乗り込み、それと同時に車が動き出す。それを見送りながら、徹心はひとりごちた。

「わからんのう、今回に限って、何がイヤだったというんじやろう…」

ところかわって、神鳴流道場へと向かう道中の車内。徹心から、今回の出稽古を徹が酷く嫌がったという話を聞いていた鶴子は、単刀直入に疑問を解消することにした。

「なあ、徹はん。えらい、嫌がってたって聞いたけどなんでー？そないに神鳴流（カミナリリウ）が嫌いなん？」

「いえ、違いますよ。そういう事じゃなくて、俺だって本当は喜んで参加させて貰いたいんですけど」

「そやな。いつもやったら意気揚々と来て、ボロボロになっても笑顔で帰ってくものな。そないに苦虫を噛み潰したみたいな表情、初めてみたわ。つまり、今回に限って何かあるということか」

鶴子の推測に、徹は言うべきか言うまいか少し逡巡した後、よく考えると別に隠す意味もないので、正直に話すことにした。

「ほら、今回の出稽古には、かの有名なサムライ・マスター、近衛 詠春』が来るといつていたじゃないですか。正直、あんまり関わりたくないんです」

「へー、なんでなん？詠春はんは、あのサウザンドマスターの仲間にして、関西呪術協会の長やで。魔法の世界に関わる者なら、お近づきになりたい者こそ多くても、厭う人間はまずおらんとちゃいます？」

「だからですよ、俺はサウザンドマスターが嫌いですから！なるべく、その関係者とも関わりたくないんです。少なくとも今はまだ…」

「徹はんも、大概変わり者ですなあ。男は英雄に憧れるもんやろ。特に自分くらいの年頃は」

「俺は、英雄がそんなにいいものだとは思いません。厄介事と敵が増大するだけで、何もいいことはありませんよ」

「はあ、ほんま子供とは思えん冷めっぷりやわー」

「ほっといてくださいー！」

徹は、そういつたきり仏頂面で黙り込む。鶴子は苦笑してその頭を撫でるのだった。

道場に着いた2人を迎えたのは、サイドテールの少女と眼鏡をかけた人のよさそうな男性だった。

「おや、詠春はん。もう来とったんですか。直々の出迎えとは驚きましたわ。刹那も久しぶりやな」

（オイオイ、これはなにかの呪いか？こうも、あっさり顔合わせすることになるうとは…）

内心で毒づきながら、自己紹介・挨拶する。どんなに嫌でも、己は義父の名代としてここにいるのだ。

義父に迷惑はかけられない以上、最低限の礼儀は尽くさねばならないのだ。

「封神妖幻流35代目継承者『小宮山 徹心』の名代として参りました。愚息の徹と申します。義父には遠く及ばぬ若輩の身ではありますが、微力を尽くして当流の粹を御覧に入りたいと思います。よろしく願います」

「君が、あの…。失礼、ご丁寧にも、近衛 詠春です。こちらこそよろしく願いますよ。こちらは、私の弟子であり、娘の友人でもある『桜咲 刹那』君だ。刹那君、挨拶を」

詠春は、一瞬瞠目した後、すぐに挨拶を返す。それに続き刹那も挨拶を返す。

「桜咲 刹那です。かのく妖閃翁>のご子息に会えるとは光栄です。是非、御指南のほどをよろしくお願いします」

「いえいえ、私は未熟者ゆえ、逆に指導をお願いするかもしれませ
ん」

(刹那、いい娘だなあ。親父をきつちりストレートに褒めてくれる
辺りがポイント高いわ。逆に、詠春さんは減点かなあ。もろ表情に
出してたし、腹芸は苦手そうだ)

刹那ににこやかに対応しつつ、徹は内心でそんな評価をする。実の
ところ、徹は、この世界で自分と同年代の者とこんな風に話すのは、
久しぶりだった。初めてといっても、過言ではない。なんせ、前例
は文通してるネカネくらいだからである。何気にさびしい少年時代
を送っている徹であった。そのせいか、第一印象もよかったことも
寄与し、気づかぬ内に刹那と話しこんでいた。

それを見守る2つの視線があった。その主は、いわずと知れた鶴子
と詠春だ。

「あんなに嫌がとつたのに、現金なもんやなあ。徹はんも、可愛い
い女子には弱いみたいやな」

「同年代ですし、出稽古には他に年の近い人もいませんから、無理
もないでしょう。それにしても、驚きました。あのく妖閃翁>が養
子をとられたという話は聞いていましたが、まさか木乃香と変わら
ない年とは…。それに、『当流』と言いましたね。あの年で、かの
流派を身に着けているのですか？」

驚嘆とともにどことなく複雑そうな表情をする詠春。

「詠春はん、あんたが何考えていはるか、うちには分かります。あんとあの子が揉めて欲しゅうないから、はつきり言っておきます。下手な同情はやめなはれ。あの子は己が意思で、かの流派を望んで身につけたんや。下手な同情はあの子の意思を汚すことになりませえ」

「そうですか、肝に銘じておきます。しかし、となると『使い手』ではなく『主』であるということですか？」

「そうやるな。あの子の得物は『大蛇』いうて、中々の曲者やけど、あの子は、それを手足の如く完璧に使いこなす。奥の手もあるみたいやし、間違いなく『主』やと思いますえ」

「そうですか……。しかし、鶴子さんにそこまで言わせるとは大した少年だ。未恐ろしいですね」

「そやなあ、今は地力に圧倒的な差があるから、万が一の可能性もないやろうけど。あの大人顔負けの知能に判断能力、それに加えてかの流派とえろうやり辛い得物……。10年、いや下手したら5、6年たった後に、やりおうたら危ないかもしれへんな」

「ほほう、それほどの才だということですか」

「それが奇妙な話なんです。あの子と初めて会ったとき、確かに凡人の域を出ない剣才しかなかったはずなんですけどなあ。今や、あの子の才は超一流の域に達してますんや。才が育つなんてことは聞いたこともありません。というかあるわけがない。一体、どういうことであつしやるなあ？」

てつきり肯定の返事が返ってくるものと思っていた詠春は、予想外の答えに戸惑い考え込む。

「才が育つですか。確かにそんな事例は、見たことも聞いたことありません」

「そうですね。ですから、うちが見抜けんかっただけやと今は思うとります。でなければ……」

「かの流派に秘密があるということですか？しかし、もしそうだったとしても、かの流派は誰でも身につけられるものではありません。ある意味、神鳴流よりも狭き門なのですから……」

「そやな。まあ、考えるだけ無駄かもしれせんわ。今現実に、あの子には超一流の剣才がある。それさえ、分かっていればええどす。うちはただ、それに応じてしごいてやればいいんやから」

「そうですね、仮に才が育っていたとしても、それはけして悪いことではありません。むしろ、喜ぶべきことでしょう。まずありえないことではあります……」

二人はそこまで話して、余程気があったのか、未だ刹那と話し込んでいる徹を見つめるのだった。

神鳴流と出会い（後書き）

補足&用語説明

『封神妖幻流』：妖刀・魔剣等、本来忌避されるべき呪物まで用いて、鬼神や荒神を鎮めてきた流派。妖刀・魔剣の類に宿った妖気を利用して、自身の魔力や気とあわせて戦う流派。妖刀・魔剣は、使い手を自ら選ぶため、まず選ばなければ習得自体が不可能な流派であり、千年以上の歴史がある。

『大蛇』：徹の愛刀。現在の徹自身より長大な剣であり、蛇鞭刀とよばれる連結刃の一種で、基本形は反りを持った片刃であり、逆側に鋸かトサカのような構造をしている。元々は、封神妖幻流の開祖が鎮めた蛇神を封じ込めたといわれる封神具であり、単なる両刃の剣でしかなかった。しかし、千年以上の長き間に気づけば変質し、蛇神をたどったような今の形となり、凄まじいまでの妖気を発するようになった。徹は、初仕事の際にこれに認められ、『主』となった。『大蛇』はその際、己の物になった証として徹がつけた名前。

『主』と『使い手』：『使い手』は、妖刀・魔剣に選ばれ、振るうことが許された者であるが、封神妖幻流を完全に使いこなすには、妖刀・魔剣に『主』として認められなければならない。『主』として認められるには条件があり、これが詠春の複雑な表情の原因である。

<妖閃翁>：小宮山徹心の異名。振るうのが妖刀『村正』であるのと、神速の居合による一閃を得意とすることからついた。日本では、それなりのビッグネームであり、裏の人間は畏怖と共にその名を記憶している。

感想ありがとうございます。

拙い文章ですが、楽しんでいただければ幸いです。

おかしいところがあれば、遠慮なくご指摘ください。

封神妖幻流

静寂が神鳴流道場を支配している。先程まで気合の音が響き、剣戟けんげきの音が飛び交っていたと言つのに。それは、中央の試合場で、対峙する男女から発せられる緊張感と凄絶せいぜつな殺気が原因であつた。

(俺も色々反則で人外レベルだと言つ自覚はあるが、親父といい、この人といい、どう考えてもそんなレベルじゃなく化物だよな…)
相對してみても、改めて理解する力の差。『眼』を使うまでもなく、嫌が応にも理解させられる。絶対的な格の差を。どうしかけても、反撃されて負ける自信がある。

(いやいや、そんな自信はいらなから…。ちくしょー、どないせえいというんじゃー！)

徹は内心で毒づくが、状況は何も変わらないが、諦めたくはない。なにせ彼女は、絶対的強者だ。刃を合わせれるだけでも、価値がある。しかも、他流派の達人級マスタークラスである。師である父との稽古けいこも悪くはないが、お互い手の内をしりつくしているせいで、予定調和のよう
で今一緊張感が足りない。

それに、実戦においては、他流派はおろか得物すら違う相手であることもあろう。予測できる事の方が少ないのが、普通だ。であれば、他流派の格上の強者とやり合うのは絶対的に必要なことだ。必死に隙すきを窺うかがうが、向けられた刃は微動だにせず、一つの美ともいふべき完成された構えには、一分の隙も見出せない。

(相変わら子供とは思えんげつない殺気やわ。いくら妖刀の主

いうても、まだ12の子供がようこまで…。妖閃翁はどないな教育したんやろうなあ)

鶴子は、油断なく件の少年を見据えながら、内心舌を巻く。彼の放つ殺気は、断じて子供が放てるようなものではない。その殺気たるや、凄絶の一言に尽きる。如何な修行をすれば、このような殺気を12で放てるのだろうか。そんなことすら思う。地力に圧倒的な差があるにもかかわらず、鶴子が真剣にならざるをない理由がそこにあった。正直、徹の技は12にしては大したものだが、優れた才を持ち幼少の頃より研鑽けんさんしてきた己が技には、まだまだ到底及ばない。しかし、少年の放つ一撃は、どれも必殺の威力を持つ。それでいて己が可能とする最速で、何より凄絶な殺気をのせて、その全てが放たれるのだ。一瞬の油断や迷いが、死へと繋がることを夢想させる。そんなことは、試合である以上ありえないのだが、少年の放つ凄絶な殺気が、死を連想させ、錯覚させられる。

(く〜、これだから、この子の相手はやめられまへん！)

結婚して、現役を退いた鶴子には、当然なことながら、滅多めったな事では仕事は回ってこない。

余程の敵とか脅威きょういでなければ、彼女に実戦の機会は与えられないのだ。現役を退いてからも、鍛錬は欠かしていないが、現役時代に比べ、技のキレや鋭さが鈍っている事は否定できないし、何より、実戦の勘や感覚が錆びさびるのは、どうしようもないことである。

しかし、そこで役に立つのが目の前の少年である。彼は、試合という不殺いんたすの儀式においても、濃厚な死の気配を撒き散らし、嫌が応にも殺伐さつぱつとした戦場を現出させる。それは、これ以上ない実戦の空いだ。己が技のキレと鋭さを取り戻し、実戦の勘や感覚の錆を落とすのには、これ以上ない相手なのだ。かのく妖閃翁の頼みとはいえ、神鳴流門下ですらない赤の他人に、直々に手ほどきするのは、そ

れが最大の理由だったりする。両者の思惑をはらみながらも、緊張は徐々に高まり、剣戟の舞踏がはじまる時は刻一刻と近づいていく。高まっていく緊張感におされ、一時的に稽古の手をとめ見守っていた人々も、固唾を呑んで両者の様子をうかがう。濃密な殺気が道場内を満たし、彼等に静止と沈黙を強制させる。それは、刹那と彼女に稽古をつけていた詠春とて例外ではなかった。

（なんて凄い殺気なのだろう。まるで、別人のようだ。あれは本当に徹さんなのか…）

一時間程前に、自分とにこやかに談笑していた人物とは思えない。それ程に凄まじい殺気であった。刹那は、声をだすこともできず、ただただ、ついさつき友人になったばかりの少年を見つめる。

（鶴子さんが、ひどく楽しそうだ。これは期待できるかもしれない。噂にきく封神妖幻流、そしてその粹、言葉のとおり見せてもらうことにしましょう）

詠春は、鶴子の表情を見て、彼女がこの試合にどの程度の力をいれているか把握していた。それによって、相對する少年の力を量ろうとするあたり、中々目聡い。ポ・カーフェイスは苦手でも、さすがは関西呪術協会の長といったところだろうか。二人の内心を知っただけか知らずか、ついに戦機が訪れる！

最初に動いたのは、やはり徹であった。しかし、その動きは誰からも予想外であった。対峙する唯一人を除いて。その場から、大上段に振り上げた剣を渾身の力で振り下ろしたからである。いくら、長

大な剣とはいっても、どう考えても鶴子は間合いの外である。あたるわけがない……。何をしているのか、見物人には理解できなかった。刃が分裂して伸びるその瞬間までは。長大な刃が分裂して、一直線に鶴子の首を狙って伸びる。その様は、さながら獲物えものに喰らいつく蛇だ。

だが、鶴子とて、伊達に徹の面倒を見てきたわけではない。その武器の特性くらい当然把握している。鶴子は慌てることなく半身をずらすだけ回避するが、それを追うかのように大蛇はその動きに呼応して暴れ狂う。鶴子はさらに前方に跳ぶことで回避する。瞬時に、大蛇を引き戻し、次撃を放たんとする徹だが、すでに鶴子は己の間合に徹を捕らえていた。

「斬岩剣や、くらつとき！」

無茶な要求と共に、鶴子の無慈悲な一閃が放たれる。徹は、その斬撃の軌道を完全に『理解する』と、紙一重でよけて、体制を崩さぬよう気をつけながら、渾身の横薙ぎを放つ。超至近距離で、しかもカウンターで放たれたそれを、鶴子は己が刀で受け止めながら、後ろへ跳ぶ。斬撃の勢いを利用し、一気に結界で覆おおわれた試合場の端へと移動する。逃がさぬとばかりに、着地点へ伸ばされる刃の蛇の顎あごが、これすらも鶴子は刀でその軌道をそらし、凌いでみせる！これは予想していたようで、徹は、即座に大蛇の刃を引き戻す。その過程で鶴子の拘束を試みるも、あっさりかわされ、逆に反撃される。

「遠くから攻撃できるんが、自分だけやと思うたら大間違いや！斬空閃！」

刀身から放たれた気が、その剣速と相俟あいまってカマイタチと共になつて、徹を襲う。彼は回避が困難であると瞬時に理解し、戻した剣を

つきたて体を剣の影に隠す。

「我が妖の刃は、何人も通ること能わず。断絶せよ、妖断壁！」

声とともに刀身が赤紫に輝き、それに当たった斬空閃を霧散させる。そして、床に突き刺した剣をそのまますくいあげるように振る。

「これなら、どうだ？妖蛇地裂斬！」

なんと突き刺したとき、切っ先を伸ばしていたらしく、鶴子の真下から、床を切り裂くようにそれが現れる。完全に不意をついた真下からの斬撃、さしもの鶴子も仰け反るよるに紙一重でかわす。避けられることすら、予測済といわんばかりに、追撃が放たれる。

「仇野に鬼が啼く。全てを切り裂け、鬼哭無冥閃！」

真紅の剣閃が、体制を崩した体勢を崩した鶴子を襲う。直撃?! 誰もがそう思ったが、その予想すら超えるがゆえの神鳴流最強である。

「悪うない。でも、うちをやるにはまだまだどすな! 斬魔剣！」

清冽な斬撃が、妖しき真紅の剣閃を瞬時に打ち消す。避けるどころか、無理な体勢から技を放ち相殺してみせる鶴子。

「楽しませてもらうた、お礼や。今度はこちらから行きますえ！」

さらに、彼女の動きは止まらない。相殺と同時に体勢を整えると、一気に徹との距離をつめ、間髪いれずに放たれる超高速の斬撃。一瞬にして攻守が入れ替わり、防戦一方になる徹。必死で、自身へと迫る剣閃を時に弾き、受け止め、かわす。少しでも気を抜けば、一

瞬にして決着がつくであろうことは明白であった。

（さっきの連撃で一撃もくらわないなんて、どういう反応速度だよ……。こっちは、『真理の眼』を全開で使って、筋肉の動き、体幹に重心に至るまで『理解して』、動きを先読みしてるんだぞ！）

そう、地力・技量共に敵わない相手である鶴子相手に、曲りなりともやりあえているのは、彼の持つ紫紺の邪眼から得られる恩恵を、フル活用しているからこそである。

（ほんまにおもしろい子やわ。どうやってるしか知らんけど、うちの動きを先読みするのは明らかや。ほんまにどこまで、うちを楽しませてくれるんやろか！）

鶴子も、目の前の少年の異常さは理解していた。己との実力差を考えれば、手加減しているとはいえ、こちらが攻撃に転じた時点（最初の斬岩剣）で終わっているはずだからである。

ゆえに、鶴子は攻撃の手を緩めない。むしろ、その速度と威力を少しずつ上げていく。

（さあ、どこまでついてこられますか、徹はん？その力の底を、今日こそ見せてもらいますえ！）

一連の攻防を注意深く観察していた詠春は、予想を超える少年の実力に瞠目していた。

「まさか、これ程までとは……。しかし、何かおかしい。彼の現状のレベルでは考えられない事だ」

同時に疑問も懐いていた。ありえない事が、起きてるがゆえに…。

（これも妖刀の力だというのか？それとも、彼自身に秘密があるのか？）

一方、詠春の横で刹那は見惚れていた。自分と同じ年代の少年が、生み出す剣戟の舞踏に。

「凄い。どのような修練をつめば、あの領域に達せられるんだろうか？私と年はほとんど変わらないというのに…」

そして、己が内に羨望せんぼうと嫉妬しっとの念が、生まれいずるのをとめることができなかつた。

（私にも、あれだけの実力があれば…、このちゃん、いや、お嬢様をお守りできるだろうに！）

忘れえぬ、無力と後悔の記憶、そしてそこで自ら立てた誓いが、彼女にそれをいだかせる。知れず『夕凧』を握る手に力がこもる。二人の思いをよそに、剣戟の舞踏ぶたくは、さらに激しさをましていく！

（駄目だ！このままではジリ貧だ。いずれ速さも威力もついていけなくなる…）

次第に威力・速さ共に増していく鶴子の斬撃を、『真理の眼』によって、攻撃される部分と回避方法を『理解』して、どうにか捌いているが、限界は近い。

（手加減されているはずなのに、この状況って泣けてくるわ…。と

にかく、どうにかして距離をとって、乾坤一擲けんこんいつてきの賭けにできるしかない）

さらに、その威力と速度を増していく鶴子の斬撃。これに、徹は次の一刀を考えない渾身の一撃をぶつける。それには、徹の常人を遙かに凌ぐ膂力がこめられていた。二の太刀を考えない捨て身の一刀、しかもとんでもなく重い。さしもの鶴子も受けに回るほかない。受けた鶴子を力ずくで、吹き飛ばし距離をとる。ここに、徹の待ち望んだ距離がひらかれる。徹は力ずくの一刀で体勢をくずしながらも、己が腕に刃を奔はしらせる。鮮血が刃を染めると同時に、まるで脈動するかのよう到大蛇の刀身が波打つ。

その一瞬後、妖刀は赤黒く染まり、その禍々しさを増していく。それが極まった瞬間、徹は自身の内で高めていた、現状で放出可能な限りの魔力を大蛇へ注ぎ込む。爆発的な妖気の高まりと共に、蒼き魔力と溶け合った紅の妖気によって、刀身は紫の輝きを放つ。

「封神妖幻流奥義『妖魔混合』大蛇の型、けつめいじゃこうせん血命蛇蛟穿！」

解き放たれるは、爆発的な高まりをみせた妖気をその身となす紫の蛇。

そして、それを追うように放たれる連結刃。それはあたかも生きているのように空間を埋め尽くす！

「ほんまにとんでもない子や！でも、神鳴流をなめたらあきまへんえ。神鳴流奥義、斬魔剣！続いて斬魔剣 弐の太刀 ひゃっかりょうらん百花繚乱や！」

斬魔剣が、紫の妖蛇を消し去り、百花繚乱の弐の太刀が空間を支配する連結刃の刃を切り伏せる。文字通り全身全霊の一撃、己が流派の奥義を使い己が切り札をきったというのに、この結果。神鳴流の何という奥深さか。いや、さすがは神鳴流最強剣士『青山 鶴子』

というべきだろう。出血と大量の魔力放出&妖気の制御で、徹は疲労困憊で朦朧とする意識の中、その隙を逃さず放たれた鶴子の一刀を避けようともせず、その身に受けたのだった。

なす術もなく吹き飛ばされる少年の姿に、ようやく道場の静寂が破られ、一気に喧騒が戻ってくる。

「さすがは、青山の宗家である鶴子様だ！」

鶴子を賞讃する声もあれば、

「く妖閃翁のご子息、そして封神妖幻流の雷名に偽りなしか…」

徹の健闘を讃える声もある。

しかし、どういいうわけか吹き飛ばされた徹の身を心配するような声は聞こえてこない。

「徹さん、ご無事ですか？返事をしてください！」

かろうじて、刹那だけが、その顔を蒼白にして、吹きとばされた徹のところへと向かう。

その背を追いながら、詠春は己が思考に意識を沈める。

（あの年で凄まじい力だ。鶴子さんが弑の太刀までみせるとは、正直信じられない。

あの子は、まだまだのびる。鶴子さんの言に誇張はなかったとうことか。

刹那君との相性も悪くないようだし、神鳴流ではないあの子なら、木乃香の護衛にうってつけ

かもしれない。後で、鶴子さんに相談してみるとしよう。
それにしても、一瞬感じたあの魔力量は一体…？)

運命は、嫌が応にも徹を物語の舞台へと押し上げる。

そのとき、この世ではないどこかで、この上なく楽しそうに角と翼を生やした銀と紅に彩られた絶世の美女が笑い声をあげたのは、必然か、あるいは偶然だったのか、定かではない。

封神妖幻流（後書き）

封神妖幻流&技解説

封神妖幻流の最大の特徴は、自身の得物である妖刀・魔剣・呪物に宿る妖気や怨念を戦闘に利用することにある。これに、「気」や「魔力」を混合することで、爆発的な出力を可能とし、絶大な戦闘能力を誇る。

『妖断壁』：封神妖幻流基本技。妖気を活性化させ、定形をもたぬものを遮断する壁を作る技。当然、物理攻撃そのものは防げない。魔法や気による攻撃に対しては強力無比な防御力を誇る。

『妖蛇地裂斬』：大蛇の特性を生かした徹のオリジナル技。地中に潜らせるように伸ばした刃で敵の真下から攻撃する奇襲技。また、伸ばした刃の上にいる者を一気に切り裂くのにも使える。

『鬼哭無冥閃』：封神妖幻流基本技にして奥義。自身の気と混合させて高めた妖気を、刃に纏わせ切り裂く技。基本技であるが、極めれば、斬線上にいる敵を問答無用で切り裂き殲滅できる奥義となる。徹はこの域まで、達しておらず、カマイタチのようにして飛ばすのが精一杯である。

『妖魔混合』：封神妖幻流奥義を使う大前提にして秘奥。妖気と魔力を混ぜ合わせる技法。妖気は気と相性がいいが、魔力とはすこぶる相性が悪い。制御に失敗すると、容易く暴走する危険性がある程である。それでも、制御をなすとけばれば、魔力あるいは妖気の出力を爆発的に高めることができる。

『血命蛇蛟穿』：封神妖幻流奥義は、得物により異なる。基本技よ

り昇華した一部のものを除けば、伝承者ごとに技が異なる。これは徹が大蛇の特性を最大限に活用して生み出した最初の奥義である。血によって、活性化させた大蛇に宿るといわれる蛇神を一時的に解放し、敵を討つ。妖魔混合により、蛇神の仮の寄り坐しを作りだし、それに合わせるように連結刃を解き放つことで、妖蛇による特攻と空間を埋め尽くす斬撃の嵐によって、敵を殲滅する。

力と誓、そして友

目をあければ、そこは道場ではなかった。かすかに聞こえる気合の
声と剣戟の音。

ここは、道場から離れた場所にある屋敷の一室のようだ。和室特有
の畳の匂いが香る。

どうも濡らしたタオルでも、額にのせられているようで、微妙に視
界が狭い。

介抱されているところからして、己は負けたらしいことを悟る。同
時に蘇る記憶の波。

そして、その記憶の証左として痛む体。見た目や体の感覚から、骨
等に異常はなく怪我もないようだ。

峰打ちとはいえ、神鳴流最強剣士の一撃をまともに受けたのだ。こ
の程度ですんだのが僥倖であろう。

いや、むしろその程度で済むような確かな手加減をした鶴子をほめ
るべきかもしれない。

「あー、やらかしたー！ やっちまったよ、おい。俺、どうすんだよ
…」

それが、痛む体をどうにか起こした徹が発した第一声であった。

その顔にはつい先程まで、鶴子相手に健闘していたときのような覇
気は見られず、むしろ別人のようなどんよりとっていた。その顔に
刻まれているのは深い後悔の念である。

「ここまでやるつもりなかったのに。腕試しのつもりがなかったと
はいわれないが、それにしても『眼』まで全開にしてやる必要はなか
ったのに…。くそう、これもサウザンドマスターの仲間になんかに

会ったからだ。俺は悪くない！」

確かに、詠春と会ってしまいその鬱憤うつげんが溜たまりまっていたのは事実であり、その憂さ晴らしが一因である。しかし、実のところやりすぎてしまった理由は、その大部分は徹が男であったからだったりする。要するに、刹那にいいところを見せたいと思ってしまったのである。刹那が、予想以上に好い娘だったせいで、一人の少年として欲がでてしまったのだ。徹の肉体は精神にひきづられているのか、12歳にしては随分発育がよく、その身長はすでに160cmを超えるている。

だが、逆もまた真のようで、この世界での己の境遇・経験から、肉体年齢相応な感情も抱くのであり、そういう意味で、精神も肉体にひきずられているのかもしれない。まあ、徹自身がかなりの負けず嫌いであり、数少ない同年代異性の友人の前で、無様を晒さらしたくないというのも本音ではあったが。己以外誰もいない部屋で、一人頭を抱えて悶もたえる徹。それをよそに、障子を開く音が響く。室内に入ってきたのは、鶴子を筆頭に詠春、刹那、そしていつの間に来たのか、徹心の4人であった。

「おお、目が覚めたようで何よりやわ。少々綺麗きれいに入ってもうたから、下手すると2、3日は寝たきりになるやもしれんと、肝を冷しましたわ。…って、なにとしてはるんですか？」

悶もたえていたせいで、すぐには進入に気づけなかった為に、その様子をばっちり目撃されていたらしい。すぐに姿勢を戻したので鶴子以外に見られなかったのは幸運であった。

「ええ、おかげさまで！体はあちこち痛いし、最悪の目覚めでしたよ」

悶えたい様をみられた恥辱・敗れた悔しさを押し殺し、ささやかな復讐として、皮肉を利かせた答えを返す。

「それならいいんやけど。一瞬、打ち所が悪かったんやないかと、本気で心配しましたわ」

涼しい顔で皮肉を流し、あえてスルーした話題を穿り返す鶴子。中々いい性格をしている。

「いらぬ心配です！ただ、己の未熟さに憤慨していただけです」

(どんだけ意地が悪いんや、このどS女め！)

内心で毒づきながら、半ばやけになって答える。声にしていえないあたりチキンである。

「ふおふおふお、今日はワシとの一戦も含めれば、2度目の敗北じやからのう。

いつちよまえ拗ねているのじゃよ。のう、徹よ。

はつきり言っつてやろう。負け犬の遠吠えはみつともないぞ」

この場にいる唯一の身内だというのに、容赦なく追い討ちをかける
徹心。

「黙れ、くそ親父！あんたそれでも父親か？ここは、普通慰めるところだろ！

それどころか、追いつかせるなんざ、あんたには血も涙もないな、この鬼め！」

あんまり過ぎる状況に、ついにキレた徹。刹那や詠春の前だというのに、外面が完全に崩壊し、地が出てしまっている。先程までの礼儀正しさは吹き飛び、敬語ですらない。

「何を言うか、こんなにも自愛に満ちたワシに向かって。ひどい息子じゃのう」

「てめえの言うじあいは字がちげえよ！必要なのは慈愛のほうだつづの！」

間髪いれずに突っ込む徹。最早、目上への敬意とかくそらえな言葉遣いである。

「それよりよいのか？お主、地がでとるぞ。礼儀正しい優等生な外面はどこへいったのかのう？」

「！！！！」

徹心の指摘に我に返る徹。絶句して、詠春と刹那を見る。

しかし、すでに時遅し。二人は徹の豹変振りに言葉をなくしている。とくに刹那などは、完全に硬直してしまい、半ば思考停止に陥っている。

「ふふふ、まあ、ええやんか、徹はん。お互い素の方が、腹を割って話しやすいやろ。」

それに、うちはそっちの方が好きですよって。外面よくしたいんは分かるけど、疲れるやろ？」

「別に疲れはしませんが…。ああ、もう！今更、取繕とくつくろっても仕方ない。これが、本来の俺です。それで、皆して雁首揃えてゾロゾロと、親父までいるし。はあ、一体何用ですか？」

大きくため息をつくくと、開き直る少年。ある意味、潔いのかもしいない。

「要件については、私から。それにしても驚きました。鶴子さんの一戦で見せてもらった実力も然る事ながら、子供とは思えない礼儀正しい態度もだったのですが…。いやはや、もの見事に騙だまされましたよ。まさか、その歳で裏表を使い分けていようとは。

本当に、君には驚かされてばかりです」

「別に騙したわけではないですよ。あれも俺です。誰だって、状況に応じて裏表を使い分けるものでしょう。ただ、封神妖幻流当代の息子として、恥じないように振舞ったに過ぎません。むしろ、ずっと素のまままで過ごこせる者など、ごく少数でしょうね」

苦笑しながらいう詠春の言を、半ばやけになつて一蹴いちしゅうする徹。

「確かに君の言うとおりですね。しかし、君の物言いはその歳の子供のものとは思えない。

まるで、成人と話しているかのようにですよ。君は精神的に随分大人なんです」

「お褒め頂き光栄ですよ、<サムライ・マスター>『近衛 詠春』さん。」

俺のような若僧に一体、どのような御用がお有りですか？」

まさに慇懃無礼いんぎんぶれいという態度で応じる徹。しかし、詠春はそれを齒牙にもかけない。さすがに大人だ。

「当初は徹心さんに依頼して、君を派遣してもらおうという形を考えていたのだがね。」

君が、これ程精神的に熟達しているなら、話は別だ。君に直接依頼すべきだろうね。

君自身の意思で、私の依頼を受けてもらいたいと思う。では、本題に「待った!」……」

本格的な話に入ろうとした詠春を制止した徹は、そのまま詠春に頭を下げる。

「すみません、詠春さん。勝手ながら、お願いがあります！」

自分で促しといてなんですが、それより先に、刹那、いや桜咲さんと二人だけで話させて貰えないでしょうか？」

一転して腰を低くし、真摯しんじな態度で頼む徹。彼にとって、詠春の依頼なんかより、刹那の方が余程気にかかる。なぜなら、彼女は这个世界でできた、数少ない(ある意味初めての)同年代の友人だからだ。共にすごした時間は、一日も満たないが、彼女は後に続く友誼ゆうぎを結びたいと思わせるに十分な少女であったし、その縁を誤解ゆがで歪めたくはなかったのである。

何より、彼はせっかくできた対等な友人という貴重な存在(同じ魔の血を引く者としても)を失いたくはなかった。その為にも、今ここできつちり話しておくべきだと、彼は思ったのだ。ちなみに、わざわざ呼び名をかえたのは彼なりのけじめである。

「ふむ、そうですね。それがいいかもしれません。私達は、隣室に控えていますので、存分に話されるがいいでしょう。参りましょう、鶴子さん、徹心殿」

詠春は、未だ動揺覚めやらぬ刹那を一瞥し、しばし黙考した後、徹の要求を受け入れた。

そのまま立ち上がり、徹心と鶴子に対し頷き、両者もそれに応えろと、三人は隣室へと去った。

二人きりとなった少年少女だが、両者の間を流れるのは、気まずい沈黙であった。徹は、どう話したのか迷い、また踏ん切りがつかず、刹那は友人である少年の変わり様と急激な事態の推移に未だ動揺すると共に困惑していたのだ。

（この期に及んで、何を迷ってやがる！しっかりしろ、俺！刹那に全てを話すんだろ！）

徹は、ふがいない己に内心で檄をとばすが、それでも口は動いてくれない。こうなれば、行動で追い詰めるほかないと、彼は枕元におかれた大蛇を手にとると、妖気を解放する。

「我が妖の刃は、何人も通ること能わず。断絶せよ、妖断壁！」

解放された妖気が真紅の壁となり、和室を模り覆う。突如、得物をもち技を放った徹に対し、思わず立てひざになり、夕凧を構える刹那。

「ああ、ちょっとたんま。早とちりしないでくれ。別に君とやりあろうってわけじゃない。」

これから話すことは誰にも聞かれたくないんでね。隣室とはいえ、そうそう聞こえたりしないだろうが、念には念を入れて、外部との音のつながりを遮断させてもらっただけさ」

そういつて大蛇を枕元に戻す徹。さらに、そこから距離をおき、刹那の目の前へと移動し正座する。刹那がその時になれば、一息で斬れる位置にである。それでいて己が得物にはどうやっても届かない。これによって刹那は、本当にやりあう気はないのだと判断し、夕凧を戻し座りなおす。

「まず、最初に謝らせてくれ。桜咲さん、騙す様な真似をしてして悪かった。本当にごめんなさい！」

少年は、日本伝統の最上級謝罪、土下座をした。一見なんでもない光景であるが、実際は精神年齢にして三十路をこえるおっさんが、11の少女に土下座しているのである。ある意味非常にシニールな光景であり、その情けなさを自覚しながら、彼には微塵みじんの躊躇ちゅうちゆもなかった。

なぜなら、彼はそれだけのことをしたと思っていたからである。徹本人に、騙すつもりがなくても、受け手である刹那がどう感じるかは全く別の話である。周りの者が大人ばかりで、ネカネとの文通以外で同年代の者と交流していないことが、災いした。少年は、外面で過ごすことに慣れすぎていたのだ。ごく親しい者にしか、素を晒すことはなかった。その結果、本来、己がままに交流すべき、子供の友情を踏みにじったのだ。それは、許されないことだと彼は思ったのだ。それは純粹に接してくれた者に対する裏切りだと。ゆえに、精神年齢にして二周りも違う少女に、頭を垂れることに迷いや躊躇ためらいはなかったのである。

「なにしてはるんですか、やめとくれやす！うちかて、いえ、私だつて隠し事がありますし、騙されたなんて思つていませんから。そんな簡単に己をさらけ出すなんて、できませんから」

これに慌てたのは刹那である。徹の本気土下座の衝撃で、地が出て京都弁がでてしまつている。

まあ、無理もなからう。どこの世界に自分と同年代の少年を土下座させて喜ぶ少女がいるだらうか。むしろ、嫌がるだらう。中には、同年代の異性を屈服させることに愉悦ゆえつを覚えるどS少女がいるかもしれないが…。その様子に好ましいものを感じ、徹はかすかに笑みを浮かべ、顔をあげる。

「そういつて貰えると助かるよ。恩に着る。本当にありがとう。ふふふ、それにしても、その京都弁が君の地かな？結局お互い様と云つたところかな」

己の失態に顔を赤くする刹那と、その様にますます笑みを深める徹。二人の間に束の間、なごやかな空気が流れるが、それを少年はすぐに断ち切つた。

「では、改めて俺の友人になつてもらえないだらうか？

俺がどういふ存在なのか、俺の隠し事全てを話す。それを聞いて判断してくれ。

俺が君の友に相応しい男であるかを…」

「ふふふ、その必要はありませんよ。さっき、ご自分で言われたじやないですか、お互い様だと。

ならば、私達は友人のままのはず。それとも、徹さんは私をもう友ではないといわれるのですか？」

「いや、そんなことはない。でも、君はそれでいいのか、桜咲さん、いや刹那」

「ええ、勿論です。誰にだって隠し事の二つや三つあるものですし、内と外を使い分けることは、程度の差こそあれど、同様のことが言えます」

（刹那、どんだけいい娘なんや。本気でお持ち帰りしたい！）

などと、そんな馬鹿な思考が徹の頭を一瞬よぎる。

しかし、彼はすぐに頭を振り思い直す。己は知っているのだ、刹那の隠し事を。あちらの記憶は現在もしっかりと保持している。特に原作知識については覚えてある限りのことを書き出し、何度も反芻して覚え直している。原作の内容は、知識としてしっかり残っているのだった。刹那の生い立ちとその秘密を。彼女が、どうしようもなく苦悩し、隠してきたそれを、不可抗力とはいえ、知っているのだ。それにもかかわらず、このまま彼女の言葉に甘えて、己は秘密を抱えたまま、友人としてあるのは、理屈としては仕方ないことだと理解はしても、納得はできないことだった。ゆえに、彼は全てを話す決意を固めた。

「俺を友として認めてくれるなら、なおさら聞いてくれないか。

勝手な思いであることは承知しているが、俺はもう、君に嘘や隠し事をしたくないんだ。

なにせ君は、同年代で素の俺と対等に付き合うことのできる、初めての大切な友人だからね。

君とは、長い付き合いになりそうな気がするし、変なわだかまりをもってはいたくない。

無論、聞いたからといって何かを強いたりはしないし、君の隠し事

を話せとはいわないし、その必要もない。どうか、聞いてもらえないだろうか？」

ここまで言われてしまっただけは、刹那に否という選択肢はなかった。

「分かりました。聞かせてください、徹さん」

刹那の返答に頷き、深く深く息をすると、少年は語った。己が生い立ちと力について。

一つは、8歳より前の幼い頃の記憶がないこと、新しい名前で新しい人生を歩みだしたことを。

一つは、高位の悪魔おそろうくに血肉を与えられ、死の運命を逃れたことを。

一つは、その副作用なのか、髪と眼の色が変化し、さらに常人離れした身体能力を得たことを。

一つは、自身が異常魔力保持者であり、その放出量は破格であることとを。

そこまで話して、彼は一旦話を中断すると、己の眼に手をやると、何かを外した。

「そして、最後にして最大の秘密になる。分かるかい？今の俺の異常が」

そういつて、刹那にその顔を向ける徹。一瞬何が変わったのか理解できなかったが、すぐにその異常を理解する。

「左右の眼の色が違う？いや、眼の色が変わっているのですか。元々の色がそうなのですか？」

少年は、左目が真紅、右目が紫紺のオッドアイになっていたのだ。

「いや、俺の眼の色は、元々真紅さ。スイッチを入れてやることで、紫紺にかわる。」

今は両目ともに、紫紺になっているだろうけど、それを悟られないように、元々の色である真紅のカラーコンタクトをしているんだよ。どうも、この紫紺の瞳は、邪眼とか魔眼とかいわれるものなのさ」

先程、外したものはカラーコンタクトだった。なるほど、外した方だけ紫紺に見えているわけである。

「邪眼?! そんなものをもっている人が存在するなんて…」

驚愕する刹那。まさか、この後、魔眼持ちの「龍宮 真名」と会うなどと夢にも思っていない。その様子を見ながら、徹はさらに謳うように言う。

「どうだい? とんだ人外だろう。常人離れたした身体能力に、アルビノであるかのようなこの容姿。」

極めつけは、この凄まじい力をもつ紫紺の邪眼だ。とてもじゃないが、俺は純粋な人間といえないだろうよ」

己を人から外れた化け物であるかのように語る少年に、少女はすぐに反駁する。

「そんなことはありません! 徹さんは人間です!」

刹那の強烈な否定に瞠目しながらも、徹はそれを手で制した。

「いいんだ、別にこうなったことに後悔はしていない。あのままだったら、間違いなく死んでいた。」

あの御方(かの女悪魔のこと)には、大感謝さ。それに何より、肉

体は魔に属するといっても過言ではなくても、俺は心まで、化け物になつたつもりはない。

俺がこの心をもつ限り、俺は人間だとそう思っているよ」

「そうですか、徹さんは強いんですね。魔である己を受け容れられるなんて…」

どこか羨望せんぼうと感嘆の入り混じった声でいう刹那。彼女には烏族と人間のハーフであるという負い目があるからだろう。そして、徹と同様にカラーコンタクトで眼の色をかえ、髪を染めている。

人から異端いたんとされるような容姿を隠そうともしない少年のあり方は、衝撃しょうげきだった。

（考えてみれば、初対面の異性に対して、私があんなにも気安くなれたのは、同じ境遇にある者の共感だったのかもしれない…。異性を姓ではなく名前で呼ぶなんて、普段の私からしたらありえないことだし）

内心でそんなことを思う少女であった。

「そんなことはないさ。ただ、どうしようもないから受け容れてくれるだけかもしれない…」

まあ、この眼のおかげで、強くなれたことは確かだけどね」

照れ隠しか、そんなことをいう徹。

「眼のおかげですか？その邪眼がどういったものかは知りませんが、身体能力はともかく、あなた自身の才には何の関係もないでしょう。徹さんがここまで強くなれたのは、あくまであなた自身の剣才と修練のおかげではないですか」

刹那には、少年が自身を卑下しているようにしか聞えなかった。あの紫紺の邪眼が、どんな力をもっているかは知らないが、才能は本人自身のものであるはずだし、それに変化はないはずだからだ。

「そういつて貰えるのは嬉しいけど、俺だけは違うんだ。

この眼がなかったら、俺は到底この領域に辿り着けなかっただろう。何せ、俺には剣才がかけらもなかったからね。弓の方はあったんだけど」

苦笑して、徹はそういった。だが、先程鶴子との試合を見た刹那は納得できない。

「剣才がない?! そんなわけありません。先の試合でみせた動き、どれ一つとっても、才能のない方にできるものではありませんよ!」

「それが出来るんだ、これが。正確に言えば、出来るようになったと行った方がいいかな。

俺の持つ紫紺の邪眼は、ありとあらゆる事象を『理解する』ことができるんだ。

それゆえに、俺は、これを<真理の眼>と呼んでいる」

刹那の反論に淡々と言葉を返す。まるで、それが揺るがない事実であるかのよう。

「<真理の眼>ですか、にわかには信じがたいですね…」

眼の力を説明されても、納得がいかない刹那。それも無理ないことである。ありとあらゆる事象を『理解する』といわれても、それが剣才とどう関係するのか、全く理解できないからだ。

「そうだな、信じられないのも無理ない話だ。俺だって、他人の口から聞いたら、まず信じないね。」

でも、これは本当のことだ。そうだな、論より証拠だ。ちょっと、夕凧を貸してくれないか？」

己の得物を他人に預けるのは、あまり褒められたことではないが、目の前の少年が自分を害するとは思えないし、なにより興味がさきにたち、刹那は夕凧を渡すことにした。

「ありがとう。では、よく見ていてくれ。」

出来る事なら、俺の構えから、斬撃に至るまで、一挙手一投足を見逃さないことをお勧めする」

そう言って、しばしの間、渡された夕凧を隅々まで観察すると、おもむろに構え、そして振りだした。

それを見た刹那は、絶句した。ありえない光景が目の前で繰り広げられていたからだ。彼女の愛刀『夕凧』は野太刀であり、初見の間では抜く事さえ困難である。ましてや、それを見事に構えてみせることなど、まずありえないことだ。

しかし、そのありえないことが、目の前にある。しかも、少年は今の彼女では達することのできない領域の剣閃をみせている。正直、わけがわからない。

「ふふ、驚いたかい？これが、この眼の真価一つさ。」

武器であれば、その最強の一撃が、俺には『理解』できる。俺には、その武器のあるべき軌跡が『理解』できるのだ」

絶句し呆然とする刹那を余所に、夕凧をあるべき軌跡で振るう。それがどれだけ異常な事か…。

「しかし、それが剣才のないこととどう関係するのですか？」

どうにか、平静に戻り、疑問を呈する刹那。

「逆に聞くけど、いくら剣才があつたとしても、初見でこれを完璧に振るうことはできると思う？」

「いえ、そんなことはありません」

試しに振ることすらしないで、初撃から徹の斬撃は完璧だつたのだ。いくら剣才に優れようと、野太刀のように癖のあるものを使いこなすのは、難しい。ましてや、日本刀は扱いの難しい事で知られる。本来の意味で「斬る」ことができるのは、達人といわれる人々だけである。目の前の少年の斬撃は全て「斬る」ことを可能とした領域にあつた。つまり、彼は夕凧を使いこなしているということだ。だが、そんな事は現実にはありえない、あつてはいけないことだ。それは、修練の先にいきつくものであり、こんな容易になされるものではない、断じてない。

「そう、ありえない。俺には剣才がない。これは真実だつた。

だが、俺にはそれを覆すことのできる『眼』があつたというわけさ。修練の末にいきつく先、すなわちゴールを最初から知っている俺は、最短距離でそこまで行くことができる。しかも、どうやれば、そこまでいけるのかさえ、『理解』できてしまつ。

俺は、それを体に覚えこませればいい。そうして俺は、剣を『理解』するに至つた。

ゆえに、今の俺には剣才がある。それも最高級の」

なるほど、確かに本当にその剣の最強の一撃が視えるというのなら、

そしてそれを忠実に再現できるというなら、徹は正真正銘の化け物だ。何せ、彼はその才能を育てることができのだから。達人の動きを真似ても達人にはなれない。

しかし、その術理から仔細に至るまで全てを完全に『理解』し、再現できたとしたら、どうだろうか。それは、最早達人であると言えるよう。

「とんでもない眼ですね…。ようやくあなたの恐ろしさが理解できたような気がします」

「そうだろう、異常なのさ。しかも、それすらこの眼の力の一端に過ぎ無い。

戦闘時に使えば、相手の筋肉の動き、重心の変化から、視線の動きに至るまで『理解』し、相手が次にどう動くか先読みすることすらできる。今の俺の実力で鶴子さんとやりあえたのも、それを全開で行っていたからに過ぎ無い。つまるところ、一重にこの『眼』のおかげというわけさ」

「そういうことだったのですか。長の言葉にもようやく納得がいきました」

徹の言に、詠春の言葉が思い出される。なるほど、詠春の感じた実力と試合展開の齟齬^{そご}はここから生じていたわけである。同時に、徹には剣才がなかったという鶴子の言も、正しいものであったということだ。

「俺が怖いかい？人ならざる肉体をもち、人智を超えた魔性の瞳を持つこの俺が」

「確かに恐ろしい力です。しかし、別にあなたを恐ろしいとは思

ません。

あなたはそれを、なんの覚悟も力もない人々に振るうような方ではない。

短い付き合いですが、それぐらいは私にだって『理解』できますよ」

徹の冷たい問に、刹那はそれを明確に否定し、気の利いた答えを返す。思わず、眼を丸くする徹。そして、一瞬後笑みを浮かべる。それは、肉体年齢相応の少年の笑であった。

「ありがとう、刹那。そういつてもらえて嬉しいよ。

俺は、ここ誓うよ。なんの覚悟も力もない人々に、この力を振るうことは絶対にしないと。

そして、感謝を。君と友であることを誇りに思う」

「私も共に誓いましょう。それは私にとっての誓でもあります。礼を言うこちらの方です。あなたにとって、重要な秘密を教えてくださいたんですから。

それに、私程度の人間があなたの友であっているかどうか……」

二人は共に誓う。それは力持つものにとって、当然もちうるべき倫理感かもしれない。だが、ここで二人がそれを誓ったことには、それなりの意味があるはずだ。

一方、ここで刹那は己の弱さを思い、自分が徹の友であっているのか、疑問を抱かざるをえなかった。邪眼への変化を隠しているとはいえ、あるがままの異端の容姿をさらし、己が最大の秘密をあかした彼に比べ、髪を染め眼の色を誤魔化し、かつ己が出自を明かさなない自分は、なんと弱く矮小わいしょうであることが。むしろ己こそが騙す様な真似をしているのではないかと思ってしまう。

「そんなことはない！刹那は自分を卑下ひげしすぎだ。刹那はとても魅

力的……（以下、刹那の魅力について滔々と語る）」

徹の即座の否定と、刹那の魅力について長々と語るその様子を見て、この時ばかりは、自身の悩みがひどくどうでもいいようなものに、刹那には思えた。長い付き合いになるであろう少年のそんな態度に、刹那は己の秘密を明かす事を決心した。

「徹さん、私の秘密も聞いてください。私もあなたとは真実の友でありあたいと思うから」

刹那の言葉に、真剣な顔で頷く徹。刹那は、秘密を話し、少年と少女は真実、友となった。

ちなみに、この後、徹に呼びすてで呼ぶよう強要される刹那の姿があったとか。

生涯の友となることになる二人の幼き日のことであった。

・おまけ（舞台裏の人達）

「二人きりで話したいなんて、ませてる子やわー。徹はんは」

「あやつは、ただの子供ではないから……。む、妖断壁なぞ使いおった。

これでは聞こえんではないか！おのれ、余計なことを」

「御兩人共、いい大人がみつともないですよ。話が終わるまで大人しく待ちましょう」

隣室では、二人の話をきこうと耳をそばだてる鶴子と徹心、それを窺める詠春の姿があったとき。

力と誓、そして友（後書き）

解説：『真理の眼』について

徹が持つ紫紺の邪眼のこと。ありとあらゆる事象を『理解する』能力を持つことから徹心が命名した。語学等の学問から、体術・剣術等の戦闘術に至るまで、多種多様な応用がきく。元は女悪魔の持つ過去視・未来視を可能とする邪眼で、それが劣化し徹用に適応したもの。劣化したのは、本来の過去視・未来視の力であれば、人間の脳では、その情報量に耐えきれないためである。ただ、その名残が、『理解』したことから、予測した光景を『視る』ことができる。先読みは、主にこれによってなされる。

筆が遅いもので、更新が遅くなりましたことをお詫び申し上げます。なるべく、3日に一話くらいはと思っっているのですが、中々…。

京都弁については、一応調べて使っているのですが、おかしいところが多々あるかもしれません。己が日常的に用いない言語は難しいです。

稚拙な文ですが、お気に入り登録が60件をこえ、嬉しく思っております。

これからも、お付き合い頂けたら幸いです。

2009/12/18 刹那の年齢を修正しました。主人公と刹那は1歳違いにするつもりだったのですが、刹那の誕生日は1月であると今更気づき、さらに主人公は3月ですので、これでは同い年になってしまつので修正。

誘いと親子対決（前書き）

ユニークアクセスが14000を超えました。お気に入り登録も140件を超え、嬉しい限りです。

ここで、御礼申し上げます。記念して外伝でも書こうと思うのですが、本編が遅々として進まない現状では、自粛するべきかと思っております。

ちなみに書く内容は「初仕事と大蛇について」です。いつかは書くつもりです。

誘いと親子対決

「一年ぶりか、やっぱり久々に帰ってくると、死んだ方がましと思えるような鍛練を受けた場所でも、感慨深いものがあるな……」

山中の境内に続く百段以上ある石段を見上げ、徹は独りごちる。

「あれから、もう2年もの年月が経ったんだな……。なんか、閃光のように瞬く間に過ぎた2年だったな。刹那は元気でやっているだろうか？」

この2年余りを思い返しながら、その体感時間の短さに感嘆する。次いで、遠くの地で己の誓を果たすべく頑張っている少女を思い出す。あの生真面目で照れ屋な友人は、元気でやっているだろうか。近いうちに会うことになるであろう親友の顔を思い返しながら、笑をこぼす青年。そう、彼女と青年は、この後すぐに再会が約束されているのだ。同じ仕事を持つ同僚として。そうなった経緯を、徹は今更ながら思い出していた。

刹那との話が終わり、妖断壁をといた部屋に、再び詠春と徹心・鶴子の3人が入って来る。

「存分に話せましたか？まだならば……、いえ、愚問だったようですね。良かった、何よりです」

詠春は問いかけたが、すぐに打ち切った。答えを聞くまでもなく、刹那と徹の晴れやかな表情が、その答えを物語っていたからだ。

「ふふふ、ほんまやわ。二人とも、ええ顔しとる。何を話したんか気になるとこやけど…」

「やりおるわ！ワシの事を色ボケとか散々言っておるくせに、お主も中々に手が早いではないか」

同調する鶴子と冷やかすように言う徹心。二人の言に少年少女は微かに頬を赤くする。

「お、おかげさまで。ありがとうございました」

礼を言う刹那だが、徹は違った。

「くそ親父以外は、ありがとうございます。くそ親父、テメエの尺度で俺をはかるんじゃねえ！

誰が、そんな事するか！…もう少し成長したら分かんけど（…以降滅茶苦茶小声だったり）」

少し、過剰反応ではなかるうか。というか小声とはいえ、後半の言葉からして、凶星を指されていることに対する反発なのかもしれない。

「何はともあれ、良かったです。二人には仲良くして欲しいですからね。」

なにせ、二人は同僚になるのかもしれないのですから
乱れかけた場をまとめる詠春。こころへん、流石は一集団の長である。

「同僚…ですか。それでは、俺に刹那と一緒に仕事を依頼したいと

「ということですか？」

「その通りです。察しが良くて助かります。では、早速ですが、本題に入りましょうか。」

君には、刹那君と共に、私の娘である『近衛 木乃香』の護衛を依頼したいのです」

「娘さんの依頼ですか…。失礼ですが、なぜ関西呪術協会から護衛をつけないのですか？」

長の娘さんなら、相当の力を持っているでしょうし、専属の護衛がついて然るべきなのでは？」

なぜ、関西呪術協会から護衛をつけないのか、原作知識から徹は知っていたが、詠春に直接確かめるべきだと彼は考えたのである。

「確かに君の言うとおり、娘は優れた才能と力を持っています。しかし、私は、娘には魔法世界には関わらず、普通の女の子として暮らしてほしいと願っています。その魔力も才能も目覚めて欲しくないのです。ですが、それを直接的に欲するもの、あるいは利用しようとする者がいるのが現状です。」

ゆえに護衛をつけたいのは山々なのですが、あの子がいるのは、祖父の下とはいえ、関西と犬猿の仲である関東魔法協会の膝下です。よって、あの子の周りに関西呪術協会から護衛をつけることはできません。関東魔法協会を徒に刺激することになりますからね。」

そういう意味で、娘と年代代である君や刹那君は、娘の側に待っても不自然でなく、正体もまず悟られることはないでしょう。刹那君は優秀な剣士です。これからも、その実力は伸びることでしょうし、何より信用できます。」

ただ、刹那君は私の弟子であり神鳴流だ。どうしても関西呪術協会のみがらみに囚われる事になります。恐らく、裏切り者扱いされる

でしょう。それでも彼女はそれを承知で行くといってくれます。どれだけ感謝しても足りない程です。

ですが、一人では何かと無理なこともある。だからこそ、君です、『小宮山 徹』君。君は、神鳴流ではなく完全なフリーランスの間だ。そして、流派こそ有名ではありませんが、君自身はそれ程知られているわけでもない。君の腕は先程、存分に見せて貰ったし、徹心殿や鶴子さんのお墨付きもある。

また、刹那君との相性もいよいよですし、何より君は精神的にも熟達しているから、彼女を補佐するには最適の人材でしょう。

西にも東にも属さない独立の存在であり、実力も確かな娘と同年代の傭兵。娘の護衛として、これ以上相応しい人が他にいるでしょうか。私はそうは思えない。

ゆえに、君に是非ともお願いしたいのです。刹那君と共に娘を、木乃香を守ってくださいませんか？」

そこまで、一気に心情を吐露するかのように詠春は話し、そして徹に向かって頭を下げた。

「なるほど…、理解しました」

（やはり、生の話で聞いてみないと分からないこともあるんだな）

内心でそんなことを思いながら、徹は答える。西と東の関係を話す時の詠春の顔は、苦渋に満ちていた。長である己への不甲斐なさかそれとも親として娘の安全のために全力を尽くせぬ苦悩なのかはあ分からないが、…いや、誤魔化すのはやめよう。おそらく両方であろう。

そして、何より娘の平穩を願うその姿はとても尊く感じられた。

（この人は立派な父親だ！全力は尽くせずとも、それでも娘を守る

うとする努力を惜しんでいない)

自分に目をつけるのも、無理ない話だろう。己が詠春の立場であれば、当然飛びつくであろうから。刹那についても気にかけているのは、好感がもてた。申し訳ないと心から思っているであろうこと、そして同時に深い感謝の念をいただいているであろうことが、彼からは感じられたのだ。

(俺は、この人を誤解していた。サウザンドマスターの仲間だからといって、色眼鏡で見っていた。

原作知識から、勝手に情けない父親だと思い込んでいた。けど、そんな事はなかった。

その人の本質も知らないで勝手に見損なうなんて、酷い話だ。もう、原作知識だけで人を判断するのはやめよう。思えば、刹那だって、思っていた以上に好い娘だったじゃないか！)

猛烈な後悔と自省の念に苛まれながら、刹那に確認する。

「刹那、君は引き受けるのかい？たとえ、裏切り者と蔑まれようとも」

「ええ、その為に私は神鳴流を学び、今日まで鍛えてきたのです。お嬢様を守ることは、私の望みでもあり、私自身の誓なのです！」

間髪入れずに答える刹那。その言葉には強烈な念を感じた。彼女の本気と想いが伝わってくるようだ。

「そうか…。父上、私自身が判断してよろしいですか？」

徹心に対し、先程までとは打って変わって、神妙な態度で伺いを立

てる徹。それも、当然である。今は親子ではなく、封神妖幻流35
代目継承者『小宮山 徹心』に対して、その後継たる封神妖幻流3
6代目継承者『小宮山 徹』として、相対しているのであるから。

「ふむ、我が流派の理は覚えておるな。

封神妖幻流は呪われし妖かしの刃を振るい、神を斬り魔を滅するこ
とこそを使命とする。

ゆえに、大義や利ではけして動かぬ。我等を動かすことができるの
は、唯一『人』のみ。

我等が命をかけ、刃を託すに相応しいと信じた者にのみ、我等は助
力する」

徹心も、真剣そのもので、何度もきかせた理を今一度後継者に語る。

「心得ております。忘れたことなど御座いません」

「なれば問う！お主は、一度も会ったことのない詠春殿の娘御が、
それに足る者だというか！」

下手な答えは許さぬとばかりに、腰だめに愛刀を構える徹心。これ
は只の問答ではない。一つ一つの問と答に命がかかった真剣勝負な
のだ。心して応えねば斬られるは必定である。

「それは分かりませぬ。しかし、私は己の友を信じます。友が本気
で守りたいと誓う者なれば、我が刃を託すに足る者だと！誰が信じ
なくても、私だけは信じます！」

そして、少なくとも詠春殿は、我等が助力するに足る者だと私は思
います」

眼をそらさずに、徹は言い切った。

「言いよつたな！では、お前はその生涯をかけて、かの娘御を守ると、そこには封神妖幻流の名に恥ぬ重みがあると、そういうのだな？」

「無論です！この生命のある限り、我が友、刹那と共に、木乃香様をお守り致しましょう！」

さらなる問、そして叩きつけられる凄まじいまでの殺気。徹は少しも怯まずに即座に応えを返す。瞬間、徹の手が動き、神速の居合が放たれる。それを徹は、微動だにせず受けいれる。

「徹心はん、あかん！」「避けや、徹！」「徹君いけない、避けなさい！」

あまりのことに、推移を見守っていた鶴子と刹那、そして詠春が叫ぶ。

だが、すでに時遅し、鮮血と共に、少年の首が飛ぶかと思われたが、それは寸止めされていた。

「なぜ、避けなんだ？ワシが止めねば、間違いなく死んでおつたぞ」

「父上を信じておりました。それに、もし死んだとしても、悔いはありませんでした。」

今の私の生は、父上に新しく頂いたものなのですから」

首に突きつけられた刀をよそに、淡々と答える徹。その眼には微塵の恐怖もない。

しばし、親子であり師弟でもある二人の睨み合いが続く。

「よかるう、好きにするが良い」

見守る3人にとっては、永遠のように感じられた時間が終わり、気づいた時には徹心はすでに刀を収めていた。

「ありがとうございます！」

徹心の言葉に、深々と頭を下げ感謝する徹。安堵のため息をつく鶴子・刹那・詠春の3人。

「二人共、心臓に悪いわ。うちの屋敷で人死は勘弁やわ、ほんまに」

「全くです。どうなることかと心配しましたよ！」

「正直、依頼を持ってきたことを本気で後悔しましたよ……」

3人は口々に言う。まあ、無理もなかるうことである。

「なあに、軽い親子のスキンシップじゃよ。うちではよくあることじゃ。のう、徹よ」

「ええ、その通りですよ。やだなあ、まさか、人様の家で、本気で頸を撥ねたりしませんよ」

小宮山親子はどこ吹く風で、笑ってごまかしている。徹の首に一筋の赤い線が入っているあたり、どうみても本気である。親子そろって、中々いい根性をしている。皆が平静を取り戻したところで、今度は徹が詠春に対して頭を下げる。

「近衛詠春様、この封神妖幻流36代目継承者『小宮山 徹』、貴

方の御依頼を受けさせて頂きます」

「ありがとうございます、こちらこそ宜しくお願い致します」

一瞬、呆気にとられる詠春だが、直ぐ様返礼する。

「ただ、3年程時間をいただけませんか？私は未だ学生ですし、まだまだ修行不足ですから。」

後、3年もあれば、晴れて自由な身になり、相応の実力を身につけることができましょう」

「え、いえ、別に学生で構わないですよ。むしろ、その方が都合がいいですし。」

実力だつて、現状のままでも十分ですよ」

期間の猶予を求める徹に対し、今のままでいいという詠春。しかし、どうしようもない穴があった。

「それがそういうわけにもいかないんです。俺、実は海外に留学して、飛ばし飛ばし飛び級しまくって、今日本でいうと高校生なんですよ。だから、大学卒業まで考えると、後3年はどうしても必要なんです」

徹に同年代の友人がいないのは、これが原因だったりする。元々、あつちの世界の知識があつたせいで大卒レベルの学力があり、今更小学生から延々やっていくのは苦痛だった彼は、<真理の眼>の慣らしの意味もあつて、海外留学したのだ。長期の休みのみ、日本に帰り徹心に地獄の鍛錬を受け、普段は退魔の仕事を受けて実戦経験を積みながら、<真理の眼>を使った修行をしていたわけである。今回も、夏期の長期休みを使って帰国していたのであった。

「高校生?! 道理で、精神的に熟達しているわけです。子供とは思えない物言いも納得がいきました」

「なるほどな、一定の時期にしかないから、どないな事やと思うんだけど、そういう事やったんか」

謎が解けたといわんばかりに頷く詠春と鶴子。混乱したのは刹那である。

「1歳しか違わないのに、高校生?! うちなんて、これから中学生やのに、もう高校生やて?!」

まあ、無理もない反応であろう。むしろ、納得している詠春と鶴子がおかしいのである。

「そういうことなら仕方ありませんね。君の人生設計をどうこうする権利は私にはありませんから。」

その後は、木乃香の護衛に専念してもらえんのですね?」

「ええ、約束します。3年、いえ、3年以内になんとかします。」

それまでは、刹那には悪いが、一人で頑張ってもらうことになるな」

「それは構いませんけど、元々は私一人でやるはずだったことですから。」

3年後とはいえ、徹が来てくれるのはありがたいです。でも、どういふ身分でくる気ですか?」

学内での護衛も必要なので、学生という身分が使えない以上、当然の疑問であった。

「ああ、そこら辺はどうしましょう？元々、一刻も早く退魔に専念するために飛び級してたんですが、まさかこういう事態は想定してませんでしたから」

「ふむ、そこら辺は任せてください。義父が学園長ですから、用務員が何かでねじ込んで貰います」

何気にこねを使う気満々な詠春。中々黒い人である。

「んじゃあ、まあ、お言葉に甘えさせて貰いますよ。その時は宜しくお願い致します」

「いえいえ、お世話になるのはこちらのほうですから、気にしないでください。

では、木乃香を宜しくお願いしますね」

「承知しました！」

ここに契約は結ばれた。2000年8月、真夏日のことであった。

「って、何、一人で回想してるんだか…。ここんところ、卒業に帰国の準備やらで、かなり忙しかったからな。その反動かもしれないな」

「徹はん、何一人でブツブツいつてますのや。正直、かなり怪しい人やで…」

回想と共に自分の考えに耽っていた徹の思考を断ち切ったのは、突如背後から響いた涼やかな声だった。若干、呆れの色がみえる。

「帰国早々、会えたのは嬉しいんですが、完全に気配を絶って近づくのはやめてくれませんか、鶴子さん」

こちらも、呆れた声で返しながら、振り返る徹。彼の思った通り、そこには、物腰柔らかな京美人が立っていた。

（それにしても、この人全然変わらないな。実は妖怪かなんかじゃないだろうか？もう、30超えてるはずなのに、全然そんなふう見えないうし…。はっ！まさか神鳴流は、不老の秘技でもあるのだろうか）

鶴子の変化のなさに、そんな事すら思う徹。しかし、女性に歳の話は厳禁である。内心で思うだけでもいただけない。なぜだか女性はこの手の勘が以上に鋭いのだ！

「徹はん、今何考えとったんですか？うちに教えて欲しいもんやな」

鶴子も見事に察知し、笑顔で聞いてくる。ただし、目は全く笑っていないが…。

「いや、鶴子さんの美しさは、歳を経ようと何らかわりはないなあと感心しただけですよ」

「いややわ、徹はん。そんなほんまのことを！」

バシバシと背中を叩いて恥ずかしがる鶴子。どうでもいいが、いいトシこいてなにやってるんだか…
はっ、何をするア—ッ

「そういえば、なんで鶴子さんがここに？挨拶なら後でこちらから伺うと連絡したはずですが」

「そんなんやけどなー。なんや、徹心はんと呼ばれてもってな」

「親父に？そうですか…」

鶴子の答に考え込む徹。あの、義父に限って、何の用もなく、鶴子程の人物を呼ぶはずがないからだ。

（鶴子さんのような達人級を必要とする用事か…。絶対碌でも無い事をたくらんでやがるな）

「まあまあ、こんとこで考え込んでもしかあないし。とりあえず行ってみまひよ」

鶴子の言う事ももつともだったので、思考を打ち切り、一年ぶりの我が家へと歩みを進めるのだった。

小宮山神社、その境内の中央に徹心はいた。いや、待ち構えていたと言う方が正しいだろう。かのく妖閃翁は、白装束に身を包み、己が愛刀を手に携えていたのだから。

「待っておったぞ、我が息子にして後継者、小宮山徹よ。そして、御足労させてすまん、鶴子殿」

徹心は、二人の姿を認めるなり、大音声で言った。その表情は、真

剣そのものであり、何かの覚悟を決めた顔であった。何よりその白装束は、武士の死装束を連想させる。

「親父…、いえ父上、その格好は一体どういっておつもりですか？」

徹心の厳粛な態度、それに加えて、自分を後継者といいフルネームで呼んだ事から、徹は口調を改めて尋ねる。徹心が後継者として自分を呼ぶときは、重要な意味を持つからだ。

「徹はん、それは愚問やとちやいますか。あの格好と表情が示すものは一つしかありませんやろ。何より少しも隠そうとしとらんこの殺気、これで分かんいうんは無理があるで」

徹の疑問に徹心は黙して語らず、応えたのは鶴子であった。

「正直、分かりたくないんですが…。そういうことなんですよね」

そう、彼とて理解していた。徹心が何を考え何を望んでいるか。義理とはいえ親子であり、さらに武芸の師弟の関係でもあるのだ。その表情と態度だけでも容易に理解できてしまう。ましてや、今回は白装束と殺気のおまけつきだ。これで分からない方がおかしい。

つまり、父親であり師でもある目の前の男は自分との殺し合いを望んでいるのだ。

「親父、正気か！一体全体どういっつもりで、俺と殺し合いをしよっつていうんだ」

帰国早々、あんまりな仕打に、思わず口汚くなってしまっが、徹心は淡々と応じる。

「正気も正気よ！これは必要なことなのだ。お主とワシのどちらが、封神妖幻流の当代に相応しいか決める為にの」

「当代って、そんなのどつちだっついていいじゃねえか！親父が生きてる限り、当主は親父。それでいいだろ！」

徹心の言葉に、瞬時に反駁する徹。だが、そんなものは徹心の決意に何の影響も及ばさない。

「この愚か者め！そんな甘ったれた考えで、この先、生き残れると思うてか！

此度の依頼は、長期間にわたるだけでなく、その危険度も護衛対象の重要性からいつて段違いじゃ。

西、東に所属する者だけでなく、魔法界の者も含め、海千山千の者共が護衛対象を狙うであろう。

生半可な実力では、護衛対象をむしろ危険すだけでなく、犬死にすることになるう。

お主が死ねば、封神妖幻流は途絶えることとなるのだ。犬死になど到底許されることではない！

ゆえに、老いて衰えたワシくらい超えてみせよ。己が封神妖幻流の伝承者たる器量を見せよ。

お主こそが当代であり、封神妖幻流の意思の体現者であることを示してみせよ。

それができぬというなら、この依頼は当代たるワシの判断で断らせてもらう。

さあ、選ぶがいい！退くのか進むのか、相応の覚悟を持ってな」

徹心は、封神妖幻流当代として判断するなら、此度の依頼は受けるべきではないと言っているのだ。

もし、それを覆したいと言うなら己を倒して、自分こそが当代、すなわち封神妖幻流の現当主であることを示せといているのであった。それができぬというのなら、諦めよと徹心は言っているのだ。

（ここで退けば、親父は二度と刹那や詠春さんと関わることを許すことはないだろう。

かと言って、俺に親父が斬れるのか？名付け親で育ての親、そして生きる術を覚えてくれた師を…。

できるわけがないッ！唯一無二の身内にして、真実の理解者を殺せるはずがない！）

徹心と斬り結ぶことに苦悩する徹。これは、無理もないことであつた。

なぜなら、封神妖幻流の伝承者が本気でやりあつて、敗者が生き残る可能性は限りなく低いからだ。封神妖幻流は、本来対人の技ではない上に、妖刀・魔剣など本来忌避されるべきものを扱うのだ。その危険性は、他の流派と比べものにならない。なんせ扱う技もさることながら、得物自体も人間にとっては猛毒を帯びているようなものであるからだ。いくら封神妖幻流の伝承者が、高い耐性をもっているとはいえ、直撃を受ければ只ではすまない。いや、死ぬ可能性はかなり高いのだ。運良く死を免れたとしても、しばらくまともに動けないだろう。

かつては、師弟には途方もない実力の差があつた。絶対に己が刃が届かないという確信があつた。だからこそ、徹は何のためらいもなく、大蛇そのもので、徹心に斬りかかる事ができたのだ。そもそも、技量では徹心に、扱える妖気の総量では徹に軍配が上がる。かつては、それでも結果は違わなかつた。なぜなら、如何せん技量の差が有り過ぎ、加えて妖気の制御能力に差があつたからだ。いくら扱える総量が多くてもハリボテでは、何の意味もなく、技量が伴わな

い技は容易く破られるというわけである。

だが、今現在は全く事情が異なる。今や、徹の技量は徹心にやや劣るに過ぎず、妖気の総量は勿論、制御能力においては、完全に徹心を上回り、遙かに凌駕しているとしても過言ではなかった。

すなわち、今やりあえば、拾中八九徹が勝つのだ。それは、イコール徹心の死に繋がるのだ。徹は、息子として、弟子として、断じて、そのような結果を許容するワケにはいかない。

（ふむ、迷っておるのう。まあ、ここで迷いもなく頷くような不心得者に育てた覚えは無いしのう。

そもそも、そんな奴じゃったら、とうの昔に切り捨てておるわ。だが、此度はその優しさは不要じゃ。

仕方ない、もう一押ししてやるとしようかの)

「何を迷っておる。お主の意思はその程度のものだったのか。悲しいほど、情けない奴じやのう。

そんな情けない奴を弟子にした覚えはないのう。受けぬというのなら、破門じゃ！」

徹心は、内心で徹の優しさを喜びながら、心を鬼にして、さらに徹を追い詰める言葉を吐く。

「は、破門?! 親父、何言ってるんだよ! 嘘だろ?」

「二言は無い!」

徹の動揺に彩られた悲痛な声を、徹心は即座に断ち切る。破門されることは徹にとって、最大の恐怖といえた。破門されるということ、徹にとつて義父との絆を奪われることであり、否定することであつたからだ。また、長年共に生きてきた愛刀「大蛇」を奪われる

ことでもあり、心の寄り処の一つであり、頼もしい相棒を失うことになるからだ。

「最早是非も無しというわけか、上等だ！やってやるよ、死んでも文句言つなよ！」

「ふん！やれるものならやってみるがいい！なんなら、鶴子殿に助言を求めてもよいぞ」

最早ヤケクソ気味に徹は勝負を受けることを宣言する。それにすら、余裕綽々の態度で応じる徹心。裏の世界にその雷名を轟かす封神妖幻流の師弟にして、親子の勝負はここに始まったのだった。

拝殿の一室に着替える徹と、その外で障子の襖に背を預ける鶴子の姿がある。

「鶴子さんと呼んだのは、立会人というわけかよ。御丁寧に俺の装束まで用意してくれてよ……」

ボヤきながら、自分の為に用意された白装束に着替える。嫌味な程に、自分にぴつたりフィットすることに気づき、心底げんなりする。同時に、今更ながらに鶴子と呼んだ父の意図を理解する。

「そうやるつなー。徹心はんも人が悪いわ。そうならそうと言ってくれればええのになあ」

「多分、言えば断られると思ったんでしよう。それにあながちはず

れていないと思いますよ」

「まあ、そやるな。どこの誰が、なにが悲しゅうて親子の殺し合いの立会人になるいうんや。」

正直、今からでも辞退して帰りたいくらいや」

鶴子の言はもつともであるう。本来なら、鶴子はこの馬鹿げた勝負をとめたいのだ。どっちが勝っても悲しみしか生まないのだから、不毛としかいいようがない。

だが、流派の継承に関わることであり、他流派である自分には口を挟む資格などない。それに、現役を退いたとはいえ、神鳴流の宗家に属する者として、徹心の言い分も理解できてしまう。

「帰られては困りますよ。鶴子さんには頼みたいことがあるんですから」

「うちに頼み事？徹心はんが言っただけに助言でも欲しいんか？」

「いえいえ、そんなことじゃありませんよ。もっと重要な事です。」

あのおそ親父に吠え面かかすためのね」

白装束に身を包み、襖をあけて出てきた徹の顔には、人の悪い笑みが浮かんでいた。

「準備はできたようじゃな。では、鶴子殿、申し訳ないが、立会人と開始の合図を頼めるかのう」

徹心は、白装束に身包む徹の姿を認めると、即座にそういった。

「はいはい、わかってますよって。今更断われんやろうしな、仕方ないですわ」

苦笑して、応じる鶴子。

「親父、手加減抜きだぜ！俺は殺すつもりでやる」

「それはこちらのセリフじゃ、若僧が！お主こそ、剣を鈍らすことなど許さんぞ！我が愛刀『雷切村正』の錆にしてくれようぞ！」

大蛇を手に相対する徹は、自身の本気を示すかのように言い放ち、それを受ける徹心は雷切村正を居合の形で構える。ここに両者の準備は整った。

「両者とも、準備はよろしおすな。では、始め！」

鶴子はそれを見て取ると、開始の合図をかけた。

「封神妖幻流当代35代目継承者『小宮山 徹心』」「封神妖幻流36代目継承者『小宮山 徹』」

両者の名乗りが重な高められる戦気。

「「参る！」「」

ここに仁義無き親子対決の火蓋が切って落とされたのだった。

初手は、徹。大蛇の特性を生かした徹心の間合の外からの攻撃。徹心にむけて一直線に放たれる刃の蛇の顎門。喰らえば上半身に風穴があくであろうそれを紙一重でかわす徹心。

しかし、それすら織り込み済みである。刃の蛇は徹心に巻き付くかの如く、螺旋を描き徹心を包囲する。が、妖閃翁の二つ名は伊達ではない。放たれる超神速の間合は、縦横無尽の刃蛇をあつさりとりえて弾き飛ばす。それと同時にできた隙間から飛び込む徹心。狙いは息子にして愛弟子の首のみ。徹とて、ただ傍観したわけではない。左手で大蛇を操りながら、右手には妖気を集中させていた。

「酒呑は朱天、その焰は全てを燃やす。鬼道 朱焰！」

朱き焰が迫る徹心へと放たれる。その大きさをたると、半径3mを超えるものであった。

「なめるでないわ！これしき、凍てつき絶望の怨嗟を。絶凍牙！」

冷気を纏わせた居合の一刀でこれを瞬時に消滅させる。居合のため一瞬足が止まる。そこを狙って放たれるは、主の下へ戻った刃の蛇。地中を潜り、真下から徹心を強襲する。不意をつき、かつ死に体となった一瞬を喰い破らんと狙っていたのだ。すなわち、さきの馬鹿げた大きさの鬼道も、目眩ましに過ぎない。全ては、本命「妖蛇地裂斬」への布石。徹の恐るべきは、技の冴ではなく、妖気の巨大さでもない。無論、それらも凄まじいが、その真の恐ろしさは、相手の動きから次の動きを読む、洞察力と観察力である。ましてや徹心は、何度も手合わせをしているのだ。それが生きてくる絶好の下地があるわけである。徹心も理解していた。いや、今日この時まで、理解していたつもりだった。

だが、実際に殺し合いという場面において、敵とするにこれ程厄介

とは思っていなかった。それは、徹の修行不足から、完全に生かされていなかったという事情もあったのだが。さらに、誤算はあった。さきの鬼道の強力さだ。徹心としては、身に薄く纏った妖断壁で遮断するつもりだったのだが、その威力の余り迎撃せざるをえなかった。もし、迎撃していなかったら、火達磨になっていたであろうから、仕方無いとはいえ、足を止め隙を作ってしまった。

（むう、いかん。ここまでのものとは！ええい、意地でも避けてやるわ！）

徹心は、内心で齒噛みしながら、すんでのところで刃蛇の顎門から仰反るようにして逃れる。完全に体勢を崩した徹心を見逃す徹ではない。技を放つと同時に大蛇の柄を手放し、徹心へと接近する。その右拳は凝縮された妖気によって、真紅の輝きを放っている。

「死にさらせや、くそ親父！悪路王の拳に二撃はいらず。悪路無二！」

「ふおつふお。まだまだ死ねんわ！雷切！」

体勢を崩した徹心へと迫る凶拳。敗北必至であったはずの徹心はこれをありえない体勢からの居合で防ぐ。居合の刃に触れた瞬間に、妖気は霧散し、反対に徹の拳が血に染まる。そのまま、斬られるかと思いきや、徹は徹心を蹴り飛ばす事でそれを防ぐ。図らずも最初と同じ距離があく。

両者は、仕切り直すように相手を見据え、構え直した。

「本当に腕をあげたのう。ワシの得物が雷切村正で無かったら、さっきので終わっておったわ」

「吐かせ、くそ親父が！あの体勢から居合を放てるあんたがおかしいんだよ。大体、あんた以外にそれを使いこなせる人間はいないんだから、その仮定は無意味だ」

肋骨をへし折られながら、感心するようにいう徹心。右拳を半ば斬られ鮮血に染めながら、憤る徹。かなり、シユールな光景である。敵対しながらも、両者の顔には笑が浮かんでいる。自身と同等のものとの闘える歓び、技の粹を尽くしてなお倒れない相手とまみえる充実感。

まあ、簡単にいえば、バトルジャンキーが闘いから得る喜びだと思っただければいい。

（笑つとる。これだから男いうんわ…。完全に二人の世界やわ。うち、ほんまに必要なのかな？

まあ、徹はんに頼まれたこともあるから、そうもいかんけど…。それにしても、こんない勝負見つたら、体がうずいてあかんわ）

鶴子は呆れながら、両者の勝負を見守る。同時に乱入したいとうずく体を抑えねばならなかった。かつて、勝負した時から、数段どころか数十段、腕を上げた徹。超神速の居合を武器にいかなる攻撃にも対応して見せる妖閃翁こと徹心。両者ともに、尋常の腕ではない。一介の武者者として、体がうずくのも仕方のないことであった。

しかし、今は抑えねばならない。決着のつくその時まで、自分の出番はないのだから。せめて、今は楽しもう。達人同士の剣戟の舞踏を。技の粹を尽くした絶技の舞を。

鶴子の思いを余所に、親子対決は終着の時を迎えようとしていた。

「なあ、親父、提案があるんだ。次で終にしないか」

「次でしまいとな？それは次で決めると言う宣言か？」

「ああ、そうだ。親父勝つにせよ、俺が勝つにせよ、次で間違いない勝負を決める」

「ほう、大した自信じゃが、わざわざワシがそれに乗るとでも思うか」

「あなたは受けざるをえないさ。いや、絶対に受けるね。大蛇！」

絶対の自身をもって、言い放つ徹。呼びかけられた愛刀が、その形状を変えていく。長剣から、鞘持つ日本刀へと。そして、徹心の鏡であるかのように同様に構えてみせた。

「その怪我で居合……。徹よ、ワシをなめておるのか。よもや、ワシの土俵でワシに勝とうとするとは。

いいじゃろう、お主の思惑に乗ってやろう。そして、その思い上がり死をもって償うがいい！」

徹心は激昂して、構え直した。それも、当然である。妖閃翁の名が示す通り、徹心は超神速の居合を武器とする退魔師である。己の最強の武器をもって、正面から打ち破るといわれて、冷静でいられるはずがない。ましてや、それは自身をよく知る息子にして、弟子である。許せるはずがない。

（よし、一段階目は終了。さしもの親父も冷静ではいらなかったか、当然だけどさ）

徹は、思惑通りに進んだことに安堵しながら、油断なく徹心を観察する。激昂したといっても、全く隙は見受けられない。しかも、愛刀に込められた妖気は凄まじい高まりを見せており、次の一刀に全

てをかけるつもりなのは明らかであった。

（あれが直撃したら、間違いなく死ぬな、うん。さてこの綱渡り、上手くわたり切れるといいが…）

鶴子は驚愕していた。正直、徹の正気を疑った。妖閃翁といわれた徹心には、数十年における居合の技の研鑽と蓄積があるのだ。僅かとはいえ、技量で劣る徹が、互角に戦えているのは一重に同じ土俵で戦っていないからだ。妖気の総量や、身体能力等で勝る部分を最大限活用して、優位に進めていたのだ。それを自ら手放し、相手の土俵で勝負するというのは、自殺行為以外のなにものでもないように思えたのだ。

（徹はん、正気かいな！確かに、タイミングははかりやすくなったけど、下手すりゃ即死やで！）

両者の間に一陣の風が吹き、ついに最後の剣戟の舞踏が始まる！動いたのは、両者全くの同時、移動スピードも全く同じであった。徹は常人離れた身体能力を駆使し、徹心は技巧によって、その差を埋める。両者同時に間合に入り、同時に放たれる超神速の居合。真紅の輝きを纏った一閃は、まさに妖閃である。妖閃がぶつかり合う。刃が打ち合う音が甲高く響き渡る。威力、速度、精度、どれもが互角であったが、この瞬間、徹心は勝利を確信した。

（愚かな、ワシの土俵でワシに勝てるはずもあるまい。次で終よ！）

本来、居合は鞘から抜き放つ動作で一撃を加えるか相手の攻撃を受け流し、忒の太刀で相手にとどめを刺す形、技術を中心に構成された武術であり、居合は受流しの為のものである。しかし、この抜き打ちの一刀を極限にまで高め必殺とする技法も存

在する。これを抜刀術という。そういう意味では、徹心のそれは居合というよりは抜刀術である。徹心は元々居合を学んでいたのだが、それを抜刀術の領域まで高め己のスタイルを確立したのだ。ゆえに彼は己が技を居合という。ところで抜刀術には「死に体」というべき状態がある。それは、刀を抜刀し振り切った状態のことである。居合とは違い、二撃目を考えない必殺の抜刀術は、次の動きを顧みない形で振るわれる。

よって、この振り切った状態は、どうしようもない隙であり、刀を戻すまでやられ放題なわけである。

この隙を埋める為に、徹心は神速の納刀術を編み出し、死に体をほぼなくしたのだ。抜刀術VS抜刀術である場合、この死に体の時間が勝敗を決するのだ。ゆえに、徹心は勝利を確信したのである。確かに徹の抜刀術は己と比肩するものであったが、己の納刀術まで修めているとは考え難い。たとえ、修めていたとしても、徹心には技量という絶対的なアドバンテージがあるのだ。徹が、徹心より速く忒の太刀を振るえるはずがないのだ。最早勝敗は決したかに思えた。だが、徹心の確信は思いもよらぬ形で裏切られる。なんと、徹は鞘を忒の太刀として振るってきたのだ。徹心も考えた事はあったが、求められる鞘の材質等からナンセンスであるとしたものだ。それが、目の前でやられている。実際にやられるところも不意をつかれるものとは思っていなかった。

(なるほど、考えたのう。しかし、まだまだ甘い。慣れん二刀流なぞするから体勢が崩れておるぞ)

徹心につとつて、徹が崩れた体勢であったのが幸いした。その軌道からは容易に逃げ道が見つかったのである。紙一重ではあったが、それを躲してみせる徹心。そして同時に納刀された己の愛刀。

(これで終いじゃ！己が不遜を呪うがよい)

命を断ち切る、忒の太刀が放たれんとしたその瞬間、切り裂かれたのは徹心の方であった。避けたはずの鞘が分裂し、徹心を切り裂いていたのだ。これが、徹の真の狙いであった。鞘とはいえ、元は抜き身の刃である大蛇を形状変化させたものである。長剣から日本刀にできるならば、その逆も可能であるというわけである。徹は、抜刀術で決められるとは最初から思っていなかったのだ。

だが、徹心に形状変化と大蛇の特性を見極められれば、これすら防がれた可能性もあった。ゆえに、徹心を挑発し、激昂させ、さらに愛刀と全く同じ外見の日本刀に目の前で変化させることで、己と同一条件であるかのように思い込ませたのだ。外見は日本刀であっても、その特性は変わらないのだ。さらに、右拳を切り裂かれたことも幸いした。怪我をした手では、全力の抜刀術はできまいという油断を生むと同時に、激昂させる格別の材料となったからだ。

(してやられたわい。まさに妖幻よ。最早、いうことはない。こやつこそ当代に相応しい)

自身を切り刻む刃の感触に己が敗北を覚ると共に、感嘆する徹心。さらに、その刃の蛇が身を刻もうとしたその瞬間、それを振るう徹は横合いからの攻撃で吹き飛ばされ、拝殿へと突っ込む。刃の蛇が力を無くし、徹心は九死に一生を得たが、言うまでもなく、その体は血にまみれボロボロだ。

「徹心はん、ご無事でんな？間におうてよかったわ、ほんまに」

「鶴子殿？助かり申したが、これはどういう事じゃ！」

徹を横合いから攻撃して、徹心を救ったのは鶴子であった。だが、

流派の当代を決める勝負に他流派の人間が手を出すなど許されることではない。徹心は激怒していた。

「徹心はん、言いたいことは分かるんやけど、勘弁してもらえまへんか。」

大体、これは徹はんから頼まれていたことやから。それに、もう勝敗は決してましたやろ」

飄々と応じる鶴子。その声には一切の罪悪感はない。

「むう、それは…。しかし、「しかもくそもないですやろ!」…」

鶴子の言い分は理解したが、己が命をかけた一戦である。それに横槍はと反論しようとしたところを鶴子に強い調子で遮られる。

「妖閃翁ともあろう方が、自分の土俵で負けて負けを認めないいうんか!死ななきゃ負けやないともいうんか!そうじゃないやろ、この勝負はどっちが当代に相応しいかを決める勝負やろ。徹はんの覚悟と実力を確かめるためのものやろ。徹はんは、そのどちらも十二分に示した。」

徹心はんの土俵で明確に勝利してみせた。それで十分やないですか」

「鶴子殿、ワシは…」

鶴子の凄まじい勢いにタジタジになる徹心。それでも、鶴子は容赦しない。まだ、いい足らない。

「大体、徹心はんが死ぬことで、あの子にどれだけの重荷を背負わせると思うてんのや。必要な事いうても、限度がありますやろ。それでも父親どすか!」

「……」

完全に沈黙する徹心。もはや言葉もない。

「ほんま情けない父親やわ。あの子がうちに頼んどらんかったら、間違いなく死んでましたえ」

「あやつが頼み？ 一体、何を？」

「徹はんは、言うてましたわ。勝敗が決したと判断できたら、トドメが入るまでに自分を吹き飛ばせ、って。最後をあえて抜刀術にしたんわ、そのタイミングを分りやすくするためもあったんやろな」

鶴子の返答に絶句し、次第に可笑しくなってくる徹心。

なぜなら、鶴子の言うとおりなら、徹は自身の勝利を確信していたということなのだから。

「ふははは、所詮ワシ程度が、あやつの器をはかるうなどと、不遜なことであつたか。

完敗よ、ワシの負けじゃ！あやつこそ、当代に相応しい！」

清々しいといった表情で、声高らかに笑う徹心。どうでもいいが、完全に徹は放置されている。はやく治療してやれよ、とおもわざるをえない。南無、合掌。

ちなみに、結局、これに気づいたのは鶴子であり、大慌てで治療術師を伝手（ぶつちやけ詠春）を使って呼び、治療させた。徹心は、この後、さらに鶴子に3時間にわたって説教されることになった。自業自得である。すっかりしろ、父親！

誘いと親子対決（後書き）

封神妖幻流&技・術解説

『雷切村正』：かの雷神の愛刀「雷切」を溶かし込んで作ったといわれる村正。雷切としての特性を持ち、雷をはじめとした不定形のものすら切り裂くことができる。妖気も例外ではなく、作中で使われた雷切という技は、この特性を最大限に発揮した技。妖刀としての特性も持ち合わせており、主以外が振るおうとすると、一振りごとに多量の血液を消費する。本来の主であれば、血液を消費させることによつて、妖気を高めることができる。鞘はある神木から作つたもので、打撃にはむかないというか、替えがきかない貴重品なので、徹の行ったような刀術は不可能である。

『大蛇』：その特性は、連結刃ではなく、形状変化である。大剣から小刀に至るまで、変化可能。これは、元々大剣であることから長剣の連結刃になったところから、徹が考えついた。試しにやってみたらできたので、徹はこれを重宝している。普段は小刀の形状で持ち歩き、戦闘時には形状変化させているわけである。ちなみに、どんな形状変化をさせても連結刃としての特性は残る。

『鬼道 朱焰』：妖気を扱うという流派の特性上、普通の術はあまり向かない。なら、妖気を使う鬼道を使おうと、流派の祖が実際に学んだという。

酒吞童子の力を言霊によつて言い換え、朱き焰として放つ術。本来、単体に対する攻撃術だが、徹のそれは明らかに対人技じゃない。こめた妖気量に比例して威力が高くなる。

ちなみに、技や術の際に何か言っているのは、言霊による妖気の制御補助、威力補強の意味がある。威力や精度は落ちるが、詠唱破棄

も可能。自身の得物の特性による技や術は、基本的にこれが必要としなくても最大の効果を望める。

『絶凍牙』：徹心オリジナル技。徹心は五行の力を纏わせた抜刀術を編み出している。これはその一つ。冷気を纏わせた刃で一閃、切り裂いたものを凍らせる。かなりえぐい技で、切断面を凍らせるため、回復や治療が困難。また、かすっただけでも、体温を奪い、動きを鈍らせる。徹心が鞘中で冷気を循環・圧縮するため、洒落にならない威力と効果をもたらすに至った。

『悪路無二』：かの悪路王の力を拳にのせて放つ技。妖気の量と密度にもよるが、凄まじい貫通力と威力を誇る。下手な防御壁など余裕で貫く。これ単体でも、洒落にならないが、徹の常人を超えた身体能力と合わせるとまさに必殺の威力をもつ。ぶっちやけていえば、妖気をまとった正拳突きである。

大変、更新が遅くなりました。伏してお詫び申し上げます。年末だけに色々ありまして、筆が遅いことも重なり、遅々として進まないという状態に…。
新年までに、もう一話くらいあげたいと思いますが、どうなることやら。

詠春の依頼（前書き）

感想を見ると、詠春の依頼の内容や意図等が分かりにくいという指摘がありましたので、ここで簡単に説明します。

詠春の依頼

依頼　　： 木乃香の護衛及び同任務に就いている刹那の補佐

依頼主　： 関西呪術協会ではなく詠春個人

依頼期間： 詠春の希望は、成人までだったが、徹が交渉して高卒までに妥結した

報酬　　： 詠春の個人所有、若しくはその裁量でどうにかできる呪物・妖刀・魔剣の類の贈与及び貸与&護衛期間中の衣食住の確保＋年30000万

補足事項： 最大の目的は、木乃香の護衛であるが、同時に木乃香に魔法がばれないように最大限に努力すること。

主人公はあくまでもフリーランスの傭兵として参加しています。流派と徹心は有名ですが、徹自身はあまり知られていません。当主として依頼を受託する形になりましたが、それは結果的にそうなっただけです。

彼の態度は、色々誤解を招くとは思いますが、様付けは、あくまでも依頼主&護衛対象に対するものです。仕事上の礼儀として、そういう扱いをしているに過ぎません。教師としてあるいはプライベートでは、呼び捨てにしています。詠春ですら、さんづけ。

後、生涯守るとか宣言しちゃってますが、あれは心構えの話で、要はそれぐらいの覚悟があるということを示したに過ぎません。

また、流派としては、義や利では動かず、認めた人にしか助力しないスタンスをとっているのが、現状では、関西よりの立場であるといつてよいと思います。傘下に入ったというわけではありません。

ん。傘下に入れば、関東のお膝元である麻帆良に行くのは、刹那と同様に裏切り者として糾弾されることになります。つまり、徹に依頼する意味がなくなってしまう。そのため、刹那と違い、原則として彼の指揮監督権が、学園長に与えられていないわけです。詠春は一応持っています、長期にわたる依頼のため、大まかな方針を示すだけで、その範囲であれば自由裁量に任せる形をとっています。

詠春の依頼（後書き）

これで、一応疑問に答えられたでしょうか？理解に苦しむようなものであったり、意味不明であったり、矛盾があったりすれば、ご指摘下さい。適宜、本編の修正・加筆をしていきたいと思えます。若しくは、今回のように疑問に対する回答を別枠で書きたいと思いません。

ひとえに私の未熟さが招いたことです。分かりにくくて、申し訳ありません。もっと、精進したいと思います。

再会と魔眼との邂逅

「やって来ました、麻帆良学園都市！…って、ここどこやねん！」

真冬の寒空の下、広大な麻帆良学園都市の一角にある広場で、一人の青年がベンチに座り込んでいた。

西欧系の整った顔立ちに白銀の髪、さらに真紅の瞳と常人離れた容姿の持ち主であるが、見る者いない現状では宝の持ち腐れである。というか、くだらないボケが全てをだいなしにしている。

まあ、なんてことはない。要するに件の青年、「小宮山 徹」は迷っていたのだ。

「そうじゃないだろ！ノリツツコミなんぞしてる場合じゃないだろ、俺！

このままでは約束の時間に遅刻してしまう…。仮にも大卒なのに、よりもよって職場で迷子になって、その挙句、初出勤にも関わらず遅刻って、社会人失格にも程があるだろ」

大卒の社会人が、いいトシこいて迷子なのだ。そりゃあ、情けないし救えないだろう。

「失敗した…。これなら大人しく迎を待つべきだった。地の利を得るために探索がてらに散歩でもしようなどと思った俺が浅はかだった。

この学園、広すぎや！学園都市とは聞いてたけど、ここまで広いとは、正直甘く見てたな」

冷静になったり、逆ギレしたり忙しい男である。

しかし、無理もないことでもあった。明治中期に創設され、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市である麻帆良学園都市は、広大な敷地を有し、校舎をはじめとして研究棟などの建造物はゆうに百を超える。さらに、魔法使い達によって建設されたといわれ、怪しい施設盛り沢山な上に、認識阻害の結界をはじめとした魔法技術による防護結界などが、幾重にも張り巡らされている。これでは、初見の人間はまず間違ひなく迷うことであろうからだ。そういう意味では、彼の言にも一理あるのだが、そこら辺は彼の勤め先も理解しているようで、迎をよこしているのだから、やはりそれを待ちきれなかつた徹に否があるだろう。

「うう…。こんなことになるんだったら、昼飯抜くんじゃ無かつた。空腹で腹が大合唱してやがる…。方向感覚には自信があつたんだがな。というか、よく考えたら共学校なのか、女子校なのかすら把握してないな、俺。つつか女子校だった場合、俺だけじゃ、中に入れてもらえないんじゃないのか。」

これじゃあ、木乃香様はおろか刹那にすら会えないんじゃないか。色々なことを今更ながらに悟り、落ち込む青年。その背中には哀愁すら漂っている。こんなことになった原因は、徹心との勝負だった。辛くも勝利し、依頼の受領が正式に認められたものの、鶴子に吹っ飛ばされた時に受けた傷は浅いものではなく、しばらく（といっても2、3日であるが）療養に専念せねばならなかつた。その上、当代になったことで、流派を継ぐにあたっての心得や当主としての権限や義務等を、徹心から執拗なまでに教え込まれたのであつた。その結果、本来一週間は余裕をもって帰国したにも関わらず、全く下調べしないままであることになつてしまつたのだつた。さらに、原作知識はあるものの、普通（魔法などない）の日本で暮らしていた彼には、日本国内での学園都市の広さなど、たかがしれていると甘く見ていたのだつた。

（欧米の大学より広いぞ、ここ。世界樹なんて呼ばれるまでの神木（仙木だったか？）を中心にそえるとか、はつきり言って目立ちまくりだろ！何のための認識阻害なんだか…。魔法使い、自重しろよ！）

内心でその広大さに驚嘆しつつ、同時に先達の所業に呆れていた。アメリカに留学していた彼は、退魔業の関係でアメリカ国内の大学（学校というのはいつの時代も、怨念や霊等が溜まりやすいものなのだ）をいくつも訪れているのだが、これほどの規模のものは流石に記憶がない。

「さて、どうしたものか…。今更、約束の場所に行っても、行き違になる可能性が高いだろうしな。あちらに探してもらうのも気が引けるといっか、情けないしみつともないしなあ」

ブツブツと呟きながら、しばし自分の考えに沈む徹。どうにか手段を講じようとしているようだ。

「よし決めた！魔力垂れ流しで、女子校区方面へ向かおう。あちらで勝手に見つけてくれるだろう。」

木乃香が所属する学校は確か女子高だったはずだしな。なにせクラスメイト全員女子だったし。明日菜や木乃香があっさり入り込めた事を考えると、学園長室も同じ校舎内にあるだろうからな」

原作知識あるんだから、さっさと行けという読者諸兄もいるかもしれないが、考えて欲しい。メインのストーリー・キャラクターや戦闘に関するものならいざ知らず、舞台となる学校の設定までこと細かに覚えている方が、どれだけおられるだろうか。彼も多分にもれ

ず、かつての生で原作を一通り読んでいるものの、ストーリーや魔法・武技などはそれなりに記憶しているが、その舞台や設定までには目がいつてなかった。ゆえに、それ程詳しく覚えていないので、仕方がないことであつた。

それにしても、それなりに考えこんでいたというのに、結局人任せとはこれ如何に。

「それじゃあ、行くとしようか。解！」

ベンチから腰をあげると、徹は気合を入れるかのように構え、普段は自身の魔力を封印している枷を解く一言を唱える。それと同時に、彼を中心にして突風が巻き起こる。英雄の息子すら凌ぐ莫大な魔力が開放され、その余波で風が逆巻いたのだ。これ程の魔力なら、直ぐ様学園側も動くだろう。

ここで、思わぬ不運があつた。己の考えに沈んでいた徹は、近づいてくる者の存在に気づいていなかったのだ。ゆえに、普段なら察知しているであろう距離内まで、その人間の侵入を許してしまったのだ。

それがスカートを履いた女性だったとしたら、魔力開放時の突風と重なれば、導かれる結果は問わずものがなである。流石に10m以内に近づかれれば、察知するので思わずそちらを凝視してしまう青年。

ようは、パンツ丸見えである。見てないなどというのがおこがましいほどに、それも凝視である。

徹と長身で色黒な美女との視線が重なる。彼女は無表情にも見えるが、その目や引き攣った口元には静かな怒りが見て取れた。

え、美女じゃない？美少女だって、またまた御冗談を。その身長とその完成された肉体からして、どう見ても少女ではないでしょ！はっ、何をするアーツ

「すみませんでした！本当に申し訳ない」

次の瞬間、徹は土下座していた。おろしたばかりであろう真新しいスーツが汚れることも厭わずに。

ある意味、天晴れで殊勝な態度といえよう。それにしても土下座の好きな男である…。

（こういう場合、不可抗力だろうと男が悪いと相場が決まっている。それに今は、明らかに俺が悪いし、みようによっちゃわざとやったようにすら見えるんじゃない…。

うう、俺の未熟者！修行が足りないんだよ！このボケ！……以下己を罵る言葉が続く）

内心で壮絶な自分への罵倒を繰り広げている徹を余所に、美しいえ美少女は困惑していた。当然である。いきなり土下座されれば、誰だってひくだろう。とはいえ、彼女は違う意味で困惑していたのだが。

（私としたことが、少々迂闊だったようだね。どうも魔の気配があるとあって、散歩がてら来てみれば、これ程の魔力の持ち主と遭遇するとはね。

それにしても、侵入してからここまで完全に魔力を隠し切るとは、相当の手練だ。今、解放したところを見ると、もうその必要もなくこれから行動開始といったところかな？

この土下座も、私を油断させる擬態の可能性が高い）

土下座のインパクトで、見られたという恥じらいは吹き飛んでしまっていた。そういう意味では、徹の目論見は成功していたのだが、その莫大な魔力量のせいでいらぬ誤解を受けてしまったのだった。彼女の手はすでに、隠された拳銃の銃把に至っている。それを察知

した徹も、動きを止め土下座したまま警戒体勢に入っている。まさに、一触即発の事態であった。あわや戦闘開始というところで、その流れを断ち切ったのは、両者の共通の知人であった。

「ようやく見つけましたよ、徹！まったくどこに行っただかと思いましたがよ。」

大人しく待つてくださいと、あれ程いったじゃないですか！……って、龍宮？それになんて土下座？」

黒髪をサイドテールにした美少女、刹那であった。余程急いできたのか、その額には汗が浮かんでいる。

「む、刹那。彼は、君の知り合いかい？どういうことか説明「刹那！」して……」

龍宮と呼ばれた少女が、刹那に説明を求めようとしたその瞬間、刹那の姿を認めた徹の叫びと行為にそれを遮られた。あるうことか抱きつきやがったのであった。刹那は突然の行動に対処できず、徹の胸元で息をつまらせている。

「いやあ、久しぶり。元気そうで何よりだ！また、会えて嬉しいよ！」

「本当に久しぶりですね。徹も元気そうで何よりです。喜んでもらえるのは光栄ですが、少し離れてくれると助かります」

歓喜の表情で、刹那を抱擁する徹。刹那は真っ赤になりながらも、挨拶を返し、どうにか離れてもらおうと四苦八苦している。先程の一触即発の空気はどこへ行ったのだろうか。色々だいなしであった。

「やれやれ、そのままでもいいから説明してくれないか、刹那。彼は何者で、何のためにここへ来たのかを」

助ける気ゼロの龍宮さんだった。まあ、それ程嫌そうにも見えないし、いいかという判断である。

「この人は、『小宮山 徹』。京都にいた頃の古い友人で、今日から、私の同僚となる人だ。」

龍宮、少しは助けようとか考え無いのか…」

「同僚ということは、木乃香の護衛か。なるほど、先程の魔力にも納得が行った。」

君が、それほど嫌そうにも見えなかったのですね。それに、彼には性欲の色は感じられなかったからね。

彼は純粹に喜んでるんだろ。君と再会できたことをね、刹那」

「いきなり、何いうんや。そ、そないなことない！」

龍宮の言で、さらに真っ赤になる刹那。動揺で地の京弁が出てしまっている。ちなみに未だ抱擁されていたりする。結局、この抱擁は5分ほど続くのだが、龍宮から土下座の理由を聞いた刹那に、殴り飛ばされて終わるのだった。

「改めて、先程は失礼しました。私は、先程ご紹介にあずかりましたとおり、『小宮山 徹』と申します。以後、お見知りおきを」

仕事モード全開で自己紹介する徹。あまりのギャップに唾然とする龍宮だったが、すぐに挨拶を返す。

「御丁寧にどうも。私は、『龍宮 真名』。刹那とはルームメイトで、時折仕事を共にする仲だ。不寐で済まないが、少々聞きたいことがある。ここら辺で魔の気配を感じたのだが、何か心当たりはないだろうか？ 後、なんでこんなところで、魔力解放なんてしていたのかも、答えてもらえないだろうか」

徹は、真名の問に少々考えこむと、真名を見た後、刹那に視線を向けた。それに応じるように頷く刹那。それを確認すると、徹は口を開いた。

「後者は、とてつもなくくだらない理由なんで、正直話したくないんですが、そういうわけにもいけませんよ。貴女自身が被害を受けてますし…。

前者の問については、私の戦闘技術と密接な関係があるので、勘弁いただきたいんですが、刹那は貴女を信頼しているようですから、お話ししましょう。

仕事を共にすることもあるようですから、どの道、いずれはわかることですね。

その前にお願いがあるんですが、よろしいでしょうか？」

「それが話す交換条件というわけかい？とりあえず、そのお願いとやらを聞かせてもらえないか。

その内容次第で判断させてもらうよ」

「はい、えーとですね、真名さんとお呼びしてもよろしいですか？」

「それがお願い？そんなことだったら、全然構わないよ。むしろ、呼び捨てにしてくれいいい。

見た所、君の方が年上だろうし、敬語も必要ない。というかやめくれ。堅苦しくていけない」

拍子抜けしたという感じで、徹の願いを許す真名。しかし、徹の顔には驚愕の念が浮かんでいた。

（は、そういうえば、刹那が呼び捨てにしてたし、タメ口だった。大体原作でも同じクラスなんだから、学年も一緒に決まってるだろ！何、ボケてるんだよ、俺としたことが。

でも、あれだな。実物を見るとどう見ても14歳じゃないよな、この人。つつか、これで中学生だっていうんだから、アリエナイね、うん。刹那も成長しているけど、この差は如何ともし難いな）

刹那と真名を交互に見ながら、内心でそんなことを思っていると眉間に銃口が、首筋には野太刀があてられている。

「今、何を考えたのか。是非教えてもらいたいのだが」

顔は笑っているが、極寒の目と低い声で問ってくる真名。

「そうだな。何を見比べたのか、是非教えてもらわなければな」

こちらも笑顔だが、やはり目がヤバイ。声もこころなしか震えている刹那。

「いやいや、真名は、14歳にしては大人びた美しい人だと思ったので。刹那は、本当に美しく成長したなあと感慨にふけていただけで、見比べたりシテマセンヨ、ハイ」

冷や汗をかきながら、どうにか答える徹。声は震えていて、最後の

方は機械音声みたいだったけど…。

「命拾いしたね、徹さん」「今回はその答えで見逃しましょう」

銃あるいは刀を納め、言い放つ二人。

「Aye, ma'am！」

では、先の問に対して、お答えしたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

なぜか、軍隊式に応え、滅茶苦茶低姿勢な徹。この男、本当にこの場で一番年上なのだろうか。精神年齢で言えば、三十路の半ばのはずなのだが、情けないことこの上ない。真名が頷くのを確認して、懐から小刀を取り出して答える。

「まず、前者の質問についてですが、恐らくはこいつのせいです。こいつの名は『大蛇』。俺の相棒である妖刀です。貴女なら、見ただけで理解出来るでしょう。こいつの禍々しさが」

「なるほど、確かに凄まじい妖気だ。これを魔として探知したわけか」

納得の表情で大蛇を見つめる真名。けして触ろうとしないあたり流石である。

「次に、後者の質問ですが、情け無いことに迷いました…」

「はっ？」

予想外の答に一瞬真名の思考がとまる。それをよそに尚も続ける徹。

「いや、本当は刹那に迎えに来てもらうはずだったんですが、予定より少し早く着いてしまいました、待ちきれなくて、地形把握の為に散歩でもしようかと思っただけですよ。」

それが、予想外に広いこの学園に圧倒されまして、ものの見事に迷ったわけです。

で、途方にくれていたんですが、初日に遅刻したくはないんで、魔力放出して見つけ出してもらおうとしたわけです。そこに運悪く、真名が通りかかりまして…」

正直、あんまりな理由だったので、確かめるように刹那の方を見る真名。頷く刹那だが、呆れ顔であった。真名は彼の言っている事が真実であるとうまく受け入れることができた。同時に、どれだけ見当違いの誤解をしていたか知り、恥ずかしくなった。そして、目の前の男を人騒がせな男と結論づけた。

「やれやれ、人騒がせなことだ。解放されたあの膨大な魔力量。これから学園を襲撃するんじゃないかと思っ、冷や冷やしたよ」

「全くだ。そういうところはちっとも変わらないんですね、徹」

苦言を呈する真名に、同調する刹那。彼女も実は怒っていた。なんせ、徹を1時間以上広大な学園内を探しまわっていたのだから。

「うう、すみません。返す言葉もないです」

年上の威厳ゼロである。これで社会人だというから、なおさらである。

ちなみに、この後30分にわたり、二人から説教され、結局初出勤にして遅刻という不名誉を被ることにな徹であった。自業自得である。

再会と魔眼との邂逅（後書き）

年内にといいいながら、年が明けてしまいました。

こんな私ですが、本年もよろしくお願い致します。

感想ありがとうございます。励みになって、助かります。

狸爺と鉛蜜の罠

「学園長、お客人をお連れしました」

「おお、待つておつたぞ。はいりたまえ」

声に促され、学園長室へと入る刹那と徹。室内にはチョンマゲのよ
うな髪型をした翁と無精ひげを生やした男がいた。

「ふおおおお、ようこそ麻帆良学園へ。小宮山 徹君、歓迎する
ぞ。

わしがこの学園の長であり、関東魔法協会の理事もやつとる近衛
近右衛門じゃ。こつちは高畑・T・タカミチ君、君の護衛対象であ
るわしの孫娘、近衛 木乃香の担任じゃ」

翁の言葉に傍らに立った男が黙礼する。こちらも、軽く黙礼を返し
学園長に向き直る徹。

「はっ、歓迎して頂きありがとうございます。遅ればせながら、封神
妖幻流当代『小宮山 徹』参上致しました。遅参の儀につきまして
は、大変恥ずかしながら、迷ってしまいました、真に申し訳なく」

仕事モード全開で受け答える青年であった。どうでもいいが何故
に微妙に時代がかった物言いに…。

「ふおおおお、初めてきたのじやろう？迷うのも無理はなからう
て。

それにしても、なぜ迎を待たなかったのじや？何か個人的な用でも
あったのかのう？」

瞬間、目が鋭くなり、言葉には威圧がこめられる。言外に余計なこととはするなと言われているようだ。

「いえ、少し早くついでしまったので、暇つぶしに散歩でも思っていたのですが、思っていた以上に広くて、迷ってしまいました。先の魔力放出は、私を発見してもらったためのものです。

他意はありません。お騒がせして申し訳ありませんでした」

澱み無く応える徹。その表情は平素そのもので、後ろめたさはない。

「なるほどのう。先の魔力解放については了解したわい。正直、何事かと思っただからのう」

「重ねてお詫び申し上げます」

「うむ、今後は気を付けてくれればよい。では、改めて仕事の話に入るとしようかのう」

とりあえずの前哨戦は終わり、ここからが本番である。徹は、己の有利な就労条件を学園長から引き出さねばならないし、学園長からしてみれば、いかに徹を都合のいい労働力（戦力）として扱うかをこれから交渉によって、決するのだから。

「はっ、承知しました。では、現時刻をもって、近衛詠春様のご依頼に従い、近衛木乃香様の護衛任務に着任します。それで早速ですが、木乃香様の護衛任務に着任するにあたり、必要な身分のの手の情報提供をお願いしたく存じます」

姿勢を正し、深々と頭を下げる徹。その姿は、頭を垂れているのに

どこか迫力すら感じられた。

「うむ、着任を認める。まあ、そんなに固くならんどくれ。堅苦し
いのは好きじゃないからのう。」

まず、身分についてなんじやが、君はすでに大卒なんじやる？折角
じやから、その頭脳をいかして教師をしておらおうと思っておる。

木乃香のクラスの副担任じや。これなら、側にいやすく、護衛もや
りやすいじやろう？」

「お心遣い感謝致します。非常にありがたいお話ですが、私は教職
課程をとっておりません。また、教育実習もしておりません。それ
は些ちひか無理があるのでは？」

（というか、この時期に木乃香のクラスの副担任になんかにされた
日には、ネギに関わる厄介事に巻き込まれることは間違いない。間
接的どころか、直接のそれも当事者になる可能性が高い。そんなの
は絶対ゴメンだ！）

「何、そんなものうちの大学の単位をくれてやるわい。実習につい
ても、うちのどこかの学校でやったことにしてやるわい。君は、そ
の年で大卒の俊英じや。中学生に教えることなど簡単じやろう？」

徹の当然の疑問に、学園長は人の悪そうな笑を浮かべて、事も無げ
に答える。

（婿殿むいどのもいい時期に送ってくれたものじや。ちょうどいいから、ネ
ギ君の補佐もやってもらおうとしようかのう。こやつは、裏の事情に
も通じておるし、腕も確かと聞くからのう。適役といえよう）

内心で取らぬ狸の皮算用をしている学園長。この爺、相当の狸であ

る。

「はあ、できないことはないと思いますが、些か不自然ですし、無理がありませんか？」

「よいよい、そんなものはいくらでも有耶無耶にできるわ。権力とは使うためにあるのじゃ。」

ましてや孫のためとあらば、躊躇ためらうことなどないわ。

そうじゃ！どうせなら、君には特別生活指導員にもなってもらおうとしよう。色々考えたんじゃが、君の住居は、職員寮の一室を提供するつもりじゃ。君は年も近いし、女子寮に住ませるのは、何かと問題があるからう。職員とはいえ男である以上、緊急の用でもない限り、木乃香のいる女子寮には入れん。

じゃが、刹那君がいるとはいえ、護衛の必要上、女子寮にも入らねばならないこともあるじゃろう。

そこで、特別生活指導員の出番というわけじゃ！どうじゃ、いい案じゃろう？」

さも今思いついたといわんばかりに提案してくる学園長。その表情はさらに邪悪になっている。

（駄目だ、この爺さん。早く何とかしないと！ていうか、副担任はもう既定路線ですか、そうですか。

それにしても、よくもぬけぬけと……。この爺、最初からそういうつもりだったな。つうか俺が女子寮に住み込むという考えもあったのかよ、恐ろしい爺さんだ。

この爺さんのコネというか権力を最大限に活用するつもりだったとはいえ、ここまでやりたい放題が許されるとは、いいのかこんなんで？

まあ、護衛もやりやすくなるから、こちらにとってはいい話なんだ

るうけど…。この爺さんを敵に回すのなるべく避けよう。色々面倒な事になりそうだからな)

表情では平静を保ちながら、内心で戦々恐々とする徹であった。

「はい、お受けします。未熟な身ですが、微力を尽くします」

「うむ、快く引受けてもらえて、なによりじゃ」

半ば諦観して答える徹に、満足に頷く学園長。本当にいい性格をしている。

「ところで、君にこれだけ便宜を図る以上、頼みたいことがあるんじゃないか、いいかのう?」

一泊おいて、頼み事という名の要求をしてくる学園長。とことん食えない爺さんである。

(この状況下で聞かないという選択肢があるのかと俺は聞きたい…)

内心で歯噛みしつつ、沈黙したまま目線で先を促す徹。

「何、君になら簡単なことじゃ。侵入者の排除を手伝ってくれればよい」

(この爺!全然、簡単じゃねえだろうが!大体、依頼なしで関東に与したなんて知られたら、うちの流派がこつちら側についたとみられるだろうが。ヘタをすれば、俺も西から狙われることになりかねん…)

任務外で手伝うというのは、中々シビアな問題なのだ。無論、木乃香の安全の為という言い訳もできないわけではないが、侵入者が全て木乃香目当てというわけでもないだろう。だとすれば、それ以上は蛇足だそくでしかない。一流派の当主として、いらぬ敵を作るわけにはいかないのだ。

「恐れながら、断らせて頂きます。私はあくまでも木乃香様の護衛として、この場にいるのです。」

それ以上でも、それ以下でもありません。無駄に敵を作りたくはありません」

「ふむ、君の言はもつともじゃが、それが木乃香の安全に繋がると思ふのじゃがな」

「失礼ながら、侵入者の目的が常に木乃香様だとは限りません。むしろ、それ以外が目的であることが多いでしょう。無論、木乃香様に累るいが及ぶような場合、協力するのは吝ちかかではありませんが」

言を弄もよほする学園長を譲る気はないという態度で対応する徹。

「むう、どうしてもかのう?」

「くだいです。この件に関しては譲る気は御座いません。私の任は、木乃香様の護衛であって、学園の警備ではありません。さらにいうならば、私の依頼主は、詠春様であって、貴方ではない。失礼ながら、そちらの指揮に従う義務はないかと存じます。どうしてもというのならば、別件の依頼という形でお引き受けします。便宜を図たもつていただいたお礼に格安でお受けしますよ」

継つがるような学園長の言葉を、断固たる態度で対応する徹。それだけ

では、後々面倒なことになりそうなので、一応の妥協案^{だきようあん}を提案する。

（むう、折角いい戦力を得たと思っておったのじゃがな。若いのに中々どうして抜け目が無いわい。

まあ、このあたりで手打ちにしとかんと、悪感情を抱かせることになりかねんな。

しかし、この年で、すでに仕事に徹しておるとは、未恐ろしい小僧じゃわい。婿殿も厄介なのを送ってきてくれたものじゃ）

（この爺、あわよくばいいように使おうとしてやがったな。そうはいくかよ。大体、この爺さんは、原作では色々仕組みまくってやがったからな。気をつけないとな。

それに、この爺さんは、木乃香が魔法世界に関わることを望んでいたはず。詠春さんの依頼と真っ向から対立するからな。そう簡単に気を許すわけにはいかないし、指揮下にも入れない）

お互いの思惑を隠しつつ、笑顔でやりあう二人。傍らで空気かしているタカミチと刹那は、片や内心で苦笑し、片や感嘆しつつ動揺していた。

（狐と狸の化かし合いというか。いや、化かそうとしているのは学園長だけか。

それにしても、学園長に一歩もひかずに交渉とは、詠春さんは強烈な子をおくってきたものだ）

（凄いな、徹は。学園長に対してあれだけ毅然^{きぜん}とした態度がとれるなんて…。

それにしても、徹がうちのクラスの副担任やて。一体どうなってしまうんやろ）

空気の二人を余所に学園長と徹は交渉を進める。

「そこら辺が限界かのう。分かったわい、侵入者の排除及び学園の警備は別件として依頼させてもらうとしよう。木乃香の護衛に支障がでない範囲でなら受けてもらえるのじゃろう？」

「ええ、勿論です。別に学園のために働くのが嫌なわけではありませんから」

「そうか、ならばよい。やれやれ、念のために作っておいて良かったわい。これが契約書じゃ。内容を確かめてサインを」

学園長は、机上にあった封筒から書類を取り出し、徹の前に並べ、さらに机の引出からもう一部書類を取り出して横に並べた。封筒の中にあったのは、教師としての雇用契約書及び特別生活指導員の資格証明書と腕章、引出から出された書類は、侵入者の排除及び学園の警備についての依頼書であった。ようするに、この爺さんは、徹の言い分も承知していたのであろう。にも関わらず、あんな要求をするあたり、狸である。

（この狸爺！最初から出せよ！俺が言わなかったら、木乃香の護衛の延長でこき使うつもりでいやがったな）

内心で憤りながら、契約書の内容を確認する徹。精査しているうちに問題があったので指摘する。

「申し訳ありませんが、この契約書に二つほど文言を追加して頂きたい」

「ふむ、どのようなことかのう？」

「一つ、学園の警備及び侵入者の排除については、受諾する^{じゅたく}か否かはその時々私の判断によること。
一つ、基本的に指揮には従いますが、原則として私は独自の判断で動くこと」

「一つ目はともかく、二つ目は……。そのようなことが通ると本気で思っておるのか」

徹の要求に、学園長の言葉に険がこもる。

「ええ、勿論です。これが受け入れられない場合、学園の警備及び侵入者の排除の依頼は一切拒否させて頂きます」

毅然とした態度で断言する徹。それを厳しい目つきで凝視する学園長。両者の視線がぶつかり合い、緊張が高まる。なんとも言い難い重苦しい空気が室内を席捲^{せっけん}する。根負けしたのは学園長の方であった。深々と嘆息^{たんそく}すると、口を開いた。

「ふうー、仕方無いのう。わしの負けじゃよ。君の要求を飲もう。君は、婿殿の手勢であって、わしの指揮に従う義理はないわけじゃしな」

「ご理解頂き幸いです」

極上の笑顔で対応する徹。ちなみに空気な二人は冷や汗をかいていたりする。

これを最後に交渉は終了し、契約は締結された。かくして、狸爺と
の化かし合いは終了したのだった。

時と場所を移して、ここは麻帆良学園職員寮の一室、一人の青年と二人の美少女がそこにはいた。一人黙々と料理しているのは、室内唯一の男である徹であった。炬燵に陣取り、お茶を飲んでいるのは、刹那と真名である。あれ、なんかおかしくねえ？というツッコミはしてはいけない。

なぜなら、刹那には道案内のお礼として、真名には昼間のお詫びということ、夕食と甘味をご馳走する約束をしていたからである。

「それにしても、正直冷や冷やしましたよ」

「うん、何が？」

「何がありませんよ！学園長とのやりとりですよ。最後の方なんて、正直生きた心地がしなかったんですから」

「ああ、あれのことか。いやいや、大した事無いつて、うん」

刹那の言になんてことはないといった態度でこたえる徹。

「うん、なにかあったのか？」

「ああ、そうか。龍宮には分からないものな。実は…（詳細説明中）」

興味を示す真名に、学園長との一件を説明する刹那。

「ほう、見かけによらず腹芸も得意なようだね」

「いやいや、そんなことはないよ」

感心したかのようにいう真名に、どうとということでもないと
いうに対応する徹。

ていうか、両者共に絶対得意ですよね。うん、肩を叩くのは誰だ？
はっ、何をするアーツ

「まったく二人共、笑顔で微妙な話をしないでくれ。何か妙な圧迫
感を感じる」

呆れたようにいう刹那に対し、二人はさも心外だといわんばかり声
を揃えて言ったのだった。それも、この上なく邪悪な笑顔とてもイイ笑顔で。

「「気のせいだよ」」

それはさておき、食事の開始である。炬燵のテーブルの中央におか
れているのは土鍋であった。どうやら、今夜の夕食は、鍋のよう
である。中身は、白菜に白滝、エノキに人参と豆腐、鶏団子に豚肉と
いうラインナップ。汁は塩をベースにしている寄せ鍋？であった。

3人分にしては、中々の量であったが、そこは育ち盛りの若人3人
またた瞬く間になくなっていく鍋の中身。最後は白米と卵を入れ、おじや
になって綺麗さっぱり3人の胃袋に消えたのだった。まあ、さし
の育ち盛りの若人といえども、満腹のようで三者三様ではあったが、
満ち足りた表情でまったりしていた。

しかし、そんな平穩は長く続かなかった。発端は徹の不用意な一言
であった。

「二人とも満足してもらえたようだなによりだ。この分ならデザー
トはいらなかつたな…」

「「デザート?!」」

二人の少女が弾かれたように起き上がり、徹を凝視する。真名などは徹の両肩をつかみ、ぶんぶん揺らしてすらいる。

「う、うぶ。いきなり何をするんだ、真名。刹那もいきなり反応して、一体どうしたっていうんだ?」

徹は理解していなかった。己が女性にとっての爆弾を投下したことを。

デザート・スイーツ、それはいつの世も女性を魅了し、狂わせる魔性の存在なのだ!

「徹さん、デザートまで用意していたのかい?」

得物を狙う狩人の目で、尋ねる真名。その表情は真剣そのものだ。

「ああ、ほら元々甘味もご馳走するって約束だっただろう。だから、鍋の汁作成時の空いた時間で、餡蜜あんみつを作って、冷蔵庫に入れて「刹那!」「承知!」おいたんだが……」

真名が尋問し、居所が知れるやいなや、即座に確保に動く刹那。恐るべきコンビネーションであった。戻ってきた刹那の手にはお盆に載せられた3皿の餡蜜があった。

「え、待て待て。まだ食べるのかよ!ていうか、むしろ食えんのか?」

さらに、餡蜜を食そうとする少女達に驚愕おどろかし、また心配から止めようとする徹。

しかし、少女達の甘味への欲求の前には無力でしかなかった。

「甘い物は別腹というだろう。なあ、刹那」

「龍宮の言う通りです。心配は無用です。それに、徹の手製と聞いては食べずにいられません！」

「何、徹さんの作る甘味はそんなに美味なのか？」

「ああ、特に餡蜜も含め和菓子の類は凄いぞ！そんなじよそこらの店で、でてくるものとはレベルが違う」

語る刹那は味を思い出しているのか、恍惚こうごうの表情だ。かく言う刹那は、京都にいた頃から、度々たびたび徹から手製の甘味（和菓子をはじめとして色々）を差し入れられ、すっかりその虜とらになっていたのだった。「何だと！それは是が非にでも、味が落ちないうちに早急に食べてやらなければな」

「うむ、同感だ！」

意気込む真名に同調して頷く刹那。二人の妙な迫力に押される徹。か細い声で「あー」とか呼びかけているが、哀しいかな、製作者の声は甘味の魅力の前に黙殺される。

当然である。美味しい甘味の前には、男など塵芥ちりあくたなのだ！

完全に無視されて、地味に凹む徹を余所に、少女二人は自らの分の餡蜜へと挑みかかった。そして…

「「美味しい！！」」

室内に真名と刹那の歓喜の声が響く。製作者たる徹も、それを聞いて復活する。少女二人の満面の笑みを見ながら、満足気に一人頷く。やはり元和菓子職人として、己が作ったものが喜ばれるのは、この上ない喜びである。一人感慨にふける青年の姿がそこにはあった。一方で、少女二人は、あつという間に餡蜜を平らげていたのだった。

「うん、この上なく満足だ。ありがとう、徹さん」

「本当に。久々に食べましたけど、やっぱり徹お手製の餡蜜は最高ですね」

満足気な表情で、礼を言う真名と、褒め称える刹那。それに若干照れながら、またも不用意に爆弾を投下する徹。

「いやあ、気に入ってもらえたようで何よりだ。こちらとしても腕によりをかけた甲斐が有るというものだ。あ、俺はもうこれ以上入らないし、何だったら俺の分も食べちゃってくれよ」

「「！！！」」

その瞬間、空気が凍った。真名と刹那の視線が、お盆の上の残り一皿へと収束され、ぶつかり合い、同時に弾かれたように距離をとり、対峙する。その手にはいつの間にか拳銃と野太刀が握られている。

「刹那、君はもう何度も食べているのだろう。今回くらい私に譲ってくれてもいいだろう」

「龍宮、それとこれとは話が別だ。既製品きせいひんならいざ知らず、徹さんのお手製だぞ。また、いつ食べれるか分からない貴重品だぞ。それを、はい、そうですかと渡せるものか」

「え、何この空気。ていうか、いつの間に得物をもってるんだよ。一触即発いっしょくそくはつぱつの危機?！」

譲れという真名、譲れぬという刹那。両者の緊張は高まっていく。その緊張感におされ、また、こんなところでドンパチされたらと想像して、蒼白になり嫌な汗を流す徹。

（あー、ヤバイヤバイ！なんでこんなことになったんだ…。俺か、俺のせいなのか？

餡蜜大好評！で、メダシメダシで終わるはずが、不用意なこといったばかりに、引越し初日にして、部屋崩壊の危機に！なんとしても、それだけは避けねば…。

むう、何か手はないか。新しくもう一つ作るか？いや、手持ちの材料は使いきってしまった。

それに時間の問題もある。作る時間を、この餓狼がろうならぬ餓娘共が待つてくれるとは思えん。

……ひとつだけ思いついたが、これは俺の身が危ないんじゃないか？いや、背に腹は代えられん。ちゃんとした生活空間を保つためには、仕方のない犠牲なんだ。よし！）

内面で苦悩しながら、どうにか起死回生の一手をひねり出す。が、口が動かない。これを実行した後、己を襲うであろう惨劇を想像して、体が拒否しているのだろう。躊躇ちゅうちゆっているうちに、どんどん高まっていく戦気。最早、一刻の猶予ゆうよも無かった。

（何をビビっている！これしかないんだ。根性を見せろ、俺！）

自分を叱咤し、ついにその一手を徹は実行する。まあ、破滅への階段を昇ったと言い換えてもよい。

「二人とも、それ以上食べたたら太るぞ！」

再び凍りつく空気。が、今度凍りついたのは空気だけではない。真名と刹那も表情ごとその身を凍り付かせたのだった。ギギギと音が聞こえそうな感じで首を曲げ、こちらに顔を向ける少女二人。そこに、さらなるトドメの一言を。

「あの餡蜜の総カロリーは***calだから。鍋と合算するとえらいことだ！」

「……」

ズーンと空気が重くなったような気がする。そして、二人がこちらに向ける視線がきつくなった気がするの、気のせいではないだろう。

「フッフ、元はと言えば、徹さんがデザートなんて言い出すからいけないんだよ、うん」

「そうだな、徹が余計なことを言わなければ、こんなことには……」

「あ、あの、それって責任転嫁せきにんてんかデスヨネ。ワタクシメニヒハナイトオモウノデスガ……」

確かに徹の一言が発端だったとはいえ、二人の言ってる事は責任転嫁以外のなにものでもなかった。片言になりながらも、それを指摘する徹であったが、そんな事は乙女の体重管理という至上の命題の前には、何の意味もなさないのだった。

「「問答無用！」」

「やっぱりこうなるのかよ！」

それぞれ、拳銃と野太刀を片手に飛び掛ってくる真名と刹那。抵抗しなければ、部屋の被害少なくてすむかなあと諦観して、それを受け入れる徹だった。

ちなみに、部屋の被害は最小限ですんだ。徹自身の被害も、またの機会に甘味をご馳走するということで手打ちとなった。

「あれ、俺、なんか悪いことしたっけ？俺、もしかして損しかしてないんじゃない……理不尽じゃー！」

などと、刹那も真名も帰った部屋で一人嘆く徹の姿があったとか。

狸爺と鉛蜜の罖（後書き）

刹那はすでに餌付けされており。それに伴い、刹那は甘味好きという属性が、この話では追加されており。原作ではどうだったか、よく憶えていないのですが、まあ嫌いではなかったと思うので、折角だから真名さんと絡ませてみました。

全然、話が進まないの、これ完結させられるのかと、少々危機感を覚える今日この頃です。筆が遅いので、微々たる更新速度ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

英雄の息子

「ついにこの日が来たか」

机の上に置かれた1通の手紙、それに目をやりながら青年は一人嘆息する。避けられぬ運命であることは分かっていた。それは、詠春から木乃香の護衛を依頼された時から覚悟していたことだった。この手紙はやはりそれが不可避であることを確信させる内容であった。そして、己はあの御方の『未知』の為ひいては自身の為に、それを最大限利用する道を選んだはずだ。ならば、今更ためらうことなどはずである。

しかし、この差出人のことを考えると、心が痛む。この差出人は心から英雄の息子こと、ネギ・スプリングフィールドの無事と平穩を祈っているというのに、己は彼が厄介事やっかいごとに巻き込まれることを知りながら、それを防止することなく、あまつさえそれを己の為に利用しようというのだから、当然のことかもしれない。差出人の名は、ネカネ・スプリングフィールド。青年の幼少の頃からのペンフレンドであり、恩人でもある女性である。同時に、彼女はネギ・スプリングフィールドの従姉妹であり、姉がわりでもあるのだ。

手紙の内容は近況報告と青年の近況を尋ねる内容であった。そして、最後に弟のような存在であるネギ・スプリングフィールドが、日本で教師をやることになったこと、複雑な心境だろうが、できれば知人として、手助けしてやって欲しいと書かれていた。最後の一文は余白がまだあるにも関わらず、別の便箋びんせんに書かれており、ネカネが最後の最後までこれをいれるかどうか迷ったことを伺うかがわせた。彼女の迷いは当然であろう。

なぜなら、この肉体の本来の持ち主「トールズ・ヴェイン」にとつて、ネギ・スプリングフィールドは不倶戴天ふくたいてんの敵だからである。トールズ・ヴェインは遺伝によらない突発的に膨大な魔力を保持する存在「異常魔力保持者」であった。そのありえない魔力量に周囲は、絶大な期待を寄せたが、彼には魔法行使を阻害そがいする先天的異常も備えていた。それも外部に魔力を放出できないという魔法使いとしては、致命的なものであった。彼に期待していた周囲の者達は、彼の成長と共に明らかとなったその異常に気づくと失望した。寄せていた期待が大きかったがゆえに、余計にその失望は大きかった。

そして、英雄の息子「ネギ・スプリングフィールド」の誕生と共にそれは決定的なものとなる。ネギ・スプリングフィールドは、魔力量こそトールズにやや劣るものの幼少の頃より才能に溢あふれ、利発な子供であった。しかも、ネギは初歩的な魔法を見よう見真似で成功させ、魔力量の大きさゆえ、魔法を操れぬのではとトールズのことを思っていた者達の考えをも否定してしまう。それから、トールズの人生は酷かった。なまじネギより魔力量で優れていたせいで、常に比較され妬ねたまれ軽蔑けいべつされた。「宝の持ち腐れ」「才能のない落ちこぼれ」「魔力量だけの能無し」などと擲や擄ゆされた。両親ですら、トールズを見る度に溜息ためいきをついたというのだから、相当なものだろう。

結果として、トールズは死を恐れぬ難行に挑み、シヨック死することになった。これでは、逆恨みとはいえ、恨むなという方が無理であろう。ネギにトールズを害しようという意図がなかったのは明らかだが、無自覚で無知であったがゆえに結果的にその存在と行為は、トールズを追い詰めたのだから。そして、それらのことを知っていたからこそ、ネカネは祖父に懇願こんがんし、徹の希望である「トールズは死んだことにして、新しい名前で新しい生を歩むこと」に協力してくれたのだから。

だが、トールズとは全くの別人である徹にしてみれば、ネギに対する感情など皆無である。あるとすれば、ファザコン&シスコンの甘ったれたうっとおしいガキという印象ぐらいであった。

あの契約の際に、あの御方の血肉とともに送られてきた様々な知識、その中には過去視で見たトールズの過去についての情報も含まれていた。無論、トールズには同情しているが、だからといって己までそれにひきずられるつもりはなかった。あくまで、トールズは己とは違う人間であり、己は徹として生きてきたのだから。

ゆえに、ネカネの頼みであれば、多少であれば手助けしてやるのも、吝かではなかった。まあ、己の任務を阻害しない範囲のことだが。そういう意味では、副担任になったのは悪いことではない。

しかし、己が任務のうちに含まれる「木乃香を魔法に関わらせない」という目的においては、ネギは最大最悪の敵だ。原作でも、ネギに関わることによって、木乃香は急速に魔法に近づくのだから。ネギの使い魔となるあのカモミールなどは、特に気をつけなければならぬ。原作のような行動をするつもりなら、強制送還も辞さない。

幸いネカネとの繋がりがあ自分なら、簡単にそれをなすことができるだろうから。そういう意味で、そう遠くない未来、ネギと敵対する事になるであろうことは、予想するまでもない当然の未来である。手助けを頼まれているのに敵対とはこれ如何に…。心も痛むはずである。

「まあ、今から心配しても詮無いことか…。精々、年長者として実生活において手助けしよう」

そう心に決め、手紙への視線をきる。微妙なしこりが無いわけではないが、今はどうしようもないことである。

「なるようになるわ」

最後そう呟き、部屋を後にする徹であった。

「お話のところ失礼します。小宮山 徹、お呼びにより参上しました」

部屋をノックし、用件を述べる。なにやら室内が騒がしいが、入室の許可の声は彼に届いた。声に従い入室すれば、そこには混沌とした光景があった。何より目立つのは学園長に掴みかからん勢いで、詰め寄るツインテールの少女の姿であった。他には苦笑しつつこちらに目礼するタカミチに、突然の乱入者に驚いている黒髪の少女と茶髪に眼鏡の幼さの残る顔立ちをした少年がいた。もっとも彼女たちの驚きは、乱入者の容姿のほうであったが。徹は、原作と昨日渡された名簿を思い出し、ツインテールが『神楽坂 明日菜』、黒髪が護衛対象である『近衛 木乃香』、そしてどこか見覚えのある茶髪の少年が、『ネギ・スプリングフィールド』であろうとあたりをつけた。未だ、徹に気付かず、明日菜は学園長に何事かまくしたてている。それを待ってやる義理はないし、何より徹は無駄は嫌いであった。彼女がいくら騒ぎ立てたところで、何も変わりはないのだから。

「そこまでだ。悪いがこちらは仕事の話でね。抗議なら後にしてもらいたい」

明日菜の肩をつかみ、学園長から引き離す。

「なによ、アンタ？いきなり何よ」

いきなりの乱入者に不機嫌そうな顔を隠さずに問う明日菜。

「私は、今日より君のクラスの副担任になる小宮山 徹という者だ。静止のためとはいえ、女性の体に許可もなく触れたことは謝罪する」

「は？アンタが教師？冗談でしょ？！」

目の前の男は、身長こそ170？を超えるが、その顔立ちはどう見ても10代である。社会人にはどう見ても見えない。さつき、この生意気なクソガキが、高畑先生をさしおいて担任教師になると聞いて、驚愕し憤懣やる方なくなっただころだというのに、この上、自分とさして変わらない年代の男が副担任であるという。そんなのは、そうですかと認められるはずがなかった。

「事実じゃ、彼は今日から君たちの副担任なる。幼少の頃から、海外留学して飛び級を繰返し、この秋に大学を卒業した新進気鋭の俊英じゃぞ。色々教えてもらおうとええ」

しかし、学園長の言葉により即座に肯定され、何も言えなくなってしまう。その隙すきについて、学園長が話を進める。

「ネギ君、こちらは君が実習することになるクラスの副担任になる小宮山 徹君じゃ。君と同じく今日からの赴任ふにんじゃが、人生においては先輩じゃ。色々相談するといい」

「はい、ありがとうございます！あの徹さん、僕はネギ・スプリングフィールドといいます。よろしく願います」

「こちらこそよろしく、ネギ先生。遠慮えんりよなく頼ってください」

学園長の言葉に、人懐っこい笑顔で自己紹介するネギ。こうして改めてみると想像以上に幼い。その幼さのあまりに余計な一言を付け加えてしまう徹であった。

すでに、ビジネスライクでまり深くつきわなないで、精々影から支援するという当初の目論見は完全に潰えてしまったのだった。

「ふえー、お爺ちゃん、この上また若い先生やな。ネギ君といい、今日はうちのクラスイベント、一杯やな」

傍観していた木乃香がそんなずれたことを言う。流石の天然ぶりである。

「それよりも、そろそろ予鈴が鳴る時間だ。いつまでも、こんな所で油を売っている暇があるのか、神楽坂に近衛」

冷静に事実を指摘する徹。

「なんでアタシ達の名前」「自分の担当するクラスの生徒の顔と名前くらい把握している」「…」

明日菜の疑問を一刀両断する徹。そんなものは当然だといわんばかりである。

「そんなことより、はよ行け。ネギ先生も赴任初日から遅刻をつけたくはないだろう」

徹の指摘に慌てて踵を返す明日菜と木乃香。出て行く際に、「後で覚えてなさいよー」という明日菜の声と「また後でなー」という声が届き、足音が遠ざかっていく。それが完全に聞こえなくなったと

ここで、学園長は口を開いた。

「ふう、やれやれじゃわい。助かったぞ、徹君。まさか、君がわしを助けてくれるとは夢にも思わなんだがのう」

「別に助けたつもりはありません。無駄が嫌いなだけです。あのままじゃ話が進みませんから」

どこか愉快そうに言う学園長にばっさり言い捨てる徹。

「ふおおおつふお、本当に君は容赦がないのう。

改めて、君の担当するクラスの担任になるネギ・スプリングフィールド君じゃ。彼は魔法使いとしての修行の一環として教師をしなればならんのだ。

悪いと思うが君には、表裏両面での彼の補佐を頼みたい。君以外に適任がいなくてのう」

（よくもぬけぬけと言えるもんだな、この糞爺！最初からそういうつもりだったくせに、よく言う。

適任者がいないだ？いるじゃねえかそこに！老け顔の英雄の仲間がさあー！）

内心で酷い事ひどを言いながら、平静を保った顔で黙して頷く徹。やはり腹芸は得意なようだ。

同時に厳しい視線で学園長を牽制する。けんせい

「わかっておる、君のやるべきことの邪魔やまにならん範囲でよい。ネギ君、彼は魔法のことにも通じておる。そういった方面でも頼るとええ」

学園長はそれを平然と受け流し、ネギに話を振る。

「はい、分かりました！」

二人の思惑を全く理解しないまま、子供特有の明るさと素直さで返事をするネギ。

(こりゃ苦勞させられそうだ…)

内心でため息をつきながら、その様を見守る徹であった。タカミチからの微妙な同情の視線がありがたいようであらう。

(同情するぐらいなら代われよ！って無理か…はあ)

それから諸事情の説明と注意事項について説明を受け、話が終わり元気一杯に学園長室を辞するネギ。徹もそれに続いて退室しようとするが、その背中に学園長から爆弾のような一言をかけられる。

「ああ、そう言えばネギ君は、木乃香と明日菜君の部屋に同居させることにしたからのう」

その聞き捨てならぬ一言に、振り返って凄絶な殺気を込めて視線を叩きつける徹。原作からそうなるであろうことは知ってはいたが、己の立場からすれば到底容認できることではない。異議を唱えても無駄な決定事項であるのに、わざわざ自分に知らせるところが、またいやらしい。

(昨日の意趣返しのもりか、糞爺！それとも俺が木乃香と共にネギを守らざるをえないようにするためか？どちらにしても、嫌な爺だ。この爺は敵にはまわしたくないが、好きにもなれんな)

殺気つきの視線は、せめてもの抵抗と言葉にしない脅迫いばしである。込めた意味は「次は許さない」だ。学園長は、その意味は理解したらしく、表面上は平静を保ったまま頷く。それを見届け、今度こそ徹は学園長を後にしたのだった。

徹とネギは、足早に自身の担当するクラスである2 - Aへ向かう。そこへ行く途中、徹はある事実をばらすことにした。さきのネギの驚きが、自身の容姿についてだったことに気づいたからである。彼の考えが正しければ、ネギはもう気づいているはずだ。先程から、こちらを盗み見て考え込む様からして、一目瞭然いちもくりょうぜんだったからである。

「久しぶりだな、ネギ。6年いや、7年ぶりかな。あの時は病室だったな」

その言葉に、目を見張るネギ。

「やっぱり、トールズさんですよ。僕とお姉ちゃん以外の唯一の生き残りの。なんで、偽名なんて名乗ってるんですか？それにあの態度、まるで僕と初対面であるかのようでした」

やはり、ネギは覚えていたようだ。幼かったとはいえ、ネギにとっても重大な事件であり、彼の今後を決定付ける事件であったから当然ともいえる。何より、徹の銀髪に紅眼という容姿はインパクトがあり、忘れようがないだろう。

「偽名ではない、今は小宮山 徹が真実の名さ。ネカネさんから聞いていないか？」

「そういえば、そんなようなこと聞いた気が……。ああ！確かに言われました。今は徹さんだって」

思い出したかのように叫ぶネギ。しつと口元に指をやると事情を話す徹。

「俺が、あの時記憶を失くしたのは憶えているかい？トールズ・ヴェインと呼ばれても実感が無くて自分の名前とは思えなかったのさ。そこで、ネカネさんに協力してもらって、君のお爺さんに頼んで、トールズ・ヴェインは死んだことにしてもらったのさ。その方が何かと都合がよかったのさね」

実のところ、それだけではなかった。たまたま、外に出ていたアーニヤ以外で英雄の縁者でもないのに生き残ったトールズはいろんな意味で、邪魔だったのだ。ネギに箔をつけるためにも、悲劇の生き残りは英雄の縁者以外があつてはならなかったのだ。

ゆえに、本人が希望していたことを、これ幸いとして、死亡したことにし、戸籍を用意したのだ。無論、そんなことはさすがの徹も理解していない。ネカネの祖父の善意の結果だと思っている。

「そうだったんですか。じゃあ、やっぱり徹さんとお呼びした方がいいんですか」

「ああ、それで頼む。死んだはずの人間が生きているなんてことが分かったら、色々かんぐられそうだからな。他言無用でよろしく」

「あ、はい、そうですね。僕、絶対に誰にも話しません！」

「ああ、それから先の態度は君と縁から無用な勘繰りを受けるのを

避けるためさ。どこで、君と知り合ったのかと聞かれたら、困るだろう？それこそトールズはまだ生きていたなんてことになってしまったら、目もあてられないからな」

「ああ、そうですね。本当にそうですね。気づくのが遅くてよかったです。危うくあの場で聞いてしまつところでした」

「そうだな、それは俺も助かったよ。正直、君が言ってしまったのか冷や冷やしたからな。」

まあ、何はともあれこれからよろしく頼むよ、ネギ先生」

少しおどけたように笑って言う徹。

「はい、こちらこそよろしくお願いします！徹さん」

ネギも笑顔で元気よく返す。

運命のクラス、変人・奇人の巣窟そくくつともいうべき、2 - Aはすぐそこに迫っていた。

おまけ（その頃の学園長室）

「ふう、なんとという殺気じゃ。寿命が縮むかと思つたわい。いや、確実に縮んだわい」

「自業自得でしょう。あんなことを勝手に決められれば、彼の立場からすれば怒るに決まっています」

額に浮かんだ冷や汗を拭いながらいう学園長こと近右衛門。それに呆れたように応えるタカミチ。

「そうは言うがの、あれは必要なことじゃ。わしは婿殿と違い、木乃香が何も知らんままでいいとは思つとらんからのう。それに婿殿も盟友の息子が原因とあらば、文句も言うまい」

「それは学園長の言い分でしょう。人の親としての立場からすれば、詠春さんの方が正しいのかもしれないよ」

苦言するタカミチ。彼とて、明日菜のことを考えれば、他人事ではないのだ。

「ふおおおお、何を言うてもわしの考えは変わりませんよ。それに収穫はあった。」

あやつは婿殿の意を体现するものじゃということが。まあ、あやつもわしと婿殿の意見が対立していることに気づいたじゃろうがの。あれ、わし、さらに嫌われそうじゃねえ？」

「それこそ自業自得でしょう」

転んでもただでは起きない近右衛門だが、やはり人から嫌われることをこのむわけではないらしい。

そこに無常なタカミチの指摘。近右衛門は微妙に凹むのだった。

英雄の息子（後書き）

ようやくネギ先生登場です。主人公にとってのネギは凄い微妙な存在なのですが、そこから辺をもう少しうまく表現できたらと思います。感想ありがとうございます。励みになります。自分のペースでコツコツやっていこうと思います。では、次回もお付き合い頂けたら幸いです。

そこは魔窟、2年A組（前書き）

ユニークアクセスが50000を超えました。というか、今にも60000超えそうです。初投稿で拙い所は多々あると思われるにも関わらず、読んで頂きありがとうございます。

さすがにそろそろ、外伝書きたいなあと思っっているのですが、本編が全然進まないんで自粛するべきか悩んでおります。

こんな私ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

そこは魔窟、2年A組

（2年A組、これからこのクラスの副担任になるかと思うと、何かと感慨深いな）

2年A組の教室の前でそんなことを一人思う徹であった。己が教鞭をとることなど、露程も思っていなかったので、何かと感慨深いのであった。こういう所は、精神年齢30代そのものであった。

無論、若者どころか幼いといつていいネギには、関わりの無いことであった。一人感慨深げに頷いている徹を余所に、無造作に教室の引き戸を開ける。そこには、お約束の罫があるにも関わらず。

（はっ、感慨に耽っている場合じゃない。黒板消しを阻止しないと、早々に任務失敗になりかねん！）

原作どおりなら、ネギが常時展開している魔法障壁に遮られ、空中停止という状態を作り出し、明日菜をはじめとした生徒達に違和感を覚えさせる事になり、明日菜に魔法バレの下地を作る出来事だ。

（木乃香には影響のない出来事のはずだけど、俺と言うイレギュラーがいる以上、安心できない。くそ、こんなことなら魔法障壁切っておくように、先に言っておくんだっ！）

そんなこと思ったところで、今更後の祭りであった。無常にも、ネギの頭に落ちていく黒板消しの姿！

しかし、徹とて伊達に7年近く修行してきたわけではない。鍛え抜かれ制御されるに至った人外の身体能力と反射神経が、間一髪の処で、黒板消しの落下を阻止する。黒板消しは見事、徹の手に収まっていた。

「待つんだ、ネギ先生。見る」

空いている手でネギの肩を叩き、静止する。ネギは、何かと振り向き、徹が手に持った黒板消しを見て、事態を悟り、苦笑する。こういう所は、本当に子供らしくない少年である。

「助かりました、徹さん。ありがとうございます」

「礼はいらない。そんなことより（常時展開している魔法障壁をきれ）、早々に仕事ができてしまったようだな（俺が先に行くから、それについてきてくれ）」、「内の（）は小声

そう言つて、腕章を懐から取り出し、腕に嵌める徹。徹の指摘にハツとなり、場所を譲り慌てて魔法障壁をきるネギ。それを確認した次の瞬間、徹は震脚で地面を震わせた。衝撃が走り、徹の目前に落ちる水入りのバケツに連鎖的に飛ばされてくるおもちゃの矢。軽く跳躍し、水に濡れることを防ぎ、飛んでくる矢は、空中で掴み取る。それを見た少女達は、誰もが呆然とする…と思いきや、好奇心に目をキラキラさせている者、実力を計るように鋭い目を向けてくる者、悪戯が失敗したのが悔しいのか、残念そうな顔をしている者、舌打ちしている者すらいた。

（なんとというか…、想像以上の魔窟だな、ここは）

内心でそんなことを思いながら嘆息する徹。そして、息を吸い込むと、できるだけ冷酷に言い放つ。

「やれやれ、自己紹介する前に、副担任ではなく、こちらの仕事を
する羽目になるとは…。この悪戯に加担したものは、早急に片付け

なさい。 + として、レポートをプレゼントだ」

「「えー、横暴だー！」」

中学生とは思えない小さな双子が叫ぶ。他にも幾人かが不満げな顔である。恐らくこの悪戯に関わった者達なのだろう。

「自分のしたことは、自分で責任をとるべきだろう。横暴でも何でもない。レポートは私から、心ばかりのプレゼントだ。何、かるいかるい。精々、3000字だ。」

この際だから、自己紹介しておこう。私は、小宮山 徹。今日から、このクラスの副担任であり、特別生活指導員でもある。以後宜しく頼む」

「「えー！」」「涼しい顔で結構エグイこと言うよね」「二代目デスメガネか」「いや、メガネはかけていないぞ」「そんなことよりも若すぎない?」「銀髪に紅眼で、どこのアニメだよ……」「でも、かつこよくない?」「先程の震脚、できるアルネ」「手合せ願いたいでござるな」「ふ、流石だな」「若いのに迫力あるなあ」

徹の自己紹介に、混沌とする教室。反応はまちまちだが、何かずれている気がするのなぜだろうか。

この後、ネギが自己紹介し、さらに混沌を呼ぶことになる。

時間は経過して、ネギの初授業である。実習生であるネギには指導教員であるしずながついているが、補佐を頼まれた以上、形の上では正規の教員になっているのだから、先輩として初授業くらいは一応、見守ろうと思いい、教室の後方で見ているのだが…。

(しかし、酷いな、これは…。想像以上だ。全く、尽く想像を超えてくれるクラスだ)

内心で呆れながら、嘆息する。はつきりいつて授業になっていないのである。いや、ネギの授業内容が酷いわけではない。些か、覚えの悪い人間には厳しい内容ではあるが、十分及第点がつけられる授業だ。

では、何が問題なのかといえば、受けている生徒達の態度である。その表情は好奇心や疑問に彩られ、授業内容など、右から左であるう。この中の何人が、真面目に聞いていることやら…。

(ネギは…、気づいてないか。無理もない、こんなに一生懸命だしな。初授業だから、気合入れて頑張ってるんだよな。うう、哀れだ)

ある意味、仇敵たる少年の不憫さに涙する徹。なんだか、この男キヤラが崩れている気が…。

まあ、それはさておき、さすがにこのままではまずいと思い、しずなに提案する。

「あの、しずな先生。ネギ先生には悪いですが、これでは授業の意味がありませんし、今後の為に生徒達の疑問を解消しておく必要があるんじゃないでしょうか」

「ええ、そうですね。今後もこんなことが続いたらまずいですし、ここは思い切る必要があるかもしれないですね。今のネギ先生に、生徒達の内心にまで目を向ける余裕はなさそうですね」

徹の提案に首肯し、席を立つしずな。そのまま前へいき、ネギに一言三言告げる。それを聞いて落ち込むネギであったが、すぐに奮起

して元気よく宣言する。それが混沌を招くことを理解せずに。

「皆さん、集中できないようですから、この時間は授業をやめて質問タイムにします。何でも聞いてください！」

宣言と共に怒涛のごとく押し寄せる質問の嵐。混沌ここに極まれりである。

（巻き込まれてはかなわんな。早々に退散するとしよう。ネギ、悪く思っなよ。それは君の身から出た錆が招いたことだ）

翻弄されるネギを尻目に逃亡を図る徹。が、そうは問屋が卸さない。教室の引き戸をこごとした瞬間、スーツの裾を何者かに掴まれる。

「む、何奴？麻帆良のパパラッチ朝倉とはな…遅かったか」

誰かと思って見てみれば、そこにはイイ笑顔の朝倉和美の姿があった。

「すでにチェック済みとは、さすが特別生活指導員。でも先生、一人だけ逃げようというのは、虫が好いんじゃないかな？」

「いや、この混沌とした状況は誰でも逃げ出すだろ。ほら、しずな先生なんてすでにいないぞ」

徹の言葉どおり、いつの間にか教室内からしずなの姿はない。素晴らしい状況判断である。ここらへんは教師としての年季の差であるうか。

「いやいや、あたしらが興味あるのは、ネギ先生と先生だからさ。」

逃がさないよ」

「待て、取引しよう。私はあの状態になりたくはない。だから「あゝ、もう手遅れだから。」…」

どうにか、イイ笑顔の和美を振り切ろうと、取引をもちかけるが、すでに時遅し。ネギに集中していた生徒達の一部が、いつの間にか徹を取り囲んでいた。真名は無表情の中に人の悪そうな笑をのぞかせて、刹那は苦笑しつつ、超とエヴァは探るような目つきをこちらを見ている。さらに、葉加瀬は研究対象にしたいたいな目でこちらを見ているし、長谷川はアリエナイとかぶつぶつ言いながら、こちらを見ている。恐らく、銀髪・紅眼のことからだろう。もっと性質が悪いのは、武闘派の面々である。古 菲などは今にも仕掛けてきそうだし、楓も微妙に気を高めているようだ。極めつけは、委員長こと『雪広 あやか』だ。どうも、ネギを見捨てようとしたことが、腹に据え兼ねたらしく、怒気をみなぎらせてこちらを睨んでいる。

「一応聞くけど、後日受け付けるといふ選択肢はなし？」

「……なし……」

半ば諦観と共に提案してみるが、即答で否定される。

「酷いですよ、徹さん。僕を置いていかないでください！」

「いや、だってお前は自業自得だろ！俺を巻き込むな！」

そして、いつの間にかこちらにきていたネギの恨み言を発端として、反論虚しく、徹も揉み苦茶&質問攻めにされたのだった。

「ひどい目にあった。あれが女子校生のパワーか。女三人寄れば姦しいとは、よく言ったものだ」

どこか遠い目をして、呟く徹。その言い様にはどこか哀愁ただよっていた。質問タイムという名の尋問おもちゃでひかれたともじゅうを受けたせいか、おろしたてのスーツが微妙によれているのが、また哀愁を感じさせる。この日、彼が受持つ日本史はなかったので、散歩がてら地理を把握しようと放課後の学園内を見回っていたのである。

（しかし、本当に広いな。神木の力を利用しているとはいえ、これだけの広さに認識阻害、侵入者探知をはじめとした防護の為の結果とは、恐れ入る、ここの創始者は相当の実力者だったんだろうな）
学園にかけられた魔法や結界を分析しつつ、感嘆する徹。現実逃避の為に、仕事に徹しているわけではない。そんなことは断じてない。まあ、現実逃避もとい仕事に徹する彼の目に、本を両手に抱えて歩く危なかしい少女の姿が映る。

（うん、危ないな。あれじゃあ、前が見えんぞ。ていうか、あれうちのクラスの本屋ちゃんこと『宮崎 のどか』か。むう、このまま知らんぷりというのは、色々いただけないな。よし！）

「宮崎、大丈夫か？そんなに本を抱えて、転んだら大惨事だぞ」

「あ、先生。これはその…」

徹の声に反応して、こちらに顔を向けるのどか。徹であると認識すると体ごとこちらに向き直ろうとする。

「待て待て、無理してこちらにむかなくていい。私が大惨事のきっかけになったら、せつかくそれを防ぐべく声をかけたことが、本末転倒になるだろう」

「あ、そ、そうですね」

「やれやれ、律儀なのは悪いことではないが、時と場合によるぞ。しかし、何回かに分けて運ぶとか、人に手伝ってもらうとか方法はあつたらうに。」

存外に、宮崎は横着者なのだな」

徹は、どこかおかしそくに笑いながら、のどかの視界をふさいでい元凶の大半を奪い取る。

「…あ、ありがとうございます」

突然の行動に驚きに目を白黒させながら、それでもちゃんと礼を言うのどか。本当に礼儀正しく律儀な少女である。

「気にしなくていい。見ていてハラハラしたからな。これはむしろ、私の精神衛生のためだ」

「は、はあ。いえ、すいません。わ、私のせいですよね」

徹は、ありがたがる必要はないという意味合いで言ったのだが、逆効果であつたようだ。のどかは恐縮してしまっている。

（うーん、のどかも良い娘やな。こないない娘が、あの唐変木の毒牙にかかると思うと、なんか腹立つわ。いや、そんなことより今は

フォローしないとな)

「あ、もう、そういう意味じゃない。とにかく、気にするな」

両腕で持っていた数冊の本を片手で持ち直し、空いた片手でのどかの頭を少々乱暴に撫でる。

「はわ、はわわわ」

「いいから、たまたま、便利な労働力が無償で手に入ったラッキーとでも思っておけ。これ以上、礼を言う必要もないし、謝る必要もない。まだ、いうつもりなら、永遠に撫で続けるぞ」

それ以上のいらんことを言うなとばかりに、ひたすらに頭を撫で続ける。のどかの顔がどんどん紅潮していく。誰が見ているか分からない往来のど真ん中で、異性に頭を撫でられているのである。当然といえば当然である。というか、そんな意図がないとはいえ、パワーハラになりかねない行為である。

年近い異性に対して、なんの躊躇いもなく頭を撫でるとか、その行動が客観的にどういう風に見えるかとか意識していないあたり、この男も、十分唐変木である。さすが、元彼女いない歴〃職歴だっただけのことはある。はっ、何をするアーツ

「は、はい、わかりました。ありがとうございます」

「やれやれ…。もういいから、どこまで運ぶか教えてくれ」

了解しながら、それでもなおお礼を言うのどかに、仕方がないかと諦観しながら、話題を変える。

「あ、はい。先導しますから、ついてきてください」

(今日、赴任してきた俺に対して、場所の説明をせずに、先導するあたり、意外に頭のきれはいいのかもしれないな。これで、人見知りと奥手な性格を直して、目を隠すような髪型をやめれば、もてるだろうになあ。惜しい逸材だな)

そんな事を思う徹を余所に、先導するべく先に行くのどか。その歩みが先程よりも早いように思えるのは、気のせいではないだろう。持っている本が少なくなっただこともあるだろうが、恐らく教師とはいえ、年近い異性と肩を並べて歩くのに抵抗があるのだろう。

(この様子じゃ、それも難しいか。うーむ、そういやのどかつて、なんでネギに惚れるんだっけ？

最終的には、子供らしからぬ決意とか覚悟に惹かれてみたいな感じだったが、そもそもきっかけがあったはずだ。なんだっけかなあ、……ポクポクポク……チーン、思い出した！

そうだ、のどかが大量の本を運んでいて階段を踏み外したところを、魔法で助けるんだった。これは、明日菜にネギが魔法使いであることを確信させる出来事でもあったはず。つうか、何気に俺、ネギのどかフラグをへし折ったんじゃないか。よし、Good Job!だ、俺。

これで、のどかがネギに近づきかけを潰したし、同時に明日菜への魔法バレを遅らせることができる。つまり、俺にとっては、精神衛生的にも、仕事のにも、得な一挙両得の最高の結果じゃないか) 無自覚な行動で、一石二鳥な結果がでたと内心でほくそ笑む徹であった。

しかし、運命は残酷だった。確かに、持ってる本の量が多すぎた事が原因として、のどかがバランスを崩すことは防ぐことができたが、

今度は別の原因でバランスを崩すのであった。

そう、実のところのどかは、異性に頭を撫でられた照れと羞恥で、オーバーヒート寸前だったのだ。徹が銀髪紅眼という人外れた容姿を持っていたことも災いした。思春期の少女が、同年代の異性に頭を撫でられて平静いられるはずがなかったのである。銀髪と紅眼が整った顔立ちに、ミステリアスな雰囲気を与えており、少女の照れと羞恥を増大させる結果となっていたのである。ましてや、奥手で人見知りなのどかである。受けた心理的影響は半端なものではない。そんなイツパイの心理状況で、無意識の内に普段より足早に歩いていたのであった。結果は、言わずもがなである。もの見事に、原因こそ異なるものの、原作通りの場所で、のどかはバランスを崩したのだった。

(えー、なんでそこでバランス崩すんだよ！どこのドジツ子ですか！？)

己の行動が原因とは夢にも思っていない徹は、そんな事すら思った。そう思う間にも、のどかは前のめりに落ちていく。

(って、そんなこと思っている場合じゃねえ！間に合え！)

そして助けに行こうにも、原作知識からその原因を取り除いたという固定観念をもってしまい、起きるはずがないと完全に気を抜いていたせいで、すぐに体が反応しない。驚愕と困惑で助けに行こうという意思が湧き上がるのすら遅れた状況にあつて、それは致命的な遅れであった。

さらに悪いことに、先導されていたせいで、のどかと徹には手を伸ばしただけでは届かない距離があいていた。また、のどかがバランスを崩したのが、階段だったせいで、ただ前に加速するだけでは、助けるのは不可能だったのである。瞬動を使い前進し、その身を掴

もうとするも、時遅し。あと一步のところまで届かず、非情にものどかは階段を前のめりに落ちしていく。

(くっ！仮初めの身分とはいえ、俺も教師なんだ。俺の前で教え子に怪我なんてさせるかよ！)

激情にかられ、そこに気を抜いていた己への叱責も加わり、思わず大蛇を解き放ちそうになる徹。そこに一陣の風が吹き荒れる。そこに含まれた魔力が彼を冷静にさせた。

(結果は変わらずか。情け無いな、早とちりして気を抜いた挙句、大蛇を使おうとするなんて…。)

これは、俺の責任だな。

しかし、改めて現実としてみると、ネギは行動が軽はずみすぎだな。秘匿されるべき魔法を人の目を気にせず、堂々と人助けに使うなよ…。まあ、大蛇を使いそうになった俺がいえることじゃないか)

「宮崎、無事か!？」

階段から乗り出して、半ば叫ぶように階下に声をかける。原作通りなら無事であることはわかっているが、己というイレギュラーがいることを知っている以上、徹は安心できなかったのだ。

(これは漫画じゃない。物語のように、ご都合主義的に主人公の為に世界があるわけじゃないからな。俺はこの世界で「生きて」いるのだから！)

それは、徹がこの世界で初めて人を殺めた時に、己に刻んだ誓であり戒めである。この世界を他人事のように見る傍観者ではなく、この世界に生きる一人の人間として、当事者となることを。

結果として、のどかは無事であった。原作通り、ネギに抱きとめられていた。直後に、ネギが明日菜にさらわれるように連れていかれたから、明日菜に魔法がばれたのも一緒であろう。唯一の差異は、徹がのどかを念の為に保健室へ連れて行ったことくらいであろう。今回、世界は優しい結果をくれたようである。

「あ、くそ。絶対フラグだったよな、あれは。おまけに明日菜に魔法バレしたっばいし、やってられねえ。あの迂闊な少年のことだ、下手をすると俺のことまでしゃべってそうだな…はあ」

結局、のどかの代わりに本を運び終えた帰り道、徹は一人ため息をついた。正直、頭が痛かった。明日菜に魔法がばれたという事は、仮契約までのルートは少なくとも確定したとってよからう。つまり、それは仮契約のカードに興味を持った木乃香が、仮契約を試すことに繋がるのだ。いくらなんでも、先を見すぎかもしれないが、木乃香を魔法に関わらせないという彼の立場からすれば、ありえる未来は想定しておいて、損はない。

それに、現状のことだけ考えても、木乃香の親友にして同居人である明日菜が魔法に関わってしまったことは、間違いない。それは、木乃香が魔法に関わる機会を増やすことにほかならない。のどかが、ネギに接近することも同様だ。彼女は、木乃香と同じ図書館探検部に所属しており、やはり木乃香と魔法の接点を増やすことに繋がるであろうことは、原作からも明らかであるからだ。

「はあ、やっぱり、ネギとは一度きっちり話をつけておく必要があるだろうな」

もう一度深く嘆息すると、一人そんな事をのたまう徹。どういう風に切り出そうか等、思案している彼の耳に己の携帯が着信を報せる。

「はい、もしもし。どうしたんだ、刹那。急な仕事でも？」

「え、違いますよ。悪いんですが、何も聞かずに今からいう場所へ来てくれませんか？」

「理由はいえないのか？まあ、刹那の願いとあらば、別に構わないが…、告白でもしてくれるのか？」

「な、ななな、何言うてんのや！そ、そないなわけないやろ！とにかく来てや！場所は…」

冗談交じりにそんな事をいう徹であったが、刹那には不評であったようで、一方的に場所を告げられて、電話をきられてしまう。悪ふざけがすぎたと反省する徹であったが、どうして動揺して地が出たのか理解できてないあたり、この男の唐変木ぶりも相当なものである。一方で、電話の向こう側では、

「徹さんに連絡できたし、私たちもそろそろ行くでしょう。うん？刹那、何で顔を赤くしているんだい？」

「なんでもない！お前の気のせいだ」

真名の指摘に、真っ赤になって否定する刹那。「告白なんて」とかブツブツ呟いている。それを見た真名はピンときた。

「いやいや、どう見ても真っ赤だよ。察するに、徹さんに電話で何か言われたのかい？」

今の様子を見るに、愛の告白でもされたのかい？いや、むしろそういう用件だと誤解された方かな？」

「龍宮、お前もか！…いや、勘違いだ。事実無根だ！」

鋭すぎる真名の指摘に思わず反応してしまう刹那。すぐに否定するも、既に時遅し。

「今の言い様、どうやら大当たりのようだね。刹那も、中々隅に置けないな。」

呼び出しのついでに愛の告白とは、あまりのレベルの高さに私はついていけそうにないな」

そんな事していないと分かっているながら、いけしゃあしゃあとそんな事を言う真名。だが、彼女はやりすぎたのだ。刹那は俯いて肩を震わせていたかと思うと、突如顔を上げた。その表情はさながら般若だ。

「た〜つ〜み〜や、そこに直れ！叩つ斬てやる！」

夕風を抜き放ち、飛びかかってくる刹那。ここに至り、ようやく真名は己の失策を悟った。

「待て、刹那。私が悪かった。謝るから許してはくれないか？」

「問答無用！」

「やれやれ、弾も安くないというのに…。ちよっ、刹那、本気で殺す気か！？」

どうにか拳銃の銃把で受け止めたが、今の剣閃は洒落にならないレベルのものだった。真名の背中を冷や汗が伝う。

（しまった、引き際を誤ったね、これは。仕事でもないのに、弾を消費しないといけないとは……。だからといって、弾を渋って今の刹那を止められるとは思えないからね。しばらく付き合って、冷静になるのを待つかないか。涙を飲んで、それまで付き合うしかないか。恨むよ、徹さん）

内心で葛藤し、開き直る真名。最早選択肢は一つしかない。

「ああ、もう。こうなったら、とことん付き合ってあげようじゃないか、刹那！」

真名は、地面を強く蹴って、刹那と距離をとる。一瞬後には、その両手には二挺の拳銃が現れていた。

それを追うように肉迫する刹那。目が完全に逝ってしまった。羞恥と怒りで完全に我を忘れていたのだ。放たれる弾丸と切り裂く刃が交わり、ここに歴戦の銃士と神鳴流の剣士の決戦の火蓋が人知れず落とされたのだった。

翌日、無数の弾痕とクレーターが、その一帯で見つかったとか。

呼び出された先で、徹を迎えたのは、2-Aの生徒達だった。そういえば、原作でもネギの歓迎会をやっていたなど、今更ながらに思いつき、己の察しの悪さに呆れるのだった。それは徹の悪癖が原因だった。この世界を『ネギまつ』という物語の世界ではなく、確固たる現実であると認識している彼は、未来の出来事になるであろうそれを、今まで普段は極力思い出さないように努力してきたからだ。

その為、原作知識を必要な限り思い出さないようにしてきたせいで、突発的な出来事などには瞬時に記憶がでてこない。それに不安もある。彼が呼んだ時点で原作は未だ完結していなかったからである。その後の展開はどうなるのか、己というイレギュラーがいることもあり、彼には全く想像もつかなかった。

無論、こうして木乃香の護衛として正式に着任した以上は、己の感情には関係なく原作知識という絶大なアドバンテージを最大限に活用するつもりであるが。今一度、原作知識について内容を確認・反芻しなければと徹は心に決めた。

それはさておき、元気な2-Aの面子であった。明日菜は、ネギと漫才のようなやりとりを繰り広げ、委員長はネギに銅像を進呈したり、ネギのことで明日菜とやりあっている。「このオジコン!」「あんだなんてシヨタコンじゃない!」などと、言い争う声が聞こえたが、徹は聞こえないふりをした。折角の歓迎会に、無粋な真似はしたくないと思ったのだ。

武闘派の面々も負けてはいない。古 菲や楓は、さかんにどんな武術を嗜んでいるのかと聞いてくるし、一手お手合わせをと言ってくる。相変わらず、超やエヴァは、探るような目つきを向けてくるし、内心涙目の徹であった。

(頼むから気を高めたり、殺気をぶつけたりして挑発しないでくれ...)

遅れてきた真名と刹那はなぜか疲労困憊の様子で、両者は徹と微妙に距離をとっていた。視線で助けを求めると、刹那は顔を赤くして目を背けるし、真名は恨みがましい目で睨み返してくる。

(一体、なにがあったんだ?俺、なんかしたかな...)

それ以外も凄かった。葉加瀬は、徹の髪の毛を採取しようと迫ってくるので、それから逃げ惑わねばならなかった。なぜか、茶々丸も協力していたので、逃げるのは中々大変であった。長谷川は銀髪が染めていない地毛だと理解すると、またも「アリエナイ」とかいいながら、その理由の説明を求めてきた。アルビノだとそれらしい話をでっちあげると、長谷川は「それなら常識の範疇か、いや、待て。アルビノは紅眼で白髪ならともかく、銀髪なんてありえるのか……」と一人唸っていた。そして、麻帆良のパパラッチ『朝倉 和美』は、ここでも絶好調だった。身長・体重から、趣味、はては女性の好みまで、事細かに根掘り葉掘り聞かれるのであった。それらの波がひいていったところで、徹が疲れを吐き出すようなため息がついていると、意外な来客があった。

「先生、さつきはありがとうございます。結局、私のかわりに全部運ばせてしまって、申し訳ないです」

来客は、宮崎のどかであった。彼女の後ろには、『早乙女 ハルナ』と『綾瀬 夕映』の姿もある。

（あれ、歓迎会するときこのトリオは、ネギの方に行ってたはずだが……）

なけなしの原作知識を記憶の底から、引っ張り出してくるが、この状況は明らかに原作と乖離している。まあ、己というイレギュラーがいる以上、そういう事態もありえるのだろうか、いまいち状況がつかめない。

「気にすることはない。あの状況で宮崎に運ばせられないだろう。当然の事をしたただけだ。

それに、実際に宮崎を助けたのは、ネギ先生であって、私ではない。

礼はネギ先生に言っつけてやってくれ」

「ネギ先生には、先程、お礼を言ってきました。先生のお手も煩わせてしまいましたから。それに、かなり心配してくださいましたから」

「私は教師だ。教え子の身を案じるのは当然だろう。感謝する必要はない。

むしろ、詫びねばならない。私が、もっと注意していれば未然に防げたかもしれない……」

それは、徹の本心からの言葉であった。事実、反応が遅れていなければ間に合っていた可能性が高い。

「いえ、そんなことはありません！私がただ勝手に動揺して、不注意で転んだだけですから。

先生は絶対に悪くありません！」

己のミスに凹み、自嘲するようにいう徹の言を、のどかが強い口調で遮った。

温和で奥手な少女だと思っていたので、驚きマジマジとのどかを見つめる徹。

のどかは自分の言の調子が、強いものになったことに自分でも驚いているようで、あたふたしている。

（こんなふうに強く言えるような子だったか？いや、原作知識で人を判断するのはやめようと、詠春さんのときに決めたくないか。漫画のキャラクターではなく、生きた人間として。

外見に似合わず、意外に芯の入った強い子なのかもしれないな）

内心で感嘆しながら、さらにのどかを凝視する徹。あたふたしていたのどかも、凝視されれば、さすがに気づく。思わず目を合わせてしまい、見つめ合うような形になり、のどかの顔は赤く染まっていた。く。
ちなみに、後ろでは、ハルナと夕映が、その様子を見てニヤニヤしていたりする。

「教師であるにもかかわらず、生徒にフォローして貰うとは、私はつくづくなさけないな」

そう言っただけで嘆息する徹。

「あ、そんなつもりじゃあ…」

慌てて否定しようとするのどか。そんな彼女の言を遮ったのは、のどかの頭の上に載せられた徹の手であった。

「分かっている、さっきのは自戒の意味を込めて言ったただけだ。気を使わせてすまん、宮崎。そして、感謝を。ありがとう」

「あつ…」

撫でられるがままになるのどか。頭から湯気が出そうなくらいに、その顔は真っ赤であった。

その後ろで、夕映が「よしっ！」とでもいいかげんな表情をし、ハルナがなぜか徹に向けて親指を立てているのが目に入ったが、彼にはそれが何を意味するか理解できなかった。

これだから、職歴〓彼女いない歴は…。

おまけ（歓迎会后、のどか&夕映&ハルナ）

「ふふーん。のどか、中々いい感じだったんじゃない？」

ニヤニヤしながらのたまうハルナ。

「そうですね、私も悪くない感触だったと思いますよ」

同調するように言う夕映。こちらも顔はニヤニヤしている。

「もう、そんなんじゃないんだから」

ふくれ気味に否定するのどか。

「そのわりには、撫でられるがままだったよね。しかも、嬉しそうだったように見えたよ」

笑を深めてハルナは指摘する。

「そうですね、顔が真っ赤でしたからね」

やはり、同調する夕映。コンビネーションは抜群だ！

「二人して…。もう、本当に違うんだから」

ムキになって否定するのどか。しかし、哀しいかな。必死になって否定すればする程、この手の疑惑は深まるものなのだ。

「しかし、対照的な二人だね。ネギ先生は、直接的な助けで、素直

に礼を受け取ってくれたけど…」

「対する小宮山先生は、間接的な助けで、最初は礼も固辞されましてね」

どこか面白そうに言うハルナに夕映も合わせて言う。

「やっぱり、人生経験の差なのかなー。あの辺りは？」

「そうかもしれないね。小宮山先生と比べると、やはりネギ先生の態度には幼いところが目立ちますし」

「ふむ、見守ってくれる大人の魅力と夢を追いかける子供の魅力って感じかな。迷うところだね、のどか？」

ネギと徹を比較検討するハルナと夕映。やはり、コンビネーションは抜群だ！

「もう、いい加減にしてよー」

半泣きになって、抗議するのどかであった。

ネギにのどかのフラグが立ったのか、それは誰にも分からないことであった。

そこは魔窟、2年A組（後書き）

前書き書いている時点では、まだ60000未満だったのですが、本編書き終わる頃には60000を超えていました。お気に入り登録も400件をこえ、嬉しい限りです。重ねて御礼申し上げます。筆が遅いのは自覚していますが、もう少し計画的に更新できたらなあと思う今日この頃です。

感想ありがとうございます。要望やご指摘は有り難くて頂戴しますので、どんどんしてやって下さい。ただ、全て受け入れられるとは限りませんが、できうる限り参考にさせていただきます。

のどかをどういう立ち位置にするかは、考え中です。多分、原作通りネギに告白させると思いますが、オリ主が暴れまわった挙句、フラグをへし折ってしまう可能性は零ではありません。なんせ、オリ主はフラグ折を虎視眈々と狙っておりますので（笑）ただ、一つ言っておくとすれば、これはオリ主ハーレムものではありません。ネギハーレムはありえるかもしれませんが…。

報告と忠告

午前零時、麻帆良学園の職員寮の一室で、銀と紅に彩られた人ならざる容姿の青年が、水を溜めた古めかしい水盤に向かっていた。青年は、脇に置いてあった小刀で指先を傷つけると、血を一滴水盤へ垂らした。瞬間、水盤は光を放ち、一瞬前までは、青年の顔を写していたというのに、そこに写るものは全く異なるものであった。そこに写ったのは、どこか苦勞性っぽい人の良さそうな壮年の男性であった。

「ご無沙汰しております、詠春様。早速ですが、謹んで御報告申し上げます」

驚くこともなくその姿を認め、青年は口を開いた。

木乃香の護衛に関わる事項、特にネギというある意味最悪な存在の出現、及びその最悪な存在が木乃香と同居することになったことについて報告する。その過程で、詠春の義父である学園長と軽くやりあったことなどを聞き、詠春は苦笑いせざるをえなかった。

「ふむ、ご苦勞様でした。色々大変なようですが、お願いしますよ」

「承知しております」

一通りの報告が終わり、心から労わるようにいう詠春に、何のことでもないという風に短く応える徹。別に詠春が嫌いなわけではない。仕事時の徹は、いつもこんな調子なのであった。詠春もそれを知っているのか、別段気を悪くしたような様子はない。

「それで、実際に木乃香を見て、君はどう思いましたか？」

「はい？木乃香様ですか。少しは話しましたが、そのどうとはどういう意味でしょうか？」

詠春の突然の質問に疑問で返す徹。何を聞かれているのか分からないという顔であった。

その様子を水盤ごしに見ていた詠春は、おかしそくに笑って言った。

「ああ、これは仕事ではなく、私的な疑問ですので、普通に話してくれて結構ですよ。」

それに、仕事としてではなく、君個人としての意見が聞きたいのです」

「はあ、俺個人としての意見ですか？それで一体何を聞きたいのですか？」

訝しげに問う徹に、詠春は笑を深めて言った。

「何、簡単なことです。貴方から見て、木乃香は、私の娘はどうでしたかということですよ。」

貴方が、助力するに値する人でしたか？美人だと思いましたが？」

前者はともかく、後者は親馬鹿丸出しの疑問であった。ここでNOと言おうものなら、水盤ごしでも斬撃が飛んできそうである。具体的には、親馬鹿とお嬢様狂いの護衛から……。はっ、何をするアーツ

「前者の質問には答えかねます。その人となりをしつかり理解したわけではありませんし、何よりその判断をするのは時期早尚かと存じます。」

後者は…、そうですね。美少女だとは思いました。性格も明るくてよろしいんじゃないでしょうか。家事もできるようですし、気立てもよくて、どこか温かみを感じさせる少女でしたね。…（まあ、少しズレてますが）」

空気を読んだのか、小声で言ったところを除けば、絶賛する内容であった。家事云々は、歓迎会の時に、木乃香他数名と料理談義で盛り上がったからである。

詠春は、満面の笑で満足そうに頷くと、再び口を開いた。

「ふむふむ、そうですね。いやいや、私としたことが愚問でしたね。私の娘は最高ですから、君が気に入らないはずないですよね」

（気に入ったとは一言も言っていないのに…。まあ、間違っちゃいないが、なんか最初にあった時より親馬鹿ぶりが凄まじい気がするわ）

一人悦に入る詠春に、内心で呆れながら、その様子を見守る徹であった。

ちなみに、それから30分余り、木乃香が幼い頃からいかに可愛かったか、娘自慢を延々と聞かされたのであった。ご愁傷さまである。

詠春の娘自慢が、一段落したことを見計らって、徹は姿勢を直し、口を挟んだ。

「詠春様、一つ忠告があります。ネギ・スプリングフィールドを、すぐにでも娘さんから遠ざけるべきです。担任であることはかえられなくとも、少なくとも、同居状態は解消させるべきです」

徹の酷く真剣な様子に、詠春も姿勢を正し、真剣にその忠告を吟味する。

「ふむ、なぜですか？ネギ君は、魔法関係者ですから、魔法に気づかれやすくなるかといいたいのですか？」

「いえ、ネギが只の魔法関係者であれば、ここまではいいません。彼は、子供すぎるのです。覚悟もなく、魔法を使うということの意味すらも理解していない。

そして、何より迂闊すぎる」

徹は、冷酷にネギを評すると共に、今日だけであつた彼の起こした騒動及び魔法使用例を詠春に伝えた。来て早々のくしゃみによる突風騒ぎ（生徒に実際あつたかどうかそれとなく聞いた）にはじまり、自身がフォローしなければ違和感を与えていただろう魔法障壁の話のどかの救助での対処（自身のミス含む）、その後の明日菜に対する記憶消去魔法の行使、はては歓迎会での衆人環視の中で堂々と読心術（このときのネギのくまパン発言で、読心術及び記憶消去魔法の使用を確認）を使ったことなどである。

旧友の息子であるから、多少は甘く見るつもりであつた詠春も、見過ごすには目の余るネギの行動に、聞けば聞くほど顔をしかめざるをえない。

「本当にそこまで酷いのですか？」

あまりの行状に、思わず間違いであつて欲しいという希望をこめて、確認するように問う詠春。

「私も間違いであればとは思いますが、残念ながら、全て本当のこ

とです」

それを冷徹にばっさり切り捨てる徹。その表情は酷く苦々しい。

「そうですね…。君がこういったことでは、嘘をつかないのは分かっているつもりですから、真実なのでしょうね。

そこまで酷いとなると、こちらとしても手を打たざるをえませんね。分かりました、義父にそれとなく働きかけます。関西呪術協会としても、魔法隠蔽という面から、圧力をかけます。

内政干渉と文句を言われるかもしれませんが、道理を外しているのは明らかに東というか義父です。

せめて、同居状態は解消して貰いますよ」

詠春も、表情を硬くし、苦いものを感じざるをえなかった。徹の報告にあっただけでも、問題行為のオンパレードである。しかも、一般人に対する記憶消去魔法の行使は、一魔法使いどころか見習いに過ぎない者が判断するものではないし、倫理的にもありえない。加えて、衆人環視の中での魔法使用など、魔法をバラしたらオコジョ刑を科している魔法世界からすれば、断じて許容できるものではない。それは、西の長である詠春も同様である。

「それがいいと思います。私の方からも、学園長に抗議するつもりではありますが、派遣されている立場である私では、効果が薄いでしょうから」

「分かりました、しかと伝えておきます。早急に現状を打破できるように尽力しましょう」

徹の言に、真摯に頷く詠春。その様子を見て、安心したようにほっと息をつく徹。だが、すぐに表情に厳しいものをにじませ、静かに

言う。

「ネギと木乃香様の同居状態が解除されなかった場合、木乃香様に対する魔法関係の隠蔽の依頼はなかったものとさせて頂きます。また、魔法が木乃香様にばれた場合、そこで護衛の任を一旦打ち切らせて頂きます」

この言には詠春も慌てざるをえなかった。

「待つてください！これは義父の招いたことで、木乃香には何の責任もないではありませんか?!」

さすがのように言う詠春を徹は、またしても冷徹に切つて捨てる。

「そんな事は関係ありません。私が受けた依頼は、『一般人 近衛木乃香』の護衛であつて、『魔法使い 近衛木乃香』の護衛ではありません。それをお忘れなきよう。

さらにいうならば、私が今回の依頼を受けたのは、詠春様への助力であると同時に、刹那への友誼に対するものです。ゆえに、現状では、木乃香様自身に助力する理由は御座いません」

これは、徹の立場からすれば当然の言であつた。覚悟も力もない一般人として守るならともかく、魔法使いになり、魔法世界に飛び込んでいく木乃香を守るということは、他人への助力という形でできるものではない。真に本人への助力でなければならぬ。なぜならそれは共に肩を並べて、あるいは背中を預ける相手になるということであるからだ。ゆえに、己が命をかけ、刃を託すに相応しいと信じた者でなくてはならない。封神妖幻流の絶対の掟であり、彼にとつても違えることのできない信念であつた。

そして、現状において、彼は木乃香にそれ程の価値を見出していな

かったのである。彼女はある事から徹にとつても特別な意味を持つ存在ではあるが、それは流派の掟を犯す程のものではない。無論、それはすぐに判断するようなものではない。彼女の人となり、そして生き様を理解して、判断されるものである。さきに彼が時期早尚といったのはそういう意味であつた。

「君の言う通りですね。失礼しました、私としたことが、君に甘えてしまったようです。」

君に見限られないように、私も肝に銘じておきましょう。であれば、尚の事、早急に手を打つ必要がありますね」

徹の厳しい言に、詠春は顔をひきしめ、自身の思考が些か以上に甘かつたことを自覚した。

このとき、最早詠春からは、旧友の息子から魔法バレするならそれもやむなしという考えは消えた。木乃香の安全を考えれば、ネギを近づけて魔法世界に関係させ、徹という凄腕の護衛を失うことはありえない選択肢である。むしろ、ネギは災厄の運び手になりかねない。詠春は、ネギの育つた村がどうなつたかを熟知していたからである。だからといって、詠春は殊更にネギを排除しようとは考えない。彼にとつて、ネギは愛すべき旧友の息子であり、その生い立ちには同情していたからだ。

だが、娘の安全を考えれば、ネギと特別に接近させようとする動きは阻まねばならない。しかも、自然に両者が接近したならともかく、今の状態は、木乃香を魔法世界に引きずり込もうと企む義父の思惑によるものである。これを看過することは、自分の木乃香に平穩に生を全うして欲しいという願いが、いかに脆弱なものに過ぎなかつたかを証明することにほかならない。それは、木乃香を必死に守つてきた刹那、そしてそれに助力する徹への侮辱につながるであろう。

（お義父さん、東と西の融和は私も望むところですが、木乃香のことは話が違います。断固とした対応をとらせて貰いますよ！）

詠春は心を決め、徹に今一度劣いの言葉をかけ、これからもよろしく頼むように言つと、厳しい表情で、自身の机に向かい、筆をとったのだった。

翌日、早朝に詠春が飛ばした式神が運んできた手紙を、関西呪術協会の連絡員が、学園長に届けることになる。その内容は檄文とも言うべきものであったことを記しておく。

学園長が、この対応に頭を悩ませることになったのは言うまでもない。

報告と忠告（後書き）

水盤についての解説

水盤とはいっても、実際は水鏡のようなもの。実は呪具であり、あんまりまっとうなものではない。元は、ある貴族の姫君に横恋慕した野良法師が、姫君の様子を見るために作りあげた。効果は契約した人物の光景を写し出すこと。視覚的な色彩は勿論のこと、声等の音すら再現することが可能である。

結界等の干渉を全く受けない上に、距離も関係ないので、非常に高性能であり、重宝しそうであるが、契約できるのは一人だけであり、使用には設定した使用者の血が必要である為に、簡単には使い辛い。これを詠春から、連絡手段として依頼受領時に与えられた。詠春の持っている物は、徹が契約者で、使用者は詠春。徹の物は、その逆である。

感想ありがとうございます。とても、励みになります。お気に入り登録が500件超えて、驚愕と喜びで一杯です。拙いところは多々あると思いますが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。どのかフラグを、主人公にという声が多くて驚きました。どうするかは考え中です。何人からがハーレムなのでしょうか？

元始天尊（ぬらりひょん）の憂鬱（前書き）

読み返して、自分自身でも整合性がとれていない部分がありましたので、修正しました。未熟者ゆえ、ご容赦ください。

元始天尊（ぬらりひょん）の憂鬱

「うーむ、どうしたもののかのう」

麻帆良学園の一室で、関東の理事にして学園長である『近衛 近右衛門』は、一通の封書を前に頭を悩ませていた。

差出人は、いわずと知れた彼の娘婿である近衛詠春である。封書の内容は、西からの正式な抗議文書である。魔法隠蔽の面から、見習いに過ぎないネギと現状は一般人である木乃香の同居は認め難いというのである。その理由として、ネギが赴任初日にもかかわらず、数々の問題行為をしていたことが挙げられている。その上、詠春は年頃の娘を持つ親として、子供とはいえ、異性の教職員との同居を認めることはできないこと、加えて何のために女子高及び女子寮に入れているのか分からなくなることを理由として、保護者の立場からの抗議文書さえも添付してきたのであった。しかも、今朝一番に西の連絡員から、直接手渡しで届けられ、受け取り確認まできっちりさせられたという念の入用である。ネギと木乃香の同居を阻止しようとする詠春の本気具合が分かるうというものである。

これに本気で困ったのは、近右衛門である。西からの正式な文書である以上、無視はできないし、しかも言い分は正当なものだ。理由として書かれたネギの問題行為（中には近右衛門が把握していないものすらあった）の数々の中には、重い罪にあたるものすらあるのだ。西側の懸念は当然のものといえよう。

さらに、性質が悪いのが、詠春の保護者としての抗議である。詠春は、木乃香の父親であり、親権者である。近右衛門は、祖父であるものの、木乃香に教育や生活に対してどうこう言う権利は本来ない。詠春が、今まで黙認していたから好き放題やれたにすぎない。東の理事にして学園長という立場から、部屋割りを自分の都合のいいよ

うに決定することは簡単なことであつたが、さすがに女子寮に男を
住まわせることを認めさせられるわけではない。

なぜなら、麻帆良学園は関東の魔法使いの一大拠点だが、同時に教
育機関でもあるからだ。ゆえに、常識はずれの無法がまかり通るわ
けではない。実際、表の教職員の何人かが、子供とはいえ女子寮に
男の教職員を住まわせるのは問題ではないかと抗議してきた事実が
ある。それでも近右衛門は、ネギが子供であることを前面に打ち出
し、ネギと木乃香の同居という無理を押し通したのだ。にもかかわ
らず、ここにきて同室の木乃香の親である詠春が正式に抗議してき
てしまった。これでは、ネギの女子寮における居住を認めるわけに
はいかなくなるのは自明の理である。たとえ祖父である自分が認め
たとしても、意味はない。先も述べたように、本来近右衛門に権利
はないのだから。付け加えるならば、近右衛門が、「社会人（大人）
」であると同時に、都合の良いところでは「子供」であると言う論
理を矛盾した論理を押し通したのに対し、詠春の抗議は、「教職員
という社会人として扱うならば、首尾一貫して社会人として対応す
るべきである」という至極真っ当なものであり、他の保護者たちも
諸手を挙げて賛同するであろうこと、表裏を問わず、教職員達も基
本的に賛成であろうことも、近右衛門の苦悩をより深いものとした。

駄目押しというべきなのが、西の連絡員から、直接手渡しで届けら
れたことであり、受け取り確認をとられてしまったことであつた。
朝一で連絡員から直接という形に、近右衛門は余程の重要事項だと思
い、大して警戒もせず受け取ってしまった上、確認のサインをし
てしまった。まさか、詠春がこんな手を打つてこようとは、さしも
の近右衛門も夢想だにしていなかったのであつたからだ。その結果、
今更、届いていない&見ていないという言い訳は通用しない上に、
そんなことをすれば、西からの正式な書状を無視したことになり、
責任を追及されることはもちろん、西と東の融和を進めるどころか

新たな火種を提供することになりかねない事態となってしまうた。最早、この封書の内容を知らぬ存ぜぬで通すことは不可能なのである。そして、その抗議をかわすことのできる方策も皆無であった。

「わしとした事が、打つ手をあやまつたわい。婿殿に報せた後に、彼に報せるべきじゃった。そうすれば、彼も黙認とはいえ、雇い主が認めていることに抗議することはなかったであろうに…。」
いや、そもその間違いは彼を甘く見すぎたことじゃな…。」

近右衛門は、そう一人ごちながら、一人の青年に思い浮かべた。銀と紅に彩られた人ならざる容姿の青年を。

（わしとしたことが、完全に見誤ったわい。木乃香の護衛はもちろん、存分にこき使ってやろうと思つて、ネギ君の補佐につけたが、まさかこんな形で裏目に出ようとは…。）

そう、近右衛門は侮っていたのだ。仕事に徹しているように見えるが、所詮は駆け引きもできぬ青臭い生意気な若造にすぎないと。しかし、それが間違いであったことを、まざまざと見せ付けられることになった。自分の思惑を阻んだ上に、失策を悟らせるという形で。

「それにしても、どうやってここまで正確な情報を得たのじゃ？情報の流出には最大限の注意を払つておるはず。認識阻害に加え各種の結界が、特に魔法に関する情報が正確に伝わることを阻むはずじゃが…。まさか、独自の連絡手段でも持つておるのか?!」

麻帆良学園は、その特色上、学園外ではありえない技術や物が生まれ易い。それらは貴重な麻帆良学園の財源であるから、当然情報の流出には、最大限の配慮をしている。魔法関係の情報などは、元々隠匿されるべきものであるから、尚更だ。認識阻害をはじめ、幾重

にも結界を張り巡らせている。これは、魔法を隠匿することはもちろん、もし学園内で魔法使いが不祥事を起こしても、近右衛門の生存で処理することが可能であることを意味している。事実、近右衛門は今までそうしてきた。でなければ、学園内にあの最高クラスの賞金首にして、闇の魔法使いである『闇の福音』をおいておけるはずがない。そういった事情があったから、近右衛門は情報の管理には絶対的な自信をもっていたのだ。ネギの問題行為の数々を放置したのも、自分の思惑に適い、かつ外に漏れる心配など露程もしていなかったからだ。さらに、今回の詠春の抗議は、正確な情報を元に行っているのは明らかであり、近右衛門はそれがどのような手段で伝えられたのか、把握できていなかったのであるから。ゆえに、近右衛門は驚愕し苦悩せざるをえなかった。

実のところ、誰が連絡したか(どのような経路で伝わったのか)については、分かっていた。詠春が送り込んだ護衛である青年であろうことは。なにせ、彼以外で自分の意思に反して西に連絡するような者は存在しないからだ。他に刹那や龍宮は、可能性がないわけではないが、刹那は基本的に近右衛門の指揮下にあるし、龍宮は金にならないことはしないだろうから、可能性としては限りなく低いといつていいだろう。そう、公然と近右衛門の指揮下に入ること拒否したあの小賢しい青年以外は…。

「やってくれるものじゃ…。まんまとしてやられたわい。じゃが、このままでは終わらんぞ！」

近右衛門は一人、己以外いない学園長室で叫んだのだった。

学園長の雄叫びなど露程も知らない当の徹は、初授業の真っ最中で

あった。ネギの授業中には、委員長と明日菜の諍いや、またしても魔力制御の失敗による突風騒ぎなどがあつたりしたが、それに比べれば、彼の授業は平穩そのものであつた。まあ、居眠りしかけた少女達に容赦なくチョークが飛び、それでも寝てしまった猛者には、特別な宿題をプレゼントしていたりしていたが、些細な事である。

「神楽坂、日本最初の武士による政権、及び日本最初の武家法令の名を答えよ」

バカレンジャーであつても、徹は容赦しない。教師である時の彼は、基本的に公平で公正であるうと心がけているのだ。ゆえにできる生徒も、できない生徒も、皆等しくあてていくようにしている。授業において、生徒に答えさせるのは重要である。集中力を保つためもあるし、ただ聞いているだけではなく考えさせるということができるからだ。そんなわけで、今回は明日菜の番だつたわけであるが…。

「はい。ええと政権は鎌倉幕府で…、法令は分かりません」

「法令は、御成敗式目だ。これは、執権であつた北条泰時が中心となつて制定し、武家諸法度が作られる江戸時代まで続いた重要なものだ。忘れずに覚えておけ」

返事をして立つたはいいが、案の定答えられない明日菜であつた。バカレッドの称号は伊達じゃないなと思ひながら、答を言い座らせる。

(いやあ、結構メジャーな問題だと思つのだが。これは、ネギだけじゃなくて、俺も補習を行わないといけなくなるかもしれないな…)

原作知識から、そういえば期末テストで補習を発端とする騒ぎがあ

ったのを思い出し、内心で苦笑する。

（それにしても、このクラスはつくづく異常だな。個々人の学力の差がありすぎだろ。超や葉加瀬は言うに及ばず、雪広とかも相当だし、かと言って下を見れば、バカレンジャーの面々は底辺ブツ切りだしなあ。なんつうアンバランスなクラスだ。今まで、学力最下位独走してきたみたいだが、普通、こういうのって、均等になるようにクラス分けするんじゃないのかよ。

まあ、クラスにいる面子の裏に関わりのある人間&魔力のある人間の割合を考えれば、意図してこのクラスのメンバーが集められたのは明らかだな。絶対、あのクソジジイの仕業に違いない）

徹がそう思うのも仕方のないことであつた。なんせ、2-Aには、凄まじいタレントとか、強烈な個性とかの持ち主ばかりだつたからである。やはり、原作を読んだのと実際に見るのとは大違いのようで、徹は、想像以上の衝撃を受けたのだった。

（それにしても、雪広はネギの授業の時とは、態度が違いすぎだし、明日菜はあてると睨んでくるし、夕映はやればできる子なのにやらないし、チヨーククぶつけても平気で居眠りする奴はいるし、手のことんだ悪戯をする双子はいるし、なんて混沌としたクラスだ…）

内心で、あまりの混沌さに呆れながら、板書していく。日本人には見えない容姿だが、それでも字はうまい。呪符書きのために、必死に書道の練習をしていたからだ。だが、授業の終了を告げるチャイムがなると同時に早々に片付けを始める生徒達を見ると、実際に何人が板書をノートに写していくだろうか。それを思うと徹は少し切なくなつた。なんだか、教師の悲哀が分かつたような気がした。

何はともあれ、授業が終わつたのでこちらも片付けようと名簿等を

纏めっていると、のどかを筆頭に夕映とハルナの三人組がこちらに近寄ってきた。

「む、どうした？授業で何か分かりにくいところでもあったか？」

「い、いえ。そんなことはありません、分かりやすい授業でした。

あ、あの、先生、もし良ければ昼食をご一緒しませんか？」

教師として当然の間に、予想外の誘いで返すのどか。流石の徹もこれには驚かざるをえない。

（あれ？なんかおかしくねえ？なんでいきなり昼食の誘い？のどかは、もっと消極的のはず！というか、なんで俺に？）

内心が疑問符で一杯となり、予想だにしない事態に動揺する徹であった。苦労して、どうにか平静を保ちながら、疑問を呈す。

「突然、どうした？なんで俺に？」

平静に返したつもりだったが、動揺から「私」ではなく素の「俺」になってしまっている。まだまだつめが甘い様である。その様子を見て、ニヤリとする外野ことハルナ&夕映。

「昨日、私の代わりに本を運んでもらいましたし、私を保健室まで運んでもらいました。

せめてものお礼にと思って、お弁当作ってきたんですが、食べていただけないでしょうか？」

（はいー？！なぜにいきなり弁当イベントですか？原作でも、こんなことはなかったはず）

のどかの返答にさらに動揺する徹。歓迎会での一件で、ネギに対してはともかく、少なくとも己に対しては終わったことだと思っただけに、その動揺は大きい。

「ちょっと待て、宮崎。なんでいきなり弁当なんだ？お礼のレベルが高すぎやしないか？」

動揺のあまりそんなことすら言ってしまう徹。さらに笑を深めるハルナ&夕映。

「昨日の歓迎会で、たまには人の作ったものが食べたいとおっしゃってましたから。ご迷惑でしたか？」

迷惑だったかと、顔を俯かせるのどか。どうやら、料理談義で盛り上がったときに、戯れに言った言葉を、彼女は聞いていたようだ。

（あー、言ったような気がするわ……。軽率だったな。あれは弁当作ってくれというふりだと考えられても、文句は言えないよな。

うわー、どないしょ。これで断るとか鬼畜だろ。ていうか、常識的にありえないだろ）

己の軽率な言動を悔やみつつ、のどかの誘いをどうするべきか考える。

（教師としては、断るべきなんだろうな。でもまあ、お礼という形であるので、一応名分はたつだろう。それに昼食を共にするくらいならば、セーフだろう。夕映とハルナも一緒だろうから、二人きりというわけでもなし。それに何より、彼女はネギに気があるはずだから、別段問題はないか）

一人脳内会議で、答を弾き出す。それが正解かどうかは別として…。

「ふむ、せっかく作ってきてくれたんだ。そういうことなら、ありがたく頂こう」

「本当ですか！ありがとうございます」

徹の答に、俯き加減であった顔を上げ、華が咲いたかのように微笑むのどか。徹を見上げるような形になり、前髪に隠されたのどかの顔があらわになる。

（うわ、マジで可愛いわ、この娘。実際に見ると衝撃が凄いわ）

思わずまじまじと見つめてしまう徹。それくらい魅力的な笑顔であった。何気に見つめ合う形になってしまい、顔を赤くするのどか。その様子を見て、楽しむハルナ&夕映。

（や、やばっ。思わず凝視しちまったよ！この空気はまずい。明らかに教師と生徒の間で流れていい空気じゃねえ！落ち着け、俺！Be cool, Be cool……。なんでもいいからとにかく話して、この空気を払拭せねば！）

「宮崎、前髪をのばしているのには、何かこだわりでもあるのか？とりあえず、思いつき前髪の話題をふってみる徹。さらに墓穴を掘ることにつながるとは露知らずに。」

「い、いえ、特にこだわりがあるわけではありませんが…。どうしてそんな事を？」

「いや、せっかく可愛い顔してるのに、隠すのは勿体無いと思ってな」

(ちよつ、おま？！ていうか、俺、何言ってるんだよ！)

動揺が続いていたのか、思わず本音で話してしまう徹。

「え、そ、そんな…。あ、ありがとうございます」

平静に戻りかけていた顔を、先程よりさらに赤くして俯いてしまうのどか。どうでもいいが、最早、教師と生徒の会話ではない。口説いているといわれても、仕方なさそうな感じである。その証拠に、ハルナ&夕映が、とてもイイ笑顔で、徹に対してサムズアップしている。

結局、徹はこの後も動揺が収まらず、本音ダダ漏れの会話を繰り広げ、色々墓穴をほることになるのだった。ちなみに、のどかのお弁当は、中々のお味だったそう。

「やってくれたのう」

放課後、学園長から呼び出しを受けて、学園長室に入った徹を迎えたのは、近右衛門の剣呑な一言であった。木乃香とネギの同居の件で、詠春とは別に己からも抗議するつもりで、意を決して学園長室へ来た徹は、何のことが分からずにキョトンとしてしまう。さしもの徹も、まさか詠春がこれ程早く手を打つとは思ってもいなかった。無理もないことであった。

「しらばつくれんでもよい。どういう手段を用いたかは知らぬが、君が嬪殿に報告したであろうことは分かっとる。ネギ君と木乃香の同居を、ここまで強硬に阻まれようとは予想だにしなかったわい。君がここまでやる男であることもな！」

どうやら、近右衛門の目には、それが演技であるように映ったようで、詠春からの封書を示し、語気を強めて吐き捨てるように言う。これには、徹も困った。今の言と封書から、詠春が手を打ったことは、彼にも理解できた。同時に、それを前提に考えれば、先の態度が演技と見られても仕方のないことも。

(むう、初手でしくじった。意図した事ではないとはいえ、交渉する相手を怒らせてどうするんだよ。

それにしても、詠春さんがこんなにも早く手を打つとは思わなかった。昨日の今日だというのにな。そんなに昨日の報告&忠告は、衝撃だったのか？まあ、こちらとしてはありがたい限りだが、狸爺の様子からして、余程の内容だったんだろうな。狸爺をしても断る余地がないような。

さて、どうしたものかな…。これ以上、狸爺を刺激するのは避けたいから、改めて俺から抗議するのは、却下だな。ここは、とりあえず狸爺の出方を見るところでしょう)

「失礼しました。まさか、すでに詠春様から書状が来ているとは思いませんでしたもので」

「ふん、君の差金であるとは認めるのじゃな？」

「ええ、私が御報告申し上げました」

「なぜ、ネギ君の素行についてまで報告を？君の任務には関係ある

まい。勝手に木乃香との同居を決めたわしへの意趣返しか？」

意識すると、「テメエの仕事には関係ねえんだから、余計なことチクってんじゃねえよ。喧嘩売ってんのか？」である。

「お忘れですか？私の任務には、木乃香様に魔法がバレることをできるだけ防ぐことも含まれているのですよ。それに、純粋に護衛の面からも、英雄の息子なんて狙われやすい肩書を持つ魔法使いが同居するともなれば、その素行にも注意し報告するのは当然でしょう。ネギが木乃香様と同居しなければ、報告の必要はなかったでしょうが、何の相談もなく、勝手に同居をお決めになられたのは、学園長だったと記憶しておりますが」

意識すると、「ボケてんじゃねえよ。最初からそういう話だったろうが。あんな迂闊で面倒なガキを押し付けられた以上、それぐらい当たり前だろ。大体、そう仕向けたのはあんだらうが」である。徹も、負けてはいない。

「ぐぬぬぬ」

「はっ！」

どうしようもない正論に、近右衛門は呻き声を漏らし、徹はそれをはなで笑ってみせる。両者の視線が絡み合い、不可視の火花が散る。その視線たるや、視線だけで相手を射殺せそうなものであった。実は同席していたすっかり空気がタカミチが、その迫力と空気におされ、嫌な汗をかいていたりしていたが、当の本人達は気にもとめていない。

（やっぱり、狸爺といえども、無理を通しているという自覚はあつ

たんだな。

どうしようもない正論には、弱いし反論できないわけだ。ここで勝負をかけるか)

「では、改めて即刻同居状態の解消を求めます。今日中、若しくは遅くとも明日中に。私が見た所、まだ職員寮には空きがありましたから、十分可能でしょう。返答は如何に？」

「ぬっつ、どうしてもか？」

「どうしてもです、こればかりは譲れませんね」

何とか、ネギとの同居状態を保ちたい近右衛門は、一縷の望みをかけて問うが、徹は容赦なく即答する。

再び両者の視線がぶつかり合うが、今度は早々に近右衛門が目を逸らした。そして、項垂れると意気消沈した様子で、呟いた。

「仕方あるまい。わしの負けじゃ、ネギ君にはおって連絡しておく。それでいいのじゃろう？」

「はい、勿論です。ですが、どうせなら、今ここで連絡していただけませんか？今なら、高畑先生に証人になって頂けますし」

この要求は、近右衛門に青筋を浮かばせ、今まで以内も同然の空気であったタカミチを慌てさせた。

(この若造が！調子に乗りおって！じゃが、これでは連絡を遅らせるといふ手段も取れぬ。ええい、抜け目のない嫌な奴じゃ！)

(今までそっちのけで話していたのに、今更、僕を巻き込まないで

欲しいな。学園長、本気で頭にきているようだし、まったく勘弁してくれよ）」

「ぬぐぐぐぐ。安心せい、きっちり今日中に連絡しておくわい。主の要求通り、今日中、遅くとも明日には同居状態を解消させよう。それでよかろう！」

苦虫を噛み潰したような渋面で、近右衛門は答えた。

「ええ、結構です。急なお願いを聞いて頂き、ありがとうございます」

この上ない笑顔で、礼を言う徹。「要求」ではなく、「お願い」に変えてるあたりは嫌味だろうか。だとすれば、本当にいい度胸をしている。

「言ってくれるわい。良い顔しよって、余計に腹立たしいわい！もう、ここに用はなかるう。早々に立ち去れい！」

怒り心頭で退室を促す近右衛門。

「は、承知しました。それでは失礼します」

礼儀正しく一礼し、退室しようとする徹。その背中に近右衛門は、一矢報いんと言葉を投げかける。

「これで終わったとは思わないことじゃ。わしは諦めんぞ！」

「受けて立ちますよ、いつでもどうぞ。私は、自身の仕事に最善を尽くします」

負け惜しみつばい近右衛門の言葉を、余裕を含んだ答を返し去っていく徹。

余談であるが、この後、まんまとしてやられたあまりの怒りと悔しさに、近右衛門はブチ切れて、タカミチが八つ当たりされることになる。それは半端なものでは無かったことを記しておこう。

おまけ（放課後のトリオ＜ハルナ＆のどか&夕映＞）

「今日の先生は、傑作だったね。案外、色恋沙汰には慣れてないのかもね」

可笑しそうにのたまうハルナ。流石はラブ臭を嗅ぎ取る女、鋭い指摘である。

「そうですね、予想外の事態に弱いように見受けられました」

同調しつつ、自分の見解を述べる夕映。

「迷惑にならなくて良かった」

一人安心しているのは、のどかである。

「今日のところの軍配はどっちかな？夕映はどう思う？」

ハルナは今日の一連の出来事を思い出しながら、そんな事を問う。

「そうですね、ネギ先生ですかね。子供らしからぬ自然な褒め方で、ポイントが高いと思いますよ。それに、小宮山先生は売である大人

な態度が、動揺で所々崩れていましたから」

本人が聞けば、きつと「そんなものを売にした覚えはない！」と反論するだろうが、夕映としては、ネギに軍配が上がるようだ。

「えー、あのギャップがいいんじゃない！分かってないなあ、夕映は。ねえ、のどか？」

ハルナとしては、徹に軍配が上がるようだ。肝心ののどかに尋ねるハルナだが…。

「え、ええと…」

何とも言い難い表情で困るのどか。のどかとしては、素顔を可愛いと褒め、隠さない方がいいと言ってくれた徹も、それに従い、髪型を変えたのどかにすっかり気づき、今のほうがいいと言ってくれたネギも甲乙付け難かったのだった。

（小宮山先生は、普段見せない態度で色々新鮮だったし、美味しそうにお弁当を平らげてくれた。

ネギ先生は、自然な感じで親切丁寧に対応してくれた）

のどかが、結局どちらに軍配を上げたのか、それは3人しか知らない秘密である。

元始天尊（ぬらりひょん）の憂鬱（後書き）

感想ありがとうございます。励みになって助かります。

主人公は、精神年齢三十路の割には、色恋沙汰（アタックされる側）は苦手です。彼は、そういう感情の対象となる相手に対しては、その感情の動きには敏感なのですが、それ以外の人の感情には基本的に疎かったりします。なんせ、前世では3枚目か4枚目くらいの平凡な容姿で、アタックする側がほとんどだったのでから無理もないのですが。のどかの場合、ネギに惚れ込んでいると思いついてるので、意識的に対象外としてるので、余計にです。

汝、無知にして覚悟なき者（前書き）

前話の後半部分を大幅修正しています。修正前だと、この話とは繋がらないので、3月5日午前3時以前に前話を読まれた方は、先に前話を読み直す事をお勧めします。お手数をおかしますが、よろしくお願いいたします。

汝、無知にして覚悟なき者

「徹さん、お話があります。少し時間を頂けないでしょうか？」

学園長に同居状態の解消認めさせた翌日の放課後、職員室で帰り支度を整えていると、複雑な表情でネギが徹を訪ねてきた。後ろには明日菜の姿もある。拾中八九、同居の件で文句をいいにきたのだろうと徹はあたりをつけた。

「話？後ろの神楽坂も、もしかして関わりのある話か？」

「はい」「そうよ」

それぞれ肯定するネギと明日菜。

「そうか、分かった。しかし、こんなところである話でもあるまい。長くなりそうだし場所をかえよう」

徹はそういうと席を立ち、ネギ達がついてくるかも確かめずに職員室を出た。勿論、ネギと明日菜は、慌ててその背を追ったのだが。

徹が足を止めたのは、学園の屋上だった。そして、ネギと明日菜以外誰もいない事を確認すると、懐から4枚の呪符を取り出し、それを放り投げた。4枚の呪符はそれぞれ四辺に飛ぶと簡易的な結界を形成した。効果は、結界内の音の遮蔽及び結界内への侵入の禁止である。

明日菜がその様子を見て、目をみはっているが、徹は気にもかけず

話を進める。

「さて、これで余計な外野の乱入はない。遠慮なく話してくれ」

「わざわざ結界をはるなんて、念がいつてますね。別に魔法関係の話ではないので、ここまでしなくてもいいんじゃないやありませんか？明日菜さんもいますし…」

ネギは少し大袈裟すぎると思ったのだろう。それに、隠さなければならぬ人物にはとつくにばれているが、明日菜に魔法バレした事は、ネギ本人は隠しているつもりなのだ。ある意味、当然の言である。

徹は、少し迷っていたが、学園長とほぼ敵対したような現状では、徹底的にやったほうが良いと判断した。ゆえに、明日菜に魔法バレしていることを知っていることも、隠すつもりはないし、学園長の横槍も許す気はない。その為の結界である。

「神楽坂を気にする必要はないだろう。君のミスで、すでに魔法のことはしられてしまっているのだから」

「そ、それは…」

まさか、知られているとは思っていなかったのだろう。ネギは動揺をあらわにしていた。

「安心しろ、別に俺にとっては、そんなことはどうでもいい。まあ、教師として多々言いたいことはあるが…。学園長も認識しているが、そのことでお前を処分する気はないようだ」

「え、学園長にもですか?!」

徹どころか、学園長にも知られていると聞いて、ますます動揺するネギ。それを見て、正直徹は呆れた。

（魔法使いの見習い、しかも子供の隠蔽など見抜けない奴が、学園長なんてやれるわけないだろうが。

大体、タカミチが来るタイミングが一々絶妙だったことをおかしいとは思わないのかよ。大方、あれはネギのフォローをそれとなくするために陰ながら見守っていたのだろう。自主的にか、学園長の差金かは知らんがな）

「あれで隠せていたと思う方がおかしい。君と神楽坂の様子を見る者が見れば、一目瞭然だ」

「うう、そうでしたか」

シユンとなるネギ。

「ちよつと、そんな言い方しなくてもいいじゃない！」

頂垂れるネギを哀れに思ったのか、明日菜が文句をつけてくる。だが、徹はこれにも容赦はしない。

「黙れ、小娘。部外者は口を挟まないでもらおうか。大体、客観的事実を言っただけで、非難したつもりはない」

「うぐ…」

徹の冷徹な物言いに押し黙る明日菜。それでも、不満げな顔を隠さないのは、さすがである。

「さて、いい加減に本題に入ろうか。ネギ、俺に話とは何だ？」

用件は見当がついているが、あえて問う。一旦、場に流れる空気をかえる為に必要なことであつたからだ。もつとも、これからもつと重苦しい空気になるであろうことから、あまり意味のないことであることも徹は理解していた。徹に促されネギは顔を上げ、真っ直ぐに徹の目を見て口を開いた。

「そうでした。話というのは他でもありません。僕が明日菜さん達と同居すること認めて欲しいんです。

学園長から聞かされました。徹さんからの要求で、同居を解消することになつたと。ついては、今日中に職員寮に引越すようにと。なんでですか?!なんで、徹さんが反対するんですか?!てつきり、力になってくれると思つていたのに……」

ネギの表情はわけがわからないといった感じで、裏切られたと思つているであろうことが、伺い知れた。なるほど、職員室での複雑な表情は、これに起因していたわけである。

(うわ、あの狸爺、俺が要求したつてことをバラしやがつた。最低だな、あの糞爺。

それにしても、想像以上に甘つたれたガキだな、こいつ。原作読んだ時もあったが、現実にはそれ以上だな。ネカネさんから、俺に頼れども言われたか?それでも助けてやれることと、やれないことがあるわ。んじゃあまあ、厳しい現実つてやつを教えるとしても……)

「勘違いするな、ネギ。俺は、女子寮に住む生徒の保護者から抗議があつたために、そういう要求をしたに過ぎない。俺の一存ではな

いから、俺が認めたところで意味はない」

実際には逆なのだが、現実には詠春の手紙から徹の要求という形になったので、外形的に言えば嘘は言っていない。

「生徒の保護者から…、そうだったんですか。それじゃあ、もう…」

徹が認めたところで意味はないことに、意気消沈するネギ。諦めかけるが、そこで学園長が、徹に認めさせることができれば、同居状態を継続させることは可能だといっていたことを思い出す。

「でも、学園長がおっしゃっていました。徹さんが認めてくれれば、同居を継続することは可能だった。

つまり、それは徹さんなら、その保護者の方を説得できるということとではありませんか？」

(ほう、さすがは天才少年。精神的には幼くても、頭は回るようだ)

徹は内心で感嘆するが、手を緩めるつもりはない。むしろ、ここで完膚無きまでに叩きのめすつもりであった。

「よく気づいたな。だが、俺はそれをするつもりはないぞ」

「何ですか?!」「何ですよ?!」

冷酷な言に抗議するネギと明日菜だったが、徹には無意味である。

「当たり前だろ。元々、神楽坂達との同居は、住居が用意できていないという暫定措置だったはず。ならば、職員寮に空きができた以上、そこに移るのは当然だろう。」

大体、子供とはいえ、女子寮に男性教員が住むこと自体が異常なんだ。それを解消するのは、何もおかしいことはない」

「…」「そ、それは…でも！」

当然の帰結に、押し黙る明日菜。彼女は今さらながら、自分が反対したとき、確かにそういう話であったことを思い出していた。一方で、それでも食い下がろうとするネギであったが、徹がその言を遮る。

「大体、同居しなければならぬ理由でもあるのか？」

これは、当然の疑問である。学園長の意図は理解できるが、ネギがなぜ同居に固執するのか徹には理解できなかったからである。

「そ、それは…」

言い淀むネギであったが、迷った末に口を開く。

「実は、僕、一人で寝るのが嫌なんです！故郷では、お姉ちゃんと一緒に寝てましたから。」

だからお願いです。どうにか認めてもらえないでしょうか？」

あまりの答に徹は愕然とした。本気で呆れ果てた。

（おいおい、本気かよ…。そっぴや、原作で明日菜に抱きついて寝てる描写があったが…。同居によって固執する理由が、よりもよって子供のわがままかよ。うわ、本気で救えないわ）

「それは本気で言っているのか？」

一縷の望みをかけて問うが、ネギは頷いて肯定してしまう。徹は頭をふるりと冷酷に言い放った。

「ネギ・スプリングフィールド、お前には失望した」

「え、何ですか?!」

突然の言葉に、ネギは動揺する。

「なんでだと?!そんなことも分からんか…。ならば、問う。ネギ・スプリングフィールド、お前は何者だ？」

「え、僕はネギ・スプリングフィールドで、見習いの魔法使いで、今は教師「それだ!」で…」

徹の間に、名前と自分の立場を挙げていくネギ。『教師』で徹が口を挟む。

「教師であることが何だっというんですか？」

「常識を考えろ、ネギ・スプリングフィールド。どこの世界の男性教師が、男子禁制の女子寮に女生徒と同居し、同衾する?」

徹の当然の言に、ネギは押し黙る。

「でも、それはネギが子供だからで…」

「それは理由にならない。なぜなら、魔法使いの修行とはいえ、ネ

ギは教師としてこの地にいるのだ。

ただの子供として来たならば、俺も同居には反対しない。だが、ネギは見習いとはいえ魔法使いであり、教師だ。教師として扱われるならば、それ相応の義務を果たさねばならない」

そう、権利には義務もつきまとうものなのである。ネギが教師として働く以上、教師として扱われるのは当然なのだ。子供だからというのは、何の理由にもなりはしない。プラベートはともかく、公的には教師なのだから。

「…」「そ、それはそうかもしれないけど…」

ますます、暗く頂垂れ、言葉もないネギ。明日菜も、何とかいいすがろうとするが、反論が出てこない。

「それに魔法関係者としても、同居は断固反対だ。

赴任初日に神楽坂に魔法の存在を知られた君には、魔法の秘匿性を保つためにも、一般人との同居など到底認めることはできない。

ネギ、君は本当に魔法が秘匿されなければならないことの意味を理解しているか？魔法を使うことに覚悟があるのか？」

さらに、魔法関係者として追討ちをかける徹。もうやめて、ネギのライフはゼロよ！

「そ、それは。でも、あれはのどかさんを助けるためで…」

ぐうの音もでない徹の言に、どうにか言い訳しようとするネギ。だが、それすらも徹は切って捨てる。

「宮崎の救助の為に魔法を使ったことは理解している。なるほど、

それ自体は立派な行為だ。

だが、お前はその時、周りを確認したか？人の目を意識したか？魔法を知られるリスクを考えたか？魔法を使ったことの責任をとる覚悟はあったか？

お前は、己の安っぽい正義感の為に、独善的に魔法を使ったのではないか？

「あううう」

「そんなの、咄嗟に判断できる訳ないじゃない！」

自分が考えもしなかったことを指摘され、凹むネギ。明日菜は、気丈にも反論してくるが。

「神楽坂、お前の言うとおり、今のネギにそれを求めるのは酷だろう。見習いなだからな。」

しかし、それが咄嗟に判断できないならば、魔法など使うべきではないのだ」

「それじゃあ、本屋ちゃんを助けなければ良かったていうの?!」

徹の言に激昂する明日菜。徹は少しも揺るがず、冷静に対応する。

「そうは言っていない。魔法は便利で強力なものだ。それを使うならば、相応の覚悟と義務を負わなければならないという話をしているのだ。もし、あの時俺が言った事を考慮した上で実行し、お前にバレてしまったのなら、俺もとやかく言う気はない。」

だが、現実はずう。ネギはお前に見られることなど、想定もしていなかった。その上、その後の対応も最悪だ。神楽坂、お前が、魔法についてネギを問い詰めたとき、ネギは何をしようとした？」

「それは、記憶を…?!」

明日菜は、そこで何かに気づいたようで、顔を青ざめさせた。

「そうだ、お前の記憶を消し、自分の違反行為がなかったことにしようとしたのだ。」

それは、ネギには魔法を使ったことに対して、なんの覚悟も無かった事の証左に他ならない。

神楽坂、お前だって記憶というものの重要さが分からないわけではなからう？それをあろうことが、ネギは自分の都合で、自分の勝手な判断でお前の記憶を奪おうとした。それは許されることか？

それがどれ程の恐怖か、お前は理解していたか、ネギ？オコジヨ刑が嫌で、それから逃れることしか、すなわち自分のことしか考えていな方ではないか？」

さしもの明日菜も、最早言葉もない。聞けば聞くほど、ネギの未熟さや無責任さがあらわになり、かばうことが難しくなっていく。ネギは、己の罪を未熟さを幼さを赤裸々にされ、愕然とした。

「理解したようだな。ネギの一般人との同居が一分も認められる可能性がないことを。」

これだけ言っても、同居を望むなら教師を辞めるんだな」

「それは、魔法使いの修行をやめることになります。そんなことできるわけないじゃないですか！

僕は、父さんみたいな「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になるんです！」

泣き叫ぶように言うネギ。だが、最後の最後まで、徹は容赦ない。

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」だと、笑わせるな。今のお前が、どの面下げてそれを言う。今のお前は、わがままをいつているだけのただのガキだ。

ネギ・スプリングフィールド、汝、無知にして覚悟なき者よ。今のお前には、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」どころか、魔法使いたる資格すらない。

悪いことは言わない、荷物をまとめて故郷に帰れ。魔法ではなく、その情け無い精神を修行して出直してこい！」

それは、弾効にして断罪の言葉。今のネギを否定する絶望の言葉であった。

「ぼ、僕は……」

反論もできずに、その場にその顔を蒼白にしてうずくまるネギ。徹の迫力に、明日菜も何も言うことができない。徹は、それをつまらないようなものを見る目で、一瞥すると、結界を解除し、屋上を後にするのだった。

ちなみに、原作ではこの日起こるはずだった惚れ薬騒動は、結局起こらなかった。なぜなら、同居解消を聞かされ、それで頭が一杯だったネギには、惚れ薬を作る余裕などなかったのだ。

おまけ（その頃の学園長室）

「あやつも、ネギ君に直接泣きつかれれば、認めざるをえまい。頼もしい援軍もいることじゃなしな」

茶をすすりながら、人の悪い笑みをこぼす近右衛門だった。まさか、

この時ネギが徹に散々に痛いところをつかれまくって論破された拳
句、ぐうの音も出ない状態になって泣かされているとは、知る由も
ない。

「しかし、彼がそんなに甘い人間ですかね？僕は、ネギ君が泣かさ
れていないか心配ですよ」

タカミチは、心配して言う。まさにその通りなのであるが、やはり
知る由もない。

「ああいう輩は、女子供には甘い相場が決まっておる。大丈夫じ
ゃよ」

プライベートならば、確かに当たっているのだが、魔法使いにして
教師であるネギを、徹は子供として見ていない事を理解していない。
さらに、仕事時の彼は冷徹にして冷酷であり、敵であれば女子供で
あっても、刃を向けた以上は躊躇いもなく殺せる男であることを。
この後、10歳児とは思えないくらい、暗い影を背負ったネギが、
故郷に帰りますと言いにきて、近右衛門とタカミチは二人がかりで
慰め、思いとどまらせる事になる。
近右衛門は、またしても見誤ったと後悔し、タカミチは、件の青年
の恐ろしさに身震いした。

汝、無知にして覚悟なき者（後書き）

感想ありがとうございます。時に、原作ありきを前提にして、思いつくままに書いていることがあるので、整合性や首尾一貫性を失っていることがあります。自分でも、気を付けますが、おかしいと思えばご指摘ください。

なんだか、ネギ虐めの回となってしまう。最初は、学園長と和解させて、ネギとも融和させていこうかと思っていたのですが、主人公のキャラクターからすると、それはありえないなと思い、このような事になりました。原作で、なぜネギの行動が放置され、許容されているのか疑問でしたので、そこら辺を思い切りついでにしてみました。ネギ好きの方には申し訳ありません。ただ、ネギも成長させて行くつもりなので、これからの展開次第では、肩を並べて戦うこともあるかもしれません。

妖かしの凶刃（前書き）

ユニークアクセスが100000を超えました。お気に入り登録も700件近く、初めて書いているだけに、色々拙い本作を読んで頂き、心より御礼申し上げます。

いい加減、外伝書がないと思っっているのですが、相変わらず本編が全然進まないために自粛しております。

こんな私ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

妖かしの凶刃

徹とネギが屋上で話してから、数日がたった。結局、為す術も無く論破され、かつ自身の罪と甘えを自覚させられたネギは、同居解消を受け入れた。翌日から今日まで、徹とは必要最少限の会話しかせず、その会話のときさえ、目を合わせようとしなかった。徹は、若干のいらだちは感じたものの、己の要求はおったのだからと、干渉しなかった。

だが、周りから見れば限界だったようである。その証左とも言うべきか、今、徹の前には、委員長こと雪広を筆頭に、『那波 千鶴』、『村上 夏美』、『大河内 アキラ』の4名が何か言いたげに立っていた。授業を終えて片付けをしているところに、逃げ道を塞ぐように両側からである。

（ああ、拾中八九ネギの件だよなあ。はあ、あの坊やは、どんだけ面倒かけさせてくれるんだか）

正直、聞きたくは無かったが、教師として聞かざるをえまい。徹は、問うた。

「どうした4人揃って？何か言いたげだな」

「しらばくれないで欲しいですわ、ネギ先生の件です」

やはりというべきか、最初に口を開いたのは雪広であった。

（亡くした弟さんの代償行為だか、なんだか知らんが、仕事にまでそれを持ちださんで欲しいものだな）

「ネギがどうしたというのだ？ネギのことがなんで、私に関係するのだ？」

「まだ、とぼけるおつもりですか？！わからないなら、説明して差し上げます。」

ここ数日のネギ先生の憔悴ぶりは、見てるこっちが辛くなるほどです。あの可愛らしいお顔に、目にクマまで作って、不憫でなりませんわ。」

その原因は、憔悴が始まってから、目を合わそうともしない小宮山先生にあることは明らかです。時に先生を恐怖しているように見えますし」

雪広の言に、なるほど、よく見ているものだど、徹は感心した。ただのシヨタコンではないらしい。」

「よく見ているものだ。だが、私には関係の無いことだな」

「関係ないですって？！」

「あやか、落ち着いて」

徹の言葉に激昂する雪広。横にいた那波がいきり立つ雪広を宥めるも、その視線は厳しい。村上も大河内も同様であったが、徹はどこ吹く風であった。

「ああ、関係ないな。確かに、ネギが憔悴している原因は、私の言にあるのだろう。それは認めよう。」

だが、それをお前達に責められるいわれはないな。私は、教師として、同僚として、言うべきことをいったに過ぎないのだからな」

「教師として？」

それまでだんまりだった大河内が、口を開く。徹の言葉をどうも吟味しているようだ。

「そうだ、教師として当然のこと、必要なことを説いたにすぎない」

「それは何のことですか？」

「お前達には、いう必要のないことだ。お前達が知るべきことでもない」

大河内の疑問に即答し、雪広の疑問は即座に切って捨てる。大河内は自身の思考に沈み、雪広はまだ不満げである。村上と那波は、風向きが変わった事を理解したのか、聞き役に徹している。

「先生は、まだ子供なのに酷だとは思われませんか？」

「雪広、それは、本気で聞いているのか？だとしたら、お前もまだまだ子供だな」

「わ、私が子供?! どういう意味ですか?!」

雪広の感情的な訴えに徹は容赦しない。

「お前が社会の仕組みを理解していないから、子供だというんだ。雪広、ならばお前に聞くが、お前が企業の経営者であったとして、従業員としての能力を持つ子供を雇ったとする。まあ、仮定の話だ、実際には、そんなことは許されないだろうが。」

お前は当然、その雇った子供に給料を払わねばならない。だが、同

時に子供は、従業員として働かねばならない。それは分かるな？」

「はい、それがネギ先生と何の関係が…」

「ネギの件も同じことだ。あいつは実習生とはいえ、教師として、この地にいるんだ。ゆえに、私は、教師としての責務を果たせといつたに過ぎない。それは、給料という対価を与えられている社会人である以上、ネギの義務であり、子供であることなど、何のいいわけにもならない。それができないというなら、子供として扱って欲しいなら、教師をやめるほかない」

「……」

徹の厳しい言に沈黙する4人。雪広は、未だ不満があるのか、悔しそうな顔をしているが、納得はしているようだ。他の3人も、自分達が口出しすべきことではないことを悟ったようだ。

「納得してもらえたようで、何よりだ。

この件は、ネギ自身が自分で折合をつけるほかないのだ。教師としての自分と、個人としての自分とのな。どこまでが甘えで、どこまでが自分がなすべきことなのか、それを考え、結論を出さねばならない。

だから、お前達が心配してるのは分かるから、悪いとは思うが、そのことについては聞いてくれるな」

「先生のお考えは理解しましたわ。でも、元気づけることくらいは、許して頂けますよね？」

雪広が、これくらいはせめてといった感じで聞いてくる。

「ああ、勿論だ。厳しいことを言ったが、私はネギに漬れて欲しい
と思っっているわけではない。」

自分の置かれている立場と責務を理解して欲しいだけだ。そういう
ことなら、どんどんやってやれ。

なんだかんだ言っても、子供に過ぎないのだからな。うん？そう言
えば、少し待て……」

徹は、雪広の言葉を満面の笑みで肯定し、むしろ推奨してやると、
何かを思い出したかのように懐を探る。その為、彼の笑顔を間近で
初めて見た4人が、揃って顔を紅潮させたのには、気付かなかつた。

「おお、あつた、あつた。ほれ、これをやるから、ネギを誘って飯
でも食べてこい」

徹がそういって、差し出したのは、超包子の無料クーポン券であつ
た。歓迎会の時に、料理談義で盛り上がった超と四葉から、プレゼ
ントされたものである。10枚のうち、4枚は使ってしまった
から、残りは6枚。同室の雪広に村上と那波、大河内と彼女の友人
そして肝心のネギを合わせれば6人。ちょうどいい数であつた。

「わっ、これ超さんとこのやつだ！」

笑顔の衝撃からいち早く立ち直り、喜色の声を上げたのは、意外に
も村上であつた。大人になった小太郎がタイプなあたり、ちよつと
やんちゃ系が好きなのかもしれない。であれば、徹は好みとは正反
対だろう。ある意味、納得である。

「本当ですわね、よろしいんですか、先生？」

次に立ち直つたのは、雪広である。さすがは、シヨタコン。徹など

アウトオブ眼中なのだろう。

「ああ、十分堪能させてもらったし、次は自費で行くことにするさ。遠慮なく持っていけ」

「貴重なものでしょうにすいません」

お次は、那波である。あやかフリークたる彼女にとっても、徹は対象外だろう。

「……………ありがとうございます」

最後は、動揺冷めやらぬ様子で礼を言う大河内である。彼女は未だ衝撃が抜けきっていないようで、頬が赤いままである。他の3人は違い、完全に見とれていたようだ。ギャップ萌というやつだろうか？

そんなこんなで、その日クラスを揺るがした騒動は終わったのだ。た。

ちなみに、その日の放課後、雪広、村上、那波、木乃香、明日菜、ネギが超包子で、仲良く歓談していたそうである（大河内は、部活があると言って、明日菜と木乃香に券を譲った）。まあ、雪広と明日菜は相変わらずだったようだが……。おかげで、ネギも元気を取り戻したようである。

時は移って、その夜。徹は一人、森の拓けた場所に佇んでいた。昼間とは違い、スーツではなく漆黒の長衣を身に纏い、その手には、教科書ではなく彼の相棒である妖刀『大蛇』が握られ、その目は生徒ではなく獲物である侵入者に向けられている。

彼は、その場から紫紺の邪眼を使って、侵入者の数及び距離を測っていたのだ。このエリアにいるのは彼一人である。今夜の侵入者は、大挙してやってきたようで、多方面からの侵入が確認されていた。その為、今回は徹にもお鉢が回ってきたのである。木乃香の住む女子寮にもっとも近いエリアということで、徹と刹那がその守りを志願したのだが、刹那は龍宮とペアで別の地域に回され、彼一人で担当することになったのだが…。

（絶対、あの狸爺、俺を監視してやがるな。遙か後方に気配が二つあるから、俺がしくじった時の保険だな。保険つけるくらいなら、刹那と組ませてくれれば良かったものを…。

まあ、結構やりたい放題というか、あの爺さんの目論見を潰したからな。これくらいの意趣返しは、ある意味当然か。

さて、どうしたものかな？あまり連中に手の内は見せたくないんだが…。この数と範囲となると、些か厳しい。まあ、ここならやってやれないことはないか。んじゃあまあ、行くとするか）

徹は、戦闘の方針を決めると、敵がひしめく森へと飛び込んだのだ。つた。

ところかわって、学園長室。机に置かれた水晶玉には、森へと入る徹の姿が映されていた。徹の予想通り、案の定、近右衛門は徹を監視していた。隣には、同じように水晶を見つめるタカミチとエヴァの姿がある。

「さて、どれ程のものか。名にし負う封神妖幻流、見せてもらおうとしようではないか」

「僕も、興味があります。あの詠春さんに、この若さで凄腕と言われる彼の手並、どれ程のものは是非みてみたいですね」

「あの小僧がどれ程のものか、精々楽しませてもらいたものだな」

見定めんとする近右衛門と、純粋な興味から、徹の実力をはかろうとするタカミチとエヴァ。

水晶玉から3人の見守る？中で、戦いの火蓋は切って落とされようとしていた。

徹は、森に入つてすぐに、こちらに向かつて飛んでくる使鬼を認める。地面を蹴つて、瞬時に間合に捕らえると大蛇を一閃し、両断する。大蛇は真紅の光を纏い妖しく輝いているが、斬つた瞬間に輝きをましたようであった。

それはさておき、それを皮切りに次から次へと湧いてくる使鬼達。幸い、高位の者は認められないが、この数は中々厄介である。徹は動きまわつて、居場所を特定させず、一匹または一人を切り裂き、数を削つていく。しかし、使役者は、質より数を優先したのか、明らかに削るより、増えるスピードの方が速かつた。そして、ついに徹は囲まれてしまう。奇しくもそこは、先程、彼自身が侵入者を測つていた森の拓けた場所であった。

どうしたものかと徹が思索していると、森の中から拍手の音が聞こえてきた。

「いやいや、大したものだよ。たった一人で、僕の使鬼達を相手にここまで戦えるんだから。流石は、東の重要拠点である麻帆良学園だ。いい人材を揃えている」

声の主は、左右に徹を囲む使鬼とは格の違う使鬼を従え、こちらに歩いてきた。中々端正な顔立ちだが、その顔は愉悦と加虐の喜びにあふれ、邪悪そのものである。

「貴方が、この群れの主ですか？面倒なことしてくれるものです。さっさとお帰り願えませんかね？」

徹は、大蛇を地面に突き刺し、仕事モードで対応する。

「この状況で、そんな口がきけるとは大したものだ。見るに君はただ若い。どうだろう？私につかないかね？この襲撃がうまくいったあかつきには、相応の報酬を与えるぞ」

徹の態度を、覚悟を決めた、あるいは強がりだと思っただろう。群れの主はそんな事をいう。

「馬鹿馬鹿しい、寝言は寝てから言ってもらえませんか？大体、何か勘違いしてませんか？私がそちらについたところで、この学園の襲撃がうまくいくわけがない。私以上の実力者が、後には控えているのですから。それに貴方は、ここで死ぬんですよ。わざわざ姿を現してくれるとは愚かにも程があります。死人や愚者に仕えるつもりはありませんので、悪しからず」

「き、貴様！せっかく僕が誘ってやったのに、何たる言い草だ！万死に値するぞ！

もういい、お前などいらぬ。黄泉路へと旅立つがいい。やれ！」

徹の言葉に群れの主は激昂して、命を下す。周囲を囲む使鬼の数は低位のものとはいえ、百を超える。徹の命は一巻の終わりかと思われたが、周囲を囲む使鬼達がおかしい。いずれも動かないのである。

いや、動けないのであった。これに焦ったのは、群れの主である。

「お前達、何をしている?!早く奴を殺せ!」

もし、彼が冷静に注意深く使鬼達を観察していたなら気づいたであろう。徹が突き刺した大蛇を中心に広がる真紅に輝く蜘蛛の巣と使鬼達を縛る妖糸に。

「無駄ですよ。貴方の使鬼は尽く我が手の内です」

「ば、馬鹿な。こんなことが?!」

「封神妖幻流 妖呪縛土蜘蛛。これに一度囚われたら、その妖気・魔力を吸い尽くされるまで、逃れること能わず。低位の使鬼では微動だにすることさえできませんよ」

徹の言に、群れの主は、何かに気づいたかのように徹を見る。

「封神妖幻流だと、東についていたのか?!なぜだ、貴様の流派は、頑なに中立を貫いていたではないか!」

「別に中立を貫いたんじゃないやなくて、剣を捧げてもいいと思える人がいなかったただけなんですけどね。」

それに、東についたわけでもありません。今、ここにいるのは単なる傭兵としてですよ」

「傭兵だと?!ならば倍、いや3倍払う。だから私に「寝言は寝てから言え」といったはずですよ……」

「傭兵にだって、仁義ってものがあるんですよ。そんな簡単に雇い

主を裏切るわけないでしょう。

そもそも、貴方みたいな愚者に雇われるなんて、死んでもごめんです。

さて、それではそろそろ死んでください」

徹の無情な宣告に、群れの主は俯くと決然と顔を上げた。

「死ぬのは貴様だ、愚か者め！」

彼とて、無駄に話に興じていたわけではない。自身の切り札とも言うべき、左右に侍らせた前鬼と後鬼は周囲の使鬼とは格が違う。時間をかければ、この呪縛を解くことも不可能ではないと踏んだのだ。果たして、それは成功した。彼の前鬼たる『牛鬼』と後鬼たる『馬頭鬼』は見事に呪縛を打ち破ってみせた。但し、全てが終わった瞬間に…。

その時にはもう、何時の間にか徹の手に収まっていた大蛇が、主の心臓を貫いていたのだ。主を救わんと殺到するが、徹にその攻撃が届く前に、力の供給が一気に減少したせいで、再び妖系に囚われる。

「狙いは悪くなかった。だが、こちらとてそんなことは先刻承知しているさ。いつでも殺せたからこそ、お前の時間稼ぎに付き合ったんだからな。」

お前は、自分から姿を現した時点で負けてたんだよ。俺の敷いた罠に自ら踏み込んできた時点でな」

死出の手向けに、最後まで素の口調で種明かししてやる徹。

「ごほつ、最初から、ここに誘い込むつもりだったのか…。ごほつ、囲まれたのすら、お前の手の内だったということか」

「御名答」

咳き込み鮮血を吐き出しながら、自分が手の内で踊らされていたことを悟る群れの主。

「化物め…」

怨嗟をこめてそう吐き捨てると、彼は息絶えた。徹は、前鬼・後鬼を含む使鬼達が消えたことを確認し、確実に死んだことを確かめると、周囲を睥睨し、もう敵がいなくても確認する。そこでようやく大蛇を抜いた。最後の最後まで剣を抜かなかったのは、援軍が来た時の対処と、治療術による回復を不可能にするためだったのだ。それを支えに立っていた彼は、傷口から大量の血を噴き出し倒れる。返り血がべつたりと顔につくが、徹は気にもとめない。

「じゃあ、後片付けといきますか。酒吞は朱天、その焰は全てを燃やす。鬼道 朱焰！」

紅の妖炎が死体を包み、骨も残さず火葬する。酒吞童子を源泉とする妖かしの焰は、全てを焼き尽くすのだ。大蛇を一振りし、血潮を吹き飛ばし、肩に担ぐ。

「学園長、どうせ見ているんでしょう。任務完了しました。これより帰投します」

そういつて学園へと戻る徹の顔には、悔恨も悲哀もない。ただ、なすべきことをした。彼にとってこれはそういうことであった。

「監視に気づいていたことといい、あの数を手玉にとったことといい、中々、見所のある奴じゃないか。あれは、いい手駒になりそう
だ」

愉快そうに言うのは、『闇の福音』ことエヴァである。どうやら、徹の容赦ない殺しぶりが、お気に召したようだ。

「話には聞いていたけど、想像以上だ。正直、危険だね彼は」

タカミチは、あの年で殺すことに躊躇いがない青年に危惧を覚える。

「うむ、正直ここまでとは思わなんだ。まだ、手の内を隠しているようじゃしな」

近右衛門は、それなりの使い手であった侵入者を圧倒した実力に瞳目し、同時にまだ手の内を隠しているであろうことを悟っていた。

「なんだ、タカミチ。貴様、あの程度で危険とはどういう見だ？」

「あの年で、普通に殺せてしまうのは危険だよ。あれはよくない」

「ふん、私はあの年の頃には、もう人を殺していたがな」

タカミチの危惧に不機嫌そうに答えるエヴァ。空気が澱み、重くなる。部屋の温度が下がったようにすら感じられる。

「ええい、やめい。こんなところで言い争ったところで、結論など出ぬ。」

今は、あやつが思った以上に使えることが分かっただけで、十分じ

や。無論、タカミチ君の指摘した危険性も心得ておこう」

近右衛門の言で、その場はお開きとなった。ただ、3者3様に『小宮山 徹』という人物が脳裏に刻まれることになるのだった。

おまけ（部屋での3人＜雪広&村上&那波＞）

「ねえ、あやか。私、聞きたいことがあるの。答えてもらえる？」

雪広に問う那波。

「なんですの、千鶴さん？私に分かることなら構いませんわよ」

軽い感じでした承する雪広。

「あやか、いつから趣味がノーマルになったの？」

「何を言っていますの、千鶴さん。わけがわかりませんわ」

何のことかさっぱりという雪広。だが、ここで傍観していた村上が参戦する。

「ほら、小宮山先生の笑顔にみとれて、頬を染めてたじゃない。ちづ姉が言っているのは、あれのことでしょ？」

「そう、その通りよ。どうなの、あやか？」

詰め寄る那波。

「そ、そんなことはありませんわ！私は、ネギ先生一筋ですもの！あ、あれは何かの間違いです、気の迷いです」

「そうよね、あやか。良かった、私のあやかが、私の知らないうちに変わってしまったのかと思ったわ」

慌てて弁解する雪広と安心する那波。だが、自分でシヨタコンを宣言するのはいかなものか。

「あれ、でも、ちづ姉の方が見とれていた時間は長かったような……爆弾を投下する村上。命知らずの行為である。」

「そういえば……、そうでしたわね。そこのところ、どうなんですの、千鶴さん！」

「あらあら、そんな心配しなくても、私はあやか一筋に決まってるじゃない！」

夏美ちゃんはいけない子ね、そんなことはなかったでしょう？」

雪広の疑問に即答し、笑顔で村上にプレッシャーをかける那波。

「そうだね、ちづ姉の言う通り、私の思い違いだったよ、うん」

プレッシャーに屈し、頷くほかない村上であったとさ。

妖かしの凶刃（後書き）

封神妖幻流術技解説

『妖呪縛土蜘蛛』：妖術ともいうべき呪縛術。妖気で紡いだ糸で敵を絡め捕る。妖や魔に属する者は、これに囚われると、妖気・魔力そのものを吸い尽くされるまで逃れることはできないため、それを根幹とする存在は消滅するほかない。ただ、中位クラス以上（下位でも上位の存在なら可能）の存在なら、無理やり、これを破ることは十分可能であり、一時的な足止めにはならない。

封神妖幻流にしては、珍しい設置型の術であり、今回のように罠のようにして使うのが、本来の使い方。自動で作動するわけではなく、起動キーとなる術式を設置した術式に打ち込むことで作動する。今回は、大蛇で起動キーを打ち込んだわけである。

ちなみに、気を扱える人間に対しては効果が薄く、気による身体強化ができるレベルなら、容易に脱出が可能。ただ、魔法使いは魔力を奪われるので、それ以上のスピードで強化して脱出するか、強大な魔力で過負荷を与えて術式自体を破壊するほかない。

多くの感想ありがとうございます。嬉しくて、少し頑張ってみました。ちよっとだけ、ネギ復活。まだまだ、苦難の道が続きますが、ネギ君には是非頑張っただけ欲しいものです。

明日菜の教え（前書き）

高等部とのやり取りとかをはじめ、会話部分は正確に憶えていないため、ほぼオリジナルになっていると思います。ご了承ください。

明日菜の教え

「僕、先生なのに、明日菜さんをはじめとした生徒の皆さんに、元気づけてもらっちゃって情け無いや。

徹さんの言うように、今の僕は教師なんだ。もう少ししっかしなないと」

委員長をはじめとした生徒達と超包子で食事をした翌朝、彼女等の尽力あって、ネギは大分元気を取り戻していた。彼も男の子であるから、プライドはあるし人一倍負けず嫌いであるからして、奮起するのも当然であった。まあ、そのせいかもしれないもより早く起きてしまったのは、ご愛嬌といったところか。

それよりも、昨日の食事会の主体は委員長であったのだが、ネギの中では明日菜が一番のようである。雪広、ご愁傷さまである。

「でも、本当に明日菜さんには迷惑かけたし、お世話になった。何か、恩返しをしたいなあ…。

うん？そういえば、明日菜さんはアルバイトで新聞配達をしてるって言ってたな」

一人、明日菜のことに思いを馳せるネギであったが、そんな彼の目に自身の宝物というべき、父から与えられた杖の姿が映る。

「杖？そうだ！」

何か良い事を思いついたというばかりに、一人得心したネギは杖を手で急いで部屋を出たのだった。

そんな頃、大量の朝刊を抱えながら小走りの明日菜は、少しは元気になったかなと、最近できた弟分に思いを馳せていた。数日前の徹との話し合いでは、彼女自身少なからず衝撃を受け気分を害したが、後に冷静になって考えれば、徹の言い分はまさにその通りで、自分がいかに軽く考えていたかを自覚せざるをえなかった。

明日菜は、学校の勉強はできないが、馬鹿ではない。道理は弁えているし、常識人である。頭ごなしに徹の言葉を否定する程、子供ではないのである。故に、現在の彼女は、非があるのはネギの方であり、自分は本来被害者であることを理解していた。それでも、子供嫌いを公言しているにも関わらず、明日菜の心はネギを心配する姉のような感情が大半をしめ、ネギを見捨てるという選択肢がないあたり、彼女が相当のお人好しであるうことは間違いなかった。そんな彼女の前に件の少年が現れたのはその時であった。こともあろうに少年は、杖に乗って空を飛んで現れたのだ。さしもの彼女も呆れざるをえなかった。

「おはようございます！明日菜さん」

「ああ、おは…じゃないでしょー！何やってんのよ、あんたは！」
元気一杯に子供らしい挨拶を空中からするネギに、挨拶を返しかけた明日菜だったが、ネギの行動に思わず怒りの叫びをあげずにはいられなかった。

「ほえ？何怒ってるんですか、明日菜さん？僕、何かしましたか？」
なぜ怒鳴られたか理解できず、呆然とするネギ。

「何かしたかって、あんたねえ…。はあ、いいから、降りてきなさ

い

何も分かっていないネギに呆れ嘆息する明日菜。

（ああ、小宮山先生が言ったことの意味、ようやく本当に理解できた気がする）

明日菜の言葉に従い、顔いっぱい疑問符を浮かべたまま降りてくるネギをみながら、明日菜は実感を持って理解する。ネギの危うさを。

「ねえ、ネギ。あんた、自分が何していたか理解してる？」

「え？僕は、ただ明日菜さんへの恩返しとして、杖で空を飛んで明日菜さんの新聞配達を手伝おうと思っただけですけど？」

「あんたねえ、この前小宮山先生に言われたこと忘れたの？！言うてたじゃない、魔法は秘匿されるものだって。覚悟もないのに使うべきじゃないって」

「で、でもでも。僕は魔法使いです。良い事をするためなら、魔法を使うのは当然じゃないですか？！」

ここにネギと徹の決定的な差異があった。ネギにとって、魔法は日常的なものであり、日常的にはもちろんのこと、人助けのためなら使つて当然のものであった。そこへいくと、徹の覚悟がなければ使つなという言は理解できない。何より、人助けの為にも使つてはいけないというのは、ネギの目指す「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」の精神からして、承服できるものではなかった。

ゆえに、実のところネギは、徹の言の内、教師としての部分はとも

かく、魔法云々についてはあまり納得していなかったし理解もしていなかったのである。そして今回の行動も、明日菜にはもう魔法がばれているのだから、魔法を使って手助けしても問題ないという軽率な考えから導かれたものであった。

「あなた、本当に何も分かっていないのね。いくら早朝とはいえ、人の目が全くないわけじゃないのよ?!

あなた、見られるリスクとか、見られたらその対処とか、考えているの?」

「そ、それは…。きつと大丈夫ですよ!」

明日菜の当然の指摘に対し、何の根拠もない楽観論を述べるネギ。

「あなた、見られたらまたその人の記憶を消そうとするの?私の時は失敗したから許したけど、今度そんなことしたら許さないからね!」

ネギの為にも言うておくべきだと思い、ダメ押しを加える明日菜。未だ明日菜に大きく依存しているネギにとって、それは凄まじい衝撃であった。

「明日菜さん、僕はただ…」

「ああ、もういいから。せっかく元気になったのにうじうじしないでよ。空飛ばなくても、私の手伝いはできるでしょ。ほら、手伝ってくれるんでしょう?」

押し黙り、シユンとなるネギ。明日菜はしょうがないなあと思いながらも、ネギの手をひいてやる。なんだかんだいっても、ネギは子

供なのだ。事実、あれだけ厳しいこと言っていた徹だって、裏から手を回して、ネギを元氣付けるのに一役買っていたではないか。ネギには内緒で委員長からその話を聞いた明日菜と木乃香は、間接的で遠回しな助けであることに、素直じゃないと笑をこぼしたものである。ちなみにその話を聞くまで、明日菜は徹をあいっ呼ばわりであったことは、余談である。

「朝は失敗しちゃった。人の目とか全然気にしてなかった。明日菜さんに恩返しすることだけ考えてたからかな。それだけで頭がいっぱいになっちゃたんだな。反省しないと。うーん、人目につかなくて、明日菜さんに恩返しのできる魔法なんてあつたかな？」

怒られても、恩返しを忘れていないその律儀さと健気さは評価できるのだが、魔法で恩返しというところで、根本的に間違えていることに気づかないネギ少年であつた。

一人職員室の自分の机で頭を悩ませるネギであつたが、ふと思いついたかのように自分の荷物を漁り始める。

「何かないかな？何かあつたと思うんだけど…。あつ、あつた！これはお爺ちゃんのくれた『魔法の素丸薬（大人用）』！これさえあれば…！」

試験管のようなものに入った丸薬を見つめながら、意気込むネギ。

「明日菜さん、待っててくださいよー！」

その日の放課後、明日菜が帰り支度をして教室からであると、ホームルームを終えて出てったはずのネギがそこにいた。どうやら、明日菜を待っていたようで、明日菜の姿を認めると、一直線に明日菜の方へ向かってくる。

「あらネギ、あんたどうしたのよ？」

「明日菜さん、できたんですよ！」

「何ができたってどういうのよ？」

何やら自信満々の様子で意気込むネギに、疑問符を返す明日菜。ネギは、周りを見回すと明日菜に耳打ちする。どうやら、人目を気にする位の分別はできたようである。

「惚れ薬ですよ！明日菜さん、いったたじゃないですか。これならタカミチどころか、ありとあらゆる異性にモテモテです！」

「あんた忘れたの？ 必要ないっていったじゃない」

「で、でも、これを使えばタカミチだって…」

いらないうという明日菜に、有用性を説くネギ。ネギはようやく恩返しできると思っているので、必死だ。

「そんなもの使っても、振り向かせても何の意味もないから、私は私の力で頑張ってみるって言ったでしょ！ 大体、あんたが教えてくれたんじゃない。あんたのお爺さんの言葉「わしらの魔法は万能じ

やない。わずかな勇気が本当の魔法じゃよ」だっけ？あんだ、その意味を全く理解していないじゃない」

「ぼ、僕はそんなこと…?!」

大好きな祖父の教えを持ち出され、しかも自分がそれを全く理解していないといわれ、ネギは愕然とする。徹の時の比ではない。なにせ、なんだかんだいつても常に自分の力になってくれた明日菜からの言である。その威力たるや、ネカネによく似た容姿もあいまって凄まじいものであった。

結果、たちまちネギの顔が崩れていく。今にも泣き出しそうである。どうかすでに涙が滲んでいる。

「うっ、僕は、僕はー！」

叫ぶようにして、惚れ薬を抱えたまま、その場を立ち去るネギ。呆然とその様子を明日菜は見るほかなかった。

「神楽坂、感謝する。」

あれは、本来お前ではなく、魔法使いとしての先達である俺達が言わねばならないことだった」

「あ、いえ、小宮山先生、聞いていたんですか？立ち聞きは、趣味が悪いんじゃないですか！」

突然横合いからかけられた声に、そちらを向くとそこには素直じゃない副担任がいた。言葉からして、間違いなく立ち聞きしていたであろうから、最低限の礼儀は保ったが思わず口調がきつくなる。

「それは悪いとは思っている。ただ、今日のネギは様子がちがった

ので少し気になってな。

許せよ、これでも一応ネギの補佐を命じられていてな。前科がある以上、全くノータッチというわけにもいかなくてな。念の為、立ち聞きさせて貰ったわけだ。

だが、もう少し用心しろよ。最初こそ耳打ちだったが、後は普通に話していただく。用心して、お前達が話に入った時点で、人払いと隠蔽の境界をはっていなかったら、周りにまる聞こえになるところだったぞ」

そう言われて、あつと思う明日菜。そう言えば、何もわかっていないネギに呆れて、途中から語気が強まって、普通に話していたことに気づいたからだ。

「まあ、それは防いだから安心しろ。それにお前は、そんなマイナスを帳消しにする以上のことをしてくれたんだ。気に病む必要はない」

「私は、ただ思ったことを言っただけで…」

徹の思いがけない好評価に、困惑する明日菜。彼女は別段、特別なことをしたつもりではないのだから。

「そうだとしても、あれはいずれ誰かが言わねばならないことだった。そして、ネギにとって、他の誰が言うよりも効果があったろう」

「そんなことはないと思うけど？」

「そんなことがあるのさ。神楽坂、聞いていないか？お前は、ネギの姉とも言うべき人物によく似ているんだよ。無論それだけではなく、お前があいつの世話をよく焼いてやったからこそだろうが、お

前に最初からあんなに依存していたのは、そういう面もあるのだらう」

「そういえば、ベッドに潜り込んできた時に…」

そういえばと思いつく明日菜であったが、その内容はまずかるう。

「…今のは聞かなかったことにしておく。そんなことより、私からの心ばかりの礼だ」

徹は、懐から包みを取り出すとそれを明日菜の手のひらに載せた。

「何この包み？…いい匂いね、これは苺？」

「そうだ、私特製のいちご大福だ。よければ食べてやってくれ。後で、感想を聞かせてもらえるとありがたい」

「え？先生が作ったの？」

以外な答に目を丸くする明日菜。だが、彼女は知らなかった。自分が触れてはいけないものに触れたことを…。

「うむ。何を隠そう、私の趣味は和菓子作りでな。味の方は心配要らないぞ。こう見えても、そこらの茶店には負けん味を出せる自信がある。そもそも、和菓子とは……」（以下延々と和菓子の話）」

胸を張ってそんなことをたまう徹に、「はあ」と相槌を打つ明日菜。しかも、徹は止まらない。そこから興がのつたのか、延々と和菓子の素晴らしさについて30分も熱弁するのだった。（人払いと隠蔽の結界は未だ作用していた為に、誰も助けてくれなかった。南

無合掌)

明日菜が精神的に疲労したのは言うまでもない。

翌朝、ネギはこれ以上ないという程に沈んでいた。なにせ徹だけではなく、こちらで最も頼りとしていた明日菜からも、同じようなことを言われたからである。しかも、自分が慕う祖父の教えまで持ち出されたのだ。その精神的なダメージはなみのものではなかった。目覚ましが起床時間を告げるが、ネギは布団を被ったまま、動こうとしない。

(時間だ、起きなきゃ。でも、またあんなことを言われたら…！)

起きて学校へ行かねばならないと思うと、白銀と真紅に彩られた青年の冷徹な顔が浮かび、その厳しい言を思い出し、どうしようもなく身が竦む。明日菜にまで言われたことで、その言の正しさをネギ自身認めざるをえなくなっていたのであるから、尚更である。

(学校行きたくないな…。どうせ、僕が行ったって…！)

完全に後ろ向きになり、いじけるネギ。こういう精神的な幼さは年相応である。

そんな暗いネガティブな思考を打ち破ったのは、玄関から聞こえてきた力強い声であった。

「ネギー、起きてるかー？飯は食ったかー？」

そんな問と共に現れたのは、ネギをこんな状態にした原因となった張本人である徹であった。

「徹さん?!なんでここに?」

ネギは予想だにしない事態に困惑する。ネギからしてみれば、何しに来たんだこいつとといった感じだろう。あれだけ言いたい放題言われたのだから、当然であろう。

「おう、起きてたか。良かった良かった。野郎を優しく起こしてやる趣味はないんでな。

ほら、早く顔を洗ってこい。飯が冷めてしまう」

ネギの困惑などどこ吹く風で、そんなことを言う徹。なんとというか、マイペースである。

「え、ご飯?なんで徹さんが?」

ますます困惑を深めるネギ。その混乱は極みに達している。

「なに、これでも一応人生の先輩だし、元同郷の誼だ。飯ぐらいは力になってやりたいと思っただけ」

こんなこと言っている徹であるが、これには多分に打算も含まれている。

今まで、生活面ではネカネに甘えてきたネギは、いきなり自活しろといわれても、当然不可能なのであった。その為、不憫に思った明日菜と木乃香が、食事については一緒にとうとうと提案してくれ、ネギはこれに甘えていたわけである。

しかし、徹にとっては頭の痛い話である。何の為に同居を解消させたかわからなくなってしまうからだ。食事を共にする以上、一緒にいる時間は長くなるし、心理的距離も近くなる。それらは、容易に

ネギを発信源とした木乃香に対する魔法バレを容易にする。それも、解消させるにしても、明日菜と木乃香の自主的な行動であるので、強くは言えない。また、そのくらいなら、許容する者も少なくないだろう。

そこで、悩んだ末に徹は一計を案じた。ならば己が、ネギの食事の世話をすればいいと考えたのである。ネギとの同居も選択肢として考えたが、徹としてもネギに知られたくない話はあるし、誰に気兼ねすることのないプライベートスペースを確保しておきたかった。それに、生活面で完全にフォローするのは、今後のネギの為にならないと考えたのであった。結果、同居は選択肢から除外された。苦心の末、弾き出された答が、朝食・昼食（弁当）を世話してやり、夕食は自前で調達させるというものであった。夕食について排除したのは、ネギの自立を促すためと、己の生活や仕事への介入を防ぐためにどうしても必要なことであった。この場合、夕食については、木乃香達に頼る可能性を排除できないが、少しでも機会を削れるのは悪いことではない。

まあ、彼自身、のどかの弁当の件で、歓迎会での発言を弁当作ってくれというフリだと思われたと勝手に思い込んでいるので、それを払拭する為に昼食には弁当を作っただけとこうと考えていたので、ちょうどいい機会であったりもする。この弁当が、思いもよらぬ火種となるのが、神ならぬ身には知り得ぬことであった。

「徹さん、ぼ、僕は…」

思いもよらぬ好意の申し出（ネギの主観）にさらに動揺し、一方的に悪感情を抱いていた自分が、ひどく子供であるように感じられ、落ち込むネギ。微妙に涙ぐんですらいる。

「ああ、もう。朝っぱらから辛気くさい顔してるんじゃない！」ムグツ？！」若者は元気に挨拶し、脇目もふらず飯をひたすらかきこめ！」

徹は、そんなネギを叱咤すると問答無用で立たせ、食卓へとつかせる。同時に、少年の口にトーストを放り込み、食べることを促す。ネギは必死になって、それを咀嚼すると、改めて尋ねる。

「徹さん、どうしてですか？なぜこんなことを？僕に教師としての自覚を義務を果たせといったのは、貴方なのに…」

「だからこそさ。だが、逆にお前が子供であることもまた事実。何から何まで完璧にできるとは、俺も思っちゃいないさ。むしろ、できないことの方が多いのが当然だ。ゆえに、こういうところでは頼ってもいいんだよ。お前は教師という職分に縛られているが、その範囲内であれば逸脱しなければ、頼ることは問題ない。今のお前は、『同僚に食事を御馳走になっている』だけだからな。な、問題なからう？？」

どうということでもないという徹。何か拗ねていじけていた自分が、酷く馬鹿馬鹿しくなってきたネギであった。それに徹の言い様に思うところもあった。

（木乃香さんや明日菜さんにご飯をご馳走してもらうのって、『教え子に教師が御馳走になってる』わけだから、本当はまずかったんじゃない…）

今更ながらに気づくネギであったが、最早手遅れな事である。何とも言えない複雑思いを抱えながら、徹の用意した朝食にかぶりつくほかないネギであった。

「あんだ、今朝は来ないと思ったら、そんなことになってたんだ」
木乃香お手製の弁当をつつきながら、どこか呆れたように明日菜。実のところ、今朝に限って来ないネギを彼女は心配してたのだ。それが杞憂であったのだから、無理ないことであるが。

「しかし、見事なお弁当やなー。歓迎会での料理談義からして、できる人やとは思ってたけど、彩りも栄養バランスもバッチリや。小宮山先生、ほんまに料理できる人やったんやなー」

ネギの食べている弁当を覗き込みながら、感心するように言う木乃香。徹には悪いが、あの見た目からはとても料理をする姿は想像できない。まあ、こうして実物を見せられれば、納得するほかないが。

「そうですよね！正直、僕ビックリしました。このお弁当もとても美味しいですし、僕、徹さんのことがよく分からなくなりました」

「その気持はよく分かるわ。昨日の事といい、あいつ（ 昨日の和菓子談義でうんざりしているの）（笑）何考えているのかしら？」

ネギは、思いもがけないお弁当の美味しさに頬を緩ませながら、不審な顔である。明日菜もわけがわからないといった感じである。

「そうかなー？うちには詳しいことは分らんけど、そんな難しいことやないと思うんやけど」

困惑している二人を余所に、魔法関係を除いて事のあらましを聞い

ている木乃香はそんなことを言った。

「あいつの意図が木乃香は分かるの？」 「木乃香さん、分かるんだつたら教えて下さい！」

天の助けといわんばかりにくいつく明日菜とネギ。そんな二人の様子に苦笑しながら、木乃香は答えた。

「うん。むしろ、なんで二人が分からんのか、うちにはわからん。小宮山先生がゆーてる事は、常に同じことや」

「「同じこと?!」」

木乃香の答にますます混乱する二人。聞き返す言葉がは意図せずもつてしまっている。

「そやで、なんで分からんかな。小宮山先生がゆうてるんは、子供であっても教師としての自覚をもち義務を果たせ」いうことやろ?」

「それは私だって分かってるわよ。そうじゃなくて、あいつの行動のことよ」

明日菜の言に同意を示すかのようにコクコク頷くネギ。

「うん?だから分かってへんな。それも同じことやえ。小宮山先生は、ネギ君が教師として間違った行動をしている時は注意して、そうでない時は補佐してるだけやと思うんやけど」

木乃香は、魔法云々での対立については聞かされていない。しかし、

諸事情を聞くに徹の言っている事は正論そのものだ。まだ幼いネギには些か酷だとは思うが、教師であれば当然のことなのだろうということは、木乃香も理解していた。伊達に良家の子女ではない。彼女は、職業や地位に求められる義務というものを、漠然とではあったが理解しているのだ。

加えて、木乃香は明日菜やネギと違い、当事者ではない。ゆえに、冷静に第三者として客観的に徹のことを見れたのである。

「お弁当はどう説明するのよ？」

弁当のことはそれでは説明できないじゃないかという明日菜に、木乃香は事も無げに答える。

「だから、それはネギ君が子供だからや」

「いや、でもあいつは、その子供だからという言い訳を許さない奴よ？」

「明日菜、それは勘違いしとる。小宮山先生は、教師としての必要最小限を求めているだけや。それ以上でもそれ以下でもないで。その証拠に、こちらがネギ君の食事の支度をしたのに、なんもゆわんかったやない」

「そついえばそつね」

今更ながらに、そのことについてつつこまれなかったことに不審を覚え、納得する明日菜。

「そつ言えば、徹さんが言っていました。『全部完璧にできるとはおもっちゃいない。お前は子供だ、頼るところは頼れ』みたいなこと

を」

ネギも今朝のことを思い出すように言う。

「だから、そういうことやと思うで。教師として、はじめはつけな
きやいかん。でも、子供なんだから頼れるところは頼っていいって
いうことや」

木乃香がまとめるように言うと、明日菜とネギはその言葉を吟味す
るように唸る。まだ完全に納得できたわけではない。ただ、一つだ
け理解できることはあった。それはけして、ネギに対する悪意から
でた行動や言葉ではないということ。

「それにしても、ネギ君のお弁当美味しそうやな。うちのと交換
せえへん？」

二人がそれぞれ理解したのを見届けると、木乃香はそんなことを言
った。一瞬にしてポワポワした空気に変わる。天然スキル恐るべし
である。

「構いませんよ。どれがいいですか？」

「そういえば、昨日貰ったいちご大福も美味しかったわね。ネギ、
あたしとも交換しなさい」

木乃香の申し出に気軽に応じるネギだったが、それに明日菜も乗っ
かっってきたのだった。

「え、明日菜さんまでですか？僕の食べる分がなくなっちゃいま
すよ」

「何よ、木乃香はよくてあたしはダメだって言うの?!」

さすがに微妙に嫌そうな態度をみせるネギに憤慨する明日菜。それを尻目に一人交換した玉子焼きをパクつく木乃香。

「むむ…、出汁がすっかりきいとる。これは関西で主流の出汁巻き卵やな。小宮山先生、相当にできるな」

「そうですね、美味しいですよね?」

感嘆する木乃香に同調するネギ。

「そんなに美味しいの? 私にもよこしなさいよ」

「えー、ダメですよ。僕の分なくなっちゃいますよ」

「ただじゃないから、交換、交換しましょ」

その後も、熾烈なそれでいて低レベルな争いが繰り広げられたのだが、結果はあえて記すまい。

ただ昼食を終えた際、明日菜はとても満足気な顔で、ネギは微妙に凹んでいたらしい。

昼食を終えた昼休み、職員室でネギは一人頭を悩ませていた。朝食にお弁当と世話になり、木乃香に言われたこともあって、徹のことについて考え直してみることにしたのだ。

「教師として…、でも僕が子供だから…」

思考に没頭するネギであったが、彼が担任をしている2-Aの生徒が駆け込んできたことにより、それを中断せざるをえなくなった。

「どうしたんですか？」

ただごとではない様子で駆け込んできたのは、『明石 裕奈』『和泉 亜子』の二人であった。

「高等部の先輩が私達に手をだしてきて」「ほら見て、これ」… e
t c .

口々に言う二人。その証拠だと、赤くなった腕を見せる。

しかと赤くなっているのを確認したネギは、助けなければと勢いこんでいう。

「どこですか？すぐに案内して下さい！」

「うん、任せて」「こっちだよ！」

ネギの言葉に頷き、先導する明石と和泉。それを追うネギは、今度こそ教師として毅然とした対応をするぞと心に決めていたのだが…。

ネギがそこについた時、そこでは大河内と『佐々木 まき絵』が高等部らしき女生徒から、強烈なボールを受けさせられているところだった。大河内はかろうじて受けてはいるが、佐々木は完全に涙目であった。

「やめて下さい！僕の生徒に何するんですかー！」

勇んで飛び出すネギだったが、高等部のお姉様方を彼は侮っていたというか、理解していなかった。

「キヤー」「可愛い」「ボク、どこから来たのー？」などと黄色い声があがり、高等部のお姉様方にもみくちやにされるネギ。注意しに来たのに、抱きしめられるとはこれ如何に…。

もみくちやにされ身動きをとれないネギを救ったのは、投げられたボールだった。それは、高等部の女生徒達のリーダー格にあたる。ネギを解放して、一転して憤怒の表情で、ボールを投げたであろう人物がいる方向を睨みつける。そこには不敵な表情でボールを持つ明日菜と憤怒の表情の雪広が立っていた。

「あんだ、自分が何したか分かってるんでしょうね？」

ボールをぶつけられたリーダー格が、明日菜と雪広を睨みつけて言う。

「はん、それはこっちのセリフよ。みつともないと思わないの？」

「そうですね。高等部の方達がこの場に一体何の御用でしょう？」

「ちょっと生意気言ってるみたいだから、教育してあげようと思っただけよ。」

「そう、お姉さんが教えてあげようってね」

明日菜が非を説き、雪広が問いたです。それに対し、リーダー格は揶揄するように言い放った。

これは、大河内、明石、佐々木、和泉の4人が、ネギについて話し

ていたことで、その際のふざけて言った「お姉さんが教えてあげる」というものをあてこすったものであった。

「余計なことしないでよ、おばさん！おばさんが、口出すことじゃないわよ！」

「若い私達が羨ましいかといって、僻むのはみっともないですよ」

「お、おば？！若いって、大して違わないじゃない！」

明日菜のおばさん発言に、雪広の年若さを強調する発言に、リーダー格は勿論、高等部の女生徒達の頭に血が上る。

「いい度胸ね。あなた『神楽坂明日菜』でしたっけ？噂は聞いていてよ。でも、ちょっとくらい有名だからといって、調子にのらないことね」

「はっ、調子にのってるのはそっちじゃないの！鏡で自分の顔でも見てきたらー！」

「言っただわねー！」

売り言葉に買い言葉、最早一触即発であった。ネギはどつすることもできずオロオロしている。

（わー、どうしようどうしよう。僕、先生だから止めないといけな
いのこ…）

焦るネギを尻目に、明日菜が投げつけようとボールを構えたその時、その腕を止める者がいた。

「そこまでだ！双方共、矛を収める」

いつの間に来たのか誰も察知できなかったが、銀髪に真紅が特徴的な教師『小宮山 徹』は確かにそこにいた。彼は明日菜の手をおろさせ、双方を睥睨する。その鋭い視線に身を竦ませ、動きを止めざるをえない女生徒達。

「熱くなるのは若い頃の特権かもしれないが、こっぴつのは頂けないな」

「でも、元はといえばあいつらが「そういうことではない」…」

抗弁しようとする明日菜だが、徹にその先を厳格な口調で封じられる。

「神楽坂、気持ちわかるが、直接的な手出しをした時点でお前達の負けだ。

公正ではなく不公平はあったが、あちらは一応スポーツの枠での手出しだからな。わざと体にボールをぶつけてしまった時点で、お前達は暴力という形式をとってしまったのだ。

始まりがどうであろうと、明確な暴力を先にふるってしまったのだから、非はお前達にある」

「そ、それだけでも…」

徹の言にシユンとなり俯く明日菜。悔しいのか唇を噛み締めている。

「高等部のお姫様方も、大人げないぞ。わざわざ中等部の領域にち

よっかい出さなくても、うちの学校には有り余るスペースがあるはずだ。そうでなくても、生意気だからといって、自分達よりも年下の者に年長者が力を見せつけるなんて、とても褒められたものじゃないな。

品行方正な麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校の学生とはあるまじき行為だと、私は思うのだが」

俯く明日菜を勝ち誇った表情で見ていた高等部の学生達だったが、徹の容赦ない的確な指摘で、顔を伏せる。

「…はい、申し訳ありませんでした」

「よし、これで一件落着だな。さて、授業に遅れるぞ。皆、早くいけ」

徹の言葉に、各々散っていく生徒達。ただ一人、納得いかない表情でその場を動かさず燻っている明日菜。

「神楽坂、お前の行動理念は尊いものだ。だが、やり方を間違えちゃいけない。どんなに正しい意思でなされても、一つ間違えばそれはただの暴力だ。それを覚えておけ。

お前は決して間違っちゃいけないよ。今回のことを心において、次に生かせ」

そういつてワシヤワシヤと明日菜の頭を撫でる徹。

「もうセットが崩れるじゃない、やめてよ」

口ではそういつ明日菜だったが、そんなに嫌そうではないどころか、むしろ顔が赤くなっている。

その姿は教師が生徒に言い聞かせるというよりは、兄が妹をあやしているかのようだった。

（徹さんは凄いなあ。僕じゃ、皆をおさめることはできなかったのに、あっさり鎮めちゃったし。

そういえば、タカミチもすんなりおさめていたのを見たことがあるや。僕も、同じ先生なのに情け無いなあ）

教師としての差を感じさせられた気がして、落ち込むネギであったが、彼の年齢からしてそれはどうしようもないことである。大体にして、彼を先生と呼ぶ生徒の少なさからしてそれは明らかである。

『ネギ君』『ネギ坊主』など、明らかに先生に対する呼び名ではない。そんな彼に、純然たる大人であるタカミチや前世もあわせれば三十半ばを超える精神年齢の徹と同様の対処を求める方が無理というものである。

その証拠に、徹もそこら辺は弁えているため、ネギが解決できなかったことを責めたりしていないのだから。それなのに、ネギは自分にもそれができて当然だと思っっているので、現実との齟齬が起きるのである。要するに、自分にできないこととできることの区別ができてきていないのだ。何でも自分がやらねばならないと思っっているのだ。さらに、ぶっちゃけて言ってしまうえば、ネギの駄目なところは、自分が子供であるということ認められない一点にあるのだった。

これは、ネギの父へのいきすぎた憧憬と優等生な性格が作り出した弊害である。なまじ才能に溢れ、能力もある為に、なんでもできる

しなんでもできなくてはならないと錯覚しているのである。大人とはそういうものだ。と誤解しているのだ。自らの力にだけ耽溺し、他者を省みない在り方は、とても褒められた在り方ではない。むしろ、それは子供ゆえに許される暴走であって、大人には許されぬものである。

大人には、自身の力を正確に認識し、己が力だけで足りぬ時は、周りの力を借りてことを成すことこそ求められるのだから。そういう意味で、彼は歪んでいた。

そんなこんなで落ち込んでいるネギであったが、現実には容赦がない。昼休みにもめた高等部の女生徒達が、彼のクラスの体育の授業に乱入してきたのだ。

慌てて静止に入るネギであったが、またしても無力。結局止められずに、ドッチボールで対決と相成ってしまった。自らの生徒を守らねばと思い、魔法を使おうとしたが、それは明日奈によって止められてしまった。

「こら、なんでもかんでも魔法をつかうんじゃないわよ！」

「でも、皆さんを守るためですから」

「魔法は秘匿されるべきなんでしょう？それにあなたに覚悟はあるの、ネギ？」

「覚悟……」

「この場で魔法を使って、魔法がばれた時のリスクをあなたが負う覚悟はあるのかって聞いているのよ」

「ぼ、僕は……」

「それにさつき、あいつに私も言われたわ。方法を間違えちゃいけないって。あいつらは確かに嫌な奴で、あんたの私達を守るっていう意思是正しいのかもしれないけど、相手がドッチボールという枠組みで挑んできているのに、それを魔法なんて反則技でやり返すのは、ただの暴力じゃないかしら」

「魔法がただの暴力?!」

ネギには受け容れ難い現実であった。しかし、実際のところ魔法を知らない者にとっては、それは未知なる力であり、抗えない暴力であるのが現実である。

「そうよ。魔法は凄い力だと思うけど、なんでもかんでもそれに頼っちゃいけないと思うわ。

それに心配しなくても、あんな奴ら正々堂々、正面から打ち破ってやるわ。見てなさい！」

明日奈は、力強く言い放つとコートへと入っていった。ネギは愕然とした。口先ではなんと言おうと、彼は実際のところ、魔法を万能の力のように思っていたのだ。敬愛する祖父の言葉もわかったつもりであつて、真実理解していなかったのだ。でなければ、惚れ薬の作成や短絡的に記憶消去を実行したりはすまい。

ネギの動揺をよそに試合は進んでいく。最初は高等部相手で、しかもドッチボール部というアドバンテージに気後れしたのか、2-Aは劣勢を強いられていた。魔法を使いたくなるネギであつたが、明日菜にあれだけ言われている以上、使うに使えるなかつた。それに、覚悟があるかと聞かれて、あるとは答られなかつた後ろめたさもあつた。父を追う以上、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」を目指す以上、魔法がばれたことの責任をとって、オコジヨ刑に処さ

れるなど考えられなかったのだ。

だが、強烈なタレントを多く持つ2-Aも負けていない。本屋ちゃんことのどかとその親友夕映が、ルールを逆手にとつて、ボールを奪取したのを皮切りに、身体能力に優れた大河内が速球でアウトにするなど、そのポテンシャルを生かし、劣勢を挽回していった。中にはリボンを使うなど反則行為も多々あったが、相手もそれは同じことなので、殊更指摘することでもなからう。

最後を決めた明日菜が、満面の笑みでネギに言う。

「どう？魔法なんかなくても勝てたでしょう」

「は、はい。凄かったです！」

ぐくぐくと頭を撫でられ、その笑顔に見惚れるネギ。

（魔法を使うことばかり考えてたけど、魔法がなくても皆は自分の力でどうにかしてしまった。

魔法が全てじゃないんだ。魔法でやっちゃいけないこともあるんだ…）

一方でそんなことを思うネギ。もし、魔法を使って解決していたら、この笑顔は見れなかったであろうことは、ネギも理解できたからだ。しかし、好事魔多しとはいったもので、どこにでも無粋な輩はいるものである。ネギが一つの重要な教訓を得ているところで、それをぶち壊すようなことが行われようとしていた。負けた高等部のリーダー格が、明日菜を背後から狙っていたのである。明日菜を見上げる形になっていたネギにはそれが見えた。

（明日菜さんを守らなきゃ！）

ネギは瞬時に判断すると、明日菜を背中にかばって前へでた。飛んでくるボール。その勢いたるや、さすがは勇名を馳せるドツチ部『黒百合』であると称賛できよう。それが負け惜しみの不意打ちでなければ…。魔法で強化しているネギには、これを受け止めることも可能であったが、こちらで最も頼りとし親しいであろう明日菜を狙われて、血が上っていたのだらう。思わず風属性の魔法を付与して、ボールをはね返してしまう。

「キヤーー!!」

ボールを覆う烈風が投げたリーダー格の服を微塵に切り裂く。ネギはしまったと思ひ、皆は啞然とするが、次の瞬間起つたのは歓声であった。

「凄いやー!!」「どうやったの?」「なんだよ、今のボールはありえねえ」「やるあるなー」

などとネギは称賛され、もみくちゃにされるのだった。しかし、ネギは魔法を使ってしまったことで、バツが悪く俯いてしまう。

「今のは、見逃してあげるわ。皆、喜んでるし、守ってくれたことだしね」

明日菜は嘆息した後、悪戯っぽい笑顔でネギにだけ聞こえる声で呟いたのだった。それを聞いたネギに笑顔が戻る。それは歳相応の子供らしい満面の笑みであった。

「まあ、今日はお説教はなしにしよう。何か得たようだしな…。それにしても、明日菜はいい仕事しすぎだろ。俺より補佐役にむい

てるんじゃないか？」

などと影から見守る徹であったが、自分の独白が正鵠を射ている気がして地味に凹む姿があったりするが、誰も知らぬことである。

・おまけ（いちご大福の味<明日菜&木乃香>）

「木乃香、何かあいつから、いちご大福もらったんだけど食べる？」

渡された包みを手に木乃香に尋ねる明日菜。

「うん？あいつって小宮山先生のことなん？あかんでー、ちゃんと先生って言わんと。」

ネギ君のことも誤解やって、分かったんちゃうの？」

明日菜と物言いを窺める木乃香。

「そのことじゃないわよ！あいつ、これくれた時に和菓子について延々と語ってくれてね。30分以上、ひたすら聞くはめになったんだから！」

思い出すとげんなりするのか、心底嫌そうに語る明日菜。まあ、趣味の話とは興味のない人間にとっては、この上なく苦痛なものであるから無理もないだろう。

「あはは、それは災難やったなあ。でも、なんでくれたん？」

「うん、それがよく分からないのよねー。何か自分が言うべきことを言ってくれたみたいなのをいってたけど……」

木乃香の間に明日菜は自分でも分かっていない答を返す。

「まあ、ええかー。せつかくもろたんさかいに、食べよう」

「そうね、食べ物に罪はないしね」

木乃香の言葉に頷き、包みを開ける明日菜。そこには、見事ないちご大福が2つ鎮座していた。

「おお、見事なもんやなー。お店で売ってる物みたいや」

「そうね、見かけは中々ね。でも、味の方はどうかしら？あいつのお手製だって言ってたし…」

感嘆する木乃香に、外見については同意する明日菜だったが味の方を疑う。なにせ、日本人離れた容姿の人間が作った和菓子である。味が心配になっても仕方のないことではある。

「そやなー。先生、料理のこと結構詳しくあったけど、あの外見で料理いわれてもなー」

歓迎会で徹と料理談義で盛り上がった木乃香であったが、その知識は認めても、実際に作れるかどうかは疑いを持っていた。なにせ、繰返しになるが、どう見ても料理する人間には見えない。信用度ゼロである。南無合掌。

「まあ、こんなに綺麗なんだから既製品の可能性もあるし、とりあえず食べてみましょう」

「そやなー。んじゃあ、もらうで」

二人は同時に大福にかぶりついた。

「「美味しい！」」

どうやらお気に召したようで、二人は無言でひたすらいちご大福を食べることに集中する。ある意味、シユールな光景である。この瞬間、作り主がガッツポーズをしていたそうだが、真偽は定かではない。

「ああ、美味しかった。なんだいい奴じゃない」

一転して、いい奴発言。現金な娘である。

「そやなー、またくれるとええなあ。…うん？でも、うちこれ食べたことあるような気がするわ」

木乃香は同意しながら、何か思い出すかのように言う。

「木乃香が食べたことあるってことは、どこか有名所の製品の可能性が高いわね。なんだ、手作りじゃないじゃない」

呆れたように言う明日菜。手作りなんて嘘言わなくて言いのに思ってしまう。

「うん、そやなー。でも、うちどこで食べたんやろ？」

悩む木乃香。実のところ、木乃香が帰省した際に、たまたま詠春のところ用事があって来ていた徹が、手土産として置いていったも

のを食べたのだが、さすがにそんな偶然があるとは知らない木乃香であった。結局、真実お手製なのに、信じてもらえない哀れな徹であったとさ…。

明日菜の教え（後書き）

感想ありがとうございます。励みになります。

今回の主役は、ネギと明日菜です。主人公はチヨロチヨロ出てますが脇役です。ネギの原作での成長に一番影響を与えているのは、やはり明日菜だと私は思うので、私なりにそれにそった形で書いたつもりです。それに、やはり魔法使い側であり同僚でもある主人公にいわれても、反発しちゃうだけだと思ったので。

主人公も作中で独白してますが、明日菜はネギのベストパートナーだと思ってます。身近な異性であり、姉のようであり、時にひっぱり、時に間違いを正す、彼女はネギにとって理想的なパートナーでしょう。

今回、成長したネギ君ですが、今まで染み付いた癖や考えは中々直るものではありません。まだまだ苦難の道が続きます。

見ている者は…

明日菜によって、ネギが重要な一つの教訓を得た時より、話は過去に遡る。その日、徹はまたしても依頼を受けて、侵入者の排除を行ったところだった。依頼内容同様、場所も全く同じで領域の森であったが、前回とは一つ違うところがあった。彼は、一人では無かった。同行者がいたのである。そう、麻帆良において、最強と目される実力者『高畑・T・タカミチ』と一緒にであった。といっても、肝心の侵入者の排除には、ほとんど手出しをせず、稀に自身の方に向かってきた者のみを自衛のために迎撃するくらいであった。

すなわち、タカミチの目的は侵入者の排除の手助けなどではない。徹に何かしらの用があつてこの場にいるのだろう。いや、実際には戦いぶりを直接生で観察することも、目的の一つに入っているのだろう。戦っている最中、常に何者かの視線を感じていたのだから、間違いない。だが、戦闘が終わっても去ろうとしない辺り、本題が別にあるのだろう。実際、タカミチは戦闘中より、今のほうが余程厳しい顔をしている。

（表情からして、余程の話があるようだ。内容は、恐らくここ数日のネギに対する態度及び対応についてかな？これだから良い人って奴は…。あー、正直めんどいしうざいなあ。このオッサン、魔法使えねえとは言え、咸卦法という反則技持ってやがるしな！。強化率の差で負けても元となる身体能力では勝ってるだろうから、逃げることは可能だろう。でも、こんなところで手札の一つを明かすつもりはないし、逃げてもまた後日ってことになるだろうから、逃げるだけ損だな。

仕方無い、諦めて話を聞くとしよう）

徹は内心の葛藤に結論を出し、思考を打ち切る。実のところ、聞かないという選択肢は、現在の状況（学園長と公で対立していること）から考えても、とることはできない。ただでさえよく思われていないのに、これ以上不信を得るのは避けたいところであるからだ。円滑な任務遂行の為に、潤滑な人間関係が不可欠だ。譲れないところでは対立もやむなしであるが、彼とて好きで対立しているわけではない。むしろ、仲良く出来るならそれにこしたことはないと彼自身は考えていた。

「高畑先生、私に何かお話があるようですね。ここで話にくいというなら、場所を移しましょうか？」

いつまでったも、口を開かないタカミチに苛立ち、徹は言を促す。何が悲しゆうて男（しかも30過ぎのオッサン）と見つめ合っていないければならない！というのが、徹の思いだった。

「いや、ここで構わない。すまないね、本当なら僕から話し始めるべきことだったのに気を使わせてしまったようです。構いませんから、さっさと本題に入ってくれませんか？」「……」

詫びるタカミチであったが、徹はにべもない。徹にとっては、拾中八九不愉快になるであろうことが予想される内容になるであろう話だ。些か、乱暴になっても無理はないことであった。

「それでは単刀直入に言おう。君は何を考えているんだい？」

徹の態度を見て、取り繕うのも遠回しに言つのも無駄と悟ったのだろ。タカミチは覚悟を決めたように顔を引き締めると、そう言った。

「何を考えているとは何の事ですか？木乃香様の護衛任務の事ですか？学園長に対する態度の事ですか？…それともネギの事ですか？」
わざと一泊おいて、タカミチの本題であろう話題を最後に持つてくる。分かってて言うてる辺り、こちら辺は本当にいやらしい男である。

「君、分かっててきているだろう。フウ…ネギ君のことだ」

タカミチも馬鹿ではない。徹の言からそこら辺は察し、短く嘆息すると結論を述べた。

「ネギが何か？別段、ネギに特別なことも、害になるようなこともした覚えはありませんが」

真顔で表情を全くかえずに、そう言うてのけた白銀と真紅に彩られた青年の様に、タカミチは絶句する。声の調子にも全く揺るぎはなく、何の動揺もない。それは青年が本心からその言葉を発したであろうことの証左にタカミチには思えたからである。

実際、青年、徹はまごうことなき本心からであったが、それがタカミチには信じられない。タカミチにとって、ネギが暗澹たる姿で教員を辞めて故郷に帰ろうとしたことは、記憶に新しいし、そのあまりの悲惨な様は目に焼き付いている。徹がどうしようもなく無愧に見え、言いよの無い怒りがわく。

（開き直っているのか？！ナギさんの息子であるネギ君を何だと思っっているんだ！）

「あれだけのことをしておいて、何もしていないというのかい？！」

押えきれぬ怒りが、激情がタカミチにそれを言わせた。視線には殺気すら籠っていた。

「あれだけのこと？…ああ、故郷に帰れ云々ですか。まさか、本当に帰ろうとしたんですか？それを貴方が知っていて、ネギがまだいるってことは、引き止めたんですか？あの程度で帰ると言い出すよ
うな者をわざわざ引き止めるとは、高畑先生も物好きですね」

タカミチの憤怒をあつさり受け流し、あまつさえ徹はくだらないと言いたげに吐き捨てた。

「き、君は悪いことをしたとか、やりすぎたとか思わないのか！」

あまりのことにタカミチは自制が効かず、感情を震える声でそのまま口にしていった。

「なぜそんな事を思わないといけないんですか？先程も言った通り、私は特別なことをしたわけではありませんよ。ただ、私は当然のことを言っただけですよ」

「君の一分の隙もない正論で、ネギ君がどれ程うちのめされたのか分からないのか？！あんな年端も行かない子供に酷な事を…！」

タカミチの激情を感じても、徹は微塵も態度を変えない。その態度にタカミチはどんどんヒートアップしていく。最早、視線は見るだけで殺せるレベルだし、全身から溢れる威圧感も凄まじい。タカミチは、常人なら失禁してもおかしくないだけのものを、徹にぶつけていた。

（うぜえ。こいつ、自分が何言ってるのか分かってるのかな？いい

加減、相手にするのが馬鹿馬鹿しくなってきたな)

一方、ポーカーフェイスではあったが、徹のイラつきも頂点に達しようとしていた。これ以上、話したところで意味がないであろうことを徹は理解していた。なにせ、見ている者が違うのだ。両者の言い分が噛み合わないのは、当然のところであった。

「君の仕事ぶりも見せてもらったが、君は少し冷酷過ぎるのでは」「黙れよ」「ない…」

さらに、先日の侵入者排除の一件とからめて、言い募ろうとしたタカミチを、徹は乱暴に封じる。

「俺の仕事ぶりとネギのことは関係ないだろうが。大体、俺が言った事は、本来は外部の俺じゃなくてあんたらが言うべきことだ。あんたらがなあなで済ませるから、俺がいわざるをえなくなったんだろっが！」

仕事モードをかなぐり捨て、素の言葉で対応する徹。その声には隠しようのない苛立と怒りに満ちていた。

「僕らがいうべきこと?!」

「そうだ！なぜ気づかない?!ネギが初日でやらかしたことは、一つとってもなあなあで済ませられることじゃない！一般人に対する魔法バレ、記憶消去魔法の独断行使、どれも許されるものじゃない。それをあんたらは放置した」

驚愕するタカミチに、彼らの罪を赤裸々にする徹。

「そ、それは実害はなかったのだし、明日菜君は口外しないと約束してくれた。だから「違うだろ！」…何?!」

「ネギが罰せられなかったのは、『神楽坂 明日菜』が元より魔法関係者であったこと、そして、何よりあいつが『ネギ・スプリング フィールド』だったからだろう?」

徹は言い訳しようとするタカミチを容赦なく遮り、冷酷に答を突きつける。

「何をいつているんだ?! 明日菜君が魔法関係者だって、…そんな事あるわけないじゃないか! それにネギ君がネギ君であることが何の理由になるといふんだ!」

図星を指されたからか、隠しようのない焦りと動揺がタカミチに生まれる。声も心なしか先程とは違う意味で震えている。

「しらばつくれる必要はないさ。明日菜の保護責任者があんたであることは知っているし、何よりあの娘の能力は異常だ。孤児であるのにも関わらず、保護責任者が魔法世界でも名の知れたあんたであり、稀少能力保持者。これが、魔法関係者でないはずがないだろう」

「な、明日菜君の能力を君は知っているのか?!」

「ああ、あんたは知らないだろうが、あの娘は何度か俺が早朝トレーニングの為にはった結界を壊してくれていてな。それも意図せずは無意識で、強度に関係なくだ。察するに『結界破り』若しくは『魔法完全無効化』の能力と言ったところか」

「……………」

まあ、後者であることは知っているが、あえて間違った答も入れておく。己が知ったと主張する方法だけでは、『魔法完全無効化』であると特定できないからだ。以前から知っていたことなど知られるわけにはいかないし、その方が自然だと徹は判断したのだ。その証拠に、タカミチは納得するような表情を見せている。それに、何よりもその重い沈黙が正解であることを語っていた。先程まで激情にかられていたせいか、感情がもろに表情や態度に出てしまっているのだ。

徹は容赦せず、追討ちをかける。この男、間違いなくサドである…。

「ネギについてはもつと簡単だ。あんたら、あいつを特別扱いしすぎ！魔法使いとしての修行なら、本来はもつと厳格にするべきだろう？なのにあんたらときたら、滑稽に見える程の甘々つぶりだ。正直、呆れたよ。それともなにか、あんたらは普通の見習いにも同じくらい甘いのか？」

「そ、それは…」

徹の指摘に黙るほかないタカミチ。麻帆良学園がネギを特別扱いしていることは周知の事実であり、様々な配慮がされていることは公然の秘密であるからだ。そして、ネギでなかったら、とうの昔に本国へ送還されているであろうことも事実である。実際、生真面目で規律にうるさいガンドルフィーニなどは、英雄の息子でネギに期待しながらも、未熟で幼すぎるし危険であることを理由として、送還を主張したことがあった。タカミチが擁護し学園長の鶴の一声でそれはなくなつたが、可能性としてはありえたのだ。

「そんなはずあるわけないよな。理由を言っつてやろうか、ネギが許されたのは『英雄の息子』だからだ。あんたらは、ネギをあんたの

言った通り年端も行かない子供であるネギ個人としてではなく、『英雄の息子』として見て、自分達の都合のいいように扱ってるんだよ！」

「なっ！」

そう、徹がイラついたのは特にそこであった。散々特別扱いしておいて、肝心なところでは子供であることを理由に責任逃れをさせる。そんな都合がいいことがまかり通る世の中ではないのだ。権利には義務が、罪には罰が、特権には相応の代償が必要なのだ。タカミチは反論する言葉を必死に探すか、何も思いつかない。愕然として言葉が出てこない。

「今まで考えもしなかったって面だな。だが、頭のいいあんたのことだ。本当は気づいていたんだろ？ただ、考えないようにしていただけでさ！」

「！！！！！」

酷薄な表情で蹴るように言う徹。その顔には嘲笑すら浮かんでいる。にもかからず、タカミチは動けず反論できない。あまりの衝撃に、胸の痛みに、己の罪に…。

「まだ、分かんないって言うなら、その体に教えてやるよ。あんたの罪って奴をなあ！」

埒が明かないと思ったのか、徹は気を高める。完全な戦闘体勢へと入った。

「なっ、一体何のつもりだい?!」

さすがに歴戦の強者であるタカミチは、自身も即座に気を高め戦闘態勢へと入る。

「いや、いくら言葉で言っても、あんたには根本のところがかつていない気がするからさ。拳でその身に刻みつけてやると思つてな」

「君の言い分はよく分かった。君の言い分に一理あることも認めよう。これ以上何があるっていうんだい？」

好戦的に笑う徹に対し、戸惑うタカミチ。

前言撤回、精神的にも肉体的にも相当のサドである！

「いや、分かってないね。あんたにとって肝心なところをな！それに、今日きた用の中に俺の戦力分析もあつたんだらう？なら、ちようどいいだろ！」

そこまで言うと、最早話すことはないと言つばかりに向かつてくる徹。気によって身体強化されたそのスピードはまさに疾風である。

一足で、完全にタカミチの懐にはいつて来る。

だが、タカミチも見ているだけではない。わけがわからないが、戦力分析云々は事実であるし、今の鬱屈した気分を晴らすにはちようどいいかもしれないと考え、彼は誘いにのることにしたのだ。何より徹の言う「自分にとって肝心なこと」も気になる。素早く気を載せた居合い拳で迎撃する。

いや、迎撃したかのように見えた。数十発の拳の弾幕に為す術も無く、徹は吹き飛ばされるはずだった。徹が着地と同時に攻撃せずに直上へ跳躍しなければ…。

それなりに自信があつたタイミングと距離で避けられたのは、中々に驚いたが、タカミチは冷静であつた。回避した空中では、身動きができない。次で終だと考えたからだ。

落下地点を予測し、確認もせずそこに拳の弾幕を見舞う。しかし、またしても手応えがない。代わりに背後に凄まじいまでの殺気を感じ、咄嗟に横へ転がる。次の瞬間、タカミチがいたであろう場所を、凄まじい速度で手刀が突き込まれる。まともにくらえば、間違いくただでは済まない威力であつた。

「なんだい、今は…。どうやって、僕の予測より早く？」

この一撃で完全に思考が戦闘へと置き換わり、油断なく素早く起き上がりながら、疑問を呈するタカミチ。

「戦闘中に自分の手を晒す馬鹿はいない」

「確かに、そうだね。馬鹿な事を聞いた。今度はこちらからいくよ！」

短く拒絶する徹に対し、苦笑して応えるタカミチ。

タカミチはここにきて、まだ咸卦法を使うつもりは無かつた。確かに、自分の予測を上回った回避は見事だが、それでも十分気の強化だけで何とかなると彼は判断したのだ。これはタカミチが、徹の實力を魔法生徒程度と考えていたからである。後に大いなる誤解であつたことを知るのだが、それはまだ先のことである。

それでも、タカミチはそれなりに本気であつた。咸卦法なしの気のみ強化では、最強の状態にもつていたのだから、流石といえは流石である。宣言通り、今度はタカミチから仕掛ける。徹の前方に軽く跳躍したタカミチは、かぶせるように拳を叩きつける。数・威力

共に先の数倍の居合い拳の弾幕が、徹を襲う。反撃しようにも、前面は完全に防がれてしまっている。かぶせるようにうたれたせいで、回避も後退以外は許されていない。後退しても追討ちがかけられるのが必定で。そうなればジリ貧だ。今度こそ終わりかと思えた。

しかし、徹は驚くべき行動をとった。なんと腰を落とし、力を溜めるように右腕を腰だめに構えたのだ。まさかとタカミチも思ったが、放たれた拳は今更止められない。激突の瞬間、そのまさかは起きた。徹は躊躇なく右腕を突き出したのだ。

「刺徹！」

徹の叫びが言霊となり、気で高められた彼の手刀をさらに強化する。連撃に対し、ただの一撃、圧倒的な数の暴力に対し、極限の質で勝負したわけである。ここでの勝負は、自身の名という強力なアドバンテージがある言霊まで使った徹に軍配が上がった。手刀が拳の弾幕を刺し貫き、タカミチの肉体へと迫る。しかし、タカミチとて予想しなかったわけではない。実際、初めて防がれたわけではないし、彼は徹以上に理不尽な存在をよく知っていたからだ。ゆえに、驚きはしたが、身を捻り間一髪で回避してみせる。一撃に全てをかけた徹も回避に全精力をつぎ込んだタカミチも追撃はできない。仕切り直しとなった。

「今のを避けるのか…。流石だな、タカミチ」

「褒めてもらえて光栄だね。でも、僕の方は謝らなければいけない。すまない、正直君を侮っていたようだ」

感心するように言う徹に対し、謝罪するタカミチ。最早、タカミチに油断はなかった。

「では、今度こそこちらの番だ！左手に「魔力」、右手に「やらせるかよ！」……」

咸卦法を使おうとするタカミチに容赦なく、攻撃を加える徹。これは戦闘なのだ。相手が技を使おうとしているのに待っている馬鹿はいない。ましてや、咸卦法は究極闘技とも言われる高難度の技法だ。その完成を阻むのは当然であろう。間合を瞬時に詰め、手数優先で拳を叩き込む。

（咸卦法は魔力と気を均等に混合させ、強大な力を得る技法だ。集中力を乱せば、完成を阻止できる。まして、タカミチは気はともかく魔力の方は扱いはあまり上手くない）

そういう思惑で放たれた攻撃であったが、タカミチは急所を外しこれを受けきる。流星は歴戦の強者、その集中力に些かの陰りもなく咸卦法は完成した。その余波で吹き飛ばされる徹。しかも、今のタカミチは容赦なしである。

「君のその容赦の無さを見習おう。豪殺 居合い拳！！」

押し潰すように大砲の如き拳が徹を襲う。余波で吹き飛んでいるところに追討ちである。流星に終わりかと思いきや、徹は気弾を作り出し、それを蹴り飛ばす事で、タカミチの拳を紙一重躲し、いや掠る程度に済ませることに成功する。しかし、掠っただけでも効いたらしく、地面を転がりながら吹き飛び、辛くも木に当たる直前で体制を立て直し、起き上がる。

「なるほど、最初の時もそうやって回避したわけだ。大したものだね」

「いや、洒落にならないから。なにそれ、反則だなー威卦法…」

今度はタカミチが感嘆し、徹が愚痴をこぼす。

「いや、凄いや。今ので終だと思っていたからね。あれをよけて、なおかつ未だ闘志を失わない君に僕は敬意を表する」

「そりやどうも。今度はこっちの番だな。俺の反則技、見せてやるよ。起きろ大蛇！」

タカミチの言葉におなぎりの礼を返し、徹は懐に収められた相棒を目覚めさせた。真紅の閃光が放たれ、瞬時に収束していく。

「それが君の本気がい？」

「そうだ、封神妖幻流の粹、受けるがいい！」

気で高められた妖気が徹を取り巻き、さらに右腕に収束される。腰だめにされたそれは発射を待つミサイルの如きである。

「まだ、体術でやるのかい？君の本分は剣ではないのかな？」

「さて、どうだろうな？そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

タカミチの疑問に肯定とも否定とも取れる答を返す。さしものタカミチも少し苛立ったようで、こんなことを言った。まさか、それが決定的な要因となることも知らないで。

「君ははぐらかしてばかりだな。僕の肝心なところもまだおしえてもらってないしね」

「ああ、そういやそれが始まりだったな。あんたとの戦闘が思いのほか楽しかったんで、すっかり忘れてたよ。でも、いいのかい？これを聞けば、あんたは間違いなく隙を作る。致命的な隙をだ。言ってる意味分かるだろう？」

徹は、こう言っているのだ。教えてやってもいいが、知れば必ず負けると。それは掛け値なしの真実だったのだが、今のタカミチは怯まなかった。

「あれだけ好き放題言われたんだから、今更どんなこと言われても大丈夫さ」

「そうか……。なら、言っぜ。あんたは本当にネギを見ているか？」

「なに？」

「あんたが見ているのは、ネギじゃなくてその背中に視えるナギ・スプリングフィールドじゃないのか？」

「そ、それは多少はあるかもしれないが……」

震える声で返すタカミチだが、すでに声から力が失われている。

「多少？違うな。あんたは、ネギをナギ・スプリングフィールドの息子としてか見ていない。でなければ、あいつを英雄にしたてあげようなどと思わないだろう」

「英雄がいけないとでも？」

「それをあんたが聞くかい？ あんたら『紅き翼』が一時指名手配されたことくらい知っているぞ。英雄が必ずしも幸せであることとは限らない。それに、知っているか？ なぜネギの村が襲撃されたのかを。サウザンド・マスターの息子であるネギがいたからこそだということをなあ！」

「?!」

タカミチは今度こそ絶句した。

「くく、考えもしなかったかい。でも、よく考えれば分かるだろう？ あの村には他に狙うべき価値のあるものなどなかったのだからなあ！」

さらに言えば、あんたはネギのことにかっこつけて明日菜のことを全く考えていない。あんな稀少能力持ちの素人が、この魔法世界に関わったらどうなるか想像できない程、馬鹿じゃあるまい。それにも関わらず、学園長の口車に乗って、みすみす魔法世界に関わる要因を作るとは愚かにも程がある。それで保護責任者だと、笑わせるな！ あんたこそが俺よりも誰よりも、明日菜がネギと近づくのを防ぐべきだったとなぜ気づかない！」

最早、叫ぶと言ってもいい程の怒号がタカミチを貫く。タカミチは呆然とし、咸卦法を保ったままとは言え完全に棒立ちである。それを見逃す徹ではない。

「これをくらって少しは目を覚ましやがれ！ 悪路王の拳に二撃はいらず。悪路無二！」

真紅の拳がタカミチを吹き飛ばす。

（僕はネギ君自身を見ていなかったというのか…。僕は明日菜君を守ると誓ったのに、守るところか危険に晒したというのか?!ガトウさん、僕は間違えていたのでしょうか…）

吹き飛ばされながら、タカミチは様々なことに思いを馳せる。自分の師であり明日菜を託してくれた人物に至ったところでそれは中断された。意識を失ったのである。

徹は、意識を失ったタカミチの体を調べる。

「どうやら、妖気・呪詛の残留はないようだな。さすがは咸卦法だ。こういう類の影響もある程度は防げるし回復できるようだな」

徹は感心した。なにせ、思わず封神妖幻流を使ってしまったが、本来試合とはいえ味方に使っていていいような技ではない。妖気や呪詛は普通の人間にとっては猛毒だ。まして、大蛇は邪神刀ともいうべき呪詛と妖気の結晶だ。直接には使わなかったとは言え、その妖気は使った。要するに、残留していたら洒落にならないことになるので、除去しなければと体を調べたのだが、咸卦法の恩恵でそれがなかったのだから。

「ああ、余計なこと言うんじゃないや。咸卦法と正面からやりあって勝てるか試したかったんだがなあ。これじゃあ、勝ったとは言えないよな。はあ…」

ぼやきながら、意識のない倒れたタカミチを背負うと保健室へ向かった。

（まあ、後は学園長に頼めばいいだろう。それにしても、またやり

すぎた気がする。盛大に文句いわれるんだろうな。頭が痛いわ…)

内心で酷く後悔する徹であったとき。

・おまけ(その頃の学園長室<エヴァ&近右衛門>)・

「タカミチ君が…」

呆然とした声で言う近右衛門。

「ほう、やるものだな。言葉巧みに惑わし、タカミチに決定的な隙を作らせるとは…。」

奴は心理戦も中々のものようだな」

感嘆するエヴァ。

「お主、感心しておる場合か?!色々聞き捨てならんことも言つつたし、やはり彼は危険じゃのう…。」

「ふん。だとしてもどうする?今更、排除などできまい。それに言わせてもらえば、奴の言っている事は貴様らが目を背けてきた正論であり真実だ。正義の魔法使いともあるうもが、それを言われたからといって、追い出すのか?」

「むむむ…」

近右衛門は危惧を深めるが、エヴァに痛いところをつかれ、何も言えなくなる。タカミチに言われたことは彼にも言えることでもある。ネギについては勿論、明日菜を木乃香に置き換えれば、同じことが

いえるのだから。

「クククツ、せいぜい悩め苦しめ。貴様が今まで見なかったことにしていた現実だ。その重さを知るがいいさ。私は、その様を見て精々楽しませてもらうとしよう」

「待つんじゃない、エヴァ」

「誰が待つものか。それは貴様自身で答を出すべきことだ。いい年こいた爺が私を頼るんじゃない！」

冷酷に言い放ち、尚も追いつがる近右衛門を切って捨てると、学園長室を後にした。

一人残された学園長は、今さらながらに改めて自分の所業の業の深さを知るのだった…。

見ている者は…（後書き）

技・術解説

『刺徹』：訓読みすると「さしとおす」。効果はそのまま、単に刺し貫く技です。主に言霊を使っているので、技というよりは術と言った方がいいかもしれませんが。名前は最も短い呪だと言います。一説には、真名を知られるとそれによって操られてしまうという話がある程です。それと同じように、主人公は自身の名前にかけて言霊を使うことで、通常より遥かに効率よく強化や効果付与しているわけです。なお、『徹』の特性上、何かを徹するのは十八番ともいうべき代物です。他にも『徹拳』『斬徹』『貫徹』『透徹』などがあります。

感想ありがとうございます。励みになります。

修正指摘は助かります。自身でもやっていますが、見落としはあるもので…。見つけたら遠慮無くご指摘下さい。

今回はタカミチに物申すです。あの人も色々考えると、矛盾しまくってますから突っ込んでみました。まあ、ネギと違って彼は清濁併せ呑めそうなタイプなので、問題はなさそうですが。近右衛門は多分変わりません。あの人は、むしろ濁の方が濃いような気がしますし、反省も後悔しますが、意思を貫く信念は持っている人だと思っているので。

何か主人公がドSと化している気がします。今回の話で、一応物申すネタはしばらくはないと思うので、その間に緩和したいと考えております。まあ、戦闘でも容赦ない&冷酷冷徹なんで、あまり意味ないかもしれませんが…。

ユニークアクセスが200000を超えました。お気に入り登録も1300件を超えました。このような拙作を読んで頂き、心から御礼申し上げます。

相変わらず筆が遅い私ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

私自身、強引すぎたと思っていたのですが、やはり問題あったようで、わずか一日足らずで多くの方にご指摘を頂きました。なので、この話は今一度作り直そうと思います。ネギの魔法封印部分を除き、全面改訂を行いたいと思います。私自身、今一度主人公の立ち位置や利害関係を見直す必要があります。どうも、見方や把握が甘いような気がしますので。この話は自分自身への戒めとして、あえて残しておきます。他にもここがおかしいとか、これはいただけないという所があれば、ご指摘下さい。たくさん感想ありがとございました。

その日、ネギはある決意をしていた。明日菜のドッチボールにおける笑顔が、彼の中で鮮明に残っていたのだ。あの時の笑顔は、魔法を使っていたらけしてみるのは叶わなかったであろう。本当の意味で、ネギは知ったのだ。時に魔法を使わない方が、良い結果を出すことを。同時に、魔法を使うべき場面とは、良く考え吟味するものなのだ。これは、試合終了後に明日菜を守るうとして、意図せず魔法を発動させてしまったのが原因である。この時、意図して使ったものではないにもかかわらず、それまで魔法使用に肯定的な意見をくれなかった明日菜が笑顔でそれを認めてくれたことは、彼にとって重要な意味を持っていたからだ。

以上の事から、ネギは魔法を使えないということはどういうことか、魔法を使うべき状況とはどういうものなのか、理解するために3日の間、魔法を封じてみることにしたのだ。彼にしては、格段の進歩と言えた。優秀で根が素直で「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」に強い憧れを抱き、ただひたすらに父の背中を追っていたネギにとって、自ら魔法を封じる＝魔法を使わないことを選ぶのは、それまでの魔法に全精力を傾けてきた彼の生をある意味否定するものであるからだ。それは、魔法は全能ではないという祖父の教えを、一端とは言え本当の意味で理解に至ったことでもある。

「ふう、これで準備はできた。後は…。」

今しがた書き上げた魔法陣を満足そうに見つめるが、すぐにその表情は暗く沈んでいく。中々踏ん切りがつかない様子である。まあ、無理もないことである。

なにせ、ネギにとっては己の人生の殆どを費やしたものが魔法であ

る。それを一時的とはいえ、自ら捨てるのは多大な意思の力を必要としたのだ。

「何を迷ってるんだ、僕は。あの時の明日菜さんの笑顔を忘れたのか。僕は、あの時自分の力であの笑顔を浮かべて欲しいと思っただんじゃないのか。それに本当の意味で、お爺ちゃんの言っていた事の意味を、徹さんの言葉の真意を、僕に足りないものを知るために必要なことじゃないか！」

僕は、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になって、父さんに会うんだ。こんなところで、足踏みなんてしてられないんだ！」

ネギは、明日菜への想いと少年特有の負けん気、そして年に似合わない意思の強さをもってそれを成し遂げた。描かれた魔法陣の中央に進み、高らかに詠唱を唱える。

「トリアtria ファイラfila ニグラnigra プロミッシウpromissiva ミmi
ヒhilimitationem ベルper トレースtres ディエスdie!
誓約の黒い三本の糸よ 我に3日間の制約を！」

3本の黒い糸が現れると、ネギの腕に巻きつき焼き付いたようにネギの腕に同化する。それが終了すると同時に、ネギの体から魔法による恩恵がすべて消え去ったのだった。

「よし、これで!…あう。」

勢い込むネギだったが、いきなりずっとこける。それもそのはず。彼は、幼少の頃から魔法の勉強に時間を費やしてきたのであり、外を駆け回るような腕白少年ではなく、インドア派の貧弱な少年に過ぎないからだ。つまり、平時の運動能力は魔法による補助の賜物であり、それを失えば結果は言わずもがなである。その上、魔法の補助

を受けている時の感覚で体を動かそうとしたのだ。意思と体の反応が噛みあわないのは当然であった。

「痛い…。魔法がないと、こんなに動きづらいんだ。今まで、魔法で身体補助してきたから、分からなかったや。考えてみれば、僕あんまり運動してこなかったもんね。」

「うっ…。自業自得なのかな。これからは少し運動しようかな。」

早速、魔法なしでの不便さと、いかに自分が魔法に頼り切りであったかを理解するネギであったが、彼の試練はまだまだ続く。なにせ、今は早朝であり、寝る時間を差っ引いても丸二日は、魔法なしで過ごさねばならないのだから。

「うん？ネギ、どうしたんだ？えらい難儀しているようだが…。」

徹は朝食を用意しながら、どこか不自然な動きをしているネギに問た。

「やっぱり分かりますか？流石徹さんです。実は、今朝魔法封印の儀式をしまして。今まで、魔法に頼り切ってたんで、魔法の補助なしだと体が思うように動いてくれなくて…。」

苦笑して答えるネギに徹は目を見張る。徹にとって、驚天動地の出来事であったからだ。ネギが自分の意思で魔法を封じる。彼は、それがどんなに困難なことか、実際にネギと過ごして、それを痛感していたのだ。ネギにとって魔法とは切っても切れないものなのだと、半ば本気で考え始めていた徹は、己がネギを過小評価していたことを認めざるをえなかった。

（俺としたことが見誤ったらしい。原因は先日的一件だろうが、俺はそれでもネギに原作のように、自分の意思で魔法を封じるのは無理だと思っていたからな。

だというのに、現実には見事自分の意思で魔法の封印を決意し、実行した。いやはや、大したものだ。

ネギも成長しているのだな…。しかも、何気に原作より時期が早い気がする。）

「僕も、これからは体を鍛えた方がいいのかなあ…？徹さん、呆然としてますけど、どうしたんですか？」

あまりの衝撃に己の思考に没頭してしまっただらしい。ネギが不思議そうに尋ねてくる。

「いやいや、なんでもない。それにしてもよく決意したな。魔法を封印するなんて。」

慌てて取り繕う徹だが、ネギは特に疑問を覚えなかったのか徹の言葉に照れたように答える。

「3日間だけですけどね。僕、今まで魔法を使えないということがどういう事か分からなくて…。徹さんの言葉にお爺ちゃんの教え、その本当の意味を知るためにも必要なことだと思ったんです。それに…（あの時の明日菜さんの笑顔を）…。」

「なるほどな、よく考えよく決意したな。今のお前なら、きつとその3日間で多くのものをえられるだろうよ。それにしても…クククッ。」

ネギの答に心から感嘆し、感心する徹。一方で湧き上がる笑いを抑えることができない。

「徹さんにそう言って貰えると心強いです。…って、なんで笑ってるんですか？」

徹の零した笑に訝しげに問うネギ。

（これが笑わずにいられるか！小声で聞こえないように言っただつもりだろうが、俺の五感は常人の域を遙かに超えてるんだよ。ばつちり聞こえちゃったよ。

最大の理由は、明日菜かよ！なんだかんだ言っつて、しっかり男の子してるな。このネギ坊主め。

それにしても、本当にいい仕事するなあ、明日菜。俺、いらんじゃねえ…。やべえ、正鵠を射た気がする…。もしかして俺、マジでいらん子？なんだか凹んできた。）

ネギの間に笑顔でごまかし、ワシヤワシヤと頭を撫でながら、そんな事を思っ徹であった。

その背中に微妙に哀愁が漂っていたのは、気のせいではないだろう。

その日、期末試験についての職員会議があった。本来なら、担任であるネギも参加するべきなのだが、実習生である彼に発言権などないし、そもそも彼は名目上形式上の担任に過ぎないので問題にならない。実際、担任としての仕事は、細かな事務仕事をはじめ職員会議等の会議への出席に至るまで、指導教員であるしずなと副担任である徹が、協力して行っているのが実情であった。でなければ、生徒と同じ時間に一緒に登校などできようはずもない。

もつとも、しずなも徹もネギをそのことで責めようとは考えていなかった。ネギに一般教員と同様の事務能力など望むべくもないとわかってはいるし、やはりネギは子供であるからという共通認識があり、しずなは子供なのだから、ゆっくり成長してくれることを望んでいたし、徹は教師としての職務より、生徒と触れ合うことでネギの精神的な成長を望んでいたからだ。

徹はネギとは違い、正規の教員として学園に雇われている。護衛のために必要であろう様々な特権を与えられているものの、一方で正規の教員としての職務遂行の義務を負っている。そのため、ネギとは違い2 - Aだけでなく、他クラスにも授業を受け持っているし、テスト問題の作成などのお鉢が回ってくることもあるのだ。

そんなわけで、徹はまさに今しがた任されたテスト問題の作成をどうすべきか思案に暮れていた。本来なら、もうとうに作成されていいはずのものである。しかし、なぜか2年の日本史のテスト問題に限り、何かの手違いで作成されていなかったのだ。そして、その作成について何を思ったのか教務主任が、突然指名してきたのであった。

（俺の担当科目の日本史で、しかもよりもよってピンポイントで2年を忘れるなよ！ああ、どうしたものかな？今後の為にせつかくだから経験を積んでくれといわれたけど、教師は本職じゃないんだけどなあ…。むしろ、ありがた迷惑というかなんというか。

今のところ、大きな動きはないと思うから、木乃香の護衛は刹那に任せればいいかな…。って、そーいや、期末試験といえばネギの最終試験があったはず！あれ、思い切り木乃香巻き込まれてたような気が…。

刹那は十中八九学園長に押さえられているだろうし、俺が動かない

とやばくないか?! もしかして、新参の俺にいきなりテスト問題作成が任されたのは、…まさか!)

続く職員会議の内容に耳を傾けつつ、つらつらと考えているうちに嫌な結論に至り、思わずその元凶であろう人物に目をやる。案の定、視線の先には邪悪な笑みを浮かべた学園長こと近右衛門がいたのであった。徹は、己の考察が間違っていないことを確信した。

(そもそも俺の担当科目、しかも受け持っている2年に限って忘れること自体、不自然だろうが! 完全に仕組まれたな…。)

「ふむ、今日はこれで終わりかのう。皆、大変だと思うが今日も宜しく頼む。では解散。あ、すまんが小宮山先生は、後ほど学園長室へ来てくれ。ネギ君について話があるでのう。」

それを肯定するかのように徹を呼び出す近右衛門。思い出したよう付け加えるあたりが、また嫌らしい。

「はい、分かりました。後ほど伺わせて頂きます。」

してやられたと思いつつ、徹は丁寧に返答する。口調も柔らかく笑顔のままだったが、目は少しも笑っていないかった。

「どついつつもりですか?!」

開口一番、学園長室に入るなり徹は声を荒げた。

「落ち着きたまえ、何をそんなに怒っているのかね?」

憤る徹に対し、飄々と対応する近右衛門。

「しらばつくれないうください！テスト問題の作成の件、仕組んだのは学園長でしょう？」

「ふおおおお、流石に察がいいのう。」

徹の追求にどこ吹く風で、あっさり認める近右衛門。それが徹を苛立たせる。

「よくもぬけぬけと……。それより私を木乃香様の護衛から排除して、何を企んでいるんですか？！」

「企むとは人聞きが悪いのう。わしはいつも孫のためを思っておるよ。それにこれは必要なことなのじゃ。」

徹の詰問に、近右衛門は揺るぎなく答える。

「必要なこと？私を護衛から排除することがですか？」

「そうじゃ、どうしても必要なのじゃ。さっきも言った通り、これはネギ君に関わることでな。すまんが、今回だけはわしの頼みを聞いてはくれぬか？」

「私の本来の仕事は木乃香様の護衛ですから、頼みを聞くかどうかは明言できません。でも、とりあえず話だけは聞きましょう。頼みを聞くか否かは、それによって判断させて貰います。」

珍しく神妙な態度で頼む近右衛門だが、徹はあくまでも言質を取ら

せない。全ては聞いてからという姿勢を崩さなかった。

「ここまで言うても、あくまでも言質をとらせぬとは、ほんに抜けないのう。やれやれ、降参じゃわい。今回の頼みとは他でも無い。ネギ君の最終試験のためじゃ。ネギ君が魔法使いとしての修行のためにここへ来たことは君も知っていよう。」

「はい。ですが、最終試験ですか？はつきり言って、時期早尚だと思っておりますが…。」

呆れたように深くため息をつく。近右衛門は目的を語った。徹はそれに懐疑的な言葉を返す。今までネギの所業を間近で見てきた彼にとって、それは当然の帰結である。

「君の言わんとすることは分かる。確かにネギ君は魔法使いとしては未熟じゃ。肉体的には言うまでもなく、精神的にも酷く幼い。君も見てきた通り、この学園に来てからの彼の行状は、正直いって目を覆いたくなる。根は真面目で素直でも、やはりあのナギの息子じゃということなのかもしれぬ。」

じゃが一方で、魔法技術だけを見ればネギ君が優秀なのも事実じゃ。そしてなにより、彼は紛うこと無き英雄の息子じゃ！加えて、あの年で旧世界の魔法使いの重要拠点である麻帆良に来たということ、彼に期待をかけるものは少なくないのじゃ。

そんなネギ君をいつまでも見習いのままにしておくのは、周りが納得せぬし危険も大きいのじゃ。英雄の息子とは言え、見習いならばどうとでもできる権力を持つ人間が、英雄の血脈を利用せんとする者の中には幾人もおるのじゃからな。だというのに、ネギ君は、自分がどういふ存在なのか理解しておらぬ。一つ間違えば、戦争の引き金になることも、己が魔法使いとして優秀なことが、周りにどういふ思いを抱かせるのかを…。

故に一刻も早くネギ君を一人前の魔法使いにし、同時に教師として麻帆良学園に所属させる必要があるのじゃ。そうすれば、早々手出しはできんからのう。」

「なるほど、そういうことですか…。」

（驚いた。この爺さん、案外まともな人だったんだな。まあ、一組織の長をやってる人物が、そんなしょうもない人間のはずないか。原作でのイメージが先行してどうにも…って、また悪い癖がでてやる。原作の情報で人を見るのはやめたはずだろ！くそつ、まだまだ精進が足りないな。

それにしても、ネギの早すぎる最終試験にはそんな理由があったのか…。麻帆良学園と教師としての身分は、幼すぎるネギを守るための鎧だったわけだ。）

近右衛門の説明に色々腑に落ちなかった事が、理解できる。近右衛門の説明が真実なら、彼にとっても本来ネギの最終試験は早すぎるのだろう。魔法技術はともかく、ネギは他のことを理解していなさ過ぎる。恋する少女に失恋の相がでていると真つ向からいつてしまっぐらい、ネギは世間知らずだし、なにより人間の悪意というものを理解していない。そう、ネギは、自分に周りが寄せる多大な期待と共にそれに勝るとも劣らない程の悪意がむけられている事を知らないのだ。そんな彼を守るには、本人の自覚を促すか、周りの人間が気をつけてやるほかないのだ。

現状、ネギの自覚を促すのは難しい。なにせ彼は子供だし、魔法を学ぶことにその生の大半を費やしてきたので、世間知らずであることは先も述べたとおりである。加えて、ネカネをはじめとして、彼の身近な人間は基本的に過保護で甘やかしてきたのであり、そのせいで人の悪意というものに疎く鈍いからだ。ゆえに、近右衛門及び

ネギの祖父は、麻帆良学園都市という一大拠点の強力な組織で守るという手段を選ばざるをえなかったのだろう。組織に所属させてしまえば、ネギに手を出すということはその組織を敵にまわすことであるから、ネギを狙う者達も手を出しにくいからだ。

しかも、麻帆良学園は侵入者の類には事欠かないのであり、強力な防備がひかれている。たとえネギ狙いで侵入者がきたとしても、ネギに悟らせずに秘密裏に処理することは十分可能である。そのうえ、ネギに自分が原因であるということを悟らせないことで、精神的な重圧をさげ健やかな成長を促すことができると考えたのではないだろうか。

また、学校生活とは社会生活の縮図であり、ネギに社会生活の基盤を身につけさせようという意図もあったのだろう。無論、あわよくば公私を支えるパートナーを見つけさせようという意図も多分にあったのであろうが。でなければ、わざわざ女子校の教師にはすまい。

以上の理由から、近右衛門は自身に考えられる最善の手をうったつもりであった。あわよくば、木乃香への魔法ばらしに一役買ってもらおうと考えてはいたが、基本的にはネギのためを思っていることである。ネギは近右衛門にとっても、友人の孫であり、かつての教え子の息子だ。政治的な意味とは切り離しても、大切な子であることにはかわりないのだ。

徹は、それを此処に至り理解した。同時に己が詠春の考えにひっぱられ、木乃香への魔法バレを恐れるあまりに、近右衛門をどこか偏見をもって見ていたことに気づいたのだった。

「学園長なりに最善の手を打っておられたというわけですか…。お話は分かりました。それで、私にどうしろというのですか？」

「他でも無い君には、今回の最終試験を傍観して欲しいのじゃよ。」

君が手助けしては、試験にならんからのう。」

「お言葉ですが、ネギだけならば、最初から手を出す気はありません。むしろ、喜んで傍観しましょう。それは学園長もお分かりのはずです。」

にも関わらず、こうして頼まれるということは、木乃香様も巻き込まれるということなのですね？」

原作からして、木乃香が巻き込まれるのは十中八九間違いないことだが、ここは知らないふりをせねばならない。知っているのは不自然だし、それに近右衛門の意図を正確に把握する必要もあるからだ。

「そうじゃ、わしの思った通りにいけば、間違いなく木乃香も巻き込まれる。君は、2・Aの成績管理をやったから分かるじゃろ？」

2・Aの成績が底辺にあることを。」

「存じています。上位クラスもいるにも関わらず、神楽坂をはじめとした5人の底辺クラスの者が、足をひっぱっていることも。」

「うむ。そこでじゃ、最終試験にかっこつけて問題生徒の学力向上を狙おうと思つてのう。その底辺5人のうちの一人と木乃香が所属する『図書館探検部』に、頭がよくなるという魔法の書の噂を流した。加えて、もし最下位だった場合、悲惨な事になるといふ噂も合せてのう。なんだかんだいつて、テストというのは日頃の積み重ねが物を言うものじゃ。困窮した彼等は必ずや飛びつくであろう。なにせ魔法の存在を知る明日菜君がおるのじゃ。魔法の書が実在すると考えても不思議ではあるまい。当然、好奇心旺盛で友人想いの木乃香のことじゃ、喜んでついていくじゃろう。まあ、最大の目的は、ネギ君が生徒という重石をつけて、どこまでやれるかを見ることがなのじゃが。」

「なるほど、前者は分かりました。しかし、後者は問題があると思いますよ。なにせ、今朝ネギは自身の魔法を封印しましたから。」

「ほう、それは知らなんだ。誰に強制されるでもなく、自分の意思で魔法を封印するとは、大したものじゃ。ここに来た時の彼からは考えられぬことじゃ。いい成長をしたようじゃのう。」

「はい、私も同感です。どうやらネギを過小評価していたようです。それでも試験を行うつもりですか？」

「うむ、むしろ好都合じゃ。ネギ君には、魔法をつかえないというところがどういうことか、骨の髄まで理解してもらおうとしよう。同時に魔法なしの状況で、彼がどう動くのか、どういう人間なのか見極めさせてもらおうとしようかのう。」

「今まで、甘い、甘過ぎると思っていたのですが、いつから方針を変更されたのですか？」

「君の言うとおり、わしの対応はネギ君にとって甘いものであった事は認めるが、その行状に何も思うことがないと考えているなら大間違いじゃぞ。わしとて、ネギ君の迂闊さには頭が痛いし、その精神的な幼さの危うさも憂いておるわい。」

「じゃから、それを改善する機会があるのならば、多少厳しくなっただ酷であっても、ネギ君には甘受してもらわねばならぬ。何より木乃香のためにもものう。」

「木乃香様のためですか？それはどういう意味ですか？」

ネギの話がおわり、本題である木乃香に焦点が移る。ネギの成長が

木乃香の為といわれ、思わず顔をしかめてしまう徹。その意味いかんによつては、この老獪な魔法使いとは完全に敵対することになるうからだ。

「のう、小宮山先生。君に一つ聞くが、木乃香に魔法とは一生無関係でいさせることは果たして可能なことなのかのう？もし、可能だとしても、その為に流される血は如何程のものなのかのう？その血の下に作られた日常を木乃香は喜ぶのかのう？」

「それは…。私が考えるべきことでも、判断すべきことではありません。私は、詠春様の依頼を果たすだけです。」

徹はかすかに考えこむと、すぐに首をふり冷徹な答を返した。それは己が考えるべきことではないのだから。そんなことを考えてしまえば、己は詠春の想いを裏切ってしまうかもしれないのだ。

「それは少し無責任ではないかのう？君も知つての通り、木乃香の魔力は強大じゃ。下手をすれば、極東一やもしれん。しかも、あの子はわしの孫にして、婿殿の娘じゃ。魔力の有無に関わらず、利用価値があるのじゃ。そんな木乃香が、魔法に関わらずに生を終えることなどできようはずがない。世界はそれを許すほど、優しくできていないのじゃ。現実には子供の夢物語とは違ふのじゃからな。君や刹那君が必死に守り、婿殿がいくら手を尽くして木乃香の平穩を守つたとしても、いずれどこかで綻びは必ずでるじゃろう。」

「…」

近右衛門の言葉に、徹は頷くほかない。なにせ、近右衛門の言っていることは、紛うことなき真実であるからだ。近右衛門の言つた通り、木乃香の魔力は強大である。異常魔力保持者であり、魔人とも

いえる肉体を持つ徹さえ凌ぐ。というか倍はある。原作でも、極東一といわれていたが、あれは紛う事無き真実だったと、徹は木乃香に会ったとき感じたものである。

しかも、知っているだけなのと体感するのでは大違いだ。木乃香の内を流れる魔力は、解放を待つ大河の奔流のように感じられ、恐怖すら覚えた。解放されたら、瀑布となって荒れ狂うであろうそれを心無い者に悪用された時のことを考えて……。あれを体感すれば、魔法使いならば誰もが羨望を抱くであろうし、利用しようとする者も後を絶たないに違いない。それ程まで、木乃香は魅力的に映るのだ。異常魔力保持者として退魔の仕事をしてきた徹はそれをよく知っていたし、契約時に見せられたトールズの記憶からもそれは明らかであった。

さらに、木乃香の出自もただけでない。その強大な魔力だけでも、魔法使いにとつて十二分に魅力的な木乃香であるが、彼女の魅力はそれにとどまらない。その出自は、近衛という名家の出であり、英雄にして関西の長である詠春の娘であり、関東の理事である近右衛門の孫である。その身柄の利用価値たるや、政治的にも経済的にも計り知れないものなのである。

「まあ、麻帆良にいるうちであれば、わしは全力を尽くして木乃香を守る。君達もおることじゃしな。少なくとも、命の危機になるようなことはないじゃろう。しかし、木乃香はいつまでも麻帆良にいるわけではないし、わしは老い先短いし、婿殿も木乃香より先に死ぬであろうことは間違いない。そうして、麻帆良の外で庇護者もない木乃香は、どうやってその身を守るのじゃ？自身の魔力の使い方も知らぬ身では、せつかくの強大な魔力も宝の持ち腐れじゃ。何の抵抗もできんじゃろう。そして、利用され使い潰されるじゃろう。あの破格ともいえる魔力は、魔法関係者にとっては垂涎的じゃる

うからな。

君は、そうなる状況を放置するというのかね？今が良ければそれでいいと？己の仕事の期間内だけ、木乃香の平穩を守れば、後はどうなるうと知った事ではないというのか！」

そんなわけで、現状自衛の手段を持たぬただの一般人である木乃香は、心無い者達にとって格好のカモなのだ。無論、近右衛門や詠春も、木乃香の魔力資質に関しては、手を尽くして隠蔽しているが、それにだって限界があるし、魔力は徹のような例外を除けば、基本的に遺伝によるものであるから、それにあたりをつけて木乃香を狙ってくる輩もいるだろう。また強大な魔力の有る無しに関わらず、単純に詠春の娘、近右衛門の孫という人的価値を利用しようとする狙ってくる者もいよう。

つまるところ、近衛木乃香という少女は、狙われない理由を探す方が困難な少女なのである。

ゆえに木乃香の将来、先々のことまで考えれば、近右衛門の無責任という指摘もあながち間違っているわけではない。だが、同時に徹の先の答も間違っているわけではない。彼は、あくまでも仕事として、木乃香の護衛を請け負っているのであり、その仕事期間を過ぎれば、木乃香がどうなるうと知った事ではないというのが、プロとしての当然の認識であるからだ。

「…」

だが、徹はそれを言うことができない。木乃香は彼にとっても、この世界を現実であるという認識を己に刻みつけ、確固たる信念へと昇華させるきっかけをくれた大切な少女である。刹那や詠春とは違い、背中が預けられるという程には認めていないし、相互理解も足りていないが、木乃香が徹にとって特別な存在であることに変わり

はないのだ。

徹としては、詠春と同様に木乃香には、魔法とは関わりの無い平穏な生活を送って欲しかった。原作からして、魔法世界は危険に満ち溢れているし、木乃香は忘却しているが、木乃香は現実に魔法関係者に誘拐されたことすらあるのだから。

それに魔法を得るということは、人を殺せる凶器を得るのと同義である。初歩の攻撃魔法である魔法の一矢ですら、人を殺せるのだ。木乃香の強大な魔力を注がれた魔法は、どれほどの被害を出すか想像もつかない。もし、誤って人を傷つけたとき、木乃香はそれに耐えられるだろうか？いや、負傷くらいならいいかもしれない。だが、殺めてしまったとしたらどうだろうか？優しい木乃香に耐えられるはずがないと、徹は思う。死を一度体験し、前世合わせて30年以上を生きた徹ですら、人外となりはてたとはいえ人間を殺した時のすなわち最初の殺人を犯した時の衝撃と痛み、そして罪の意識は片時も忘れたことがないし、彼がそれと折合をつけるのに要した時間は年単位なのだから。

（ふむ、意外じゃのう。こやつ、仕事に徹しているかと思えば、それだけではないようじゃのう。刹那君と同じように、仕事とは関係なくこやつなりに木乃香を守る理由があるようじゃのう。こやつの手綱を握るために、少なくとも今後の主導権を握るためにも、ここは徹底的にやっておくかのう。）

「どうしたのじゃ？君のことじゃから、そこまで関知することではないと思うっていたのじゃが、言葉もないか。では、認めるのじゃな？わしの言い分が正しく、わしの方に理があるか？」

徹の態度に内心で驚きながら、徹の心情を推察する。一方で、ここぞとばかりに徹への追求もやめない。

「いえ、確かに学園長の言い分も、ある意味では正しく一理あるとは思いますが、それが全てだとは思いません。木乃香様が魔法使いになれば、それを狙う者達は今までの比ではなくなるでしょう。数も手段も。なにせ公の舞台にあがるのですから、嫌でも知られずから不埒な事を考える者も少なくないでしょう。それに魔法使いであれば、一般人である現状とは異なり、魔法を手段としても用いたとしても許容されますから。そうなれば、今以上に木乃香様を守るのは困難になります。」

だが、徹とてあっさり丸め込まれるわけにはいかない。詠春とも、木乃香に対する魔法バレについては話しあったことがあるのだ。その時に改めて聞かされた娘への想いと、魔法世界の不条理の数々は、心に刻まれ記憶に新しい。

それに、一般人への魔法使用は、基本的に忌避される行為である。これは魔法使いの矜持というか、一般人を下にみているというか、職業倫理というか、何とも表現しづらいものだが、一般人への魔法バレを防ぐための記憶消去や記憶操作などの例外を除けば、原則的に禁じ手とされるからである。

ゆえに、護衛の観点からいえば、木乃香が強大な魔力をもつだけの一般人であるのはありがたい。下手に手を出されるよりは守りやすいし、木乃香に対し魔法を用いようとするのは極少数の過激派くらいのものであるからだ。

「むう、そうはいうがのう。木乃香が魔法を覚えれば、その強大な魔力と相まって大きな戦力となるはずじゃ。自衛にも大いに役立つじやろう。そのデメリットは見過ごせるものではないじやろうか？」

「学園長も、質より量・多勢に無勢という言葉を知っておられるでしょう。圧倒的な数の前には、質も少数の人間なども脆いものです。」

中には圧倒的な個を持って、数を凌駕する化物もいますが、木乃香様がそのタイプとは到底思えませんし…。

それに木乃香様の魔力がいかに強大であったとしても、その魔法適性が自衛に向いているとは限りません。よしんば、攻撃魔法の適性があったとしても、木乃香様に他者を傷つけることができるでしょうか？」

食い下がる近右衛門に、徹は淡々と厳然たる事実とあり得る可能性を指摘する。

「木乃香は優しい子じゃからのう…。」

さしもの近右衛門もこれには反論できない。孫の性格を考えれば、十分にありうることだからだ。

「さらに言うならば、魔法使いになるということは、木乃香様に限って言えば、一般人として生きる道を完全に閉ざすことにほかなりません。あの強大な魔力、一旦表にでてしまえば、隠すことは到底不可能でしょうし、周りもそれを許さないでしょうからね。」

先も言った通り、魔法使いは『魔法』という名の凶器を持っているのと一緒なのである。その中でも屈指の凶器の持ち主になるであろう少女を、周りが放っておくはずがない。まず、間違いなく魔法世界との関わりを絶つことは不可能になるだろう。ましてや、一般人に戻るなど許容されるはずがない。

流れる血と暴力と不条理のレベルが違う魔法世界へと永久就職である。自由な恋愛もままならないだろうし、西と東のどちらに所属するのかで、政治的にも一悶着あるだろう。木乃香の平穏な生は終止符をうたれることになる。

だからこそ、詠春は望むのだ。木乃香が可能な限り、魔法世界と関係のない平穏な生を。政治的なしがらみにもとらわれないで、己が意思のまま自由に生きてくれることを。徹もそれに賛同する。木乃香の意思で魔法に関わったならともかく、誰かの介入の結果、そう誘導されたのであれば最悪だ。それは木乃香の意思を尊重しているように見えて、その実ねじ曲げているのだから。徹は、それを許与することはできない。

「君や婿殿の言い分も分からぬことではない。しかし、それは問題の先送りであって、現実を見ていないのではないか？木乃香に魔法という自衛の手段を早期に与えることこそが、木乃香の将来のためになるとは思わぬか？」

「いいえ、私も詠春様もそうは思いません。我々にとって、木乃香様の意思を尊重することが重要です。木乃香様の生きる道を我々の勝手な判断で狭めるのは、あってはならないことだと思います。それに学園長は、問題の先送りとおっしゃいましたが、現実を見るなら、木乃香様は成人どころか高校生にもなっていない義務教育中の思春期真只中の少女に過ぎません。今、人生の選択を求めるのは時期早尚であると考えます。そして、我々は、いつか魔法がばれるのだとしても、木乃香様が魔法に関係なく平穏な日常を一分一秒でも長く過ごすことは、何事にも代え難い価値があるのだと信じます。」

近右衛門の辛辣ともいえる問に、徹は即答する。そこに逡巡や迷いは見られない。彼は近右衛門との問答の中で、自身の思いを今一度新たにしたのだった。同時に、近右衛門との避けられぬ対立も覚悟した。

「そうか。残念じゃのう。どうあっても、相容れぬようじゃのう…。」

「徹の言葉を聞き、その表情から近右衛門は全てを察した。目の前の男とは、少なくとも木乃香のことについては、決して相容れぬことを……。そして、どこか甘い理想（近右衛門の主観）を即答できるその若さを少し羨ましく思った。だが、自身の意思は曲げない。近右衛門はあくまでも自分のやり方で、木乃香の為に動くつもりであった。」

「では、話を戻そう。わしはネギ君を木乃香の防波堤にしようと考えておる。英雄の息子というネームバリューとナギに匹敵する潜在能力は、木乃香の強大な魔力から焦点を外させるには十分じゃからな。」

さらに、君ならば気づいているじやろうが、2-Aは魔法生徒をはじめ、魔法素養のある者、特殊技能を持つ者などで構成されておる。木を隠すなら森の中じゃ。あわよくば、ネギ君には2-Aから数人パートナーを作ってもらい、その一人に木乃香を潜り込ませる。そうすれば、複数いる従者の一人でしかないとして、その存在を薄くできるじやろう。」

「じゃが、今のネギ君には問題がありすぎる。現時点では、到底木乃香を任せることなどできん。」

しかし、わしは木乃香にもネギ君自身にも、猶予がないと考えておるので。ゆえにこちらで成長を促そうというわけじゃ。ネギ君には、精神的な成長を。木乃香には、魔法という非日常と触れ合う機会を。」

「なるほど、理解しました。先も述べた通り、私としてはネギについて干渉するつもりはありません。あまりにも目が余れば、手出しをするかもしれないですが、余程のことではなければ動くつもりはありません。防波堤でも、なんでも利用したらよろしいでしょう。」

しかし、木乃香様は別です。学園長の意図するところは、詠春様の依頼に真つ向から対立します。したがって、傍観しろという要請を受けることはできません。」

学園長は真意を赤裸々に明かすことで理解を得ようとするが、最早徹に交渉の余地はない。あっさりと切って捨てる。

「そうか…。ならば仕方がないのう。わしも使いたくは無かったが、使わざるをえまい。のう、小宮山先生。君は、この書類に見覚えはないかね？」

そう言つて、机から一部の書類を取り出すと、徹の前でひらひらさせた。

「それは雇用契約書ですか？麻帆良学園教師としての…。」

「そうじゃ、これに君は確かにサインしたはずじゃ。ほれ、ここにある。」

契約書の中の徹の署名捺印をみせて確認させる近右衛門。

「ええ、確かにしましたが、それがなんだというのですか？」

意味が分からずに問い返す徹に、近右衛門は不敵な表情で契約条項のページを見せる。

「そこに書いてあるじゃろう。職務上必要な業務命令には原則的に従うことと書いてあるじゃろう？」

「なっ、まさか…?!」

「君はネギ君と違って、正規の教員としても雇われておる。当然、君には教師として果たすべき義務があると言っわけじゃ。今回は緊急のテスト問題作成という業務を、君は果たさねばならんのじゃ。」

「馬鹿な、そんな理屈がまかり通るものか！俺は、契約時にいつたはずだ。依頼を受けるか否かは、俺が判断すると！大体、俺の本業は木乃香の護衛だ！偽りの身分の方を何故優先せねばならん?!」

嘲笑うかのように言い放つ近右衛門に、徹は激昂する。思わず仕事モードが崩れ、素の言葉で話してしまうほどに…。

「君がそれを主張したのは、護衛及び侵入者排除の任務についてのみじゃ。君の独自の判断で動くことも、教師としては認めたくはない。」

「くっ、確かに…。だが、原則としてとある。だが、俺の用事は本業の方だし、この例外にあたるのでは？」

近右衛門の言葉に徹は齒噛みするほかない。自由に動ける特別生活指導員という立場とそれに付随する特権を、要求するでもなく与えられた徹は、これなら教師をやるのが護衛の妨げになることはないと安心してしまい、教師の契約書については必要以上の精査をしていなかった。問題の条項も読んでいたが、その当時は当然の要請だと思い、異議を挟まなかったのが裏目に出ってしまった。

「それを認めるかは、わしの裁量にかかっておる。当然、今回については認めぬぞ。大人しく、テスト問題の作成をするのじゃな。」

「この狸爺!」

「フオフオフオ、ようやく一矢報いたわい。それとテスト問題の作成が終わるまで、ここから出られぬように結界をはってある。放り出して、駆けつけようとしても無駄じゃぞ。」

結界も壊せぬように要石を用いて、外から多重に囲む形ではっておる。しかも、対象は君のみに限定して作用する特殊概念の結界じゃ。君以外には何の意味もないが、君に対しては絶対の強度を誇る。いくら君でも破壊することは不可能じゃ。

この結界から脱出したくば、一刻も早くテスト問題を完成させることじゃ。それ以外方法はないぞ。」

いつの間にはられていたのか、結界が幾重にも張り巡らされているのを見て、徹は愕然とする。この多重結界に今の今まで、己が気づけなかったことに。

「君もまだまだ青いのう。本来は君に自主的に協力してもらうつもりじゃったが、君があまりに頑固なものでのう。悪いとは思って、少々強引な手段を取らせてもらったのじゃ。」

大体、君はおかしいとは思わなかったのかね？なぜ私が、君に自身の意図を明かしたのか？その意味を…。」

確かに交渉が決裂した以上、近右衛門が自身の狙いや意図を話す必要性は皆無だ。むしろ、徹の態度を頑なにするだけであり、逆効果であるはずなのに。その狙いは、徹の意識を話事態に集中させることにあつたわけである。しかも、あらかじめ仕掛けておいたものを起動するだけであり、その上、徹がこの部屋からであろうとした時のみに作用するように設定され、結界の存在自体を感知しにくくしていたのだ。

「くそつ、最初から…こういう手段も考えてたというわけか。まん

まとしてやられましたよ、学園長！」

「食事等必要なものは心配しなくてもよい。食事は時間をみはからって、必要なものは内線でいってくれれば、持ってこさせるからう。トイレはすぐその扉じゃ。例外的に出入できるが、そこから逃げようなどとは思わぬことじゃ。トイレにもきつちり多重結界をしかけておる。君が脱出を試みた時点で発動するようになっておる。トイレに幽閉されることになるぞ。それが嫌なら、大人しくテスト問題の作成に注力することじゃ。ではな、君がどんな問題を作るのか期待させてもらおうとしようかう。」

悔しがる徹を尻目に、御丁寧に状況を説明してくれた学園長は、勝者の笑を浮かべて去っていく。

「くそっ！あの狸爺め、覚えてやがれ！絶対にこのままじゃ済まさんからな！
ネギの奴、俺がいない間に木乃香フラグとか立ててたら、半殺しにしてやる！」

後には、負け犬ばいセリフと八つ当たりの叫びを上げる徹が残るのみであった。

感想ありがとうございます。励みになりますし、参考になります。時に私が思いもしなかったことや、忘れていたことなどを指摘して頂き、大変助かっております。ありがとうございます。ちなみに感想へのレスは、説明が必要な時と誤字の指摘に対する修正だけ行っております。全てにレスをつけるのは困難な状況にあり、つけられない方には、大変申し訳なく思いますがご容赦を。感想自体は、しっかりと読ませていただいていますので、こりずに書いていただけると嬉しいです。

今回の話は、リアルが忙しいこともありましたが難産でした。筋道は決まっているのですが、中々納得できるものが書けず、書いては消しての繰返しでした。特に学園長と主人公のやりとりとは、言いたいことを言わせてるうちにどんどん長くなってしまい、最後の方などは、なんだか安っぽくなってしまった気がしますし、こじつけっぽい感じがします。結果、図書館島探索がまるまる次話に移る事になってしまいました。うう、もっと文才が欲しいです。この話は修正するかもしれません。

次話は4月末にはあげたいと思います。原作より魔法の封印が早く解けるネギ君は、何をなすのか？

相容れない者（前書き）

何度も改訂して真に申し訳ありません。結局、全て覚えている形にしました。

これを最終改訂にしたいと考えていますが、誤字や矛盾があれば遠慮なくご指摘下さい。

相容れない者

その日、ネギはある決意をしていた。明日菜のドッチボールにおける笑顔が、彼の中で鮮明に残っていたのだ。あの時の笑顔は、魔法を使っていたらけしてみるのは叶わなかったであろう。本当の意味で、ネギは知ったのだ。時に魔法を使わない方が、良い結果を出すことを。同時に、魔法を使うべき場面とは、良く考え吟味するものなのだ。これは、試合終了後に明日菜を守るうとして、意図せず魔法を発動させてしまったのが原因である。この時、意図して使ったものではないにもかかわらず、それまで魔法使用に肯定的な意見をくれなかった明日菜が笑顔でそれを認めてくれたことは、彼にとって重要な意味を持っていたからだ。

以上の事から、ネギは魔法を使えないということはどういうことか、魔法を使うべき状況とはどういうものなのか、理解するために3日の間、魔法を封じてみることにしたのだ。彼にしては、格段の進歩と言えた。優秀で根が素直で「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」に強い憧れを抱き、ただひたすらに父の背中を追っていたネギにとって、自ら魔法を封じる＝魔法を使わないことを選ぶのは、それまでの魔法に全精力を傾けてきた彼の生をある意味否定するものであるからだ。それは、魔法は全能ではないという祖父の教えを、一端とは言え本当の意味で理解に至ったことでもある。

「ふう、これで準備はできた。後は…」

今しがた書き上げた魔法陣を満足そうに見つめるが、すぐにその表情は暗く沈んでいく。中々踏ん切りがつかない様子である。まあ、無理もないことである。

なにせ、ネギにとっては己の人生の殆どを費やしたものが魔法であ

る。それを一時的とはいえ、自ら捨てるのは多大な意思の力を必要としたのだ。

「何を迷ってるんだ、僕は。あの時の明日菜さんの笑顔を忘れたのか。僕は、あの時自分の力であの笑顔を浮かべて欲しいと思っただんじゃないのか。それに本当の意味で、お爺ちゃんの言っていた事の意味を、徹さんの言葉の真意を、僕に足りないものを知るために必要なことじゃないか！」

僕は、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になって、父さんに会うんだ。こんなところで、足踏みなんてしてられないんだ！」

ネギは、明日菜への想いと少年特有の負けん気、そして年に似合わない意思の強さをもってそれを成し遂げた。描かれた魔法陣の中央に進み、高らかに詠唱を唱える。

「トリアtria ファイラfila ニグラnigra プロミッシウpromissiva ミmi
ヒhilimitationem ベルper トレースtres ディエスdie!
i

誓約の黒い三本の糸よ 我に3日間の制約を！」

3本の黒い糸が現れると、ネギの腕に巻きつき焼き付いたようにネギの腕に同化する。それが終了すると同時に、ネギの体から魔法による恩恵がすべて消え去ったのだった。

「よし、これで!…あつ」

勢い込むネギだったが、いきなりずっとこける。それもそのはず。彼は、幼少の頃から魔法の勉強に時間を費やしてきたのであり、外を駆け回るような腕白少年ではなく、インドア派の貧弱な少年に過ぎないからだ。つまり、平時の運動能力は魔法による補助の賜物であり、それを失えば結果は言わずもがなである。その上、魔法の補助

を受けている時の感覚で体を動かそうとしたのだ。意思と体の反応が噛みあわないのは当然であった。

「痛い…。魔法がないと、こんなに動きづらいんだ。今まで、魔法で身体補助してきたから、分からなかったや。考えてみれば、僕あんまり運動してこなかったもんね。」

「うっ…。自業自得なのかな。これからは少し運動しようかな」

早速、魔法なしでの不便さと、いかに自分が魔法に頼り切りであったかを理解するネギであったが、彼の試練はまだまだ続く。なにせ、今は早朝であり、寝る時間を差っ引いても丸二日は、魔法なしで過ごさねばならないのだから。

「うん？ネギ、どうしたんだ？えらい難儀しているようだが…」

徹は朝食を用意しながら、どこか不自然な動きをしているネギに問た。

「やっぱり分かりますか？流石徹さんです。実は、今朝魔法封印の儀式をしまして。今まで、魔法に頼り切ってたんで、魔法の補助なしだと体が思うように動いてくれなくて…」

苦笑して答えるネギに徹は目を見張る。徹にとって、驚天動地の出来事であったからだ。ネギが自分の意思で魔法を封じる。彼は、それがどんなに困難なことか、実際にネギと過ごして、それを痛感していたのだ。ネギにとって魔法とは切っても切れないものなのだと、半ば本気で考え始めていた徹は、己がネギを過小評価していたことを認めざるをえなかった。

（俺としたことが見誤ったらしい。原因は先日的一件だろうが、俺はそれでもネギに原作のように、自分の意思で魔法を封じるのは無理だと思っていたからな。

だというのに、現実には見事自分の意思で魔法の封印を決意し、実行した。いやはや、大したものだ。

ネギも成長しているのだな…。しかも、何気に原作より時期が早い気がする）

「僕も、これからは体を鍛えた方がいいのかなあ…？徹さん、呆然としてますけど、どうしたんですか？」

あまりの衝撃に己の思考に没頭してしまっただらしい。ネギが不思議そうに尋ねてくる。

「いやいや、なんでもない。それにしてもよく決意したな。魔法を封印するなんて」

慌てて取り繕う徹だが、ネギは特に疑問を覚えなかったのか徹の言葉に照れたように答える。

「3日間だけですけどね。僕、今まで魔法を使えないということがどういう事か分からなくて…。徹さんの言葉にお爺ちゃんの教え、その本当の意味を知るためにも必要なことだと思っただんです。それに…（あの時の明日菜さんの笑顔を）…」

「なるほどな、よく考えよく決意したな。今のお前なら、きつとその3日間で多くのものをえられるだろうよ。それにしても…クククッ」

ネギの答に心から感嘆し、感心する徹。一方で湧き上がる笑いを抑えることができない。

「徹さんにそう言って貰えると心強いです。…って、なんで笑ってるんですか？」

徹の零した笑に訝しげに問うネギ。

（これが笑わずにいられるか！小声で聞こえないように言っただつもりだろうが、俺の五感は常人の域を遙かに超えてるんだよ。ばつちり聞こえちゃったよ。

最大の理由は、明日菜かよ！なんだかんだ言っつて、しっかり男の子してるな。このネギ坊主め。

それにしても、本当にいい仕事するなあ、明日菜。俺、いらんじゃねえ…。やべえ、正鵠を射た気がする…。もしかして俺、マジでいらん子？なんだか凹んできた）

ネギの間に笑顔でごまかし、ワシヤワシヤと頭を撫でながら、そんな事を思っ徹であった。

その背中に微妙に哀愁が漂っていたのは、気のせいではないだろう。

その日、期末試験についての職員会議があった。本来なら、担任であるネギも参加するべきなのだが、実習生である彼に発言権などないし、そもそも彼は名目上形式上の担任に過ぎないので問題にならない。実際、担任としての仕事は、細かな事務仕事をはじめ職員会議等の会議への出席に至るまで、指導教員であるしずなと副担任である徹が、協力して行っているのが実情であった。でなければ、生徒と同じ時間に一緒に登校などできようはずもない。

もつとも、しずなも徹もネギをそのことで責めようとは考えていなかった。ネギに一般教員と同様の事務能力など望むべくもないとわかってはいるし、やはりネギは子供であるからという共通認識があり、しずなは子供なのだから、ゆっくり成長してくれることを望んでいたし、徹は教師としての職務より、生徒と触れ合うことでネギの精神的な成長を望んでいたからだ。

徹はネギとは違い、正規の教員として学園に雇われている。護衛のために必要であろう様々な特権を与えられているものの、一方で正規の教員としての職務遂行の義務を負っている。そのため、ネギとは違い2 - Aだけでなく、他クラスにも授業を受け持っているし、テスト問題の作成などのお鉢が回ってくることもあるのだ。

そんなわけで、徹はまさに今しがた任されたテスト問題の作成をどうすべきか思案に暮れていた。本来なら、もうとうに作成されていいはずのものである。しかし、なぜか2年の日本史のテスト問題に限り、何かの手違いで作成されていなかったのだ。そして、その作成について何を思ったのか教務主任が、突然指名してきたのであった。

（俺の担当科目の日本史で、しかもよりもよってピンポイントで2年を忘れるなよ！ああ、どうしたものかな？本来任せるはずの俺と同教科の2年の担当教員が、入院していて不在だから仕方のないことかもしれないが…。今後の為にせつかくだから経験を積んでくれといわれたけど、教師は本職じゃないんだけどなあ…。むしろ、ありがた迷惑というかなんというか。

まあ、ネギに教師としての責務を果たせと説教した身としては、教師としての仕事を疎かにもできんよな。仕方がない、『眼』を使っても速攻で終わらせて、本業に支障がでないようにするしかない

な)

続く職員会議の内容に耳を傾けつつ、つらつらと考えていると、視界に何か考え込んでいるような様子の学園長こと近右衛門が映る。徹は、背中に怖気が走るのを感じた。

(あの狸爺、考え込んで、また何か悪巧みでもしているのか？うーん、ネギの魔法封印があったから、その近辺で起きた出来事って、何があったか？…確かネギの最終試験と図書館島探索だったと思うが。

木乃香はあれに関わっていたかな？バカレンジャーとネギ&明日菜のどかと早乙女がいたのは覚えているが、肝心の木乃香はどうだったか？)

原作では、すっかり木乃香も探索側として参加しているのだが、徹が明確に覚えていないのも無理はない。図書館島探索における主役はバカレンジャーであり、その能力の凄まじさに焦点が当てられた話だったからだ。あの話における木乃香は完全におまけであり、活躍の場面は無きにも等しい。ある意味、バックアップとして残ったのどかと早乙女より影が薄いくらいなのだから。

(くそ、覚えなおしたとはいえ、元々本筋以外はうる覚えだからな、どうにも細かいところは記憶が曖昧だな。だが、ネギはともかく明日菜が参加している以上、親友である木乃香が参加している可能性は高い。元々好奇心旺盛な娘だし、綾瀬と同じく図書館探検部だしな。

これは、学園長に釘を差しておく必要があるかもしれない…)

とはいえ、徹は現実に副担任として得た情報と総合して推測することで、木乃香が巻き込まれる可能性が高いことを導き出していた。

原作が絶対のものではなく、この世界は紛う事無き現実であると認識し理解している以上、原作にはなくても、今生きる現実にはありえる可能性を想定しておく必要があるからだ。

特に徹がここにいる最大の理由である木乃香の護衛においては、一分の油断も許されない。なにせ、最大の障害が身内にいるし、その人物はこの地の最高権力者であるのだから。何が起ったとしても、不思議ではない。

徹は、木乃香を守る上で絶大なアドバンテージになるであろう原作知識を、最大限に活用するつもりであった。木乃香の護衛を引き受けた以上、ネギを中心とする騒動に巻き込まれる可能性は高い。無論、それを避けるために最大限の努力をするつもりではあるが、全てを避けるのは無理があるからだ。その上、木乃香に対する魔法における確執で、学園長と真つ向から対立している現状では、己に確実に情報が入ってくる可能性は低い。最低限の情報提供くらいで、それ以上は基本的に望めないと思った方がいいと考えていたのである。

また、いかに原作知識を持っていても、今回のような学校行事である試験・修学旅行等を除いて、明確な日時が定かではないということであった。出来事の先後はともかく、細かな出来事については、正確な日時など知りようがないのだ。しかも、自分というイレギュラーがいる以上、突発的な予想できない事件が起こることもあり得るからだ。実際、惚れ薬騒動は事件にこそならなかったが、原作とは違う日時に起こっている。

ゆえに原作知識と現実との擦り合わせはおろそかに出来ない。細かな日時は定かではなくても、原作知識と現実の情報を総合すれば、ある程度予測することは不可能ではないからだ。どんな事件があったとしても、先んじて対応してしまえば問題はない。

ただ一つ問題があるとすれば、それは徹の感情である。彼は、無意識の内に『既知』を嫌っていたのだ。

なぜなら、知っているということは生を色褪させる。現実を現実として認識させない。知っているとおりに物事が進むのは、空虚で退屈な芝居を見ているのと変わらないからだ。極論を言えば、生を実感できないのである。生きているという気がしない。何か舞台の上である人物を演じているだけの役者のような気すらする。そんなものが果たして生と呼べようか。彼はそれを無意識の内に否定していた。もつとも、『既知』を嫌い、『未知』を望むその意思は、もしかするとあの御方が『未知』を狂おしいほどに求めていたことに関係しているのかもしれないが。

そう、実のところ、この世界において一人の人間『小宮山徹』として生きることを望む徹にとって、本来この世界に生きる人間は知り得ないはずである原作知識、特に物語の内容を知っていることは苦痛でしか無かったのである。

しかし、徹の高い職業倫理は、原作知識の忘却を明確に否定していた。それを忘れることは罪であるとすら考えていた。木乃香の護衛を引き受けた以上、その為に最大限の努力をするべきだと彼のプロ意識は訴えていたからである。それに原作において描写されたのは、ネギに関わる出来事であって、日常の描写は意外に少ない。イレギュラーである自身の生活など、原作には当然ないし、積極的にネギに関わらなければ、『既知』を感じることを減少させることは可能であることを考えれば、そんなに苦痛を強いるものでもない。

もつとも、現状ネギに積極的に関わらざるをえない立場にいる為、徹の苦痛は結構なものがあつたが、彼というイレギュラーが介入したことで、現状でさえ様々なことが原作とは異なってきた。彼が『既知』を感じなくなるのは意外に早いかもしれない。

結果、現在の徹は、時に『既知』という苦痛に苛まれながら、原作

知識を現実と擦り合わせて、事に当たっている。

「ふむ、今日はこれで終わりのか。皆、大変だと思いが今日も宜しく頼む。では解散。あ、すまんが小宮山先生は、後ほど学園長室へ来てくれ。ネギ君について話があるのでは。」

そんなことを考えている徹を余所に会議は終了し、近右衛門に呼び出される。

「はい、分かりました。後ほど伺わせて頂きます。（このタイミングで俺を呼び出すとは、やはり木乃香も巻き込まれるということか？ネギの最終試験自体には、俺が介入することがないのは分かっているはずだしな…。やれやれ、こいつはまた揉めそうだな）」

内心で深く溜息をつきながらも、徹は丁寧に返答する。口調も柔らかで笑顔のままだったが、目は少しも笑っていないかった。

「それでどのような御用件でしょうか？」

学園長室に入るなり、徹は単刀直入に尋ねた。

「せっかちじゃのう。少しは会話を楽しもうとは思わんかね？」

そんな徹に対し、飄々と対応する近右衛門。

「学園長と私ですか？…ありえませぬ。少なくとも現状の我々の間柄では」

「ふおおおお、身も蓋もないのう。少しは考えてくれてもいいじやろくに」

即答する徹にどこ吹く風で、わざとらしく笑って言う近右衛門。

「よく言いますよ…。それで何を企んでいるんですか？」

「企むとは人聞きが悪いのう。わしが何を企んでいると言うのかね？」

呆れながら問う徹に、近右衛門は平然と疑問を返す。

「会議の時に何か考え込んでいらしたようですからね。大体、何も企んでない人が、私を呼ぶ意味が理解できませんね。腹の探り合いはいらないんで、さっさと本題に入ってくれませんか？」

「ふおおおお、そう急くこともあるまいに。まあ、そうじゃな。別に惚ける必要のある事でも無し。本題に入るとしようかのう。さつきも言った通り、これはネギ君に関わることでな。すまんが、今回だけはわしの頼みを聞いてはくれぬか？」

「私の本来の仕事は木乃香様の護衛ですから、頼みを聞くかどうかは明言できません。でも、とりあえず話だけは聞きましょう。頼みを聞くか否かは、それによって判断させて貰います」

珍しく神妙な態度で頼む近右衛門だが、徹はあくまでも言質を取らせない。全ては聞いてからという姿勢を崩さなかった。

「ここまで言うても、あくまでも言質をとらせぬとは、ほんに抜けないのう。やれやれ、降参じゃわい。今回の頼みとは他でも無い。

ネギ君の最終試験のためじゃ。ネギ君が魔法使いとしての修行のためここに来たことは君も知っていよう」

「はい。ですが、最終試験ですか？はつきり言って、時期早尚だと思っておりますが…」

呆れたように深くため息をつくとき近右衛門は目的を語った。徹はそれに懐疑的な言葉を返す。今までネギの所業を間近で見てきた彼にとって、それは当然の帰結である。

「君の言わんとすることは分かる。確かにネギ君は魔法使いとしては未熟じゃ。肉体的には言うまでもなく、精神的にも酷く幼い。君も見てきた通り、この学園に来てからの彼の行状は、正直いって目を覆いたくなる。根は真面目で素直でも、やはりあのナギの息子じゃということなのかもしれぬ。

じゃが一方で、魔法技術だけを見ればネギ君が優秀なのも事実じゃ。そしてなにより、彼は紛うこと無き英雄の息子じゃ！加えて、あの年で旧世界の魔法使いの重要拠点である麻帆良に来たということ、彼に期待をかけるものは少なくないのじゃ。

そんなネギ君をいつまでも見習いのままにしておくのは、周りが納得せぬし危険も大きいのじゃ。英雄の息子とは言え、見習いならばどうとでもできる権力を持つ人間が、英雄の血脈を利用せんとする者の中には幾人もおるのじゃからな。だというのに、ネギ君は、自分がどういふ存在なのか理解しておらぬ。一つ間違えば、戦争の引き金になることも、己が魔法使いとして優秀なことが、周りにどういふ思いを抱かせるのかを…。

故に一刻も早くネギ君を一人前の魔法使いにし、同時に教師として麻帆良学園に所属させる必要があるのじゃ。そうすれば、早々手出しはできんからのう」

「なるほど、そういうことですか…」

（ネギの早すぎる最終試験にはそんな理由があったのか…。麻帆良学園と教師としての身分は、幼すぎるネギを守るための鎧というわけだ）

近右衛門の説明に色々腑に落ちなかった事が、理解できる。近右衛門の説明が真実なら、彼にとっても本来ネギの最終試験は早すぎるのだろう。魔法技術はともかく、ネギは他のことを理解していなさ過ぎる。恋する少女に失恋の相がでていると真つ向からいつてしまふぐらい、ネギは世間知らずだし、なにより人間の悪意というものを理解していない。そう、ネギは、自分に周りが寄せる多大な期待と共にそれに勝るとも劣らない程の悪意がむけられている事を知らないのだ。そんな彼を守るには、本人の自覚を促すか、周りの人間が気をつけてやるほかないのだ。

現状、ネギの自覚を促すのは難しい。なにせ彼は子供だし、魔法を学ぶことにその生の大半を費やしてきたので、世間知らずであることは先も述べたとおりである。加えて、ネカネをはじめとして、彼の身近な人間は基本的に過保護で甘やかしてきたのであり、そのせいで人の悪意というものに疎く鈍いからだ。ゆえに、近右衛門及びネギの祖父は、麻帆良学園都市という一大拠点の強力な組織で守るという手段を選ばざるをえなかったのだろう。組織に所属させてしまえば、ネギに手を出すということはその組織を敵にまわすことであるから、ネギを狙う者達も手を出しにくいからだ。

しかも、麻帆良学園は侵入者の類には事欠かないのであり、強力な防備がひかれている。たとえネギ狙いで侵入者がきたとしても、ネギに悟らせずに秘密裏に処理することは十分可能である。そのうえ、ネギに自分が原因であるということ悟らせないことで、精神的な

重圧をさけ健やかな成長を促すことができると考えたのではないだろうか。

また、学校生活とは社会生活の縮図であり、ネギに社会生活の基盤を身につけさせようという意図もあったのだろう。無論、あわよくば公私を支えるパートナーを見つけさせようという意図も多分にあったのであろうが。でなければ、わざわざ女子校の教師にはすまい。

以上の理由から、近右衛門は自身に考えられる最善の手をうったつもりであった。あわよくば、木乃香への魔法認知に一役買ってもらおうと考えてはいたが、基本的にはネギのためを思つてのことである。ネギは近右衛門にとつても、旧友の孫であり、歳の離れた友人の息子だ。政治的な意味とは切り離しても、大切な子であることにはかわりないのだ。

「学園長なりに最善の手を打つておられたというわけですか…。お話は分かりました。それで、私にどうしろというのですか？」

「他でも無い君には、今回の最終試験を傍観して欲しいのじゃよ。君が手助けしては、試験にならんからのう」

「お言葉ですが、ネギだけならば、最初から手を出す気はありません。むしろ、喜んで傍観しましょう。それは学園長もお分かりの事です。

にも関わらず、こうして頼まれるということは、木乃香様も巻き込まれるということなのですか？」

原作及び近右衛門の思惑、そしてわざわざ己に傍観を要請することなどからすれば、木乃香が巻き込まれるのは十中八九間違いないことだが、徹というイレギュラーが介在したことで、様々なことが変わってきている。原作通りに近右衛門の思惑通りに進むかどうかは、

まさに神のみぞ知るである。

「いや、そういうわけではない。これは教師としての君の仕事にも関わってくるからだからじゃ。君は、2 - Aの成績管理をやったから分かるじゃろ？2 - Aの成績が底辺にあることを」

巻き込む気満々なくせに、あえて否定する近右衛門。一応、筋は通っている辺りがいやらしい。

「存じています。上位クラスもいるにも関わらず、神楽坂をはじめとした5人の底辺クラスの者が、足をひっぱっていることも」

「うむ。そこでじゃ、最終試験にかっこつけて問題生徒の学力向上を狙おうと思つてのう。その底辺5人のうちの一人が所属する『図書館探検部』に、頭がよくなるという魔法の書の噂を流した。加えて、もし最下位だった場合、悲惨な事になるといふ噂も合せてのう。なんだかんだいって、テストというのは日頃の積み重ねが物を言うものじゃ。困窮した彼等は必ずや飛びつくであろう。なにせ魔法の實在を知る明日菜君がおるのじゃ。魔法の書が実在すると考えても不思議ではあるまい。最大の目的は、ネギ君が生徒という重石をつけて、どこまでやれるかを見ることなのじゃが」

「なるほど、試験の内容は理解しました。しかし、そう上手くいくでしょうか。今のネギは安易に魔法に頼ったりしないと愚考します。なにせ、今朝ネギは自身の魔法を自主的に封印した程ですから」

徹は先の推測&呼び出されたことで、近右衛門が木乃香を巻き込むつもりであることを確信しているが、あえて口には出さない。近右衛門は彼がそれに気づいていることを承知の上で、建前を述べてい

るからだ。なにせ、問題の『図書館探検部』に木乃香が在籍していることは、副担任である徹は当然把握しているし、木乃香がバカレソンの一人である明日菜の親友であることは、言うまでもないからだ。

「ほう、それは知らなんだ。誰に強制されるでもなく、自分の意思で魔法を封印するとは、大したものじゃ。ここに来た時の彼からは考えられぬことじゃ。いい成長をしたようじゃのう」

「はい、私も同感です。どうやらネギを過小評価していたようです。とはいっても、神楽坂の助けが大きいですがね。

その神楽坂は、学園長の仰る通り今回の試験の当事者の一人であり魔法の实在を知る者ですが、魔法の秘匿性やそれに関わることに ついての危険についても、ネギ以上によく理解しています。

ゆえに学園長の思惑通りにはならないと思いますが、それでも試験を行うおつもりですか？」

「ふむ、わしの意図するところではないが、それならそれでやりようはあるわい。折角の機会じゃ、ネギ君に魔法をつかえないという ことがどういいうことが、骨の髄まで理解してもらおうしよう。同 時に魔法なしの状況で、彼がどう動くのか、どういいう人間なのか 見極めさせてもらおうとしようかのう」

「今まで、甘い、甘過ぎると思っていたのですが、いつから方針を 変更されたのですか？」

「君の言うとおり、わしの対応はネギ君にとって甘いものであった 事は認めるが、その行状に何も思うことがないと考えているなら大 間違いじゃぞ。わしとて、ネギ君の迂闊さには頭が痛いし、その精 神的な幼さの危うさも憂いておるわい。そして、それをいつまでも

許容するつもりもない。

じゃから、それを改善する機会があるのならば、多少厳しくなつて酷であっても、ネギ君には甘受してもらわねばならぬ。何より木乃香のためにもものう……」

「木乃香様のためですか？それはどういう意味ですか？」

建前であるネギの話がおわり、両者にとって重要な意味を持つ木乃香に焦点が移る。ネギの成長が木乃香の為といわれ、思わず顔をしかめてしまう徹。その意味いかんによつては、この老獪な魔法使いとは完全に敵対することになるうからだ。

「のう、小宮山先生。君に一つ聞くが、木乃香に魔法とは一生無関係でいさせることは果たして可能なことなのかのう？もし、可能だとしても、その為に流される血は如何程のものなのかのう？その血の下に作られた日常を木乃香は喜ぶのかのう？」

「それは……。私が考えるべきことでも、判断すべきことではありません。私は、詠春様の依頼を果たすだけです」

徹はかすかに考えこむと、すぐに首をふり冷徹な答を返した。それは己が考えるべきことではないのだから。そんなことを考えてしまえば、己は詠春の想いを裏切ってしまうかもしれないのだ。

「それは少し無責任ではないかのう？君も知つての通り、木乃香の魔力は強大じゃ。下手をすれば、極東一やもしれん。しかも、あの子はわしの孫にして、婿殿の娘じゃ。魔力の有無に関わらず、利用価値があるのじゃ。そんな木乃香が、魔法に関わらずに生を終えることなどできようはずがない。世界はそれを許すほど、優しくできていないのじゃ。現実には子供の夢物語とは違ふのじゃからな。君や

刹那君が必死に守り、媚殿がいくら手を尽くして木乃香の平穩を守ったとしても、いずれどこかで綻びは必ずでるじゃろう」

「…」

近右衛門の言葉に、徹は頷くほかない。なにせ、近右衛門の言っていることは、紛うことなき真実であるからだ。近右衛門の言った通り、木乃香の魔力は強大である。異常魔力保持者であり、魔人ともいえる肉体を持つ徹さえ凌ぐ。というか倍はある。原作でも、極東一といわれていたが、あれは紛う事無き真実だったと、徹は木乃香に会ったとき感じたものである。

しかも、知っているだけなのと体感するのでは大違いだ。木乃香の内を流れる魔力は、解放を待つ大河の奔流のように感じられ、恐怖すら覚えた。解放されたら、瀑布となつて荒れ狂うであろうそれを心無い者に悪用された時のことを考えて…。あれを体感すれば、魔法使いならば誰もが羨望を抱くであろうし、利用しようとする者も後を絶たないに違いない。それ程まで、木乃香は魅力的に映るのだ。異常魔力保持者として退魔の仕事をしてきた徹はそれをよく知っていたし、契約時に見せられたトールズの記憶からもそれは明らかであった。

さらに、木乃香の出自もただけでない。その強大な魔力だけでも、魔法使いにとつて十二分に魅力的な木乃香であるが、彼女の魅力はそれにとどまらない。その出自は、近衛という名家の出であり、英雄にして関西の長である詠春の娘であり、関東の理事である近右衛門の孫である。その身柄の利用価値たるや、政治的にも経済的にも計り知れないものなのである。

「まあ、麻帆良にいるうちであれば、わしは全力を尽くして木乃香

を守る。君達もおることじゃしな。少なくとも、命の危機になるよ
うなことはないじゃろう。しかし、木乃香はいつまでも麻帆良にい
るわけではないし、わしは老い先短いし、婿殿も木乃香より先に死
ぬであろうことは間違いない。そうして、麻帆良の外で庇護者もい
ない木乃香は、どうやってその身を守るのじゃ？自身の魔力の使い
方も知らぬ身では、せつかくの強大な魔力も宝の持ち腐れじゃ。何
の抵抗もできんじゃろう。そして、利用され使い潰されるじゃろう。
あの破格ともいえる魔力は、魔法関係者にとっては垂涎的じゃろ
うからな。

君は、そうなる状況を放置するというのかね？今が良ければそれで
いいと？己の仕事の期間内だけ、木乃香の平穏を守れば、後はど
うなるうと知った事ではないというのか！」

そんなわけで、現状自衛の手段を持たぬただの一般人である木乃香
は、心無い者達にとって格好の力モなのだ。無論、近右衛門や詠春
も、木乃香の魔力資質に関しては、手を尽くして隠蔽しているが、
それにだって限界があるし、魔力は徹のような例外を除けば、基本
的に遺伝によるものであるから、それにあたりをつけて木乃香を狙
ってくる輩もいるだろう。また強大な魔力の有る無しに関わらず、
単純に詠春の娘、近右衛門の孫という人的価値を利用しよう狙っ
てくる者もいよう。

つまるところ、近衛木乃香という少女は、狙われない理由を探す方
が困難な少女なのである。

ゆえに木乃香の将来、先々のことまで考えれば、近右衛門の無責任
という指摘もあながち間違っているわけではない。だが、同時に徹
の先の答も間違っているわけではない。彼は、あくまでも仕事とし
て、木乃香の護衛を請け負っているのであり、その仕事期間を過ぎ
れば、木乃香がどうなるうと知った事ではないというのが、プロと
しての当然の認識であるからだ。

「…」

だが、徹はそれを言うことができない。木乃香は彼にとっても、この世界を現実であるという認識を己に刻みつけ、確固たる信念へと昇華させるきっかけをくれた大切な少女である。刹那や詠春とは違い、背中が預けられるという程には認めていないし、相互理解も足りていないが、木乃香が徹にとって特別な存在であることに変わりはないのだ。

徹としては、詠春と同様に木乃香には、魔法とは関わりの無い平穏な生活を送って欲しかった。その世界にどっぷり浸かっている者の実感として、魔法世界は危険に満ち溢れているし、木乃香は忘却しているが、木乃香は現実に魔法関係者に誘拐されたことすらあるのだから。

それに魔法を得るということは、人を殺せる凶器を得るのと同義である。初歩の攻撃魔法である魔法の一矢ですら、人を殺せるのだ。木乃香の強大な魔力を注がれた魔法は、どれほどの被害を出すか想像もつかない。もし、誤って人を傷つけたとき、木乃香はそれに耐えられるだろうか？ いや、負傷くらいならいいかもしれない。だが、殺めてしまったとしたらどうだろうか？ 優しい木乃香に耐えられるはずがないと、徹は思う。死を一度体験し、前世合わせて30年以上を生きた徹ですら、人外となりはてたとはいえ人間を殺した時のすなわち最初の殺人を犯した時の衝撃と痛み、そして罪の意識は片時も忘れたことがないし、彼がそれと折合をつけるのに要した時間は年単位なのだから。

（ふむ、意外じゃのう。こやつ、仕事に徹しているかと思えば、それだけではないようじゃのう。刹那君と同じように、仕事とは関係なくこやつなりに木乃香を守る理由があるようじゃのう。

こやつの手綱を握るために、少なくとも今後の主導権を握るためにも、ここは徹底的にやっておくかのう」

「どうしたのじゃ？君のことじゃから、そこまで関知することではないと思うっていたのじゃが、言葉もないか。では、認めるのじゃな？わしの言い分が正しく、わしの方に理があるか？」

徹の態度に内心で驚きながら、徹の心情を推察する。一方で、ここぞとばかりに徹への追求もやめない。

「いえ、確かに学園長の言い分も、ある意味では正しく一理あるとは思いますが、それが全てだとは思いません。木乃香様が魔法使いになれば、それを狙う者達は今までの比ではなくなるでしょう。数も手段も。なにせ公の舞台にあがるのですから、嫌でも知られますから不埒な事を考える者も少なくないでしょう。それに魔法使いであれば、一般人である現状とは異なり、魔法を手段としても用いたとしても許容されますから。そうなれば、今以上に木乃香様を守るのは困難になります」

だが、徹とてあっさり丸め込まれるわけにはいかない。詠春とも、木乃香に対する魔法認知については話しあったことがあるのだ。その時に改めて聞かされた娘への想いと、魔法世界の不条理の数々は、心に刻まれ記憶に新しい。

それに、一般人への魔法使用は、基本的に忌避される行為である。これは魔法使いの矜持というか、一般人を下にみているというか、職業倫理というか、何とも表現しづらいものだが、一般人への魔法認知を防ぐための記憶消去や記憶操作などの例外を除けば、原則的に禁じ手とされるからである。

ゆえに、護衛の観点からいえば、木乃香が強大な魔力をもつだけの一般人であるのありがたい。下手に手を出されるよりは守りやす

いいし、木乃香に対し魔法を用いようとするのは極少数の過激派くらいのものであるからだ。

「むう、そうはいうがのう。木乃香が魔法を覚えれば、その強大な魔力と相まって大きな戦力となるはずじゃ。自衛にも大いに役立つじやろう。そのデメリットは見過ごせるものではないじやろうか？」

「学園長も、質より量・多勢に無勢という言葉を知っておられるでしょう。圧倒的な数の前には、どんなに優れた才であっても、少数の人間なども脆いものです。中には圧倒的な個を持って、数を凌駕する化物もいますが、木乃香様がそのタイプとは到底思えません……。」

それに木乃香様の魔力がいかに強大であったとしても、その魔法適性が自衛に向いているとは限りません。よしんば、攻撃魔法の適性があったとしても、木乃香様に他者を傷つけることができるでしょうか？」

食い下がる近右衛門に、徹は淡々と厳然たる事実とあり得る可能性を指摘する。

「木乃香は優しい子じゃからのう……」

さしもの近右衛門もこれには反論できない。孫の性格を考えれば、十分にありうることだからだ。

「さらに言うならば、魔法使いになるということは、木乃香様に限って言えば、一般人として生きる道を完全に閉ざすことにほかなりません。あの強大な魔力、一旦表にでてしまえば、隠すことは到底不可能でしょうし、周りもそれを許さないでしょうからね」

先も言った通り、魔法使いは『魔法』という名の凶器を持っているのと一緒なのである。その中でも屈指の凶器の持ち主になるであろう少女を、周りが放っておくはずがない。まず、間違いなく魔法世界との関わりを絶つことは不可能になるだろう。ましてや、一般人に戻るなど許容されるはずがない。

流れる血と暴力と不条理のレベルが違う魔法世界へと永久就職である。自由な恋愛もままならないだろうし、西と東のどちらに所属するのかで、政治的にも一悶着あるだろう。木乃香の平穏な生は終止符をうたれることになる。

だからこそ、詠春は望むのだ。木乃香が可能な限り、魔法世界と関係のない平穏な生を。政治的なしがらみにもとらわれなくて、己が意思のまま自由に生きてくれることを。徹もそれに賛同する。木乃香の意思で魔法に関わったならともかく、誰かの介入の結果、そう誘導されたのであれば最悪だ。それは木乃香の意思を尊重しているように見えて、その実ねじ曲げているのだから。徹は、それを許容することはできない。

「君や婿殿の言い分も分からぬことではない。しかし、それは問題の先送りであって、現実を見ていないのではないか？木乃香に魔法という自衛の手段を早期に与えることこそが、木乃香の将来のためになるとは思わぬか？」

「いいえ、私も詠春様もそうは思いません。我々にとって、木乃香様の意思を尊重することが重要ですし、木乃香様の生きる道を我々の勝手な判断で狭めるのは、あってはならないことだと思います。それに学園長は、問題の先送りとおっしゃいましたが、現実を見るなら、木乃香様は成人どころか高校生にもなっていない義務教育中の思春期真只中の少女に過ぎません。今、人生の選択を求めるのは時期早尚であると考えます。そして、我々は、いつか魔法がばれる

のだとしても、木乃香様が魔法に関係なく平穏な日常を一分一秒でも長く過ごすことは、何事にも代え難い価値があるのだと信じます」

近右衛門の辛辣ともいえる問に、徹は即答する。そこに逡巡や迷いは見られない。彼は近右衛門との問答の中で、自身の思いを今一度新たにしたのだった。同時に、近右衛門との避けられぬ対立も覚悟した。

「そうか。残念じゃのう。どうあっても、相容れぬようじゃのう…」

徹の言葉を聞き、その表情から近右衛門は全てを察した。目の前の男とは、少なくとも木乃香のことについては、決して相容れぬことを…。そして、どこか甘い理想（近右衛門の主観）を即答できるその若さを少し羨ましく思った。だが、自身の意思は曲げない。近右衛門はあくまでも自分のやり方で、木乃香の為に動くつもりであった。

「では、話を戻そう。わしはネギ君を木乃香の防波堤にしようと考えておる。英雄の息子というネームバリューとナギに匹敵する潜在能力は、木乃香の強大な魔力から焦点を外させるには十分じゃからな。

さらに、君ならば気づいているじゃろうが、2-Aは魔法生徒をはじめ、魔法素養のある者、特殊技能を持つ者などで構成されておる。木を隠すなら森の中じゃ。あわよくば、ネギ君には2-Aから数人パートナーを作ってもらい、その一人に木乃香を潜り込ませる。そうすれば、複数いる従者の一人でしかないとして、その存在を薄くできるじゃろう。

じゃが、今のネギ君には問題がありすぎる。現時点では、到底木乃香を任せることなどできん。

しかし、わしは木乃香にもネギ君自身にも、猶予がないと考えてお

るのでのう。幼い彼には酷かもしれんが、ネギ君には一刻も早く成長してもらわねばならぬ。ゆえにこちらで成長を促そうというわけじゃ。多少強引であつてもものう……」

「なるほど、理解しました。先も述べた通り、私としてはネギについて干渉するつもりはありません。あまりにも目が余れば、手出しをするかもしれませんが、余程のことではなければ動くつもりはありません。防波堤でも、なんでも利用したらよろしいでしょう。」

しかし、木乃香様は別です。学園長の意図するところは、詠春様の依頼に真つ向から対立します。したがつて、そのための行動を起こされるつもりなら、その時は断固たる対応を取らせて頂きます」

近右衛門は真意を赤裸々に明かすことで徹の理解を得ようとするが、ネギへの対処に元より口を挟むつもりはない。彼にとつてネギは友人であるネカネの弟ではあるが、それ以上でもそれ以下でもないからだ。むしろ、あの己の立場への無理解と目標への盲目さは、好きになれない。

結局のところ、徹にとつて重要なのは木乃香である。彼女に影響がなければ、ネギがどうなるうと知つた事ではない。まあ、さすがに生死に関わるような事になれば、介入することも考えないではないが、今回の試験は一般生徒も参加（巻き込まれるというべきかもしれない）するものであるし、何より学園長達が用意したものだ。その可能性は限りなく低いだろう。万一そうなつたとしても、即座に助けに入れるよう備えているだろう。好ましい人物ではないが、そういうところは信頼できる。

しかし、一方で完全に信頼することも難しい相手である。なにせ、依頼主である詠春とは真逆の考えを持つている人物である。それでいて悪意ではなく、自分の方が木乃香のためになるといふ信念の基に行動している身内の人間であるのだから、始末が悪い。いっそも

確に敵対していたならば、徹としても対処がしやすいのだが…。そんなわけで、何かと面倒で油断のできない相手なのだった。ゆえに、近右衛門の誘導によってではあるが、木乃香自身の意思による参加という形でなら、傍観することを認めるという要求をのむことは絶対にできない。逆に「木乃香を巻き込むなら、容赦はしない」という意思を明確にする。

「ふむ、それは実力行使も辞さぬという意味かね？」

近右衛門は、その真意を確認するために問う。

「ええ、我が刃をもって応えるでしょう。現段階で、ネギを排除するつもりはありませんが、事と次第によっては潰させて頂きます」

それに即座に冷徹な答を返す徹。その表情や言の葉には、逡巡や迷いは全く見られない。彼はその時がくれば、間違いなくそうするであろうという事が近右衛門にも理解できた。

「ネギ君を潰すとな…それがどういう意味を持つか、君は理解しておるのかね？」

剣呑な宣言に近右衛門は今一度問う。それが何を意味するか理解しているのかと。

「ええ、それで東を敵にまわすことになるかと構いませんよ。ただその時は相応の覚悟をお願いします。私は敵対する者に容赦したりしませんので。恩義には相応の働きをもって、仇には刃をもって返すのが当流の流儀なれば」

「何を言っても無駄なようじゃのう。肝に銘じておくとしよう。じ

やが、君も忘れぬことじゃ。ここがどこなのかをのう。そして、わしもまた敵対者には容赦はせぬことを覚えておくがよい」

徹の厳然たる言葉に、近右衛門も相応の覚悟をもって応える。両者の間に剣呑な空気が流れる。

「覚えておきましょう。それでは試験問題の作成がありますので、これで失礼します」

それを断ち切るように徹は言葉を発し、学園長室を退室する。退室する際に置き土産として、凄絶な殺気を近右衛門に叩きつけて。

「ふう、やれやれじゃわい。思った以上に扱いづらい男じゃて。あやつを利用するのは、想像以上に骨が折れそうじゃな。少なくとも木乃香の件ではあやつが妥協する可能性はないと思うべきじゃろうな。個人的な理由もあるようじゃしろう。それも踏まえて動くべきじゃろうな。」

あわよくば、婿殿の私兵という立場のまままでこちら側に引き入れればと思つたのじゃが、流石に高望みじゃったわい。こうなれば、婿殿と直接話す他あるまい。∴正直、気が進まんのう」

徹が去つた学園長室で、近右衛門は溜息をついて一人ごちる。先程の話し合いで、どうあつてもあの青年が木乃香のことで妥協しないことは明らかである。個人的に折れない以上、徹を一時的にせよ排除するには、その意思の根本をなす依頼者である詠春と話しあう以外に道はない。だが、正直なところ、近右衛門は気が進まなかつた。

「木乃香のことで話しあうと、どうしてもお互い感情的になつてし

まうからのう。この間も物別れになつたばかりじゃしな」

だからこそ、可能性は低いと知りながら、あえて徹との話し合いに臨んだのだが、詠春説得の糸口どころか、その意思の堅固さを見せつけてしまい、余計に連絡をとりにくくなつてしまった。

「やれやれ、あやつ態度を見る限り、婿殿の意思は堅そうじゃな。危険はないから傍観してくれというても、首を縦に振ってくれるかどうか…」

ネギの魔法封印という計算外もあつたが、近右衛門としては、当初の計画通り図書館島探索に誘導したいというのが本音であつた。しかし、そうすると木乃香がうまいこと巻き込まれたとしても、護衛である徹と刹那が邪魔になる。あの二人がいては、障害など有つてなきが如しである。それでは形式上のものとはいえ試験にならないし、ネギの成長も見込めない上に、木乃香が魔法に触れ合う機会を作ることできない。

しかし、基本的に近右衛門の指揮下にある刹那はともかく、詠春の私兵たる徹は危険がないからといって、木乃香が魔法に関わることを許容する傍観など、受け容れるはずがないのは先の話し合いから明らかである。となれば、上位意思者である詠春を説得するほかないのだが…。

「たった一人しかいないかけがえのない愛娘じゃ。平穩な生を望む婿殿の気持ちもわからぬではない。しかし、わしはそれがまかり通る程、世界が優しくないことを知っておるのでな。酷かもしれないが、一刻も早く木乃香には、魔法を身につけてもらわねばならぬ。なにせ、ネギ君と同様に木乃香もまた『英雄の娘』なのじゃから…」

近右衛門は、詠春や徹のような考え方はとれない。理解はするが、納得はできない。木乃香の膨大な魔力や政治的価値を考えれば、木乃香が生涯にわたって魔法に関わらないでいられることなどありえない。詠春の対処は問題の先送りにしかならないと近右衛門は見ているのだ。眼に入れても痛くない可愛い孫娘である。自分の目の黒いうちに後顧の憂いを絶ちたいと思うのは、当然であろう。

「婿殿、悪いがわしもひけぬのじゃ。是が非でも折れてもらおうぞ」

近右衛門は静かに言い放つと、机の上の電話へと手を伸ばしたのだ。つた。

相容れない者（後書き）

ユニークアクセスが300000を超え、お気に入り登録も1800を超えました。このような拙作を読んいただき、心から御礼申し上げます。

初めて書いたということもあり、手探りでまだまだ未熟ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

祖父と父親、鶴の声

日本の誇る名所として知られる富士山。その麓にある一軒の少し大きめの茶店の一室で、齢を重ねた翁と壮年の瘦身の男性が対峙していた。片や、関東魔法協会の理事にして、旧世界における魔法使い達の重要拠点『麻帆良』の長である『近衛 近右衛門』。片や、関西呪術協会の長にして、魔法世界における英雄の一人『旧世界のサムライ・マスター』こと『近衛 詠春』。両者共に、魔法世界・旧世界における重鎮である。そんな二人が、こうして対峙しているのは、その政治的地位に要請されたものではない。

彼等は、ただ一人の少女の為に多忙の身ながらも、どうにか時間を作り出し、この会談の場に望んでいるのだ。肉親であるがゆえに、お互いに譲れぬものをかけて、彼等はそれぞれ祖父として、父親としてそこにいた。

無論、この会談の真意を勘ぐられ、政治的リスクを冒すのは、双方共に好ましいことではないので、それぞれ立会人を連れていた。近右衛門は自身の右腕ともいうべき『高畑 タカミチ』を、詠春は西との関係が深い神鳴流に属する『青山 鶴子』を伴っている。

これは、極秘裏に行われているこの会談が、公になってしまった時の為の保険である。日本有数の霊地である富士の力を利用して作られた密談の為の場所を用いて、極秘裏に行われているとはいえ、どんなところから情報が漏れるかは分かったものではない。そして、立会人なしに両者だけで密談するのは、義父と娘婿という関係からして、癒着や内通を疑われること間違いなしである。なにせ両者は、かつてよりはましになったとはいえ、対立する組織の長ないし幹部なのだから。

だが、その危険を冒してでも、彼等は直接会って話し合う必要がある

ると考えたからこそ、この会談は実現したのである。

「まずは婿殿、急な申し出にも関わらず、応じてくれたことに礼を言うぞい」

「いえ、気にしないでください。徹君から報告は受けていますし、何より木乃香のこととあっては、見過ごせませんから」

近右衛門の謝辞に詠春は気にするなとこたえる。確かに、今から3時間程前に連絡を受け、急遽会談の申し入れを受けた時は困惑したのだが、その直後に徹から近右衛門からの要請及び話し合いについて報告を受け、詠春は得心がいった。義父は木乃香に対して何らかのアクションを起こすつもりなのだと。そして、その為の説得を行うつもりなのだと。ゆえに詠春は、少々強引ではあったが、会談の時間を作り出した。もし、この会談に応じなければ、義父は少々強引でも自身の意を通すであろうことが、詠春には予想できたからである。

「ふむ、そのいいよう…。もう、何の為の会談かすでに承知しているようじゃのう」

「ええ、お義父さんが何をされたいのか、何を要請されるつもりなのかは理解しているつもりです」

「そうか、ではいらぬ建前は抜きにして、本題に入るとしようかのう。単刀直入にいおう。此度のネギ君の最終試験、君の手の者には傍観をお願いしたい」

「それは刹那君、徹君双方にということですか？ということはやはり、此度の試験に木乃香を巻き込まれるおつもりなのですね？」

「いや、わしからは何もせぬよ。あくまでも木乃香の自発的な意思によって、結果的に巻き込まれるかもしれぬというだけじゃ」

「木乃香の自発的な意思ですか？ 詭弁を弄するはやめて頂きたい。お義父さんの誘導の結果でしょう。しかも、かもといいながらその可能性は非常に高いのでしょうか」

「詭弁とは心外じゃな。わしは何もしておらぬし、あくまでも可能性の話じゃよ」

「木乃香の所属するクラブに対して、意図的に情報操作を行なっておいて、何もしていないとはよく言えたものです」

「婿殿の想いも分かるが、理解してくれぬか。ネギ君の成長の為に必要なことなのじゃ。何より木乃香をこのまま無防備な状態にしておくことはできぬ」

「ネギ君の為ですか…。一定の理解はしますが、木乃香に優先することはありません。木乃香の安全については、散々話し合っただけです」

近右衛門はネギを絡めて説得の材料にするが、詠春はにべもなく切り捨てる。

「木乃香の自発的な意思に限り、その結果として、魔法に触れてしまっただけじゃむなしではなかったかのう？」

「先も言ったとおり、此度巻き込まれるとしたら、それはお義父さ

んの誘導の結果ではないですか。そんなものを自発的な意思などと認められようはずがありません。

それに、お義父さん、私はこう見えても怒っているんです。私に無断で、木乃香とネギ君の同居を決めたことを。もし、徹君から報告を受けていなかったからと思うとぞつとします。今のネギ君の迂闊さからして、まず間違いなくお義父さんの思惑通りに木乃香は魔法に触れることになっていたでしょうからね」

近右衛門の言に対して、詠春は辛辣であった。まあ、無理もないことである。原作ではまるで知らされていなかったであろうネギの失態の数々は、全て徹によって正確に報告されているからである。その為、今のネギを木乃香の側におこうなどとは微塵も考えていない。むしろ、ネギ自身の為にも今一度、魔法学校で修行しなすべきとすら考えている。

「それは悪かったと思うておるし、そちらの要請に従って解消したではないか。もし、要求されなかったとしても、そちらにもしつかり連絡するつもりじゃったよ」

「事後承諾という形ででしょうか？正直、この件に関しましては、お義父さんは信用できませんね」

「酷い言われようじゃな。わしはただ木乃香の為を思って行動しているというに」

「そのお気持ちは大変ありがたいですが、はつきり言ってありがた迷惑です。あの娘の将来をお義父さんの一存で歪める気はありません。選択はあくまでも木乃香自身がすべきでしょう」

「そうは言うが、本当にそんな余裕があるとも思っているのか？

木乃香の極東一ともいうべき膨大な魔力は、西でも少数とはいえ知られておる。東でも一部の人間は気づいておるう。である以上、このまま木乃香が魔法に関係することなく、平穩に生を遅れる可能性は限りなく低かろう。婿殿の想いも分からんではないが、それは問題の先送りではないのかのう」

詠春の言い分に対し、一步もひかず核心を突く近右衛門。ここに至っては、青臭い理想論などを聞くつもりはないのだから。

「問題の先送りですか…。確かにそういう側面もあるかもしれません。しかし、あの娘はまだ中学生なのです。義務教育も終えていないあの娘に人生の選択を強いるのは、余りにも酷ではありませんか。だからこそ私は、お義父さんに木乃香をお預けしたのです。西の政争の具にされることを避けるため、あの娘の安全を守るために。そして、少しでも長く平穩な生を感受できるように。それをお義父さんは裏切られるつもりなのですか?!」

「裏切るとは心外じゃのう。わしは今までそれを守ってきたはずじゃ。今回もあくまでも木乃香の意思を尊重した元で行っておる。わしが本気なら、もっと強引な手段をとることもできるのじゃぞ」

「無論、これまで木乃香を守って頂いたことは感謝しています。ですが、ネギ君の来日以来のお義父さんの行動には疑問符をつけざるをえません。何をそんなに焦っておられるのですか?」

「焦りか…。婿殿の言う通り、わしは焦っているのかもしれない。じやが、わしには不吉な予感がするのじゃ。旧世界も魔法世界も巻き込んだ大きな騒乱が起きるのではないかという予感が…。そして、それは魔法使いも一般人も関係なく牙を剥くのではないかと。ネギ君の村が襲われたこと、未だナギの奴が姿をくりましたままであ

ることが、それを示唆しているように思えてならぬ」

「予感ですか…。お義父さんの言う事もわからないではありません。あの大战の黒幕である『完全なる世界』は、そのトップをナギが潰したとはいえ、未だ健在である可能性は捨てきれません。ナギが姿を現さないのも、彼等を追っているからかもしれない。しかし、だからといって、木乃香を巻き込むことはないでしょう！」

「もし、わしの予感があたり、一度ことが起きれば、木乃香は必ず巻き込まれるであろう。木乃香の魔力は放置しておくには、強大すぎるから。魔法使いから見れば垂涎の的じゃ。そんな時、あの娘が無力であつたらどうするのじゃ。ただ利用されるだけの存在に、よしんばそうでなくとも何の抵抗もできずに屍を晒すことになりかねんのじゃぞ！」

「私はそうは思いません。木乃香は優しい子です。あの娘に戦えるとは思えません。むしろ、下手に魔法に触れることで、魔法使いとして認識されてしまうことの方が危険でしょう」

「それが甘えじゃとなぜ気づかぬか?! なればこそ、戦えるように教え導くべきではないか！」

「私は『英雄』と呼ばれた者の一人として、そして西の長として魔法世界の事態を知っています。そこに流れる血も、押し付けられる不条理も、桁が違います。何の覚悟もないまま、飛び込めばどんなことになるか分かったものではありません。そして私は親として、木乃香がそのような世界に飛び込むことは断じて容認できません。あの娘の手が血で汚れるようなことなど、あつてはならないんです！」

ヒートアップする両者。お互いに木乃香のことを思うが故に退けない。理想より確実な安全をとる近右衛門、どこまでも木乃香の為に最善を尽くそうとする詠春。どちらもある意味で正しく、間違っていない。それがゆえに、彼等は譲れない。そんな彼等を止めたのは立会人の一人である鶴子の声であった。まさに鶴の一声である。

「そこまでしなはれ！全くええ大人がみつともない。感情的になつてどうしますのや。そんなんじや、何時まで経つても結論なんて出るわけありまへん。木乃香はんのことを想う気持ちは立派やけど、その志を同じくする二人が争つてどないしますのや！協力して守るべきやのに、お互いの力を削ぐようなまねしたら、それこそ本末転倒やないですか」

「う、うむ」「そ、そうですね」

「これだから男いうんわ……」

きまり悪そうに返事をする近右衛門と詠春。鶴子は、そんな男共に呆れ顔である。

「はあ……。今は起きるかどうか分からん事を恐れても、どうにもならんと思えますわ。私見を言わせてもらえれば、はっきり言つて木乃香はんは戦いにはむかん。どんなに力持つたとつて、使いこなせなきや意味ないんは近衛はんのいうとおりや。でもな、どんなに鍛えても、性根は滅多なことじゃ変わつたりせえへん。そこから言えば、木乃香はんは間違ひなく戦えへん。相手を傷つける覚悟はできん子や。あの娘は優しすぎますのや」

「それはそうかもしれぬが……」

「そうですね、木乃香は優しい子ですからね！」

認めざるをえない近右衛門とは対照的に勢い込む詠春。しかし、鶴子はそれも切って捨てる。

「詠春はんも、ちょっと過保護過ぎるとちやいますか？木乃香はんを舐め過ぎや。木乃香はんの意思を尊重する言うなら、魔法に関わるといふ選択肢も与えるべきやろう。その強大な魔力いうのもあの娘の一部、あの娘自身の力なんやから」

「しかし、あの娘には平穏な生を……」

「それは近衛はんとやってることが変わりまへんえ、詠春はん。親としてのエゴ以外のなものでもありまへん。まあ、気持ちはよく分かりますけどな」

詠春のやっていることも、近右衛門と変わらないという鶴子。

「……」

近右衛門と詠春は痛い所を突かれ、沈黙せざるをえない。

「御両人共、凶星みたいどすなあ。でもまあ、今回のことについては、近衛はんに非があると思えます。いくらなんでも、詠春はんは無断で事を進め過ぎや。徹はんがいなかったら、なし崩し的に魔法に触れてたんちやいますか？」

「ぐ、ぬっ」

全くその通りにするつもりだっただけに、反論できず呻くしかない

近右衛門。心当たりがありすぎる上に、徹からの報告で、自身が用いた策のほとんがリークされてしまっている。言い逃れは不可能である。

「今回だけやったら、傍観するという選択肢もあつたんやろうけど、今までが強引すぎますわ。担任にしたことといい、一時的に強引に同居させていたことといい、加えてネギいう子の迂闊さも加えれば、十分すぎるほど魔法に接近させてます。それ以上の干渉は明らかにやりすぎやと思いますえ。これ以上干渉するんやったら、担任から外すとかすべきやと思います。それが近衛はんを信頼して、木乃香はんを預けている詠春はんに対する最低限の義理やとちやいますか？」

「むづ。しかしじゃな…」

「しかしもへちまもありしまへんわ。こんだけ話しても決着つかへん以上、お互いに尊重し合う他ないですやる。それにうちは、何より木乃香はんの意思が重要だと思えますわ。詠春はんもいうてましたけど、覚悟も無しで生きて行ける程、甘い世界じゃありません。誘導も、巻き込まれるという形もただけまへん。あの娘自身が選ぶ必要がありますのや」

言い継ろつとする近右衛門だが、鶴子は躊躇いなく切つて捨てる。

「選択の機会ですか…。しかし、それでは結局魔法に触れることになるのではないですか？」

「どの道、今の中途半端な状態のあの娘が、魔法に全く関わらないことなど無理な話やと思いますえ。どうせ巻き込まれるぐらいなら、一切合切話した上で、木乃香はん自身に選択させたらええやないで

すか。魔法を選ばないなら、魔力は封印でも何でもしたらええとちやいますか？そしたら、悪用もできなくなると思いますえ」

「魔力の封印ですか…。考えなかったわけではないですが、あの娘にどういった形であれ、枷を嵌めるのは避けたかったのですが…」

「詠春はん、それはわがままやで。近衛はんの言う通り、あの娘の力は魅力的過ぎますのや。一般人として平穩に生を送るには、邪魔でしかない。封じるかなんかせんと、あの娘は一生狙われることになりますえ」

鶴子の提案に複雑そうに応える詠春だが、鶴子はそれも切って捨てる。

「…」 「…」

近右衛門と詠春は、再び沈黙するほかなかつた。鶴子の言はこの上なく正論であり、中立を保ちながら第三者としての客観的な意見であつたからである。

「黙りどすか。御両人共、情け無いとちやいますか？こんなうちが言うまでもなく、分かつてるべき事柄やと思いますえ」

言われるまでもなく、両者は理解してた。しかし、肉親としての情が思いが、それを見えなくしていたのだ。

「とにかく、これ以上話しても無駄やと思いますし、うちは帰らせてもらいますわ。うちが言いたいことは、あらかたいわせもらいましたしな」

そう言つて鶴子は、一人部屋から退出していく。言いたいことだけ言つて、後は自分とは関係ないと言わんばかりに振り向きもしないその様は、いつそ清々しくすらあつた。

「…」「…」「…」

残されたのは、近右衛門と詠春に完全空気のタカミチ。なんともいえない空気が室内に漂う。

「と、とにかく今回の要請について答を貰いたい」

仕切り直すように回答を求める近右衛門だが、完全に諦め顔であつた。

「そ、そうですね。申し訳ありませんが、要請を受けることはできません。すいません、鶴子さんがいなくなった以上、私もこれで失礼します」

詠春は疲れたような顔でこれに回答し、鶴子の後を追つ為に足早に退出する。

残された近右衛門は、同じく残っているタカミチにぼやく。

「なんでこうなつたんじやろう…」

「自業自得だと思いますよ…」

完全空気のタカミチが最後にそう指摘し、会談はお開きとなつたのだつた。

祖父と父親、鶴の声（後書き）

大変遅くなりました。前話を何度も改定したせいで、自然この話も何度かつくり直しております。筆が遅いくせに何やってんだか……。こんな私ですが、これからも見捨てないでいただけるとありがたいです。

完全な第三者の視点ということで、鶴子さんに再登場してもらいました。今回の内容は、前話と似通ってる部分がありますが、やはり徹とは別に詠春ともしっかり話しあうべきだと思いましたが、こうなりました。次はいよいよ、ネギ君の取った行動が明らかになるわけですが、彼はどんな道を選ぶのでしょうか？

それにしても、京都弁は難しいです……。多少、おかしくてもご容赦下さい。

間違えてはいけないもの（前書き）

本来なら、ネギのとった選択を書く予定でしたが、英単語野球拳の話があつたなと思ひ出し、あれ現実的には洒落にならないだろとつこんでみたら、一話使つてしまいました…。再び、ネギ苛めになつてしまったような気がします。

提案した人物が誰だったか、正直よく覚えておりません。原作とは違う人物だったりしたら申し訳ありません。ただ、私なりに提案する可能性のある人物を用いたつもりです。

ちなみに主人公は、問題ないときは気配消して、授業を見守っている。一般人は彼の存在をよく忘れます。

間違えてはいけないもの

学園長が詠春との会談に臨んでいた頃、麻帆良では一人の少年が頭を悩ませていた。

「うーん、どうしよう。まさか僕のクラスの成績が、万年最下位だったなんて……」

ネギは予想だにしない事態に頭を抱えていた。最終試験の内容をしらされた時、最下位脱出くらいならと思っただが、直後にたまたま側にいた『椎名 桜子』、『明石 裕奈』の両名から思いもよらない衝撃の事実をしらされ、愕然とした。

それは彼が担任を勤める2-Aが『試験成績万年最下位』であるということであった。というか担任であるにも関わらず、生徒に言われるまで自身のクラスの成績を把握していないのは、かなり問題があると言わざるをえない。こういうあたり、やはり子供というか教師としての自覚が薄いネギであった。

担任教師としての務めを果たしていたならば、衝撃でも何でもない事実なのだが、ネギには寝耳に水・青天の霹靂ともいうべき事実であり、彼を大いに苦悩させることになった。まあ、楽勝だと思っていた試験の難易度が、一気に上昇したようなものであるから無理もない。

「魔法でどうにかしようにも、今日を含めて3日間は魔法を使えない。試験は魔法封印の効果が切れる日の翌日だし、どうしよう、どうしよう。」

なんで僕は魔法封印なんてしちゃったんだ……。よりにもよって、最終試験の時に魔法が使えないなんて、話にならないじゃないか!」

魔法封印した朝の決意はどこへやら、一日ともたず魔法封印について後悔するネギ。ここら辺はまだまだ子供である。また、思考が完全に魔法で解決することが前提になっている辺り、祖父の教えを真に理解するにはまだまだ時間がかかりそうである。

「たった一日じゃ、副作用のある魔法しか使えないし、本当にどうすれば…」

その副作用も、到底見過ごせるようなものではないことは、ネギも理解していた。なにせ徹だけでなく明日菜にも記憶消去の件では、散々に注意を受けている。一時は良くても後にパーになってしまう魔法など、両者がきつく言い含めた記憶の重要性からして、認められるわけないのだ。

「うう、でも他に思いつかないし。だからといって、明日菜さんに嫌われたくないし…」

完全に袋小路に入ってしまうネギであった。地道にテスト対策することを考えられない辺り、やはり教師とは言い難い少年であった。彼にとって、魔法抜きで物事を考えるのが如何に難しいことであるかの証左というべきかもしれない。

ネギが職員室で苦悩し遅々として方策が見つからない一方で、同じ職員室内で高速で手と頭を動かしている人間がいた。試験問題の作成を命じられた徹であった。

徹は、自身の机に置かれた過去五年分の試験問題と今回の試験範囲を擦り合わせながら、あまり過去問と重複しないように、それでい

てある程度は重複させつつ問題を作成していた。カラーコンタクトをしてる為、他者から変化は見えないが、彼の眼は紫紺に染まり、その能力を全開にしていた。

原作通りになるかは分からないが、試験問題作成のために木乃香の護衛を疎かにすることなど、徹にとって許されざることだからだ。彼の持つ紫紺の邪眼『真理の眼』は、この手のことにかけてはこの上なく便利である。一読しただけで、出題の意図から解答に至る全てを『理解』できるのだ。その意図を掴みながら、重複問題の精査など彼には見事に等しい作業だったのである。すでに8割方完成している辺り、尋常の速度ではない。一切の淀み無くキーボードの上を踊る指先を、初めての試験問題作成ということでアドバイスしようと思っていた周囲の教師は呆然として見ていた程であった。

ちなみに、徹は並行してネギの監視も行っていたりする。その人外の超感覚を駆使し、ネギの一挙手一投足を観察していた。現状のネギが安易に図書館島探索を行うとは思っていないが、原作のように明日菜の後押しがあれば、飛びつくであろうことは眼に見えていたからだ。

ただ、その明日菜が原作とは違い、魔法の秘匿性やそれを知ることのリスクをしっかりと認識している以上、それは限りなく低い可能性であるのが油断はできない。図書館島探索の発案はそもそも綾瀬であるし、たとえ明日菜が反対したとしても、他のメンバーに押し切られてしまう可能性はゼロではない。なにせ、真偽はどうあれ（原作では本物だったが）そういったものに目がないというか、好奇心旺盛な者達ばかりであり、加えて頭脳労働するくらいなら、肉体労働を嬉々として選ぶような面子ばかりが揃っているのだから。

「うっん、これで終了かな。いやあ流石に全開でやると、我ながら半端じゃないなあ。まあ、作業中に何事も無くて良かった」

そうこうしているうちに、試験問題の作成は終了していた。幸いにして、作業終了までネギが動くことも、ネギを尋ねる者が現れることもなかった。徹は胸を撫で下ろした。それにしてもまさに人外のスピードであった。わずか2時間弱（空き時間＋昼休み）で、過去5年間の問題と試験範囲を擦り合わせつつ、担当教科の他の教師の要望も盛りこんだ問題を作成できるとは、誰が思おう。

（さて、どうしたものかな……。このまま事態が動くのを待つべきだろうか？それともこちらから積極的に動いて、こちらに都合のいいように誘導するべきだろうか？）

試験問題作成を終えて、あまりにも早く終わったことに驚いている教務主任に作った試験問題を提出すると、一息いれようと緑茶をすすりつつ、お手製のみたらし団子を食べながら思考の海に沈む。学園長からネギの最終試験への手出しは無用だと言われているが、木乃香が巻き込まれる可能性がある以上、徹の知った事ではない。学園長はあくまでも護衛対象の身内であるというだけに過ぎず、自分の依頼主にして雇い主は詠春であるのだから。

（詠春さんに会談の申し入れがあったということは、学園長の要求が通る可能性もゼロではないだろうけれど、俺がネギの失敗の数々を報告している以上、現状ではまずありえないだろうしな。万が一通ったとしても、それが正式に俺に到達されるまで、木乃香に対する魔法バレを防ぐために動くことは、咎められることじゃない。それに教師としても、副担任として、自身の担当クラスの成績向上に寄与することは当然のことだろう）

この際だから、徹底的に学園長の思惑を邪魔してやろうかとすら考える徹であった。まあ、会談の結果は彼の予想通りなのだが、それ

にしたって結果が出ないうちから中々悪辣な思考であった。

そんなことを考える徹の目に、苦悩していたネギが職員室を出て行く様子が目に入る。そういえば、次はネギの担当科目の授業時間だったと、同僚のしずなの方に目をやるが、同じようにしずなもこちらに目をやっており、思わず目が合う。その直後にしずなは自身の手元に目をやり、もう一度目を徹に向ける。徹は軽く頷くと、ネギを追うように職員室を退出した。その瞬間、彼等が交わした意図は以下のとおりである。

（しずな先生、次の授業の付き添いはいけますか？）

（そうしたいところですが、生憎と今手のはなせない仕事があつて…。申し訳ないけどお願いできますか？）

（了解しました）

（それにしても授業の際に試験のことを肯定してしまうのは、いかなものだろうか？いくらたまたま居合わせて知られたといっても口止めするか形だけでも否定くらいしておけよ。じゃなきゃ、教師としても、魔法使いとしても問題あるだろ…。というか、今の今まで試験のことは頭になかったのかよ。自分に関係なきやどうでもいいのか？さすがにそれは担任としてどうよ）

実習生であるネギの付き添いとして、教室の後方で授業を見守る徹原作での流のとおりにながの正規教員への昇格が、彼女達生徒の試験成績にかかっていることが暴露されてしまう様子を傍観しながら、そんな事を思う。原作を読んだときには思いもしなかったことだが、こうして現実に見るとありえないことだといわざるをえない。

試験内容を決めた学園長にも問題あるだろうが、わざわざ生徒に重^{プレッ}圧^{シャー}かけるようなことを肯定する教師がこの世界にいるのだろうか？いや、生徒達自身のことでも重圧をかけることはあるだろうが、教師の私事でしかも人生に関わることでかけることなど、ありえないだろう。いや、あつてはならないことだろう。

（うーん、やはり数えて10歳児に教師で、しかも担任とかありえないし、無理があると言わざるをえない。正規教員への昇格と学園長はいつてるけど、むしろ教員やめさせたほうがいんじゃないだろうか…）

と、徹が内心で酷い事を思っている一方で、2 - Aはさらに混沌としたありえない状況に突入しようとしていた。

「英単語野球拳！」

「…」

その単語を聞いたとき、徹は絶句した。確かに原作でその提案はあり、反対する者もいたが押し切られ、結局実行されたことも知っていた。しかし、現実に教育機関で、女子校で、それが現実に提案されるなどと誰が思おう。しかも、ネギは世間知らず&子供なのが災いして、その内容がどういうものかも理解しておらず、あまつさえ許可をだそうとしているのではないか。その瞬間、徹の何かがキレた。

「そじゃあやってみま「いいかげんにしろ！」しょ…と、徹さん、どうしたんですか？」

突如響いた怒号に、呆然として問い返すネギ。2 - Aの面々は「い

「たんだ」「そういえば…」「うわ、最悪だ」「ど、どうしよう…」「当然だろ」「これはどうしようもないですわね」などと口々に呟いているが、徹の知った事ではない。

「お前ら、学校を舐めているのか?!ここをどこだと思っている。学校のそれも教室で、言うに事欠いて野球拳だと…。貴様等、学校をなんだと思っっているんだ!ここは学ぶべき場所であって、遊ぶ場所じゃないんだぞ」

徹の言に一言もない生徒達。彼女らは自身のでかしたことを理解しているようだ。だが、一人空気読めていないというか、事態が呑み込めていない者がいた。ネギ少年である。彼は無謀にも、わけわからないなりに徹をとりなそうとしていた。それが火に油を注ぐことになるとは露程にも思わずに…。

「徹さん、落ち着いてください。何をしたかは知りませんが、そこまで怒らなくても…」

「なんだと…」

ネギの執り成しに、低い声と共に振り向いて凄まじい視線をぶつける。「うわー、空気よめてないよ」「わざわざ地雷を…」「火に油を…」などと言っている辺り、生徒達はネギがやってしまったことを悟っているようである。

「ネギよ。それは本気で言っているのか…。いや、何を怒っているのか分からないと言ったな。この…、大馬鹿者が!」

「ひっっ」

徹に一喝され、情け無い叫びを上げるネギ。しかし、徹のターンはこれからであった。

「そもそも君に問題があるということを理解しているか、ネギ・スプリングフィールド！野球拳を知らないことは仕方ないにしても、生徒がふざけ半分で提案してきたことを反対があるのにも関わらず、そのまま授業に取り入れようとするとは何事だ！大体、君が正規教員へ昇格することは、生徒達とは全く関係ない私事に過ぎない。それを仕事に持ち込むとは、公私混同もいいところだ！それを理解しているか?!」

「へう、そ、それはでも…」

「でももくそもない。私事で生徒達に重圧をかけるなど教師のすべきことではない。そもそも、君が教師として彼女達に認められていないからこそ、彼女達は野球拳などというふざけた提案をしてきたのだ。君が子供で世間知らずだから、なあなあで済ませられるとね、つまり君は舐められてるんだよ。それを理解しているかい？」

「え…」

徹の言に愕然とするネギ。思わず生徒達の方に目をやる。

「そんなことはありませんわ!」「そこまで言うことないじゃない!」

雪広と明日菜がすかさず反論し、他の生徒達からも追従する声がかかるが、徹は容赦しない。

「ではきこうか。これがネギ以外の教師であつたなら、お前達はそ

んな提案をしたか？私でも、タカミチ先生でも、しずな先生でも構わない。もし、提案できるといふなら、反論をきこうじゃないか」

これには誰も反論できず黙るほかなかった。あの提案は、ネギだったからこそ出せたものであり、他の教師であつたなら一顧だにされずに大目玉間違いなしの代物であつたからだ。野球拳の内容を知らないであろう子供だからこそであり、実際にやつたとしても、見られるのは同性か異性とはいえ子供だけであるから、そんなに羞恥もないしお咎めはないだろうという打算の下に出された提案なのだ。普通の教師に対してならば絶対に通らないし、提案すらしないものであることをクラスの誰もが理解していた。ゆえに反論などできようはずもない。

「こんなことでは正規教員への昇格はおろか、実習生としての資格剥奪も考慮に入れる必要があるな……」

反論できない生徒達につまらなげに睥睨し、そんなことすら呟く徹

「え、そ、そんな！ま、待ってください！」

「ちょっと待つてよ、先生。悪ノリした私達が悪いんだから、何もそこまでしなくても……」

当然の如くネギと言いだしつぺである明石は焦る。他にも提案に同調していた生徒達から同様の声がかかる。

「今さら、そんな事が通るものか！明石、お前は大体提案が通つたらどうするつもりだったのだ？本当に英単語野球拳などという馬鹿げた行いをするつもりだったのか？」

「そ、それは…」

徹の間に明石は口ごもる。まさか、おふぎけの提案でこんな大事になるとは思ってもしなかったのだ。だからといって、ここで「はい、そうです」と肯定できるはずもない。

「どうやら本気でやるつもりだったようだな…。はあ、お前ら理解しているか？いくらこの学校が寛容でも、教室でしかも授業中に野球拳などやったら、厳罰は免れん。よくて謹慎、悪ければ停学。それに、うちはこれでも名門私立だ。最悪、退学だってありえるんだぞ」

「え、そ、それは…」

徹の客観的で的確な指摘に、顔を蒼褪めさせる明石をはじめとした生徒達。そこに徹はさらに追討ちをかける。

「それだけじゃない。そんな事を教室内で、しかも授業中に許したら、私やネギの管理責任だって当然問われる。正規の教員である私は当然懲戒免職だろうし、ネギも実習資格を剥奪されるだろう」

「……………」

淡々と己への処分を語る徹に、最早生徒達は言葉もない。絶句するほかなかった。自分達があまりにも軽拳妄動あったことを認めざるをえなかった。自分がまたもやらかしてしまったことを悟り、ネギも愕然としていた。

「け、結局、ぼ、僕はどうなるんですか？」

震える声で問うネギ。その顔色は蒼白で、恐怖に歪んでいる。生徒達も固唾を呑んで耳を澄ませる。

「今、言った様に当然クビだ。お前の場合は実習の中止…、いや、実習資格の剥奪になるだろうな」

改めて結論を聞かされ言葉もないネギ。何も言えずに俯く事しかできない。生徒達もかける言葉が見つからない。今、何をいったところで慰めになりはしないし、何よりその原因を作ったのは自分達である。何が言えるというのだろうか。

教室に重苦しい空気が流れる。誰も言葉を発さないのではなく、発せない痛い静寂が空間に満ちる。それを断ち切ったのは意外にもその静寂を作り出した張本人であった。

「安心しろ。幸いに実際の行動に移っていなかったし、ネギが許しを与える前に俺が止めた。ゆえに手がないわけじゃない」

手があると聞いて、瞬時に顔を上げるネギ。生徒達も負けず劣らず縦る様な視線を痛いほどぶつけてくる。彼、彼女らの目は言っていた。そんな都合のいい手段があるのかと。

「何、話は簡単だ。お前らが黙っていればいいことだ。今日この時間に起きたことは、一切他言無用だ。要するに今日この時間には、何もなかったことにするんだ。そうすればネギの処分も、お前達への処分もありえない。なにせ処分の対象となる事実そのものがなくなるんだからな」

徹の言に生徒達は希望を見出す。英単語野球拳自体反対していた者達にも、安堵の表情が見える。悪ふざけがすぎると反対したとはい

え、クスメイトの退学など誰も望んでいないのだから、当然のことであった。生真面目なネギは何を言っているのか理解できないように、呆然としている。

「理解したようだな。よし、では今の提案はなかったものとして処理する。いいな、お前らは英単語野球拳なんていう提案はしなかったし、ネギがそれを許そうとした事実もない。いいな？」

確認するように言う徹にクラス全員が黙って頷く。ここに至っては反論も否定もありえない。

「ふう、やれやれ。実際に行われる前にかできて良かった。もし、実際に行われていたら、何らかの処分は免れなかっただろうからな。…だが、忘れるなよ、次はない。その時は容赦なく処分するから、肝に銘じておけよ」

徹は深く嘆息すると胸を撫で下ろした。しかし、最後に低い声で釘を刺すことも忘れない。生徒達も神秘的な顔で、また頷いた。ネギは事態の急展開に未だついていけなかったが、とにかく今回は助かったことだけは理解した。

「よし！では、お説教はこれでお終いだ。通常の授業に戻ろうかと、その前に提案者である明石及びそれに賛同した者達に校舎内の全てのトイレ掃除を命じる。行うのはテスト終了後で構わないが、確実に行うように」

「ええ、そんな。なかつた事にするんじゃない？」

「それとこれとは話が別だ。自分達の上でかそうとしたことを考えれば安いものだろう。お前達は、学校というものを侮辱したんだ。」

ならば、それは学校に対して償うべきものだろう。よって学校をより良くするために働け」

明石の抗議に徹はにべもなく言う。

「うう、自業自得か。分かったよ…」

項垂れながら、頷く明石。他にも賛同した者達が、神妙な顔で頷いたのだった。その様に安心したかのように、どっと笑いがクラスに巻き起こるが、ネギだけは笑えなかった。彼は、己に何の沙汰もないことが、見逃されたことが、果たしていいことなのか、喜んでいいのか判断できなかつたのである。本来、厳罰をもってしかるところを、なかつたことにするなんて、それは自分の目指す「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」とは、かけ離れた姿ではないかと彼は考えたのである。それは、安易に記憶魔法を使い自分の失敗を隠そうとしていたネギでは、絶対に気づけないことであつた。皮肉にも、明日菜や徹等によって促された精神的成長によって、彼は自身の現状や己の行いについて認識するに至つたのであつた。

その後、授業は再開された。生徒達は先の失敗の分もと言わんばかりの集中力で授業に臨んだのだが、肝心なネギが、先の指摘と認識&最終試験のことで苦悩しており、全く授業に身が入っておらず、結局あまり実りのない授業になつてしまつたのだつた。

- おまけ（やつてしまつた人達） -

「うう、失敗した。まさか、こんな大事になるなんて…」

「ごめんよー、私が悪ノリしなければ…」

授業の終わった休み時間、『佐々木 まき絵』が頂垂れる明石を慰めるように謝る。

「いいんだ。まき絵や皆のせいじゃないよ。私が考えなしにあんな事言っただのが悪いんだから」

「でも、それをいうなら私達だって、よく考えようもせずに止めなかつたんだから、同罪だよ」

明石はやはり自分が悪かつたのだと言うが、『和泉 亜子』は止めなかつた否が自分達もあると言い、それに大河内も頷き同調する。

「うん、それはそうかもしれないけど。やっぱり私が一番悪いと思うんだ。私にはお父さんだっているし、その大変さや重みを皆より理解していきやいけなかつたのに……。なんにもわかつてなかつたみたい」

教授である父のことを思い出し、改めて自身の軽率さと無思慮を悔やむ明石。大好きな父親も教職であるだけに、今回のことは彼女に大きな衝撃を与えていた。

「うん、これからはもっと考えることにするよ。それにネギ君、うん、ネギ先生だって、先生であることを忘れないようにする。子供だからって、公私のけじめはつけなきゃ駄目だよな」

「ゆーな……。そうだね、私もちょっと考えを改めるよ。ネギ君も先生なんだよね。そこを間違えちゃ、ネギ君にも迷惑がかかるよね。これから気をつけよう」と

これからの自身の指針を示す明石に佐々木が同調する。大河内や和泉も、心は同じようで神妙な顔で頷く。

「それにしても小宮山先生、怖かったなあ」

徹の冷厳な表情と怒号を思い出し、和泉は震えるように言う。

「うんうん。とても一歳しか上とは思えない迫力だったよね。やっぱりあれかな、社会人は違うってことかな？」

佐々木もそれに同意を示し、確かにすごい迫力だったと大河内も頷く。

「そうかな、なんかはつきりと叱ってくれてカッコよかったけど？」

「……えっ?!」「」

明石の爆弾発言に啞然とする三人。耳を疑わざるをえない発言であった。

「ゆうなもようやくファザコンから卒業」だってお父さんみたいだったし」「…」

一人素早く立ち直った和泉が感慨深げに言うが、明石の言葉がそれを全て断ち切った。

「あの悪いことは悪いって、はつきり言って叱ってくれるところがお父さんみたいでかっこいいなって…、どうしたの三人とも?」

「やっぱり、ゆうなはゆうなか」

「結局、お父さんなんだ…」

「…」

残念そうに首をふる和泉に、呆れたように言う佐々木。大河内は黙して語らないが、苦笑が浮かんでいる。

「え、何言ってるのねえ？」

その明石の問に答える者は誰もいなかったそう。

間違えてはいけないもの（後書き）

お気に入り登録が2000件を超えました。本作を多くの方に読んで頂き、感謝の気持ちと嬉しさで胸がいっぱいです。心から御礼申し上げます。これからも、お付き合い頂けると幸いです。

次で図書館島というか、ネギの最終試験を終わらせたいと思います。次こそはネギの選択を、そして学園長はどう動くのを書きたいと思っています。次は今回程、日をあけずに更新したいと思っています。それでは、次話もお読み頂ける事を期待します。

苦悩する者達（前書き）

多くの感想ありがとうございます。書いていただいた感想はすべて読み、少しずつ自分なりに理解し糧にさせていただいております。本作は原作とは大幅に異なるものになりますが、これからもよろしくお願いたします。

苦悩する者達

放課後にさしかかろうという時間、職員室で二人の教師が職員室で苦悩していた。

その一人である徹は、自身の浅はかさを後悔していた。それは、先の授業での対応をしずなに話したところ、対応自体は認めてくれたものの、自身やネギに下るであろう処分についてまで言及するべきではなかったと怒られたからであった。

徹は、自身の軽はずみな行動が他者に与える影響を考えさせると共に、もう少し考えて行動しろということと自身の行動に対する責任について示唆したつもりだったのだが、教師にあるまじき生々しさと保身的な言動であると窘められてしまったのであった。こういうあたり、形式上正規の教員であつても、教職課程も実習もしていないにわか教師に過ぎないということであろう。徹はそれを痛感していた。

（言われてみるとその通りだし、そもそもキレて感情に流されるとは未熟。ネギに大きな顔して偉そうな事いつときながら、情けないにも程があるぜ。やれやれ、なんだかんだいっても結局俺もにわか教師に過ぎないってことか…）

そんなことを思う徹の目に、今一人苦悩している教師の姿が映る。いわずと知れた子供先生こと、ネギ・スプリングフィールドである。彼は、いろんな意味で限界であった。ただでさえ、最終試験のことで頭がいっぱいだったと言うのに、ここへきて教師として大失敗した拳句、新たな悩みまで追加されてしまったのだ。未熟な少年の精神では耐え切れず、彼の苦悩は限界に達しようとしていた。

（ああ、どうしようどうしよう。最終試験の対策は全然めどがたた

ないのに、授業では大失敗しちゃった。これじゃあ、試験以前の問題で僕の教師としての資質が疑われちゃうよ。それに徹さんがうまく治めてくれたけど、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」としてあれでよかったんだらうか…）

（ああ、ネギはネギでてんぱっているようだな。まあ、最終試験に加えて、俺のせいで原作とは違って野球拳の件が失敗として刻まれたんだから無理もないか。

しかし、相当につまんでいるな。あいつの幼い精神ではそろそろ限界かもしれない…。手助けしてやるべきか？ 学園長の要請なんてぶっちゃけ知ったことじゃないし、未だに詠春さんからの連絡もないから、応じる義理も義務もない。うまいこと誘導してやれば、木乃香を遠ざけることも可能だろう。それに野球拳の件は、ネギの責任というよりは、生徒側や前任者であるタカミチが責められるべきだろう。あいつの悩みを増やしたのは間違いなく俺だし、正直教師として俺にもまずいところがあったのは事実だ。あそこにいたのが俺じゃなくて、しずな先生だったら、連中もあんな提案しなかったかもしれないからな。そうだな、よし！）

苦悩するネギを見やりながら、今後の行動について考える徹。正直、最終試験の間、彼はネギに対しては不干涉であるつもりだったのだが、彼自身やらかしてしまったという思いがある。また積極的に介入することで、木乃香をネギから遠ざける方向に誘導でき、本業の仕事上の要請にも適うと、徹は自身を納得させた。

「ネギ、何を悩んでいる？」

「えっ？」

苦悩しているネギに声をかけたのは、少年が今もつとも苦手とする人物であった。それゆえに、ネギは予想だにしない事態に間の抜けた声を出してしまっただった。そんなネギの様子に苦笑する徹。

「どうした？俺が声をかけたのがそんなに意外だったか？」

「い、いえ、その…正直徹さんが僕のことを嫌っていると思っ
ていましたから…」

一瞬、誤魔化すことも考えたネギであったが、素直に応じる。目の前の人物には嘘や誤魔化しは禁物であることを彼は嫌というほど理解させられていたからである。

「そうだな、はっきり言っ
て好きじゃない。お前の生い立ちや境遇には同情するが、仕事や義務とは無関係だ。なすべきことをなさな
い者やけじめをつけられない者は嫌いだ」

言葉にしたネギが拍子抜けするほど、徹はそれをあつさり
と肯定する。その様は、否応にもネギに怒りの感情を抱かせる。

「それなら…、それなら放
つておいて下さいよ！僕は、今大変なんです。これ以上、僕を悩ませない
てください！」

ネギは悔しくてたまらなかつた。ネギの目から見て目の前の男性は常に正しく、自分の欠点を的確に指摘してきたからだ。また、自分以上に教師としての責務を果しており、自分と違い生徒からもしつかり教師として扱われている。今日、彼から指摘されて気づいてしまった。自分が生徒達からなめられていることに。いや、正しくは

教師として扱われていないというべきだろう。今まで親愛の発露だと思っていた呼び名「ネギ君」や「ネギ坊主」こそが、実は教師として扱われていない証左に他ならない。考えてみれば、自分を「先生」と読んでくれる者のなんと少ないことか。

「まあ、そう熱くなるな、落ち着け。別にお前の悩み事を増やしに来たわけでも、喧嘩を売りにきたわけでもない。むしろ、その逆だ。悩み事の解決への助力とお前への謝罪をしにきたんだ」

熱くなるネギに対し、平然と宥める様に言う徹。その内容に思わずネギは目を丸くする。

「悩み事への助力?! 僕の悩み事が何かわかってるんですか? それに謝罪?! 徹さんが僕に謝るようなことがあるんですか?」

「ああ、知っている。魔法使いとしての最終試験のことだろう。どうやって2 - Aを最下位脱出させるかで悩んでいたんだろう? 謝罪については説明するまでもない。さっきの授業のことだ」

「最終試験のことを知っていたんですか? しかも、その内容まで」

「ああ、今朝学園長に呼び出されてな。詳細までは聞いていないが大まかな概要は知っている。俺は副担任だし、2 - Aの試験成績は俺の教員としての仕事に直結するからな。それで説明を受けたんだよ。」

実際には、不干渉の要請の為だったのだが、馬鹿正直にそれをネギに話す必要はないし、知ったところでどうなるわけでもない。むしろ、徹の本業まで話さなければならなくなり、木乃香が表に出ていない魔法関係者であることがばれてしまう危険があり、害悪ですら

ある。それに、嘘は言っていない。実際、学園長は建前としてそれを理由としてきたのだから。

「なるほど、そういういうことでしたか…。でも、さっきの授業って、まだ言い足りないんですか?!」

先の授業での失態が相当堪えたのか、疑心暗鬼になっているネギは声を荒げてしまう。

「だから落ち着け。謝罪だといっただろう」

徹はそんなネギの様子に苦笑しつつ、ネギを宥める。

「そ、そうでした。すいません、僕思わず…」

「いや、いい。正直言いすぎたのは事実だし、すこしきつい言い方をしたのも事実だ。情けない話だが少し感情的になってしまった。ネギだけの責任ではないというのに申し訳ないと思っている。本当にすまない」

「そんな、やめて下さいよ！徹さんは何も間違ったことなんてしてないじゃないですか。あれは、僕が世間知らずで、皆さんに先生として認められてなかったから…」

ネギの謝罪を制して、逆に謝罪し頭すら下げる徹にネギは驚愕し慌てふめきながらも言うも、後に行くに従って声が小さくなってしまふ。ネギが今日痛感したことを思えば仕方のないことであった。

「確かに今日のことの最大の原因はそれかもしれないが、それはネギだけの責任じゃない。むしろ、『俺達』に責任があるというべき

だろう」

「『俺達』ですか？」

「そうだ。俺とお前はまだ20に満たない若僧だ。教師としては未熟もいところで、生徒達も歳近く正直友達感覚で接している者も多いだろう」

「それは僕の方だけで、徹さんは…！」

「そうならば嬉しいが、実際は違う。事実、ついさつき浅慮の程をしずな先生に怒られてきたところさ」

「しずな先生に？」

「そうさ。俺もまだまだ教師としては未熟なんだよ。偉そうに人のことを言えた義理じゃないのさ」

「そんなことは…」

「いや、今回のことで実感したよ。『俺達』は二人とも未熟なのさ。であるにもかかわらず、『俺達』は担任と副担任だ。正直、重責を負わせた学園長に恨み言を言いたくなるが、一旦承諾した以上、仕事はきちりこなさなければならぬ。それは分かるな？」

「はい、それはその通りだと思います」

ネギは徹の言に頷きざるを得なかった。魔法使いの修行として教師をやることになったときも大いに戸惑ったものだが、全くできないものとは考えなかった。しかし、実際にやってみると思いもしな

った己の欠点や不見識が明らかになり、教師という仕事も思っていた以上に大変なものだった。正直、今の自分には荷が重いわざるをえないのをネギは自覚しつつあった。同時に投げ出すわけにもいかない。彼の夢には絶対に必要なことであるし、苦勞はしているが麻帆良での生活は楽しく充実したものであったからだ。

「だから協力しないか？」

ネギのそんな心情を知ってか知らずか、徹は言った。

「協力？でも、試験は僕に対してのもんですから、徹さんに協力してもらおうわけには……」

思いもがけない申し出であったが、ネギは頷けない。徹がそう言ってくれたことは嬉しいことであったが、ネギには試験は自らの力でやりとげないといけないという思いがあったからだ。

「ふう、そらへんがまだ子供だな。というか、頭が堅いな」

そんなネギに対して呆れたように徹の言に、ネギは憤慨する。

「僕は確かに子供ですけど、そんな風にいわなくてもいいじゃないですか！」

「やれやれ、お前何か勘違いしていないか？試験を自分一人の力でクリアしなければならぬと思っていないか？」

「何を言っているんですか。そんなの当然じゃないですか！」

「違うんだな、これが。聞くが試験を受けるのは誰だ？」

「それは僕に決まってるじゃ」「そっちの試験じゃない」…えっ?!」

「お前の受ける試験の内容を思い出せ。確か『2 - Aの試験成績最下位脱出』だったな」

「はい、そうですけど。それが何か?」

「そもそもだ、この条件はお前の力だけで達成できるものなのか?」

「え、そんなの当たり前…!」

当然だと肯定しかけて、ネギはそこで言葉を呑み込んだ。彼は今さらながら重大なことに気づいたのだ。期末試験を受けるの彼の教え子達であって、自分が受けるわけではないことに。

「気づいたようだな。魔法使いとしての最終試験を受けるのは、確かにお前だが、その合格条件である期末試験を受けるのは生徒達だ。つまりこの試験は、そもそも他者の協力を必要とするものなんだよ」

徹に言葉にして言われ、ネギは改めて認識する。確かにそうだ。この試験は生徒達の協力がなければ、合格はありえない。なにせ今まで万年最下位だったのだから、そこからの脱却を求める以上、これまで以上の勉強を強いることになるのだから。いくらネギが頑張ろうとも、生徒達が勉強してくれなければなんの意味もないのである。すなわち、ネギのすべきことは…。

「僕のやるべきことは、魔法で何かをするんじゃないやなくて、先生として皆に頑張って勉強してもらうようにすること…?」

憑物がとれたかのように呆然として言うネギに徹は頷いて肯定する。

「そのとおりだ。そして、それはお前だけの仕事じゃない。副担任である俺の仕事でもある」

「僕だけの仕事じゃなくて徹さんの仕事…」

生徒の試験成績向上などそもそも一人で行えるものではない。言われてみればその通りだが、何でも自分一人でこなさなければならぬという視野狭窄に陥っていたネギにとって、それは青天の霹靂であつた。

「そうだ。俺が協力するのは、ある意味当然なんだよ。何せ俺が担当するクラスでもあるわけだしな」

「そんなこと考えもしませんでした…」

「だから頭が堅いというんだ。大体、誰しも一人でできることには限りがあるんだ。それを理解しているか？そして一人じゃ、自分の力だけじゃできないなら、協力して貰えばいいんだよ」

「協力…。でも、人の力を借りるのは試験としては駄目なんじゃ？」

「分かってないな。そもそも協力が必要な試験だと言つたら。それに協力を得られるということも、その人の力なんだよ。『人望』という名のな」

「『人望』…」

「お前には、それがある。雪広が凄いやる気になっていただろ。他

の連中だって、多少は頑張ってくれるだろうさ」

「でも、それじゃあ僕はなにもしてないんじゃない？」

「やれやれ、納得できないって顔だな。頑張るのはあくまでも生徒達なんだが、お前がそれでも何かしたいと思うのなら、手はない」ともない」

「それは一体なんなんですか？」

表情を一変させ意気込んで聞くネギに徹は苦笑しながら問を返す。

「うちのクラスが試験成績最下位なのはなぜだと思う？」

「全体的に成績が悪いわけじゃないですよ？委員長さんや、超さんは、トップクラスでだったはずですし」

「そうだ。他も他クラスと比較しても平均的なものだが、けして悪くはない。しかし、例外が存在する」

「例外？」

「そう、正直洒落にならない成績をとっているのが、うちのクラスには5人いるんだ。この5人こそが、うちの万年最下位を決定づけていると言っても、過言ではないのだ」

「じゃあ、その5人を改善すれば！」

「そう、最下位脱出は十分可能だ」

「でも、具体的にどうすれば…」

ようやく試験合格の糸口が見えてきたが、またしてもその為の方策が思いつかない。ネギとて、勉強というものが一朝一夕でできるものでないことを理解しているから、余計である。

「ふむ、お前の悩みは理解できる。確かに勉強というのは、本来本人がやる気を出さなければどうしようもないものだし、俺達教師のやるべきなのは生徒達に勉強させるやる気を出させることにあるのだろう。」

しかし、今回ははっきりいって時間がないし、俺達は半人前で正攻法では未熟もいいところだろう。ゆえに今回は生徒達の自主性にかけるしかないというところだが…」

「そんな?!それじゃあ皆さんに頼るだけで、僕はなにもしないことになるじゃないですか!」

「落ち着け、人の話は最後まで聞け。」

俺達にもしてやれることは、今回に限って言えばある。それは勉強合宿だ!」

「勉強合宿?」

「そうだ。まあ、この5人が並外れて成績が悪いからこそできることだがな。あれだけ悪いと、流石に学校側としても手を打たざるをえないからな。おそらく認められるだろう」

聞き返すネギに徹は苦笑しながら言う。

「合宿をくんで、俺とお前が早朝と放課後に集中的に教える。勿論

普通に学校にも行ってもらうし、補習的なものにしてやれば問題はないだろう。合宿所は、すでに目星をつけてある。どうだ、やる気はあるか？」

「是非お願いします！」

ネギはその日一番の声で言うと共に深々と頭を下げたのだった。

さて、ところかわって勉強合宿。当初、強制参加を申し付けられた5人は嫌そうな顔をしたが、学園長の流した噂と徹の「もう一度二年生をやりたいか」という言葉に、一も二もなく参加を了承したのだった。ちなみに雪広を筆頭として、自主参加を申し出た者もいたが、今回のものはあくまでも苦肉の策であるからと、一定ライン以上の成績の者は参加を拒否した。結果的に参加者は、5人だけとなった。これは自主参加希望者が成績優秀者ばかりだったからである。野次馬的に見に来る者もいたが、徹のスパルタぶりに恐れをなしてすぐに逃げ出した。

「鬼だよな」「鬼アルネ」「鬼でござるな」「鬼ですな」「鬼ね」

参加者5人は徹を口々にそう評した。徹の教育法それは…、間違えるとその部分について、なぜ間違えたのかという原因を徹底追及し、懇切丁寧に解説するのだ。そして、その後に彼お手製の和菓子を食べさせられるのである。一個や二個なら甘くて美味しいで済むだろう。だが、これが十を超えればどうだろうか。甘味が好物である女性といえども、20、30と至ればそれは最早苦行である。しかも、甘くて美味しいそれは、乙女の最強の敵である『体重』に直結する。彼女達は、乙女としての尊厳の為に必死に勉強するほかなかった。

ネギはネギで、これまた一生懸命に教えてくれる。聞いていないと泣きそう、間違えると自分の教え方が悪いと謝ってくるので、罪悪感をひしひし感じる。こちらもまた、勉強せざるをえない。

「うう、まさか勉強してこなかったかったことが、こんな形で返ってくるとは思わなかったでござる」

「本当アルネ。私もあれにはまいったアル」

早朝、せめて少しでもカロリーを消費する為に鍛錬させてくれと徹に願い、許された『長瀬 楓』『古 菲』は組み手をしながらぼやいた。いくら甘いものは別腹な乙女で育ち盛りの年代であっても、あれだけ大量に食べさせられると最早拷問である。それは大食漢の二人であつてもそうだったから、他の3人はどれほどであつたらうか。胃がむかむかするとか、口の中が甘ったるいとか、そういうレベルを超越してしまっている。勉強してこなかったことをこれ程後悔したことはない。武闘派である彼女達であつても、正直体重計に乗るのが怖いのが実情である。

「小宮山先生もあれアルが、ネギ坊主も参つたアル」

「うむ。あんなに頑張られると、あの目で見られるとどうしようもないでござるな」

そう言いながら、両者の動きは加速していく。常人には捉えがたいスピードに達したところで加速はとまるが、最早何をしているのか常人には判別できない。手と手が交差し、拳が手刀が飛び交う。両者共にクリーンヒットを許さず、見事に捌いて反撃している。これが中学生なのだというから、麻帆良のレベルは色んな意味で異常である。いや、麻帆良というよりは2-Aがというべきかもしれない

が。そんな様子を陰から見守る2つの影があった。

「二人共凄いですね。僕の目には何が何だか」

とても学生とは思えない高レベルの攻防にネギが感嘆する。

「お前も動体視力は悪くはないんだから、頑張れば十分に視えるレベルだ」

「そうでしょうか？魔法で強化なしに、僕の目である動きが捉えられるのでしょうか？」

徹のそうでもないという言に半信半疑な様子で、ネギは確かめるように問う。

「お前は魔法に頼りすぎだ。少しは魔法なしの素の自分の能力を信用して使ってやれ。魔法だけが能じゃないだろう」

「魔法以外の僕の能力…」

「そうだ。合宿を始める前にも言った『人望』もそうだし、合宿で実際に役に立ったお前の頭の良さだってある。事を成すのは、何も魔法だけが手段じゃないんだ。それ以外の手段だってたくさんあるさ」

「僕は、やっぱり視野が狭かったんですね。日常的に魔法を使っていたせいか、魔法を使わない手段というのが最初から頭にありませんでした。思えば、こちらにきてから魔法以外のことで如何に自分が何も知らないかを思い知らさせてばかりです。明日菜さんに偉そうに言っておきながら、僕は魔法に頼るばかりで…」

言ってる内に情けなくなつたネギは顔を俯かせる。

「最初から全部うまくやれるなんてこはないし、万事悟っている奴なんていない。自惚れるなよ、ネギ・スプリングフィールド。お前は天才かもしれないが、誰がなんといいおうと社会的には大した力もない一人の子供でしかない。子供であることを認める。そして、よく学び、よく悩め。経験や苦悩からしか得られないこともあるのだから」

徹は叱咤するように断言する。ネギの歪み様は、本人の想いが大きいことは否定しないが、周囲の環境がそれを正さず、むしろ助長させたのは間違いない。父親が英雄であり、両親ともに欠けていることも大きいと思うが、恐らく本当の意味で純粹に子供として扱われたことがないのが、最大の原因だと徹は思っていた。原作知識からしてそうだし、思えば唯一それをなしうるスタンが石化させられたのが痛い。『英雄の息子』として、並以上の結果を常に求められ、それに十分以上に応えられる能力があつたのが、ネギの不幸である。結果、彼は自身で何事もこなさなければならぬという強迫観念すらもっているような気配があると徹は思っていた。

ゆえに、誰かが言つてやらねばならない。「お前は子供なのだ、できなくて当たり前なのだ」と。

「僕は子供ですか？」

「そうだ、そんなこと改めて言うまでもないだろ。今年で15になる俺ですら半人前なのに、数えて10歳のガキが大人であるものかよ」

あまりの身も蓋もない言い様に、半ば清々しさすらネギは覚えた。そんなこと当たり前のことではあったが、スタンと身内以外でこうも真つ向から自分を子供扱いした人は初めてだったからだ。彼はあくまでも『英雄の息子』として扱われ、純粹に子供扱いする人など今となつてはネカネくらいしかない。

「ガキつて……。もう、敵いませんね。なんかそこまで言われちゃうと、素直に認めるしかない気がしてくるじゃないですか」

「そつだ、認める認めてしまえ。そして、人に頼ることを覚える。必要なときは「助けて」と言える人間になれ。一人じゃできないことも、人に頼ることも恥じゃないんだよ。むしろ、できないのに一人でやるうとすること、人に頼れないことの方が恥なんだよ。それがわからないうちはまだまだ子供つてことさ」

苦笑気味に言うネギの言に対し、何を迷うことがあるというふうに戻す徹。

「なんというか、徹さんは率直すぎませんか。もう少しオブラートに包んでくれるとありがたいです」

半ば呆れた様に返すネギ。しかし、その声音は明るいものだ。落ち込んでいる感じはない。

「何を言うか。それでも気を使つたつもりだが」

「うわ、使われてなかったらどんな惨状になっていたのか、想像つきませんよ」

「ふん、言っじゃないか。なら、その惨状を味わってみるか…」

「心から遠慮させてもらいます！」

おどけるように話す二人。最早、そこに険悪な空気はなく、ただじやれ合っているようにしか見えなかった。

このやり取りの後、ネギは古に弟子入りする。そして、ジヨギングがてら明日菜の新聞配達に付き合うようになったそう。

ちなみに、試験結果は原作どおりの一位であったことはいうまでもない。乙女達は自身の尊厳と母性本能の為に、原作以上に懸命に勉強せざるをえなかったからである。

彼女達は試験後に口を揃えて言った。「しばらく和菓子はみたくない」と。

・おまけ（試験後のタカミチと学園長）・

「なんだか結果的にはいい方向にいったみたいですね」

ネギの最終試験が無事に終わり、余禄でバカレンジャーの成績も上がった。ネギの後見人のような立場であり、バカレンジャーの元担任でもあるタカミチにとって喜ばしいことであった。

「ちつともよくないわい。わしの思惑はことごとく外された挙句、木乃香には簡単には手を出せんようになるし、結局あの小僧はわしの

要請を無視して思い切り干渉しよるし、散々じゃわい。

…まあ、形式上とはいえネギ君を合格にし、麻帆良に正式に属させる事ができるようになったことは喜ばしいがのう」

不満気に言う近右衛門。まあ、無理もないことではある。今回の最終試験の主目的であるネギの正式配属とバカレンジャーの成績向上は成せたとはいえ、近右衛門の最大の目的の一つである木乃香への魔法認知への布石は、説得するどころか半ば禁止させられてしまったのだから。

「かー、これもみんなあの小僧のせいじゃ。ネギ君の不祥事を尽く婿殿に報告しおつてからに。あれ程、婿殿のネギ君に対する評価が低いとは夢にも思わんかつたわい！ネギ君は子供なんじゃから、少しくらい目をつぶつてくれてもいいじゃろつ」

「まあ、彼の仕事内容からすれば、仕方のないことかと。それにもし大目にみてくれていても、それはそれでまずいんじゃないですか？正直、騙し討に近いですからね。それに子供だからというのは、我々が言つていい科白ではないでしょう」

愚痴をこぼすように言う近右衛門だが、タカミチはその意見には賛成できないと諫める。

「タカミチ君までそんなことを…。わしの味方はどこにもおらんのかー！」

「少なくとも木乃香君への魔法認知についてはそつでしようね。僕に限らず、学園長の味方はいないでしょう。やり方が強引ですし、他の生徒まで巻き込んでいる辺りダメダメだと思いますよ。何より、詠春さんの信頼とか思い切り裏切ってますよね」

「うう、それは…」

痛い所を突かれ沈黙する近右衛門。彼とて理解しているのだ。少々強引過ぎたことを。

「木乃香君だけじゃなく、ネギ君に対しても、しばらく手出しは自重すべきじゃないですか。我々が手出しをしなくても、彼は立派に成長している。今日の彼の顔を見ましたか。実に晴れやかな顔をしていましたよ」

今回の試験結果を知った時のネギの表情を思い出して、タカミチは言う。

「うう、それはそうなんじやが。ネギ君にはのう…」

近右衛門にも理解できていた。ネギが己が想定した形とは異にする形ではあるが、いい成長をしていることを。特に、合格を祝福した時のネギの態度は特筆に値した。そのやりとりは以下の通りである。

「ネギ君、合格おめでとう。これで君は正式に麻帆良の先生じゃ。よく頑張ったのう」

「ありがとうございます。でも頑張ったのは僕だけじゃありません。一番頑張ったのは、明日菜さんをはじめとした生徒さん達ですし、徹さんも協力してくれました。今回の結果は、僕だけの力じゃありません。支えてくれた皆さんのおかげです」

以下略。とにかく、ネギの変貌ぶりに驚愕したものである。だが、

それは一概に喜べるものではない。近右衛門としてはネギには『英雄の息子』たる役割を果たしてくれることを期待していたのだ。だが、今のネギには背伸びするような様子とか英雄願望的なところがなりをひそめている。元々、父親と違い理的で物静かな性格の少年である。落ち着けば当然のことであつたのかもしれないが、それでは少々まずいのである。

「今のネギ君にはナギのように無茶を通すような気概が見られん。落ち着き、自分のできることを着実に探しているようじゃ。かつてのような焦りや、背伸びしているのが嘘のようじゃ。喜ばしいことなんじゃが、それでは英雄足りえんのじゃ」

そう、今のネギでは英雄足りえない。英雄とは一種の不条理であり、無理無茶無謀をそうでなくしてしまう者である。だが、今のネギにはそれを全く感じない。このまま成長しても、かなりの実力者としていい「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になるだろうが、それは『英雄の息子』に求められる立ち位置ではない。

「それでいいじゃありませんか。むしろ、今までがおかしかったんです。あんな小さな子に全てを押し付けるなんて。あの子の両親は、一度世界を救っているんです。親子二代に渡って重荷を背負わせる必要はないでしょう。」

むしろ、僕たちは守ってやるべきだったんです。あの子が普通の子供として生活していけるように。思えば、ガトーさんがなぜ明日菜君の記憶を消して、僕に預けたのか……。それも同じだったのではないのでしょうか。力や血筋などに囚われずに、平穏な生活を送って欲しいという願いからだつたのではないのでしょうか」

「今さら、君がそれを言うのかね。君も明日菜君をネギ君の従者にするのに賛成したではないか?!」

どこか後悔するかのようにつつタカミチに、近右衛門は憤然として反駁する。

「ええ、その通りですね。正直、後悔していないといえは嘘になりますが、結果的には良かったと思つています。あの二人、なんだかんだ言つて相性がいいようすし、お互いに成長を助け合つています。ようすから。ですから、今更明日菜君からネギ君を遠ざけるとはいけません」

だが、タカミチはそれをあつさり認める。確かに後悔はあるがそれは間違ひではなかつたと。

「ならば何だというんじや？」

「僕はもうネギ君を英雄にするのには協力しないということです。少なくとも、ネギ君が自分からそうなりたいと願わない限りは」

「何をいいだすんじや、タカミチ君！」

タカミチの宣言に狼狽する近右衛門。己の片腕ともいえる人間にいきなり袂別宣言べいべつをされたようなものだ。狼狽するのも仕方のないことであつた。

「それから、生徒達を積極的に巻き込むようなものにも協力しません。そもそも、ちよつと特殊な才能を持っているからといって、何の説明なく一般人を巻き込むのがおかしんです。今回のことで色々目が醒めました。僕は元とはいえ担任であり、彼女達は大切な教え子だつたというのに、むざむざ危険に晒すことを選択してしまつた。これは許されないことです。僕は彼女らこそ守らねばならな

ったというのに……」

嘔み締めるように言うタカミチ。そこには悔恨と苦渋に染まる男の顔があった。さしもの近右衛門も言葉がない。

「学園長には恩義がありますし、これからも今言ったこと以外なら、喜んで協力します。ただ、今後は学園長の方針に異を唱えることもあるやもしれません。それを留意してください。それではこれで僕は失礼します。」

最後に一応フォローするようで、さらに釘を刺したかのようにも聞こえる。袂別ではないが、全面的な信任はしないという意味表示をして、タカミチは去る。

「どうして、どうしてこうなった……」

後には、項垂れる近右衛門が一人残されたのだった。

苦悩する者達（後書き）

大変遅くなりまして申し訳ありません。

ぶつちやけてしまうと今回の話も非常に難産でした。最初の予定していた展開は、原作通り図書館島探索であり、深い考えなしの原作追従ルートでした。しかし、書き進めていくにつれ、それはありえないだろうということになり、一から作り直すことになりました。自身の未熟を恥じるばかりです。最早、作者でも先行きのわからない物語になってしまいました。これからも見守って頂けたら幸いです。

またしても説教かよと思われるかもしれませんが、ご容赦を。ネギ君にはこれは必要じゃないかということをやってやりたかったのです。ネギ君はもっと真つ当に成長できる子だと思っておりますよ。

今回、とうとうタカミチに学園長とは違う道を選ばせました。先の詠春&鶴子との会談や徹との殴り合い、ガトーの真意、タカミチ自身のネギや生徒達への感情等を考慮したら、案外こういう展開もありえるんじゃないかと思つて書いてみました。原作でのタカミチは常識人ですし、ネギに対する思い入れや明日菜を思う気持ちは結構なものがありますから。生徒思いでもありますし、正直全面的にタカミチが学園長のやり方に賛成していたとは、到底思えませんから意見・感想・批判等お待ちしています。遠慮無くお願いします。

それぞれの思惑（前書き）

2010/12/11

改訂終了です。筋は通したつもりですが、まだおかしいところがあれば、遠慮なくご指摘下さい。

2010/12/11 19:47

再び微修正を加えました。何度も申し訳ありません。

それぞれの思惑

期末試験が終わり、結果も上々と2-Aの生徒達が一息つき、ネギが体力作りに力を入れ始めた頃のある晩、麻帆良学園都市の一室で4人の少女が密会していた。いや、正確に少女といえるのは2人だけかもしれない。後の2者は、いずれも人外存在であるからだ。

「以上が調査結果よ。満足してもらえたかな？」

そう言つて、確認を取るのには「麻帆良の最強頭脳」と言われる天才少女『超 鈴音』である。

「ふん、悪くはない。少なくとも知りたいことは分かった。強いて言うならば、渡米中の奴の行動が全く不明なことが不満といば不満だが、奴の扱う流派の詳細が知れただけでも十分だ。しかし、よくもここまで調べられたものだな」

その確認に対し、渡された書類に目をやりながら満足を伝えるのは、ハイ・テイライトウォーカー人外の極みとも言うべき吸血鬼の真祖『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』である。アタナシオティ

「それは先生の扱う流派が結構有名だったからですよ。『封神妖幻流』、少なくとも日本国内で裏に関わる者達にとつての知名度で言えば、『神鳴流』と並びます。といつても悪い意味込ですが……」

苦笑するようにそれに応えるのは、『葉加瀬 聡美』である。この場にいる者の中で、最も一般人に近い人物であるが、彼女の頭脳は中学生を大いに逸脱しており、この密談に参加する資格は十分にある。

「悪い意味ですか？小宮山先生は、多少厳しいところは見受けられますが、そんなに悪い人には見えませんでしたか？」

そう疑問を呈すのは、麻帆良のトンデモ技術の結晶ともいうべきガイノイド『絡繰 茶々丸』である。生物ではないというのにどこかおもんばか慮るような表情を見せている。

「ふん、奴の人間性云々の話ではなかるう。奴の流派自体が抱える特異性ゆえなのだろうよ」

「流石エヴァンジェリン、説明するまでもなく理解しているようだね。貴女の言うとおりよ」

従者の言葉を熟知り顔で否定するエヴァに、同調する超。

「流派自体の特異性ですか？マスター、それは一体何をさすのですか？」

主の否定の言葉に疑問を返す茶々丸。彼女はすでにエヴァの持つ書類の内容を学習済だが、何が問題なのか理解できなかったからだ。

「分からんか？奴の流派は妖刀・魔剣・呪物の類を使うのだ。それも必要にかられて仕方なくではなく、進んで好んでそれを扱うのだ。正義の魔法使いや邪法や外法を嫌う連中にとっては、忌み嫌うべき存在なのだろうよ。」

「妖刀・魔剣・呪物を扱うことがそれ程問題なのですか？」

「妖刀・魔剣はその名の通り、妖気・魔力を帯びた刀剣だ。妖気は

人の心身を蝕み、およそ常人が使えるものではないし、力ある魔剣は代償を必要とするものも少なくはない。そんな物を好き好んで使う奴はいないだろう。呪物は論外だ。呪いの品だからな。正義の魔法使いでなくとも、普通の神経した者ならば、好き好んで呪われる危険性のある物に近づかないだろう」

「なるほど。にも関わらず平然とそれを扱うからこそということですか」

「そうみたいヨ。流派の開祖は、妖刀・魔剣・呪物に適合しやすくする為に鬼と交わって子孫を残したってという話まであるくらいヨ。はつきり言って、人外じみた流派ヨ」

どこか呆れたように応える超。それも無理なきことである。彼女が調査した際に入手した数多の情報には、人間であることを疑いたくなるような話も少なくなかったからである。

「そうですね。裏の世界でも、半妖呼ばわりする人もいるくらいですから。案外、事実なのかもしれませんけど…。でも、私はそんな事よりも彼等が例外なく人殺しであるという事実の方が、忌み嫌われている最大の理由だと思いますけどね」

調査に協力した葉加瀬もそれに補足するように言う。

「妖刀・魔剣を真に使いこなす為には、『使い手』ではなく『主』にならなければならないだったカナ。そして、『使い手』から『主』になるためには、人を殺す必要があるという話だったネ」

これがかつての出稽古の際に、詠春が鶴子と話した時沈痛な表情を浮かべた理由である。実際には、『主』となるだけの素養を持つ

た者が、真実自身の意思で相手を殺害することを決意し覚悟すること」なのだが、結果的に対象を殺害した後に目覚めたように周りには見えることから、誤解されて伝わっているのであった。

「ふん、必要とあれば自らの手を汚せるのだ。何の覚悟もなく力をふるい、他者を傷つけながら不殺を訴えるような偽善者よりは、余程好感が持てるわ！だが、人間共からしてみれば、忌むべき存在なのだろうな。躊躇ためらいなく人を殺し、禁忌とされる物を平然と扱う者達は…」。

本当に、よくこれまで潰されなかったものだな。奴の流派は忌み嫌われているのだろうか？」

吐き捨てるように言うエヴァであったが、一方で、そんな流派がなぜ今まで生き残れたのかという疑問が湧く。

「ええ、今でこそ表立って忌み嫌われてはいませんが、実際に潰そうとした動きもかつてはあったようです。なにせ、千年以上の歴史を持つらしいですから…」

「生き残れたのは、その圧倒的な戦闘力と彼等の残してきた功績のおかげみたいネ。戦闘力に関しては言わずもがな。禁忌ともいうべき物を平然と使いこなし殺傷すら厭いとわない彼等は、一線を画す力を持っていたそうネ。功績に関しては、真偽は定かではないが、神を殺したり封じたという話もいくつかあったし、神鳴流と幾度も共闘して強大な妖怪や悪魔を討ち果たしたこともあるみたいネ。

まあ近年では、『妖閃翁』の働きもあって、一部では未だに嫌われているようだけど、表立って誹ひ謗ぼう中傷じゅうじやうされることはないみたいヨ。それでも流派に対する畏怖と嫌悪は健在のようだけどネ」

「ふむ、なるほどな。まあ、そんなことはどうでもいい。重要なの

は、奴が呪物の扱いにも長けているということだ」

自分で聞いておいて、興味がなくなれば切って捨てるエヴァ。結構自己中心的な人である。

「呪物：やっぱり、エヴァンジェリンの狙いは呪いの解除カナ？」

「そうだ。奴の流派が呪物を扱う以上、呪術にも長けているはずだ。実際、奴は呪具らしきものをいくつか帯びていたし、奴が呪物である程度自分の意思で使用できるのは間違いない。奴ならば、この忌々しい呪いを解く方法を知っている可能性もあるう」

エヴァの狙いを正確に類推する超。エヴァはそれを否定せず、むしろ肯定する。

「少し意外カナ。エヴァンジェリンはネギ坊主を利用して、呪いを解くつもりだったと思っていたヨ……」

未来を知る超にとってイレギュラー（彼女の知る未来ではいなかった存在）である徹は微妙な存在である。なんといっても、己と同様のイレギュラーである。その存在は、彼女の悲願成就の可能性を示す吉兆のようにも見えたし、一方で彼女のいた未来とこの世界は繋がっていないのではという絶望をもたらすものでもあったからだ。それゆえに、彼をきっかけとした変化には敏感にならざるをえない。超の持つ「未来を知っている」という絶大なアドバンテージを最大限活かしながら、自らの悲願が成就する未来を導く為には、自身が企図・想定した変化ならともかく、彼女の思惑を超えるような変化は好ましくないのだ。もし、多大な変化があれば入念に周到に準備してきた計画を修正しなければならぬからだ。

そんな前提の下、エヴァとイレギュラーの接触は予測不可能な変化をもたらす可能性があるものであった。徹の経歴を考えれば、解呪の可能性は十分にありうると超は判断していたからだ。ここでエヴァの呪いが解かれれば、麻帆良どころか日本の裏の世界のバランスが変わってしまうことすらありえる。いや、下手をすれば、魔法世界全体に影響を与えるだろう。なにせ魔法世界では、子供の寝物語にすら語られるあの『闇の福音』^{ダイク・エヴァンジェル}が野に放たれるのだ。どんな騒動が巻き起こされるか分かったものではない。

それに今現在は協力関係にある超とエヴァだが、エヴァが本来の力を取り戻せば、その関係が崩れるのは想像に難くない。なぜなら本来のエヴァであれば、脆弱な人間の協力など要しないのだから。下手をすれば、不干涉どころか計画を破綻させかねないのだ。『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』とはそれに強力で圧倒的な存在であった。ゆえに、超としてはエヴァには悪いが、少なくとも計画実行が終わるまでは、解呪は避けてほしいのが本音であった。

「最初はそれを考えていたのだがな。あれは子供過ぎる。私に女子供をいたぶる趣味はない。それにあれを利用して呪いを解くとなれば、爺やタカミチが出てくるのは間違いない。つまらない横槍は御免だし、それに奴が呪術の専門家であれば、呪いを解くまでいかなくても、その糸口になる可能性はあるからな」

それに対し、エヴァはネギを利用することは否定的だった。徹のせいで、原作よりもネギの未熟さが際立ってしまったことも一因であるし、この時点の彼女は学園長から許可を得ていないのだから仕方のないことではある。

「それはそうかもしれないけど、ネギ坊主を利用した方が確実じゃないカナ？学園長達の横槍はこっちで何か手を打つてもいいヨ」

「随分、協力的じゃないか？ そんなにあの子供先生を私に襲ってほしいのか？ 協力には感謝するが、お前に何の得があるというのだ？ 言っておくがどんなに協力されても、茶々丸はともかく私は傍観ほうかんはしても協力はせんぞ」

やけに協力的な超を訝いぶかしげに思うエヴァ。 もしや、それを餌えさに傍観ではなく協力を求めるつもりではと思い、一応釘を刺しておく。

「いやいや、そんなことは分かっているヨ。ただ、どうせなら確実性のある方でいった方がいいと思っただけネ」

少し慌てて否定する超。 いつも超然としている彼女にしては珍しいことである。 その様子に些か不審を覚えるエヴァであつたが、少なくとも己に対しての害意や利用しようとする意思は見受けられないので、あえて触れずにおく。 藪蛇やぶへびは御免であるし、目の前の少女は立場も性格も、良くも悪くも複雑で面倒な人間だからだ。

「分かっているなら構わんさ。 確かにあの坊やの血を使うのが最も確実な方法だろうが、坊やに接触すれば、間違いなく爺達が動く。 そうなれば、私が呪いを解こうとしている動きも気取られるだろう。 その場合、奴との接触を妨害される可能性も否定できん。 奴が呪術の専門家であることは、爺達も知っているはずだからな。 だから、あの坊やを利用して呪いを解くのは、本当の意味で最後の手段なささ。

だが、今なら奴と接触したところで、咎とがめられる事はない。 爺は近衛木乃香の件で、頭を悩ませていて私への監視も緩くなっている。 つまるところ、今が奴と何の邪魔なしに会う絶好のチャンスなのだ！」

そう力説するエヴァに対し、超はポーカーフェイスを保ちながら、内心で考えを巡らす。

（また、あのイレギュラーによる変化が…。当初は、私の魔法公表の一助あるいは、うまくいくという可能性を示したものと捉えていたけど、もうそんな悠長なことは言つてられる状況じゃないネ。明日菜サン達との同居解消に始まり、図書館島探索も起きなかった。他にも大小合わせれば凄まじいまでの変化が見られるヨ。これ以上の変化は計画を修正しなければならなくなりそうネ。イレギュラーとの接触は私自身もイレギュラーである以上、何が起こるか分からないから避けてきたけど、これ以上の変化が生じる前に接触して話をつけておくべきネ。

彼は麻帆良所属の魔法使いではなく、西の長の私兵みたいだから、交渉次第では協力は無理でも傍観くらいはひきだせる可能性は十分にある。それに心理的な隙をついたとはいえ、あの高畑先生を倒す程の手練てだれ。敵に回すのは少しリスクが高い相手ヨ。こちらの戦力だつて無限じゃないネ、少しでも敵に回る可能性を減らすのは悪くない策のはず…。

でも、迂闊うかつだつたネ。できれば、エヴァンジェリンと接触する前に手を打つべきだった。そうすれば、万が一にもエヴァンジェリンの呪いが解ける可能性を潰せたのに…。

まあ、今はこれ以上考えても仕方ないネ。エヴァンジェリンと彼の会談の結果次第で、こちらも応手を考えないと。とにかく早合点や仮定は危険ヨ。ここは焦らずに、エヴァンジェリンとの会談を観察するべきネ。そこから見えてくるものもあるはずだからネ。）

「とにかく明日だ！明晩の満ちた月の力を受けた状態なら、奴との交渉も私に有利な展開に持っていけるだろう。その為にも、貴様等は茶々丸を万全な状態にしておくのだ。カードは少しでも多いほうがいいからな」

「マスターの為ならば」

「分かりました。全力を尽くします!」

「…分かったヨ」

茶々丸が力強く頷き、葉加瀬が勢い込み、超も神妙な顔で頷いたのだった。

以下のような挑戦状、いや招待状が徹の元に届いたのは突然だった。はっきり言って何の前触れもない。だが、徹はそれをどこか当然のような気持ちで受け取ったのだった。

『今宵、午後10時に桜通りで待つ 闇の福音』

「ついに来たか。俺は喜んでいるのか? 恐れているのか? どっちかねえ…」

そう一人ごちる徹。彼としては、いつか来るだろうなと覚悟してきたものが実際に来ただけなのだが、それでも相反する感情が同時に生まれ、何とも言い難い表情になるのを抑えられない。その感情は恐怖であり、歓喜であった。恐怖は言わずもがな、あの『闇の福音』を相手しなければならぬのだ。当然、生じる感情である。

では、歓喜とは何か? それは彼の仕事が上手くいったことについてであり、同時にイレギュラーである己が一応の価値を認められたこ

とに対するものであった。前者は、ネギと接触する前にこちらに接触してきたことだ。これは彼の仕事上、木乃香が巻き込まれる可能性を減少させられるという意味で重要なことであった。後者は、こうして呼び出された以上、少なくとも話す価値がある相手と評価されたことになるからだ。エヴァの性格からして、興味や評価に値しない者は無視する傾向が強いから、これは喜んでいいだろう。

「しかし、桜通りとは…。あそこは監視の目が緩いとかそういう事情でもあるのかね？」

図らずも、原作の吸血鬼騒ぎがあつた場所が呼び出し場所である。原作を知る者としては、そんなことを考えずにはいられない。なにせ、偶然の一致というにはピンポイント過ぎる。麻帆良は広大な為待ち合わせには他にいい場所がいくらでもあるし、荒事に向いた場所も多くあるからだ。

(流石に考えすぎな気がしないでもないが、緩いとはいえ常時監視されている身としては、そういった可能性が少しでもあるなら、調査しておくべきだろう。まあ、それもこの会談が何事も無く終わればの話だが…)

そんなことを考えながら、これからどうすべきか思考をまとめる。

(通常通りの監視なら、誤魔化すのはそう難しいことじゃない。なにせ式神をちよつと偽装してやれば、騙されてくれるレベルだからな。それに詠春さんとの会談の影響か、最近学園長の動きが鈍い。そのせいか、監視もおざなりだ。密談するにはもってこいの状況だな。エヴァ対策は麻帆良に来ることが決まった時点から練に練ってきたし、麻帆良に来てからは『真理の眼』を使って色々解析済だ。別荘に引きずり込まれない限り、まず負けはない。それにしても、

エヴァは何を考えているのやら…)

「まあ、なるようになるか…。今更、ネギや学園長に気を使う必要も意味もない。俺は俺の為に動くだけさ」

思い切り原作に介入していることが脳裏をよぎるが、今更だと切つて捨てる。かつて物語の読者であり、傍観者でしかなかった『水無月透』は、今やこの世界に生きる当事者である『小宮山 徹』なのだ。

そして、どれだけ類似しており、その知識が情報として有用なものであっても、どこまでいっても漫画は架空の物語しかなく、現実ではないのだ。一人の人間として現実に生きる彼に、漫画の物語を^{ストーリー}気にして、現実で全力を尽くさずにいるなどありえないことなのだから。

「来たか、時間には正確なようでは何よりだ、小宮山先生。いや、封神妖幻流36代目継承者『小宮山 徹』」

悠然とマントと髪を風にたなびかせた黄金の少女が、特別製の隔離結界の中に侵入した白銀の青年を迎える。色々な意味で対照的な二人であった。男と女、教師と生徒という立場、銀髪と金髪、長身(年齢の割に)と矮躯という風に。唯一の共通点は真紅の眼。常人にはありえざる魔性の瞳だけが、彼と彼女の共有するものであった。

「流石によく調べているようですね、マクダウエル。いえ、『闇の^{ダーク・エヴァンジェル}』^{マカ・ノスフェラトゥ}不死の魔法使い』、『人形使い』^{ドール・マスター}等の数多の異名を持つ吸血^{ハイ・テイル}鬼の真祖』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』というべき

でしょうか？」

「貴様にだした手紙には闇の福音としか書かなかったはずだが…、中々どうして私をよく調べているようじゃないか？小僧」

「そりゃあ、ハイ・デイトライトウォーカー吸血鬼の真祖が自分の担当するクラスにいたら、調べるのは当然でしょう。仕事柄、賞金首とかの情報には精通してますから」

実際には原作知識ありきだが、嘘は言っていない。徹が賞金首について精通しているのは事実であるし、彼女の逸話は魔法世界では知る人ぞ知る常識だ。

「ふん、その様子だと最初から私が何者であるかを察していたようだな。だが、よく分かったものだな。それでも私の存在は、麻帆良の最高機密だぞ。それに普段の私は普通の人間となんら変わらないというのに」

「私は少し眼には自信がありましたね。それに魔とか呪の気配とかには敏感なんですよ。普段から慣れ親しんでいますのでね。まあ、それでも最初は自分の目を疑いました。まさかこんないたいけ幼気な少女が、あの高名な闇の福音だなんてね」

徹の言に訝しげに疑問を返すエヴァだが、どこか面白そうに矛盾ない答を返されてしまう。ここら辺は、今までエヴァへの対応をシミュレートし、言い訳に至るまで練に練ってきた徹の面目躍如であった。ちなみに内心は、どこかおかしいところはないか不自信をいだかねないかという緊張と不安で一杯だったりする。それを表に出さないだけの経験があり、心構えをしておいたからこそ、外面を取繕とくつくえているだけである。

「なるほどな。流石は好んでその身を魔や妖魅に委ねて、その力を使う者だな。殊更、隠蔽いんぺいに力を入れていたわけではないし、貴様らのような存在にとつては一目瞭然いちもくりょうぜんだったというわけか…。」
「一つ言っておくが、小さいと言うな！好きでこんな身体くみでいるのではないわ！」

淀みなく答える徹に一応の納得を見せるエヴァだったが、一方で聞き捨てならないこともあったらしい。

「おや？私は小さいなど一言も言っていないませんが…。」

「いたいけは幼子に使う形容だろうが！貴様、言葉遊びで私を愚弄ぐろうする気か？」

ちなみに徹は別にからかうつもりで幼気といったわけではなく、感じたままに言ったただけだったが、エヴァが思いもしない反応をしたので、緊張の裏返しかついつい調子にのってからかってしまったのだった。まあ、エヴァの怒りが予想以上に大きいのを見てこれ以上はまずいとすぐに引き際を悟たのだが。

「失礼しました。想像以上に可愛らしい反応をされるもので、興がのってしまいました。非礼をお詫びします。」

しかし、そろそろ本題に入りませんか？お互いに相手のことを調べあげており、それになりちしつに知悉ちしつしている以上、自己紹介は不要でしょうし、前口上や建前もいらないでしょう」

「ふん。ふざけた対応をするかと思えば、今度は単刀直入に来いとは中々人を食った男だな、貴様は。」

まあ、よかるう。私としてもぐだぐだと無駄話をするつもりはない。

だが、その前に一つ確認したい。先程、呪の気配と言ったな。それは貴様が私の状態を把握しているということか？」

態度を正して非礼を詫びる徹に毒気を抜かれたのか、エヴァはあっさり本題に入る。

「ええ、存じていますよ。貴方が何者かによつて呪いをかけられていること、そしてその呪いが西洋術式による『インフェルヌス・スコロステイクス登校地獄』であることも。なにせ、観察する時間はたくさんありましたからね」

「そこまでわかっているなら話は早い。私と取引をしないか、小宮山徹。私の呪いを解いてくれるならば、私はお前に相応の報酬を支払う用意がある」

すらすらとエヴァの現状を語る徹に、エヴァは目を僅かに細め、解呪の可能性が高まったと内心で喜びながら、取引を持ちかける。

「取引ですか？こういってはなんですが、現状では貴女の呪いを解くのは私にとって百害あつて一理なしです。申し訳ありませんが、余程のことがない限りその取引には応じられませんよ」

徹は言外にこう言っているのだ。その百害を打ち消すほどの理をその報酬は持つのかと。

「ふん、貴様は別に麻帆良に所属しているわけではなからう。現に爺とも対立しているようだし、百害は言いすぎであろう。むしろ、西の人間であるお前にとっては、私という存在がこの地から解き放たれるのは都合のいいことではないか？」

エヴァもまた言外に牽制する。そこまでの不利益はないのだから、

あまり欲張るなよと。

「勘違いしないでいただきたい。確かにどちらかといえば西よりの立場ですが、西に属しているわけではありませんよ。当流が仕えるのは組織ではなく、あくまでも人なれば」

「それでも今現在に限っていえば、貴様は西の長である詠春の私兵だ。利益となることはしても、奴の不利益となることはすまい。そして、私の解呪は奴にとって不利益ではなく、むしろ利益だと思っぞ。なにせ、悪名高き『闇の福音』が対立組織からいなくなるのだから」

徹の否定の言にエヴァはたたみかけるように反論する。流派としてはそうでも、今の立場では少なくとも西側であることには違いないと。そして、詠春の意に沿わぬことはすまいと。

「確かに貴女の言には一理ありますが、私が積極的に西の為に動くことはありませんよ。今の私に与えられた任務は別のものですからね。ゆえに、貴女の呪いを解く理由にもなりえません」

エヴァの反論に理があることを認めつつも、それはエヴァを解呪する理由にはならないと徹は切って捨てる。しかし、エヴァはそれを予期していたようで、妖しげな微笑を浮かべて口を開いた。

「そう、理由にはならない。だから取引をしようといっているのだ、小宮山徹。今一度言おう。私の呪いを解け。そうすれば相応の報酬を支払おう。決して損はさせんぞ」

「取引内容は解呪ですね。『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』ならできないことはないと思いますが、報酬の内容を聞かせていただいてもよろしいですか？」

「それは報酬次第では解呪を請け負うととってもいいのだな？」

エヴァの確認に対し、徹は黙然と頷く。その顔は真剣であり、嘘はないようにエヴァには見えた。

「嘘ではないようだ。では肝心の報酬に話を移そう。一つ目は、貴様と原則的に敵対しない、少なくとも私から手を出すことはない」と誓おう。無論、貴様の仕事を邪魔することもしない。近衛木乃香のことで爺と対立しているようだが、私は中立不干渉を貫こう。二つ目は、私のコレクションから飛び切りの魔剣と呪物を進呈しよう。貴様の流派なら喉のどから手が出る程であろう代物だ。どうだ、不足はなかるう？」

なるほど、実に徹の欲するところを突いたいい報酬であった。

一つ目は言わずもがなである。闇の福音という規格外の強者と戦う可能性を限りなく低くできるのだ。現状で戦っても負けるとは思わないが、相手は600年の時を生きる真祖である。どんな引き出しを持っていくか分かったものではない。勝つことはできても、こちらにも相応の代償を支払うことになる可能性は高い。ゆえに仕事上の要請はもちろんのこと、精神的な安心も得られるという意味でも利が大きい。加えて中立不干渉は、学園長が木乃香に対する魔法バレの手段として、エヴァを利用することはできないことになり、学園長の手を制限することに繋がる。

二つ目は、呪物や魔剣の収集は封神妖幻流にとって、欠くことのできない重要な役割でもある。しかも、600年の時を生きる真祖の秘蔵の品だ、かなりのものであることは疑いが無い。これも利が大きい報酬であった。

「なるほど、悪くはありません。しかし、一つ目に付け加えていた

「だきたいことがあります」

「なんだ欲張りな奴だな。まあ、聞くだけは聞いてやろう。中立不干涉に加えたいこととはなんだ？」

「その対象に桜咲刹那も含めていただきたい。それが私の要求です」
実のところ、最初の条件でも十分受けるに値する報酬であったが、徹個人としては、どうせならば刹那もと欲張ってしまう。やはり、刹那は木乃香と共にあるべきだと思うし、共にある以上両者の安全が保証される事が望ましい。それに仕事には、刹那の補佐も含まれているし、刹那個人に対する友誼もあつて詠春の依頼を引き受けたのだから。

まあ、本音をいえば、学園長ともめた時こちらにつくという条件を付け加えたかったが、それは流石に高望みだと断念した。目の前の少女は、傍観や不干涉はともかく、強制的に味方につくことを是とするような存在ではない。欲張れば相応の報いがあることは間違いないのだから…。ここは中立不干涉の対象に刹那を加えるくらいで妥協しておくべきであると判断したのだった。

「桜咲刹那？ああ、そういえばあれはお前の同僚だったな。それくらいならよからう。条件は同じでいいな。但し、あれが私に自分から敵対してきた時にはその限りではないぞ？」

エヴァとしても刹那のことは気に入っているし、そもそも木乃香に手をださなければ、積極的に敵対することもない。それくらいなら受け入れてもいいと判断したのだった。

「ええ、その条件で構いません。では、呪いをかけた術者及びかけられた状況、並びに呪いによって受けている制限の中でも体感して

いるものを教えてください。ああ、覚えていれば術式についても、
お願いします」

承諾の意図を伝えたと思えば、矢継ぎ早に質問を飛ばす徹。これにはエヴァも啞然とし、逆に焦ってしまう。正直、もう少し揉めると思っていたからである。場合によっては、少々手荒なことも想定しただけに拍子抜けである。この場に従者である茶々丸の姿がないのは、その為に近場の森に伏せてあったからだったりするから尚更である。

「待て待て。貴様、そんなにあっさり決めていいのか？本当に誰の呪いを解こうしているのか分かっていいのか？私だぞ、悪名高き『闇の福音』、吸血鬼の真祖にして不死の魔法使いであるこの私だ。それでも、お前は私の呪いを解くと？」

「ええ、だからそう言っているんじゃないですか。貰えるもの貰えれば相応の仕事はしますよ。何かご不満が？今さらながらに、呪いを解くのが嫌になりましたか？」

平然と肯定して応答する徹に、エヴァはなんだか酷く馬鹿馬鹿しい気分になった。なんで解呪される側の自分が焦らなきゃなんののだと。というか、なんで自分が解呪した後のことを心配してやらねばならないのだと。

「ええい、もういい。とにかくお前は私の呪いを解くという依頼を引き受けたということだな？」

やや、投げやりに言い放つと乱暴な口調で最後の確認をする。これ以降の変更は受け付けないという意思をにじませて。

「ええ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル様。解呪の御依頼、確かにこの封神妖幻流当代36代目継承者小宮山 徹がお受けいたしました。以後、御身の呪いを解く事に全力を尽くすことを誓いましょう」

黄金の少女の最終確認に対し、白銀の青年は微笑して姿勢を正し承諾の旨を伝えるとともに、優雅に一礼したのであった。

それぞれの思惑（後書き）

お待たせしました。当初とは異なる形となりましたが、改訂終了です。

今回は本当に反省することばかりです。安易に戦闘に走ったり、キヤラクターの考察が全然できてなかったり等、改訂前は本当に酷いできてました。本当に猛省します。

筆が遅く、まだまだ表現も未熟ですが、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

呪いの真実（前書き）

大変遅くなりました。申し訳ありません。年末年始はどうしても忙しく、更新も感想への返信も困難でした。重ねてお詫び申し上げます。

今回は、オリジナルどころか捏造といわれそうですが、私なりにエヴァの呪いや心情について考察したものです。あくまでも私の主観をもとにしたものなので、公式の設定とは異なる点が多々あるかもしれません。

また、外伝である夢幻の章はシリーズもの扱いにして別枠で投稿しなおしました。これは、章管理の関係で更新しても、割り込み投稿になり最新話と扱われない為に更新通知がなされないと知人から指摘を受けたので、その解消としての措置です。

呪いの真実

「ふむ、なるほど。詳細はこんなところですか」

徹は、エヴァから聞き出した呪いの詳細を要点をふまえてまとめる。その内容は以下の通りである。

- ・ 呪いをかけた術者は、ネギの父親にして魔法界の英雄サウザンドマスター
- ・ かけられた状況は、特に特別な儀式を経たわけではなく、馬鹿魔力による力押し
- ・ 詠唱も正確だったかすら怪しく、アンチヨコ見ながらというお粗末なものだった
- ・ 魔力を大幅に制限される上に、真祖としての能力も封じられる
- ・ 拘束期間は15年にも及び、学外にできることは不可能

「ああ、それで大体間違っていない。あえて言うならば私の能力と魔力を封じ込めているのは、『登校地獄』だけが原因ではないというところぐらいか」

「ああ、それは理解していますので、ご心配なさらずに」

「なに、どういことだ？」

あえて補足した事実をすでに分かっているという徹に、エヴァは疑問を呈する。それはどういう意味だと。

「いいですか？そも『登校地獄』とは、真面目に登校しない不良生徒等を強制的に登校させるために用いられた呪いです。ゆえに登校

を強制する制約キアスが存在するのは確かです。加えて制約を遵守じゅんしゆしなかつたときの罰則及び学校外の魔力使用の制限として、確かに魔力を一時的に封印する効力もあります。しかし、この呪いはあくまでも魔力を封印する効力はもっていても、流石に真祖の能力を封じきる程の効力はありません。大体、真祖の能力を封じるなんてことが、『登校地獄』なんてちやちな呪いでできるわけがありません。」

「ちやちな呪い、私を15年も縛り付けているというのに……。待て！貴様、聞き捨てならんことをいわなかったか？！魔力の封印が一時的なものだと？しかも、制約を遵守あるいは校内ならばその効力は及ばないというのか？」

己が長年苦しめられてきたものを、ちやちな呪いといわれ慥然ぶいぜんとした表情を隠せないエヴァ。さらに言葉をつのろうとしたところで、徹の言に含まれていた驚愕きょうがくの事実気づき、ありえない思いで聞き返す。

「そんなの当たり前じゃないですか。先程も言いましたけど、元々魔法学校で登校の強制及び学外での魔法使用を制限するために用いられた呪いですよ。魔法学校内で魔力を封じられたら、何を学びにきているんだという話になります。それに制約を遵守しても魔力を封じられるなら、何のために登校するという制約を守らねばいけませんか？」

エヴァの疑問に些ちかか呆れながら、徹は『登校地獄』について解説する。というか、こんなことも知らなかったのかというのが本音である。

「むう、確かにお前の言はもっともではあるが、にわかには信じら

れん。私は登校しようが、しなかるうが魔力を封印されたままだと
いうのに?!それに私は麻帆良の外へはでられんんことは、どう説
明する?」

驚愕の事実をあつさり肯定され、もつともな解説に唸るしかにエヴ
ア。しかし、未だ半信半疑である。こうしている今も魔力は封じら
れているからだ。それに己が麻帆良の外へはでられないことはど
う説明するのかと、『登校地獄』の効力を誤解しているのではない
かと。

「こういつてはなんです、私はこれでも呪術の専門家です。少な
くとも国内では最高峰であろうことを自負しております。私が呪い
の効果を誤解していることなどありえません。」

大体、『登校地獄』の字面からして分かるでしょう。『登校地獄』
は登校を強制するものであって、学校内に留めおくようなものでは
ありません。それに生徒を帰宅させずに学校内に軟禁なんきんなんて大問題
になりますよ。すなわち、『登校地獄』の本来の効力にそんな効力
はありません」

己の能力を疑われるのは心外である。流派の特性上、必要不可欠な
ものとして、古今東西の呪術を収集・習得してきたのが、『封神妖
幻流』である。それ故に徹心の弟子となつた以上、当然に徹は、そ
れをあるときは実践、またあるときは体感し、学び修めてきたのだ。
そんな彼があまり使われていないとはいえ『登校地獄』程度の呪い
の効力を間違えるはずもない。よって、それについては断言する。
そして、エヴァが疑問を呈した学外へ出られない効果もあつさりと
否定する。

「馬鹿な!では、私を長年苦しめてきたのは『登校地獄』ではない
というのか?!いや、そもそも貴様自身が言つたのではないか!私

の呪いが『登校地獄』であると」

あまりの事実思わず激昂して、言葉が荒くなるエヴァ。

「ええ、言いました。ですが、それは基本となる呪いが『登校地獄』であるという意味で、『登校地獄』そのものともそれだけであるという意味ではありません。まあ、確かに誤解を招く表現ではありましたが…。大体、御自身ではお調べにならなかったんですか？」

「調べたが私の蔵書にはなかったし、この学園内でも調べてみたが無理だった」

（うわー、絶対隠匿いんとくされてるよ。いくらマイナーな呪いとはいっても、エヴァの蔵書にないのは仕方ないにしても、図書館島の規模と歴史からしてないってことはないだろうからな。まあ、学園長からしたら、組織の長としても、私的な思惑からしても、逃したくない得がたい人材だから、無理もないかもしれないけど…）

エヴァの返答に内心で考えを巡らせ、些か以上にげんなりする。その為に、彼女が強いられてきた境遇を考えると、理解はするが納得はできないからだ。なんとというか、学園長を嫌いなる理由が一つふえてしまった。

「そうですね、それは仕方ありませんね。しかし、そもそもアンチヨコ見ながらの詠唱も正確か定かではない呪いが、ちゃんとかかるはずないでしょう。貴女が思っているより遥かに、呪いというものは繊細で難しいものなのですよ」

「確かにその通りかもしれんが、であればこそ尚更解せん。なぜ、そんないいかげんな呪いが私を縛り封じていられるのだ？」

エヴァのもつともな疑問に、徹は人の悪い笑みを浮かべて答えた。

「簡単にいえば強大な魔力によるごり押しの結果ですね。後、サウザンドマスターの意思力が半端じゃなく凄かったということでしょう。流石は英雄というべきでしょうか」

「魔力はわかるが、意思の力だと?!そんなものが何の役に立つ?」

「そう馬鹿にしたものではありません。むしろ、呪いにおいてん最も重要なものです。呪いとはそもそも精神的・霊的な手段で、他の人、社会や世界全般に対して、悪意をもって災厄・不幸をもたらす行為の総称です。すなわち悪意という意思がなければ、呪いは成り立ちません。他者や世界に対する怨み辛み、嫉妬や妄執と言う念が核となって、呪いとは成立するのですよ」

「奴が私に悪意を抱いていたというのか?」

呪いについての解説に少し弱気になって、疑問を呈すエヴァ。彼女は、サウザンドマスターが自分に多大な悪意を抱いていたとは思いたくなかったからだ。

「いえいえ、勘違いなさらないで下さい。分かりやすいように悪意という表現を用いただけで、呪い自体をかけることは呪いをかけるという意思があれば誰にでもできます。でなければ、陰陽師などは呪殺の依頼を引き受けられないでしょう。私が言いたかったのは、呪いにおいて術者の意思というのは重要なファクターであるということですよ」

「そ、そうか」

ほっと胸を撫で下ろすエヴァだが、一方で徹は全くないとも言い切れないとも思っていた。なにせ原作知識によれば、サウザンドマスターは悪戯好きのヤンチャ少年が大人にそのまま成長したような人物だったからだ。まあ、原作どおりとは限らないわけだが、エヴァの話を書く限り、そう大差はないようである。

「話を続けます。実際には調べてみないと分かりませんが、貴女の話によれば、サウザンドマスターは貴女に平穏な生を送って欲しかったようですし、常時の魔力封印はその為でしょう。平穏な生に強すぎる魔力は必要ありませんから。麻帆良からでれないのは、彼がこの呪いを誤解していた可能性もありますし、貴女を外に出す危険性を考慮してという可能性もあります。」

まあ、あえて私的な見解を言わせていただけなら、術者の莫大な魔力と強靱な意思力、そして日本トップクラスの霊地である麻帆良という環境が合わさったことによってもたらされた単なる失敗の産物と言う可能性が高いです。なにせ、学校行事とかでも殆ど外に出れないのでしょうか？」

「し、失敗の産物だと?! だから馬鹿魔力でいい加減な呪いをかけるなといったのに…。あの馬鹿がつ!」

いくら好いた男の所業といっても、流石に術の失敗で15年も外出を禁じられては、エヴァも激昂せざるをえない。ましてや彼女自身制止を試みただけに尚更である。「あれほど言ったのに…」と憤懣ふんまんやるかたないエヴァ。

「まあまあお気持ちは察しますが、落ち着いて下さい。本題はここからです。『登校地獄』の解呪依頼を受けておいてなんですが、本来ならばそんなもの必要ないんですよ」

「なんだと！どういう意味だ？」

解説が必要ないとはどういうことか。実際に己は呪いによって縛られ封じられているというのに。

「『登校地獄』は修学中に登校を強制する呪いです。ゆえに、卒業すれば自動的に解呪されます。通常なら3年、最長でも6年でしよう。疾とうの昔に解呪されていないとおかしいのです。つまり、15年つたつてもなお解呪されていない貴女の呪いは、最早『登校地獄』とはいえない。いえ、基本術式はそうですが、それを基本とした亜種的な呪いというべきでしょうね。

まあ、麻帆良という霊地自体に別の要因によって縛られている可能性も捨てきれないんですが…」

「そついえば、あいつも3年たつたら解きに来ると言っていたな…。結局、3年どころか15年も待たされた拳句、奴は私の知らぬところで勝手に野垂れ死んで、来たのはその息子だ。待ちぼうけさせた拳句、他の女との子供を見せられることになるうとは…フフツツ、私は怒つても許されるよなー？」

徹の解説を聞きながら色々思い出していたら、現状を含めて何気に結構理不尽な仕打ちをされていることに気づいたエヴァ。どす黒い凄惨な笑みを浮かべて、何か放出してはいけないものを放出していた。

「お願いですから落ち着いて下さい。お怒りはごもつともですが、それを何の罪もない私にぶつけないでくださいよ」

徹は背中に冷たい汗が流れるのを感じながら、若干距離をとって宥

める。

「ふん、確かにお前にあたってもせんないことだ。この鬱憤^{うっぷん}は死んだナギの代わりに坊やにでもぶつけてやるとしよう…フッフ」

(やばい、これで俺の解呪が失敗したら、ネギの奴、本気で血を絞りとられるんじゃないか…。まあ、恨むならサウザンドマスターを恨めよ。南無南無…)

何気に死亡フラグがたったかもしれないネギ。徹もその可能性に思い至るが、もしそうなくても俺のせいじゃないよと責任を押し付けて、内心で合掌する。かの少年の行く末に幸あらんことを心からおう。

「まあ、ここまで色々話してはなんですが、全ては推察した可能性でしかありません。実際には、調べてみないことには詳細は分かりません。ですから、解析の術式を受け入れて欲しいのですが…」

結局のところ、全ては可能性の話であり、実際には調べてみないことには分からないと身も蓋もないことをいう徹。なら、最初からそうしろよと言いたいところだが、これには彼なりの確たる理由があった。

「それは貴様の術を抵抗^{レジスト}せずを受け容れるということか？」

「はい、そのとおりです。やはり、実際に術式の組成を見ることが最も確実ですから」

再び「お前」から「貴様」になり、警戒の色が強くてた声でエヴァが問う。徹はそれが最も合理的で確実だといって肯定する。

「貴様の言うことはもつともだろうが…」

エヴァは逡巡せざるをえない。これは一重にエヴァの経験からくる危機意識が原因であった。彼女の経験上、他人の術に無防備に身を任せるというのは自殺行為に他ならないからだ。そも彼女が吸血鬼となったのも、他者による術（儀式）が原因であるのだから、無理もないことである。ましてや、徹は自他共に認める呪いの専門家である。そんな人物の術を「はい、そうですか」と気軽に了承して、受け容れられるはずがない。知らぬうちに呪いを仕込まれる可能性もあるのだから。

「繰言くりごとになります、呪いとは貴女が思っているより遙かに繊細で難解なものです。正規の方法でかけられたのならともかく、力技のいい加減でかけられた呪いを解くには、力技で強引に呪いを解くか、実際の術式を調べるしかりません」

徹もエヴァの警戒は百も承知である。だからこそ、あえて解呪には本来必要のない推察をべらべらと喋ったのだから。全てはエヴァに呪い自体に興味を抱かせると共に、彼女自身の危機意識を抑え受け容れやすくする一助にする為であった。

「貴様の言はもつともだろうが、貴様が私に解析以外の効果を持つ術をかける可能性がある以上、その要求は受け容れられん。私はそこまで貴様を信用していない。他の方法を考えろ」

しかし、それでもまだ弱かったようである。エヴァはにべもなく徹の要求を却下する。だが、徹とてここで引き下がることはできない。彼にも一旦仕事として引き受けた以上プロとしての意地があるし、エヴァに恩を売っておくのは重大なメリットがある。

そして、何より麻帆良最高機密である学園結界の術構造を解析できる絶好の機会である。^{チャンス}原作どおりであるならば、件の呪いと連動しているそれを直接解析できるのはこの機会をもって他にない。なぜなら、基本的に西の人間（詠春の私兵）としている以上、麻帆良の防衛システムに触れることは徹には許されていないからだ。実際問題、徹が常に単独かつ遊軍扱い（+監視つき）で用いられるのは、彼の用いる戦闘方法が単独での運用にむいているということ以上に、彼に対し必要以上の情報（科学的な警備システムや魔法先生＆魔法生徒の用いる術式等）を渡すことを避けるためでもあるのだから。

ゆえに、もしもエヴァの呪いの解析に並行して、多少なりとも学園結界の構造解析をすることができたなら、それは学園側に対する最強のカードとなりえるのである。まあ、本当に最後の手段になるだろうが……。加えて、エヴァ程の存在を縛り付ける術式を見られるのは絶大なメリットである。術師としては勿論、それを元にエヴァを縛り付ける新たな術を構築できる可能性すらあるのだから。

「申し訳ありませんが、一旦仕事を引き受けた以上結果を出すのを至上としておりまして、わざわざ失敗の危険が高い方法を探ろうとは思いません。より確実に結果を出せる方法を探りたいと考えています」

「依頼者の私がそうしろと望んでもか？」

「そうですね、これが何度も機会があるもの^{チャンス}でしたら、私も貴女の意味を尊重したでしょう。しかし、今回はそうではない。恐らく、私が解呪の儀式を行えるのは今夜だけ。それも、一度の失敗も許されないでしょう」

「むっ、それは……」

「エヴァンジェリン様、貴女もお分かりのはずです。力技でかけられた呪いを力づくで解こうすれば、かけられたとき以上の魔力が必要になります。そして失敗する可能性も低くはありません。最近、失策が多いとはいえ、学園長は無能な方ではありませんから、成功失敗の如何を問わず解呪に必要なだけの魔力の放出があれば、如何にこの特別製の結界とはいえ気取られることは想像に難くありません。そして、我々の行動は明るみになることになるでしょう。そうなれば、私も責任を問われることになるでしょう。」

申し訳ありませんが、貴女が私を信用していないように、私もここまでして貴女の呪いを解く理由はありませんから。

さらに言わせていただくなら、先に可能性として話した貴女自身がこの地に縛られている可能性もあります。何の下調べもなく、強引に解呪したら、この地や貴女自身にどんな影響があるか分かったものではありません」

徹は淡々と予想しえる未来を語る。付け加えるように言ったが、原作のとおりであるならば、彼女を真に縛り付けているのは学園結界の方である。ゆえに力技で強引に『登校地獄』だけを解呪すれば間違はなく、連動して学園結界にも少なからず影響が出るだろう。そして、それは必ず学園側に察知されるに違いない。そうなれば、徹は身の破滅である。秘密裏の解呪であれば、知らぬ存ぜぬも通せるかもしれないが、解呪現場に居たとなれば、そんな言い分は通じるわけがない。当然、責任を追及されるだろう。元々、麻帆良の過激派からは西に属する者として嫌われているし、良識派（穏健派）からも殺人を厭わない姿勢からよく思われていない。追求は熾烈なものになるだろう。下手をすれば殺される可能性すらある。早々やられるつもりはないが、いくら頑張ったところで所詮は個である。圧倒的な数の前では、最終的に翳り殺されるのがおちである。麻帆良が保有する戦力は質量共に、非常に高いのだからなおさらである。

はつきり言つて、そこまでの危険を冒して徹がエヴァの呪いを解く理由は存在しないのである。得られる報酬は魅力的ではあるが、強引な力技での解呪は明らかにリスクに見劣りする。解析の術を用いて解呪の際に得られるであろう副次的な情報も含めて、はじめに引き受けることを考えないというレベルの依頼なのだ。解呪に全力を尽くすとはいったが、それはあくまでも許容できるリスクの範囲内の話である。彼の本業はあくまでも「木乃香の護衛」であつて、今回の「解呪」は副業的なものでしかない。本業を円滑に遂行する為に受けた副業が原因で、本業に支障がたら本末転倒である。ましてや、依頼者が納得すれば回避できるリスクだ。依頼者がそれを拒否したからといって、己がその分のリスクを引き受けてやらねばならない道理はないのだから。それはプロとしての当然の判断であつた。

「むづ…、どうしてもか？他に方法はないと言つのか？」

「ええ、ありません。これを了承して頂けないなら、御依頼はなかつたものとして扱わせていただきます」

エヴァは尚も他に方法はないかと疑問を呈すが、徹は厳然たる態度で否定と拒否の意思を伝える。すなわち、ここまで説明して駄々こねるなら、後は俺のしつたこつちやねえよというわけだ。

「ぬづつ、どうしてもか？」

「ええ、ここまで説明してご理解頂けないなら、貴女は私の取引相手足り得ないということです」

徹のダメ押しの一言にエヴァは大きく溜息をつく、凄まじく嫌そ

うな顔で言った。

「いいだろう、お前の要求を呑もう。だが、解呪にかっこつけて不埒な真似を試してみる。その時は…存在ごとこの世から抹消してくれよう」

一息入れた後に凄みをだして、エヴァは脅しを口にする。それがはったりではないという意味を目に宿して…。

「無理を聞いて頂き、心より感謝します。エヴァンジェリン様」

徹はそれを見て頷き、深々と一礼したのだった。

結論から言えば、解析はものの一分で終わってしまった。何の問題もなく秘密裏にそれは終わった。まあ、元々徹にはエヴァを害する意思など露程もなかったのだから、当然と言えば当然であるが。

「なるほど…。中々に厄介ですね。これは解呪は難しいかもしれませんが…」

「なんだと?! どういうことだ、説明しろ!」

徹は解析した結果を元に解呪方法を思案していたが、難しい顔で唸った。これには黙っていられないエヴァである。身の危険も顧みず、他人の術式を抵抗することなく受け容れたというのに、肝心の目的である解呪ができないとなれば無理もないことである。

「落ち着いて下さい。先も言ったとおり『登校地獄』だけでしたら、解呪は可能です。まあ、術式もいい加減で問題となるのは必要になる魔力量だけですから、当然と言えば当然ですが…。問題なのは、これに連動している『学園結界』の方です」

「『学園結界』だと?!それが私の力を封じ、この地に縛り付けているものの正体だということのか?」

「ええ、その通りです。少なくとも真祖としての能力を封じているのは間違いなくこれです。超自然的な存在である真祖を封じれるものなんて、人ではありえませんか。正式名は『蟠桃^{ぱんとう}』でしたか。この地にある世界樹といわれるあの神木を利用した学園結界こそが、貴女を封じているものに他なりません」

「だが、私は『学園結界』の存在自体は以前から知っていたし、それに縛られていると感じたことはないぞ。何かの間違いではないか?」

徹の答に半信半疑なエヴァ。彼女とて馬鹿ではない。あからさまに縛られていれば気づくはずだからだ。彼女の感覚から言って、少なくとも魔法的な影響を『学園結界』から受けていないということは断言できる。外見は幼気な少女であっても、彼女は600年の時を経た不死の魔法使いなのだから。

「それが魔法的なものであれば…ではないですか?」

だが、徹は思いもよらない糸口を突きつける。

「なんだと。どついう意味だ?」

「極まった科学は魔法と同じという言葉聞いた事はありませんか？ライターしかりコンロしかり、別に魔法でなくても火を出す手段など科学的に見ればいくらでもあります。それと同じように、貴女を縛る媒体が必ずしも魔法的なものであるとは限らないということです」

「科学的な手段ということか？馬鹿な！大体、貴様自身が『学園結界』は神木を利用していいったではないか」

「ええ、貴女を能力を封じる源泉がそこにあるのは間違いありません。ですが、その対象を特定するのは、何も魔法的な手段である必要はありません。そもこの学園都市の『学園結界』は、世界樹の魔法的な力による結界と科学的な大量電力を用いた電磁結界を複合させた結界なのです。恐らく神木を力の源泉とし、制御を科学的な電子技術に頼っているのだと思われます」

「年2回の停電に伴う賊の大量侵入はその為か…。うん？待て！であれば、停電時には私への縛りも解けるはずだ。だが、今まで停電に伴って私への縛りが解けたことなどないぞ」

「最低限必要なことに対しては、制御の予備電源を確保しているのです。貴女もその範疇はんちゆうであつたということでしょう」

徹は長々と語っているが、実際には今行つた解析結果に原作知識と彼独自に調査した結果と併せて、初めて推察し理解できた事実である。エヴァが気づけないのは無理もないことである。

「では、爺は知っているということか？私を真に封じているものが何であるのか…。よくも、長年謀ってくれたものだ」

それでも気づけなかった己に腹が立つエヴァ。そして、それ以上に長年謀ってくれた近右衛門への怒りがわく。

「まあ、十中八九知っているでしょうね。最初から連動してたのか、後付で連動させたのかは定かではありませんが、少なくとも貴女有能力を真に封じていたのが『学園結界』であつたのは知っていたでしょう」

「そうか！後付の可能性すらあるのか：ギリッ」

好いた男の所業ならともかく、妖怪爺の所業であつたなら許せるものではないだろう。徹によりその可能性を示唆され、憤懣やるかたない表情で、歯軋りすらしてさらなる怒りを燃やすエヴァ。学園長に死亡フラグがたつたかもしれない。

「お気持ちには察しますが、学園長のことはこの際置いときましょう。本題に移りますが、まず一つ目の問題として、『登校地獄』を解呪しても、連動した『学園結界』により無効化される可能性がありません。すなわち、『登校地獄』が『学園結界』がセットとして扱われている場合です。この場合、片方が解除されたとしても意味をもちません。両方を同時に無効化せねば、片方が存続する限りもう片方も自動的に修復されます。流石に『学園結界』を解除するなんて、立場的にも魔力的な意味でも不可能ですから、解呪は不可能です。次に二つ目の問題として、解呪すれば確実に『学園結界』に影響があるのでということです。解析の結果、連動しているのは間違いありませんから、もし『登校地獄』からの解放、『学園結界』からの解放であるならば、その影響は計り知れません。なにせ真祖の能力を封じているのですから、学園結界のリソースをどれだけ割いているのか見当もつきません。それがなくなれば、間違いなく学園側に察知されます。ゆえにこの場合も、少なくとも今この場での解呪は不可

能となります。

そして、最後に貴女の問題があります…」

提示された二つの問題点はエヴァにも納得できる問題だったが、最後はどうにも納得がいかない。己の問題とはどういうことか。

「私の意思だと…？それに何の問題があるというのだ？」

「どうやらご自分では気づかれておられないようなものではつきり申し上げますが、貴女は本当に呪いを解きたいと思っておられるのですか？」

その問は思いもかけない影響をエヴァに与えた。彼女にしてみれば、問われること事態がおかしい愚問のほずであつたというのに。なぜだろうか、彼女は即答できず、言葉に詰まることすらしたのだ。

「……馬鹿馬鹿しい。今更、何を問うのかと思えば愚問だな。そんなの決まっている。さつさとこの忌まわしい呪いを解きたいと思っているに決まっているだろう！」

胸の奥で何か引つかかるものを感じながら、それを断ち切るにやはり愚問だと言いつつエヴァ。しかし、どこか必死さすらが漂う。まるで、本心を押し殺しているかのよう…。

「そうでしょうか。本当にそうならば私の見当違いな心配だということになりますか、実際には違うのではないですか？貴女は『私』に呪いを解いて欲しくないのではありませんか？」

それは徹が『水無月 透』として、原作を読んでいたときに感じたことであり、『小宮山 徹』として呪術を学び修めて得た結論だっ

た。エヴァは本当は解呪を望んでいないのではないかということだ。いや、正確には『ナギ・スプリングフィールド』以外の解放者を彼女は望んでいないということである。

実際、原作においてエヴァは解呪に対して、ぬるい行動しか起こしていない。手段を選ばぬではなく、明らかに手段を選んでいる。最も簡単なネギに対しての吸血行為すら、結局行っていないし、学園側が彼女の生徒への吸血行為を黙認していることからして、あの一連の騒動は完全に出来レースだろう。ナギが生きていると知ってからはもつと酷い。彼女は解呪に対してなんら動きを見せず、それどころかネギの師として、血を対価としてるとはいえ、それ以上の多大な援助を行っている。本心から解放を望んでいるなら、明らかに矛盾した動きであり、一方でネギ、いやナギに対する思い入れの深さを物語っている。

大体、頭脳明晰で600年の歳月を経た百戦錬磨の魔法使いであるエヴァが、『登校地獄』なんてチャチな呪いに囚われていること自体がおかしいのだ。ナギの馬鹿魔力があつたとはいえ、アンチヨコ見ながらのてきとうな詠唱である。そんなものが強力な拘束足りえるとは思えないし、呪いとしても正常に働くことすら疑わしい。である以上、異なる要因があつたはずである。そう、彼女が望んで囚われていたからこそ、それは効力を発揮したのではないだろうか。学園結界という強力な枷があるとはいえ、15年もあれば対策の一つも思いつくだろう。しかも、原作においてその枷に気づいたのはネギとの騒動の際にようやくという体たらくだ。もし本気で解放を望んでいたのなら、そもそも学園結界という枷にももつと早く気づいていたはずである。

ようするにエヴァは、わざと解呪の方策を試みなかったのだ。いや、表面上は試みているつもりだったかもしれないが、恐らく本心から

でなく、本気でもなかったのだらう。彼女にとって、解放者はナギの他におらず、呪いは彼女にとつての枷であると同時に、ナギとの約束という絆を具現化したものであったのではないだらうか。

「何を馬鹿な。貴様に依頼したのは私だぞ。そんな筈がなかるう。もしそうならば、大体最初から依頼などせんわ！」

「呪いを解きたいという貴女の意味は本物でしょう。ですが、解いて欲しい人物は他にいないのですか？そう、他でもない呪いをかけた張本人であるサウザンドマスターこと『ナギ・スプリングフィールド』を貴女は望んでいるのではないですか？

そうでなければ、今の今まで貴女が解呪を試みなかった理由を説明できません。貴女程の実力があれば、15年もの歳月があれば十分に解呪する術を見つけられたはずですからね。仮にそれができなかつたとしても、約束の3年を過ぎたところで、学園側に呪いの解除若しくは是正を求めるのは可能だつたはずですよ。

つまるところ、貴女は彼を信じていた。彼が死んだという噂を聞いても、それでもなお彼の生存を信じていた。彼が生きて貴女を解放しにくることを。だからこそ、今に至るまでこの地に留まり続けていたのではないですか？そして、それは彼ではなく彼の息子が現れたことで、貴女は裏切られたと、あるいは貴女の願いが叶わないものであることを悟つた。ゆえに、今ようやく本気で解呪を試みようとしているのではないですか？そして、ここに至つて尚も貴女は本心では解呪を望んでいないのではないのでしょうか」

その指摘は、あまりにも不用意であつた。たとえそれが的を得ていたとしても、心の奥底に秘めていた願望を暴かれて喜ぶものなどない。ゆえに、当然の如くそれはエヴァの逆鱗に触れた。

「黙れ、若僧が！私の十分の一も生きていない分際で、訳知り顔で

知ったような口をきくな！もし、これ以上くだらぬ戯言を続けるつもりなら、二度と口を開けないようにしてくれよう」

エヴァは抑えきれない怒気を全身から放ち、その視線は射殺さんばかりである。それを見て徹は確信する。己の考察は間違っていないかったと。あえて、暴き立てた甲斐があったというものである。

「申し訳ありません。ですが、意思の確認は必要なことなのです。呪いというのは意思が重要だと先刻申し上げたでしょう。ましてや、15年もの歳月をかけて定着した呪術です。被術者が心から解呪を望まなければ、外部からの干渉すら困難なのです」

そう、実際に先に挙げた二つの問題点より、ある意味では厄介な問題であった。前述した2つの問題はしかるべき準備をすれば解決できる問題であるのに対し、意思というのは、他人がどうこうできるものではないからだ。それが心からの願いであれば、なおさらである。呪いはエヴァ自身の願いと結びつき、ナギ以外からの干渉を強硬にはねつける可能性すらあるのだ。そして、何よりもずいのは呪いが15年という歳月をもって定着してしまっていることだ。本来、歳月の経過によって自動解呪されるはずの『登校地獄』が、解除されるどころか不安定にすらならず、確認たる効果を発揮しているのである。最早、『登校地獄』というべきではないものに変質してしまっていると言っているだろうか。

すなわち、少しでも不安要素を排除しないと、解呪はおろか術式に干渉することさえ困難である可能性すらあったのであった。

まあ、ぶつちやけてしまつと徹はすでに解呪を諦めていた。というか最初からこの場で解呪するつもりなどない。

先に述べた問題もそうだし、本人が解放を心から願っていない以上、解呪を試みても失敗の可能性が高いからである。加えて、もし秘密

裏に解呪に成功したとしても、その後己の立場が相当悪くなるのは想像に難くない。エヴァの解放という大きすぎる変化は、学園側だけならまだしも、超などからもならまれる要因になりかねないからでもある。

ゆえに、徹は最初から術式の改変（正しくは正常化）にとどめるつもりであった。すなわち、変質した『登校地獄』を改変し本来のものに戻すことで、経年（＝卒業）による解呪機能を復活させるつもりであった。これにより、エヴァが今回麻帆良を卒業したと同時に解呪がなされることになる。エヴァが麻帆良に縛られている期間は、学園長との約束よりすでに超過しているのは間違いない。よって、本来の効力によって解呪されたならば、責任を問われることもない。それが徹が自身を害さずにエヴァの解呪を行うという無理難題をどうにか行おうとして、考えに考えた末に至った方策であった。

エヴァから言わせれば屁理屈であり不誠実かもしれないが、解呪の依頼は結果的には果しているし、そもそも時間制限をされたわけでもないのだから文句を言われる筋合いはない。それに、術式の正常化に伴って、学園都市外へと出るとは可能となるはずだし、また学園結界による魔力及び能力の制限はあるにしても、学園都市内に限れば、『登校地獄』による制約を護る限り魔力制限は解かれるのだから、彼女が得る利益は決して報酬に劣るものではないだろう。さらに言うなら、卒業までナギが来るのを待つ時間ができるし、もし来なかったとしても呪い本来の効力によって解けるのだから、ここで徹が解呪を試みるより心情的に受け容れやすいだろう。現状でうてる最善の手だと徹は考えていた。

「以上を踏まえた上で、一つ提案があるのですが、聞いてはいただけませんか？」

「提案？まあ、いい。言うだけ言ってみるがいい。だが、もし先のような事を言うようなら容赦はせんぞ…。」

「はい、それではお言葉に甘えまして。現状では解呪は難しいということはお解かり頂けたと思います。ですから、ここは今すぐの解呪は諦めます」

「なんだと！？ここまでしておいて、今更そんなこと認められると思っっているのか！」

徹のあんまりな提案にエヴァは激しい怒りを覚えて、声を荒げる。解析の為とはいえ、赤の他人の術式を受け容れさせられた彼女からすれば、今更解呪しないというのはありえないのだから、声を荒げるのも無理はないだろう。

「おちついて下さい。解呪しないとは言っていません。今すぐには無理というだけで、最終的には呪いから解放される事になります」

「何だと…、どついうことだ？」

「つまり…（繰言になるので省略）」

わけがわからないという風で訝るエヴァに徹は、『登校地獄』の術式改変について語る。それに伴うメリットとデメリットも。

「なるほどな…。それが貴様にとって許容できるおとしどころというわけか。貴様、最初から今ここで解呪するつもりなどなかったな？」

徹はあまりにも理路整然に説明し過ぎたのであった。しかも、それ

でいて多面的に配慮がなされている方策（妥協点）である。この場で今考えついたにはあまりにもそつがなさ過ぎたのだった。ゆえに、エヴァは徹の真意を悟る。

（この男、最初から今ここで解呪する気がなかったな。察するにこやつは以前から、私の呪いについて検討し様々な可能性を取捨選択し、解呪の可能性について探求していたに違いない。呪いの専門家としての興味か、それとも私に恩を売ろうという魂胆なのか、生憎とその真意は計り知れないが…。

つまり、こやつにとってこれは取引ではあっても、交渉の余地などない。初めから、全て決められていた方策であり、外形上は奴の利益と私の望み、そのどちらにもある程度沿った妥協の産物のように見えるが、実際には奴が許容できる最大最高の手なのだろう。そして、これ以上を望んでも奴はけして首を縦に振らないだろう）

エヴァは迷っていた。徹の思惑にのるべきか？それとも、強引にでも解呪を迫るか？ということ。

（しかし、こやつという問題点は3つ目を除き、もつともな話だ。奴の推測、いや説明が正しければ学園結界にも必ず影響が出る。そうなれば、ここで解呪すれば十中八九爺達に気取られるだろうな。しかも、私自身学園結界との繋がりについては身に覚えというか心当たりがある。つまり、奴が嘘をついている可能性は低い。そうすると、どのような手段を用いるにしろ、この場での解呪は私にとってもリスクが高い。結局のところ、私には選択の余地ないということか。嫌な話だ…）

少なくとも今は、是が非でも呪いを解きたいエヴァにとって、この迷いは奇妙に思われるかもしれないが、それは当然のものである。なぜなら、解呪はエヴァにとっても、メリットだけを与えるもので

はなく、厳然たるデメリットも存在するからである。

確かにエヴァの呪いは、彼女の力を封じる安全装置であり、彼女を麻帆良に繋ぎ止める為の枷である。しかし、同時にそれは麻帆良内での彼女の身の安全を保障するものでもあるのだ。もし解呪がなされそれが明るみにできれば、学園長やタカミチなどによって呪いを理由に押さえつけられていた過激派をはじめとした『正義の魔法使い』を自称する者達は喜び勇んで、彼女を狩ろうと暴走するだろう。麻帆良は良くも悪くも人材の宝庫だ。如何に600年の時を生きる彼女であっても、総力戦となれば分が悪い。いや、生き延びる自信がないわけではないが、相応の痛手を被ることは避けられないだろう。そうなれば、多大な力の浪費である。しかも、麻帆良を出ることできたとしても、その後もひきりなしに刺客が差し向けられるであろうことは想像に難くない。黄金の少女は、捨て置くにはあまりにも有名すぎ、強すぎるが故に。

「そんなことないですよ。可能ならば解呪していました。ただ、現状では失敗する要因が多すぎる上に、失敗した場合のデメリットが大きすぎます。それに貴女として学園側に気取られるのは、本意ではないでしょう?」

「ふん、見透かしたような様な事を言う。足元を見おつて、どうにも貴様は好きになれんな…。」

だが、貴様の言うとおりだ。私としても、爺達の横槍はごめんだし、いらんリスクを負いたくもない。

しかし、術式の改変などと簡単に言うが、本当にそんなことができるのか?」

エヴァにとって認めるのは業腹ではあったが、徹の言は間違っていない。せめてもの返しとして、にらみつけて肯定する。一方で、今更ながらに疑問を呈する。これは無理もないことであった。

術式の改変、言うは易く行うは難しである。確かに力技の解呪よりは、魔力量的には容易であろうが、求められる技量的にいえば、そちらの方が遥かに困難なのである。しかも、発動前ならまだしもすでに発動している術式を改変するというのだ。リアルタイムで環境に適応しながら、効果を発揮し続けるそれを改変するなど神業にも等しい所業であるからだ。

「ええ、可能です。私ならできます。いえ、私だからこそできます」「貴様だからだと、どういう意味だ？」

エヴァの当然の疑問に思わせぶりな答を返す徹。その意味を訝しげに問うエヴァだったが、答は次の瞬間に彼の眼の色が紫紺に染まると共に変質した魔力によって示された。

「眼の色の变化：先程の解析の際の変化は見間違いではなかったわけだ。なるほど、『眼』に自信があるとはよくいったものだ。魔眼、いや、その禍々しい気配は邪眼というべきかな？そして、この魔力……。貴様、真つ当な人間ではないな」

驚愕を隠さずに感嘆するように言うエヴァ。一目でその本質を見抜くあたり、やはり彼女も尋常な存在ではない。

エヴァのいう禍々しい気配と魔力の変質こそ、徹が魔法を用いない理由であった。そう、あの御方との契約の影響か、彼の魔力は人間というよりは悪魔に近いのである。その本質は単純な魔力放出ならともかく、魔法行使の際には隠しきれるものではない。見るものが見れば、彼の本質に気づくだろう。そして、忌避し嫌悪される事になるだろう。

ゆえに徹は封神妖幻流を用いて戦うのだ。いや、それでしか戦えな

いというべきだろうか。符術のようにあらかじめ術式を用意するな
どして隠蔽の術を併用して行使できるものを除けば、彼は魔力を用
いた術や魔法を使う事ができないのだ。いや、使う事はできる。し
かし、それは彼の秘密を暴露することであり、許される事ではない。
だからこそ、妖刀が放つ妖気や呪具の放つ禍々しさは絶好の隠れ蓑
であった。そういう意味で、封神妖幻流は彼の為に誂あつらえられたとも
いうべき最高の戦闘技法であった。

「流石ですね、今現在に至るまで、事情を知る刹那以外には眼の事
を見破られたことはないのですが。」

まあ、この地にきて初めて完全解放しましたし、普段はコンタクト
をして隠れますから無理ありませんが。
確かに肉体のほうは人間を逸脱してますが、心は真つ当な人間であ
るつもりですよ」

「口清いことを言う。なるほど、まさかの御同輩とはな。恐れ入っ
たぞ、同類相憐れむというわけか？桜咲刹那とは……」

徹の変化に面白がる様に嘲る様に言うエヴァ。あるいはそれは孤独
である自身にむけた嘲笑だったのかもしれない。しかし、今度はそ
れが徹の逆鱗に触れた。

「黙れ吸血鬼。この場で滅ぼされなくなかったら、その口を閉じろ」
徹は口調も雰囲気も一変させて凄絶な殺気をエヴァに叩きつける。
いつの間にか、その手には大蛇が長剣として復元されて握られてす
らいた。

「くくく、それが本来の貴様というわけか？そっちの方が好感がも
てるぞ。いっそのことそちらで常も通したらどうだ？もっとも、常

人にはその凄絶な殺気は耐えられまいがな」

「黙れと言ったぞ、吸血鬼。今の貴様を殺すことなど造作もないことを忘れるな」

「ほう、面白い。やれるものならやってみるといい。この闇の福音、貴様如きに遅れを取ると思うなよ」

売り言葉に買い言葉で、両者の緊張が高まり、それに比例して両者の魔力も高まつていく。高められた魔力の余波で、ミシミシと不可視の結界を歪ませる音が響く。

「はあ、やめましょう。詫びたとはいえ、先に非礼を働いたのはこちらです。お互い様ということでは手打ちにしませんか」

毒気を抜かれたように深く息をはいて脱力する徹。これは無理もないことであった。激昂する徹に対して、エヴァは面白がるような態度を崩さなかった。それが明らかかな挑発であり、誘いであることに気づかされたからである。

「なんだつまらん、やらんのか。貴様の力をこの目で見れると楽しみにしていたのだから」

「そんな見え見えの挑発にはひっかかりませんよ。さて、私の力については御理解頂けたと思います。この『眼』を用いて、貴女にかかっている呪いをリアルタイムで解析し、同時に改変を行います」

ちっとも反省していない顔で残念そうに言うエヴァ。そういえばこの人、少しバトルマニアな気もあつたかもなどと原作知識に思いを馳せつつ、徹は本題に話を戻す。

「待て、貴様が尋常ならざる眼の持ち主であることは分かったが、どんな力をもっているかは聞いていないぞ。ちゃんと説明しろ」

徹がわざと眼のことをはしよったのに目敏く気づいたエヴァは、すかさず追及する。

「ごもつともなお言葉ですが、己の手の内を全て晒すわけにはいきません。とにかく術式の改変を行うために必要な力があるということ、そこは御理解いただけませんか？それにすでにヒントはいくつも差し上げています。私がどのような場面で眼を使ったかとかね。ああ、一つだけ断っておくと魅惑チャームの力はありませんから」

「…ふん、まよかろう。大方、魔力を目視できる解析に優れた観察力・洞察力強化の能力といったところか？あとは魔力の封印にも一役買っているようだ。術式の解析・構築には優れているかもしれないが、あまり戦闘向きではないな」

「ご明察と言いたいところですが、あえて正誤は秘しましょう。ご想像にお任せします」

エヴァの推察はあつたてているようであり、間違つてもいた。確かに本来不可視のものをみることに観察力・洞察力強化の能力があるということとは当たっているが、その本質は『理解』にあり、観察力・洞察力強化はその一助でしかない。さらにいうなら、戦闘にむかないというのは大外れであり、むしろ洒落にならない能力を発揮するのだが、初見の彼女にそこまで見破れと言う方が無理だろう。それよりも、些かのを外してはいるが、能力の一端を見極めた眼力をこそ褒めるべきであろう。ちなみに涼しい顔で流しているが、徹は内心で冷や汗だらだらである。

「思わせぶりなことばかり言いおって、貴様は意地が悪いな。まあいい。とにかくできるといふのなら構わん。さっさとやれ」

「承知しました。では、今少しのご辛抱を」

エヴァの要請に了承し頷くと、徹はエヴァを中心に魔方阵を描き出した。

作業する事一時間余り、時間は日付の変わり目にさしかかろうとするところで、魔方阵は完成した。徹はそれを一瞥して満足げに頷くとエヴァに髪を一本要求した。

「私の髪だと、何に使うつもりだ？まさか藁人形に入れて、丑の刻参りでもしようというのじゃあるまいな？」

「丑の刻参りとはよく知っていますね。というか最終的に解呪しようというのに、呪いかけてどうするんですか？大体、丑の刻参りには本来藁人形なんて必要ありませんし、あれは自分も鬼と化して呪ういわば人を呪わば穴二つの典型例ですよ。好き好んでやるわけないじゃないですか。まあ、髪でも爪でも、なんでしたら血でも構いませんよ。これにつけるかあるいは包みこんで下さい」

そう言っつて、徹は懐から人型の形をした符を取り出した。

「これは何だ？」

「形代かたしろといます。神霊が依り憑く依り代の種類として用いるものですが、今回はこれを貴女の一時的な身代わりとして用います」

「一時的な身代わりだと？」

「はい、先も述べたとおり、私は学園結界には手を出せません。ですが、解呪ではなく改変にとどめるにしても学園結界への影響はあられると思われます。ゆえに、これを一時的に貴女だと誤認させて、学園結界から貴女を解放します。それからすぐに術式の改変を行います。幸いすでに改変すべき部分は解析済ですし、本来の『登校地獄』の術式も用意してあります。改変は数秒で済むはずです」

「そんなことが可能なのか？いや、それならばそもそも解呪も可能なのではないか？」

「ご指摘はごもっともです。確かに解呪も可能でしょうが、間違いなく学園側に察知されます。形代が貴女の身代わりとして機能するのは恐らく十数秒です。この形代は私が一年以上念を込めた特別製ですが、貴女程の存在を模倣するとなれば、よくもって二十秒が関の山でしょう。その間に誰にも捕捉されずに麻帆良からの逃走を果す自信がありますか？たとえ、その自信があつたとしても、私にはそもそも逃亡するという選択肢がありませんから、解呪を選ぶ事はできません」

「そういうことか…。仕方あるまい、貴様の案を受け容れよう」

解呪が可能である以上、それを選びたい気持ちはあるが、エヴァとて全てを投げ出して逃げたいと思っっているわけではない。最大でも二十秒しかないのだ。仮に無理矢理解呪させて本気で逃亡を試みる

なら、別荘をはじめとした秘蔵の魔道具や従者なども諦めねばならないだろうし、目の前の男が障害として立ち塞がるであろうことは間違いない。はっきりいって、ナンセンスである。デメリットが大きすぎる。それよりは改変にとどめることを受け入れ、一年後に訪れる自動解呪を待つて動いた方がいいに決まっているからだ。事前に準備ができるし、わざわざ敵を増やす事もない。

特別製の形代を受け取ったエヴァは指を浅く噛み切る。どうやら、血を選択したようである。

「ああ、どうせならその血で自身の名を記して頂けませんか？その方が身代わりとしてよく機能しますから」

あそこまで時間をかけて用意したのだから、今更小細工は弄しないだろうと思いつ、エヴァは言うとおりにする。元々、彼女は東洋系の魔法（陰陽道等）には疎いので、それがどんな意味を持つのか理解はできない。ただ、推測ぐらいはできる。確かに記名した方が身代わりとしては、有用になるだろうと彼女も思ったのだった。

「では、その記名した形代を今まで貴女がいた魔方陣の中心において頂けますか。そして、貴女はこちらの円の中に立って下さい」

「これでいいのか？」

魔方陣を挟んで対称となる位置に描かれた円の上に立つエヴァ。

「結構です。では始めます」

それを確認し、徹は魔方陣に魔力を流し込み起動させる。変化は突然であった。魔方陣が発光し、形代が独りで立ち、人のいやエヴァの形を成していく。数秒とたたずにそれはエヴァと瓜二つの存在

となった。そして、今度はエヴァに変化が現れる。真祖としての能力が解放されたのである。湧き上がる高揚感にエヴァは胸を押さえ、て自制する。

「分かる、分かるぞ！私は今解き放たれた！」

歓喜の声を上げるエヴァを見ながら、徹は学園結界から解放された彼女の呪いの状態を解析・確認し、用意してあった術式をそれに合わせて、微調整していく。調整が完了したのは、魔方陣起動より実に10秒。解析・確認から僅かに5秒である。しかし、このスピードをもつても、時間的にはきついことに徹は認めざるをえなかった。形代の劣化が始まっていることに気づいたからだ。いかに特別製といっても、吸血鬼の真祖という規格外の存在の身代わりには、不足だったようである。この調子では、用をなさなくなるまで後5秒とかかるまい。術式を己自身でエヴァに打ち込むのでは時間が足りない。余り気はすすまないが、非常手段を採る外ないと彼は判断した。

「大蛇！」

徹の言葉に応え、剣蛇がその顎門をあらわにし、棒立ちのエヴァを貫く。さしものエヴァも、解放された喜びで隙だらけであり、また今更徹が牙を剥くとは考えておらず、彼の得物が連結刃であることを知らず間合いの外であると判断していたことから完全に油断していたのだ。その一撃は正確に彼女の胸を刺した。それに僅かに遅れて形代が燃え尽き、魔方陣からの光も途絶えた。そして、徹はエヴァを刺した大蛇を戻し、懐に収める。エヴァは倒れふし微動だにしない。

「よくもマスターを！」

エヴァの状態を確認しようと近づいた徹に対し、結界をぶち破り茶々丸が突っ込んでくる。刺したのからタイムラグがあったのは結界の解除に手間取ったのだらう。その顔は怒りに染まっている。

「絡繰、怒るなっていうのは無理かもしれないが、話を聞いてくれないか？…っつて、無理か」

茶々丸は完全に激情に吞まれている。交渉の余地などなさそうである。面倒を避ける為に余計な気を使ったのもまずかった。誰がどう見ても、徹が不意打ちしたようにしか見えない。徹は己の選択を激しく後悔しながら諦めた。具体的に言うと、茶々丸の攻撃を避けるのをやめた。同時に凄まじい一撃が彼の腹に突き刺さり、凄まじい勢いで背後の森へと吹き飛ばされた。彼女が如何に怒り狂っていたか分かる証左であった。

「はっ、こんなことしている場合ではありません。早くマスターの治療を！」

一撃入れて我に返ったのか慌ててエヴァに駆け寄る茶々丸。己の主の状態を確認して、彼女は愕然とした。余りの傷の深さに手の施しようがなかった…わけではなく、傷一つついていなかったからである。出血した様子もなく、主の顔に苦悶は見られず安らかなものですらある。

「これはどういうことでしょうか？確かに小宮山先生の一撃はマスターを刺したはずですが…」

そこまで考えて、茶々丸はいくつかの違和感に気づいた。一つ目は刺した瞬間に出血が見られなかったこと、二つ目はあれだけの勢いで刺したのにも関わらず、矮躯のエヴァが吹き飛ばされずに同じ位

置で立っていた事ことである。正直、わけがわからない。主の呼吸は平静であり、身体に異常は見られない。つまり、あれは主への攻撃ではなく、それ以外の意味をもつものだったのかとようやくその考えに至ったのは、主の体をくまなく精査スキャンし終えてからであった。

ちなみに徹はアバラを何本かもってかれて、痛みに脂汗を流しながら帰宅したそうなの。

呪いの真実（後書き）

いつの間にやら、ユニークアクセスが500000を超えました。このような拙作を多くの人に見て頂き、感謝にたえません。ありがとうございます。未熟者ですが、完結まで頑張りたいと思いますので、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

さて、今回ですが、話のメインはエヴァの呪いについての考察です。原作を読んでいて思ったことや考えた事を書いてみました。前文にも書きましたが、捏造といわれそうで正直怖いですが、一応筋は通したつもりです。矛盾やおかしいところがあれば遠慮なく指摘ください。これでも考えに考えてかいたつもりですが、自分自身では気づけないことも多々あると思いますから。

では、次話でお会いしましょう。次はこの話の後日談+ になると思います。せつかく500000を超えたので、外伝を書きたいと思っていますのですが、あいもかわらず筆が遅いので…。いつか、いえ近日中に書けるように頑張りたいと思います。とかいいながら、本編の更新だけで手一杯な予感が…。

謝罪と真意（前書き）

2011/05/26 21:00 加筆修正しました。

謝罪と真意

「小宮山先生、昨夜は申し訳ありませんでした」

報酬を渡すと言われて、朝早くエヴァの別荘を訪れた徹に茶々丸が開口一番に謝罪した。

「いや、気にすることはない。お前の主を害するつもりがなかったとはいえ、客観的に見ればそうとしか見えないからな。お前の行動はある意味当然のものだ……まあ、本音を言えば少しは聞く耳を持つて欲しかったがな」

茶々丸の謝罪に少し苦笑しながら、徹は返答する。

「まあ、当然だな。茶々丸、だから謝る必要などないと言ったのだ」

それを当然の対応だといわんばかりに鼻を鳴らして言うエヴァ。

「ですがマスター、仕方のない誤解とはいえ、こちらの過失で小宮山先生を負傷させてしまったのは事実です。謝罪はしてしかるべきだと思います」

そんな主の態度に珍しく反論する鋼の従者だが、黄金の主はそれこそ鼻で嗤う。

「負傷？そんなものが今のこやつのごどこにあると言っただ？動作に不自然さは感じられんし、無理をしている様子もない。それこそ心配するだけ無駄というものだ。昨夜の負傷はすでに完治しているよ。うだな。流石はご同輩といったところか？」

「同輩？小宮山先生はまさか…?!」

擲捨するような主の言葉に聞き捨てならぬものをとらえ、驚愕とともに徹を見やる茶々丸。

「いやいや、俺は人間だから。多少人から外れてはいはいても、俺は人だよ」

その視線に苦笑しながら答える徹。

「『人』か。邪眼に加え、魔に近い…いやそのものともいうべき魔力を持ちながら、よく言うものだ。身体的に見れば、お前は最早人とは言えまい。あまりにも魔に近すぎるがゆえに……。そう、『魔人』ともいうべきだろうな」

「それも俺は『人』であるつもりだ。少なくとも心だけは。そして俺は心こそがその者の存在を定義づけるものだと考えている」

「ふん、口清いことだな。それならば私や茶々丸はどうなる？まさか『人』であるというつもりか？」

徹の言い様に苛立ちを感じたのか、嘲るように言うエヴァ。

「心もち己が意思で『人』であろうとするなら、それは『人』であると俺は思う」

「綺麗事を……。どんなに綺麗事を並べたところで、我等は人とはあまりにも差があるのだ。常人をはるかに超えた身体能力や回復力等、実際貴様の受けた負傷とて、常人なら昨日今日で完治するよう

なものではあるまい？それにそもそも、茶々丸の全力の一撃でその程度で済んでいること自体がすでおかしいのだ。そんな貴様が『人』などと笑わせるものだ」

忌々しげにいい捨てるエヴァだが、それには多分に自嘲も含まれていた。他者によって強制的に吸血鬼にされた彼女にしても、それは他人事ではなく思うところが多々あるのだろう。それは『同輩』と表現したところからも察せられた。

「それでもだ。どれだけ肉体的に人から外れようとも、心は『人』であるつもりだ」

確かにエヴァの言い分が正しいのだろう。実際、常人ならガイノイドである茶々丸の全力の攻撃を受けたら、骨折などではすまない。よくて内臓破裂。下手をすれば胸を貫かれてもおおかしくないのだから。そんな一撃を技巧によりうまく受けたとはいえ、骨折程度にすませ、あまつさえ翌日には完治しているなど、どう考えても人外の所業である。

しかし、それでも徹は『人』でありたかった。どんなに肉体が人から外れようと、心まで人から外れるつもりはない。もし、外れてしまえば、待っているのは破滅だけだと彼は思うからだ。そしてそれは、本当の意味で『人』ではなくることだと思っただからだ。だから、徹は『人』であると断言する。己の為に。譲れぬものがあるゆえに。

「…そこまで『人』であることに固執するとは、貴様も相当な物好きにな上に頑固者だな。まあ、いい。

それよりも昨夜の行動について説明しろ。貴様に私を害する気がなかったのは分かっているし、何をされたのか大まかな見当はついて

いるが、詳細が不明なのは気分が悪い。儀式の詳細はともかく、昨夜の暴拳については、詫び代わりに説明しろ」

エヴァが避ける事もできずに大蛇で貫かれたのは、気を抜き油断していたところで虚を突かれたからだけではない。むしろ、それだけであつたなら彼女は反応できたであろう。それが殺傷を意図したもののなら、600年余の経験によつて、体が自動的に100%反応する。それどころか、真祖たる彼女なら意識して避けることすらできたかもしれない。そんなエヴァがあつさり貫かれたのは、徹の一撃に殺意をはじめとする害意が全く感じられなかつたからであつた。

「緊急の措置とはいえ、あれだけのことをしておいて、説明なしというのは確かにあんまりですね。」

では、僭越ながらご説明させていただきます。大体予想はついていると思いますが、あの一撃は大蛇を用いて、術式を打ち込むことを目的としていました……」

エヴァの言はもつともだとも思つた徹は口調を仕事モードに変更し、説明する。その目的を皮切りに、形代の劣化が想定以上に早かつたこと、術式を己の手で直接打ち込むには時間が足りなかつた為に已む無くとつた緊急的な措置であつたことを話した。

「そういうことだつたんですか……」

「なるほどな。確かに自壊が始まっていたのは私も見た。説明する時間がなかつたのも確かだろうし、実際貴様は術式の改変をやり遂げたのだから、それは不問にしてやろう」

話を聞いて改めて納得する茶々丸に、やや不満を見せながらも許しを与えるエヴァ。実際、彼女にしてみれば、得るところは多かつた

のだ。それを思えば、多少の不満は飲み込むべきだと判断したのだ。現実には校内に限れば魔力の封印が解かれているのは実証済みだし、体感しているのだから尚更である。

「ありがとうございます。それでは報酬を…といたいところですが、その前にこれを」

エヴァに対し感謝を示し、報酬を請求するかと思いきや、徹は懐からペンダントを取り出した。

「なんだ、これは？何かの魔具か？いや…呪具だな。なんのつもりだ？」

一見してその特性を見抜き、不審気にその目的を問うエヴァ。

「一見で看破するとは流石ですね。そのとおり呪具です。但し特別製の…貴女の状態を以前の状態に戻す呪具です。いえ、正確にはそうであると錯覚させるものですが」

「以前の状態にだと…なるほど、そういうことか。アフターケアのつもりか？」

己の答からすぐにその真意に気づく辺り、やはりエヴァは尋常の存在ではないと改めて彼女に対する警戒と評価を心に刻み思わせぶりに返答する。

「まあ、そんなようなものです」

術式の改変、いや正常化により『登校地獄』は正しく機能する。それはすなわち登校さえしていれば、エヴァの魔力は封印されないと

いうことだ。感知に優れたものなら、エヴァの変化にすぐ気づくだろう。そうなれば、必然的にいずれ術式の改変や解呪の可能性にいきつくはずだ。そして、そこからエヴァに対して、何らかのアクションが起こされる可能性は決して低くない。それだけですめばいいが、下手をすれば術式の改変・解呪の実行者である徹にも、その類が及びかねない。ゆえに、エヴァの状態を偽装するとは必要不可欠なことであったのだ。

「しかし、昨日の今日で用意してくるとは、随分用意がいいものだな」

徹の答に納得し、その手から呪具を受け取りしげしげと見つめながら感心するエヴァ。

「いえいえ、実はそれ本来別の目的に使うために作っていたものでして、それを転用したものなんですよ。いやー、解呪と術式の正常化にだけ焦点をあててたせいで、その後のことか考えていなかったんですよね。本当に危ないところでした」

感心された徹からしてみれば、非常に気まずかった。エヴァの解呪・術式の解呪については何年も前から考えていたことであったが、それが及ぼす影響や結果についてまでは考えが及んでいなかったのである。彼からしてみれば、凄まじい失態であった。それに気づいたのが、昨夜の儀式の後だったのだから、本気で救えない。偶然にも別の目的で作っていた呪具が転用できたからよかったものの、本当に危ないところであった。怪我の功名とは少し意味は違うが、ともかくにもそんな産物であったからだ。

「ふむ、まあそれは仕方あるまい。それは本来ならば私が用意してしかるべきだろうからな」

それを聞いてもエヴァは徹を責める事をしない。彼女自身、解呪に焦点を当てすぎてそれ以外のことが疎かになっていた自覚があるし、最愛の男の息子の襲来に些か以上に焦っていたのも事実だからだ。それに己の身の安全に関わることだ。それに本来ならば、自前で隠蔽手段を用意すべきだと彼女は考えていたからだ。

「まあ、せっかく用意したんですから使ってください。首から外せば呪具の効果は切れますから、不便はないはずです。後、できれば使った感想をいただけるありがたいです」

「ふむ、そういうことなら使ってやるが、感想とはどういうことだ？」

エヴァとしても、善意の申し出を無碍にするつもりはない。それが両者の安全につながるなら尚更である。しかし、些か気にかかることもあったので、疑問を呈する。

「正常に作用しているか&使い心地を聞きたいというのもあります
が、何よりも今後の参考にしたいということですよ」

「今後だと？」

「はい、それは本来別の目的に使うつもりだったというのは言いましたよね？その本来の目的というのが、この際ぶっちゃけると木乃香様の魔力の隠蔽なのです。新に作り直すので、せっかくですから参考らせていただきたいのです」

魔力の隠蔽&偽装の呪具など、そう都合よく転がっているわけではない。徹が今朝までにエヴァの為の呪具を作れたのは、一重に木乃

香の魔力封印&隠蔽の為の呪具作成を詠春から依頼されていたからであった。しかも、殆ど完成していた為に魔力の波長を木乃香からエヴァのものに変更し、封印から偽装に改変する程度ですんだからこそ間に合ったのであった。

「なるほどな。…それにしても、いい度胸だな。この私を実験台にしようとは?」

凄みをきかせていうエヴァだったが、肝心の目が笑っているのだから心ではないのは明らかだ。

「貴女としても益がある話ですし、悪くはないでしょう?それとも自前で用意されますか?」

そんなことは百も承知だが、念の為に自分で用意するつもりがあるか確かめる徹。

「いや、貴様の呪術の腕だけは信用しているからな。ありがたく貰っておこう」

「酷い言われようですね。こちらとしてはアフターサービスまで万全を期したというのに」

「ああ、確かに貴様は万全を期したし、全力を尽くしただろう。依頼者としては、十分に満足できる仕事ぶりだった。ゆえに今更貴様の能力を疑うことなどないし、むしろ能力面だけいえば信用すらしている。しかし、貴様という男を信頼できるかといえば、話は別だ……。

なぜだかは説明するまでもなからう?」

「……」

エヴァの探るように確かめるような問に徹は沈黙を持って応える。

「答えぬか？ いや、答えられないのか？ まあ、どちらでもいいことだが、答えぬならいつてやろう。」

貴様はそつがなさ過ぎる。突然の依頼だというのにまるで予期していたかのような対応、加えて私の問題の解決策に至るまで、貴様は完璧にこなしてみせた。これが異常と言わずして何と言おうか。

確かに、私の正体に気づいており、かつあのような邪眼を持っているたというのなら、私が貴様にする依頼は予想できたかもしれぬ。そして、私の問題への対応策も練ることも可能だろう。」

「そつがないことはいいいことですし、後者も納得できるならば、どこもおかしくはないでしょう？。」

「愚か者め、おかしいに決まっているだろ！なるほど、邪眼持ちで私の正体と呪に気づくまではいい。しかし、どうしてそこで私の呪を解こうという発想ができる！？」

エヴァ自身後になって気づいたことであつたが、冷静になって見れば徹の対応は色々異常であつた。それにすぐ気づけなかつたのは、彼女がネギの登場でいかに邀撃を受け焦っていたのかの証左であつた。

「私がただの一般人であつたならまだしも、貴様は私の正体を知っていたのだ。自分で言うのもなんだが、私は魔法世界における禁忌のような存在だ。解呪しようなど、まともな判断力をもっている者なら、露程も考えないだろう。そして、昨夜貴様はいくつか失言をしている。「本来の『登校地獄』の術式も用意」、「一年以上念を

込めた特別製」だ。忘れてはいないだろう？

この2つは致命的な失敗だったな。いくらなんでもありえなすぎるのだ。私の依頼を予想していたとはいえ、それに本来の『登校地獄』の術式が必要などとは、誰が考えよう。つまり、貴様が以前から私の解呪について考えていた証拠だ。そして特別製の形代は貴様が考察どころか、解呪の具体的な方法まで考案していた証左にほかならない。偶々持っていたなどという言い訳は通じんぞ。貴様の力量を持って、一年以上念を込めた特別製の形代が、貴重なものでないはずがないからな。それを不用意に持ち歩くなどありえん。そう、実際に使う必要があるとき以外には……」

「…これは参りましたね」

エヴァの鋭すぎる指摘に頭をかく徹。ここまで看破されるとぐうの音も出ない。

「客観的に見て、今回の取引は貴様のリスクとリターンが明らかに釣り合っていない。確かに報酬の魔剣・呪具は貴重なものだし、私の絶対的中立は確かに貴様の利益になるだろうが、それでも貴様の負うリスクに比べれば可愛いものだ」

改めて他人から言われて考えてみると、確かにそうだと徹は思った。我ながら何と言う危ない橋をわたったのだろうか。一歩間違えれば、本業どころか戦争の引き金をひいていたのかもしれないことだったのだ。依頼時には正当な取引だと思ったものだが、客観的に見れば明らかに異常な取引だ。絶対的中立どころか、味方になるくらいしてもらわないと到底つり合わないだろう。

（なんだかんだ言って、エヴァ同様俺も冷静じゃなかったてことか？やはりエヴァに認められたと思って、舞い上がっていたせいか？

それとも……くだらない主人公願望でもあったのか？いや、そんなものがあるなら、もっと前から真帆良に来るし……うーむ)

考えに没頭する徹。なぜ、こんな無茶な取引をしたのか、いくら考えても出てこない。

「なあ、貴様は一体何を考えている？何が目的だ？それが分からぬ限り、信用はできても信頼はできん」

エヴァはそういつて純粹に問いかける。それは真摯なものであつて、拒絶は許されないもののように徹には思えた。

「正直、自分でもよく分かっています……。そうですね、強いて言うなら自己満足でしょうか？」

口に出して見ると、それ以外のなんでもないように思えた。確かに、この世界を現実と認めず、くだらない主人公願望を持っていた時期はあった。だが、それは初依頼の時に粉々に砕かれ、捨て去った考えである。ゆえに、けしてそんなふざけた考えからでた行為ではない。

そう、強いていうなら、それは自己満足という名の職人としての性^{さが}だった。徹は、エヴァに対する重要カードとして、解呪の可能性・方法について、真帆良に行く事が決まって以来検討してきた。様々な可能性・方法を取捨選択&吟味した結果、導き出されたのが昨夜の儀式だったのだ。そして、できた以上は試さずにはいられないのが、職人の性^{さが}である。本当にうまくいくのか確かめずにはいられなかったのだ。

「自己満足だと？どういう意味だ？」

「今まで見たことのないへんてこりんな呪いを見つけました。解呪方法を試行錯誤の末、思いつきました。思いついたなら試してみたい……そういうわけです」

無論、それだけが理由ではない。やはり、完全な味方は無理でも、エヴァにこちらよりになって欲しいというのは偽らざる本音であるし、大きな理由だ。徹がその価値を過大評価していたのか、エヴァが己を過小評価しているのかは不明だが。

また、徹自身エヴァの身の上には元々同情していた。しかも、己が同じような境遇になったせいで尚更それは強まった。そして、己にどうにかしてやれる方法があるなら、どうにかしてやりたいと思っってしまったのだ。幸いというかなんとか、彼はその分野における専門家になった。結果として、解決方法とはいかなくても改善策には手が届いた。

それを試したかったというのも本心だし、エヴァが少しでも救われて欲しいというのも偽らざる徹の本心である。それでも自発的に解呪を行わなかったのは、彼なりの最後の一線であった。彼女からしてみれば、赤の他人の同情など侮辱にも等しいだろうし、救ってやりたいなど傲慢も甚だしいだろう。ゆえに、仕事として依頼されない限りは、その為の準備はしてもけして行うつもりはなかった。それが彼なりのけじめであった。なぜなら、彼女への同情も救いたいというのも、結局のところ自己満足でしかないからだ。そんなものを恩ぎせがましく押し付ける気は毛頭なかったし、対価もなしに解呪に準ずる行為をするのは呪術を生業にしている者としてのプロ意識と職業倫理的に許容できなかったのだからでもある。

まあ、結局のところ徹の『自己満足』という言葉に何ら嘘はなかった。一方で、口に出した以上の理由を言うつもりもなかったが。

「なるほど、貴様は呪術の専門家だったな……。実験台といった先の私の軽口は的を得ていたわけだ」

呆れた様に嘆息するエヴァ。

「ええ、ですが貴女にも十分な利益があったわけですし、悪い取引ではなかったはずです」

「まあ、そうだな。依頼したのは私だし、文句を言うのは筋違いというものだな」

なんとというか予想外の答を聞かされ、毒気を抜かれてしまったエヴァはなんともいない表情で首を振る。

「まあ、事情は分かった。そういうことなら、これ以上四の五の言うつもりもない。報酬はそのケースに入っている。遠慮なく持って帰るがいい」

エヴァは疲れたように足元のケースを指差すと踵を返した。これ以上、話すことはないと言わんばかりである。

「承知しました。またのご依頼をお待ちしています、エヴァンジェリン様」

ケースを開封して中身を確かめた後、徹は深々と一礼して言う。

「ふん、まあお前はそこそこ使える男だ。用があればまたこき使つてやるさ。後、いちいち様づけは仰々しくてかなわん。エヴァと呼ぶことを特別に許してやる。以後もお前が私の良き取引相手であることを願う」

振り向かないままにそれだけ言つと、エヴァは家の中へと姿を消した。

「ありがとうございますエヴァ様」

それに対し、徹は再び深々と一礼したのであつた。

これで立つ鳥跡を濁さずで終わればよかつたのだが、その後も呪具が正常に作動するか調べるため、エヴァ&茶々丸に学校を出席&欠席してもらい、放課後別荘の中で、その差異を色々調べることになるといふぐだぐだな終わり方の依頼であつたそうなの。

謝罪と真意（後書き）

大変遅くなりまして申し訳ありません。外伝どころか本編の更新が滞る始末、伏してお詫び申し上げます。

今回は後日談 + の予定でしたが、+ の部分は話が全く異なってくるので、次回以降に回しました。色々ハイになっていたせい&職人の性で、正常な判断ができていなかった主人公。せっかくできたんだから、試してみたいというのは当然の欲望だと思うのですよ。いきすぎると問題ですが、今回は両者に益があるしOKということ

で。
意見・感想・批判等お待ちしています。遠慮無くお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9104i/>

紫紺の邪眼

2011年9月8日07時41分発行